2014年12月号 (毎月20日発売) 11月20日発売
第15巻 第12号 通巻171号
ナナメに傾ける写真の意味とは?
デジタルカメラマガジン
12
2014
[特集1]
傾けるとカッコ良くなる写真のメソッド
ナナメの構図
人気写真家10人がナナメに傾けるテクニックを大公開!
16年ぶりにリニューアルした超望遠ズーム
キヤノン
EF100-400mm
F4.5-5.6L IS II USM
EOS 7D Mark IIとの相性も抜群!!
[特集3]
飛行機・動物・夜景・風景の
4ジャンルを徹底攻略
絶対に失敗しない
超望遠ズームの撮り方
[特集2]
スタイリッシュにスナップできる
カメラが欲しい
桃井一至&佐々木啓太が徹底評価
人気
クラシカルコンパクト
5機種
α7シリーズに
最適なMFレンズ
カールツァイス
Loxia 2/50
Quattroシリーズ第2弾は
広角28mm単焦点
シグマ
dp1 Quattro
ライカ
X
ソニー
RX100 III
富士フイルム
X30
パナソニック
LUMIX LX100
富士フイルム
X100T

デジタルカメラマガジン

CONTENTS 1

2014.12
2014年12月号（毎月20日発売）
11月20日発売

表紙撮影=鈴木知子　商品撮影=加藤丈博
表紙デザイン=菊池美範／大村貴一郎（エィアール）

※各部門の応募の手順は「GANREF」（http://ganref.jp/）に移動しました。

撮影情報の読み方 本誌の撮影情報は項目名を省略して以下の順番で記載しています。
カメラ名／レンズ名／焦点距離（35mm判換算）／露出モード（絞り、シャッター速度、露出補正）／ISO感度／ホワイトバランス／記録モード／撮影地

※本誌での実勢価格は、2014年11月上旬にすべて編集部で独自調査したものです。
標準価格、実勢価格、定価など価格表記については特に断りのない限り、すべて税込の価格になっています。

CONTENTS 2

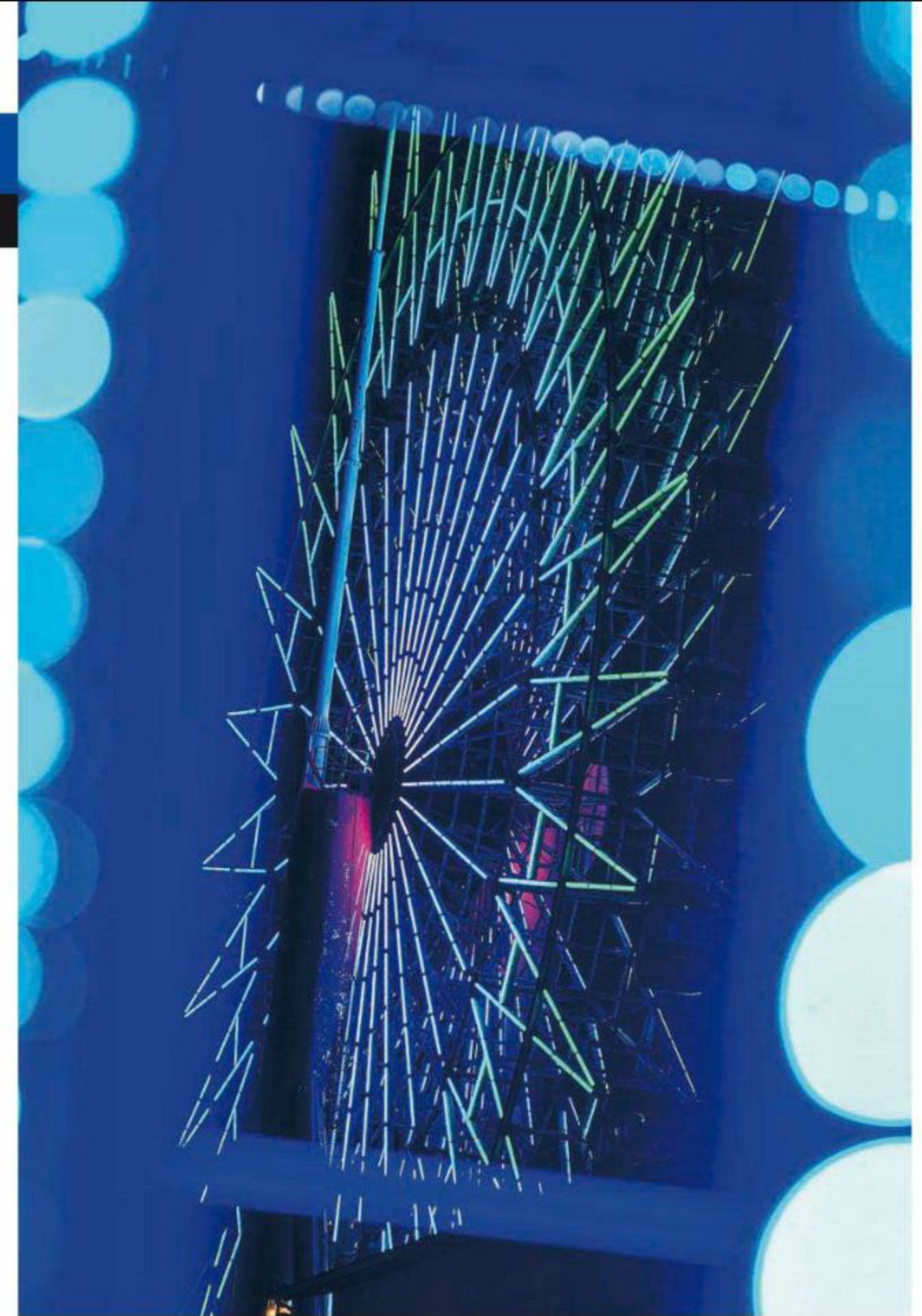
2014.12
2014年12月号（毎月20日発売）
11月20日発売

COVER STORY
The theme in December

夢で逢えたら

［表紙撮影］鈴木知子

DATA
カメラ：**ソニー α7S**
レンズ：**ソニー FE 70-200mm F4 G OSS**
焦点距離：**122mm**
露出モード：**絞り優先AE**
絞り：**F4**
シャッター速度：**1/25秒**
露出補正：**±0EV**
感度：**200**
ホワイトバランス：**電球**
撮影地：**神戸ハーバーランド（兵庫県）**

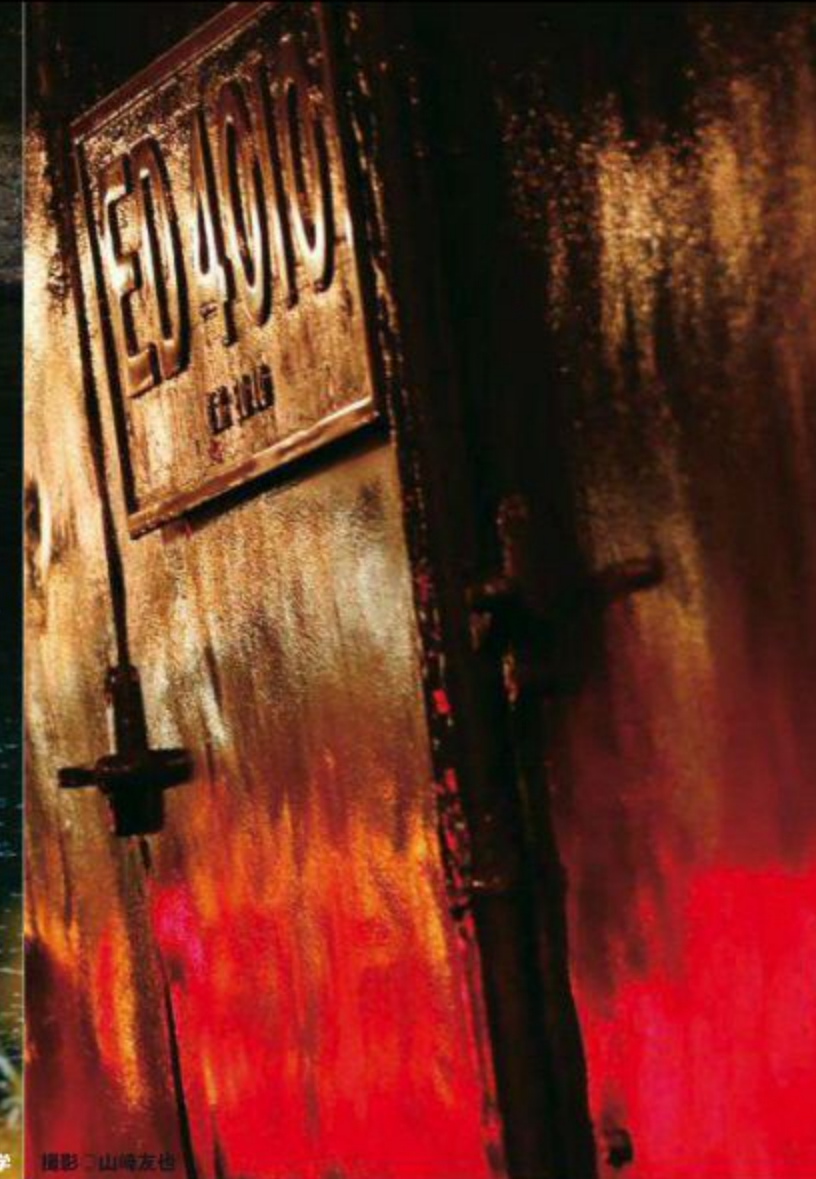
PROFILE
鈴木知子（すずき ともこ）：神奈川県生まれ。東京工芸大学短期大学部卒業後、広告撮影プロダクションに入社。写真家 柳瀬桐人氏ほかのアシスタントを経験後、アパレル・コスメなどのコマーシャルフォトを中心に活動。ライフワークの横浜を中心としたスナップ写真をブログにて毎日展開している。フォトセミナー講師や撮影ノウハウ書籍の執筆も行っている。近著に『商品写真の撮り方 完全ガイド プロがやさしく教えるブツ撮りの手引き』（MdN）、『写真が絶対うまくなる デジタル一眼カメラ入門』（SBクリエイティブ）がある
http://suzucamera.exblog.jp

日々撮影をしていると、写真は「一期一会だなぁ」と強く感じるときがある。そのタイミングは被写体との出合いだけでなく、自身の「閃き」も含まれる。普段は思いつかないようなアイデアが、ふっと湧いてくることがある。何度も歩いている場所なのに。

神戸ハーバーランドは「港町神戸」を実感できるスポット。夜景撮影でも人気のあるエリアで、そこに観覧車がある。私もカメラ片手に潮風を感じながら、夜の波止場散策をのんびりと楽しんだ。たまたま通りかかった場所に、遊覧船に乗り込むためのタラップがあり、そこに電飾がつけられていた。タラップ越しに観覧車の方向に視線を向けると、夜ならではの非現実的な世界が広がった。電飾にギリギリまで近づき、観覧車を囲むようにフレーミング。そしてカメラを少し傾けてみると、静止していた場面が動き出したように感じられた。

観覧車では家族やカップル、さまざまな人たちが数分間の時間旅行を楽しむ。夢のようなひとときを幻想的に表現したかった。次々と場面が変わる夢のように、くるくると廻る観覧車をオーバーラップさせた。夜の闇と光にやさしく包まれる瞬間が、いつまでも続くことを願って。

撮影◎チャーリィ古庄
キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／ 170mm(272mm相当)／マニュアル露出(F5、1/5秒) ／ ISO 6400 ／ WB:オート　夜にスローシャッターで飛行機を流して撮影。高感度に強いEOS 7D Mark Ⅱとの組み合わせなら、夜景が高画質で撮影できる

撮影◎戸塚 学
キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／ 300mm(480mm相当)／絞り優先AE(F5.6、秒、1/2,500秒、＋0.3EV) ／ ISO 800 ／ WB：オート
ヤマセミの出現を待っていると、上空を何度もカケスが飛ぶ。何気なく300mmでファインダーをのぞくと、ドングリを運んでいた!

撮影◎戸塚 学　撮影◎山崎友也

（上左）キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／ 214mm（480mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/640秒、−2.0EV） ／ ISO 800 ／ WB：オート
アオサギにピントをしっかり合わせて開放F値で撮影した。手前のセイタカアワダチソウの花は、形がわかる程度に優しくぼけている

（上右）キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／ 108mm（172mm相当）／マニュアル露出（F4.5、1/30秒） ／ ISO 1600 ／ WB：太陽光
鉄道博物館にて撮影。軽くてハンドリングが良いので暗い場所でも手持ちでさまざまな角度から狙え、数多くのバリエーションをものにできる

（下左）キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／ 300mm（480mm相当）／シャッター優先AE（F8、1/1,000秒、−0.3EV） ／ ISO 300 ／ WB：オート
滑走路のそばから300mmの望遠端で撮影し、迫力ある離陸シーンをアップで切り取った

（下右）キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／ 135mm（216mm相当）／マニュアル露出（F13、1/160秒） ／ ISO 200 ／ WB：太陽光
花との距離が近い場合、背景を走る都電はかなり絞らないと認識できない。必然的にスローシャッターになるが手ブレ補正のIS機能は心強い

EF70-300mm F4-5.6L IS USM

Canon EF LENS

チャーリィ古庄　戸塚 学　山崎友也

写真家7人のSEVEN SENSES

EOSレンズを知り尽くした7人の写真家が、鋭い感覚でセレクトレンズの魅力を語る。

EFレンズは2014年4月22日に累計生産本数1億本を達成

撮影◎チャーリィ古庄　撮影◎山崎友也

戸塚 学

ズームレンズの自由度を利用して自然風景の中で鳥を狙う

technique 1 70mmの広角側で自然風景の中で野鳥をとらえる

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ ／ EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／ 70mm（112mm相当）／絞り優先AE（F11 、1/80秒、－0.3EV）／ ISO 320 ／ WB：オート **1羽のライチョウが餌を食べながらようやく開けた場所に出てきた。背景の赤い枯れ木をはっきりと描写して、コントラストでライチョウを目立たせている**

人工物を避けて構図を作る

人を恐れないライチョウは近づいて撮影できる貴重な野鳥だ。背景とバランスをとって構図を整えるには70mmがちょうど良い。

この写真は、立山の黒部アルペンルートで撮影したもの。遊歩道から狙うため、被写体に自由に近づくことは不可能だった。そんなときに70～300mmの焦点域は微妙な画角の調整が可能なため、重宝するのだ。風景を背景にする撮影で注意したいのは、中途半端に人工物が入ってしまうこと。雰囲気が台なしになるので背景には注意を払いたい。また、鳥の生態を伝えるために、F11ぐらいまで絞って背景の様子をはっきりと描写させたい。その効果もあって、植物の後ろの池までシャープに見せることができた。

遊歩道ぎりぎりまで出なかったため、背景にはむだなものが写り込んでしまった。バックに吹き流しが写り込んだことにより、自然風景の印象が壊れている

technique 2 300mmで野鳥の小さな顔の表情を狙う

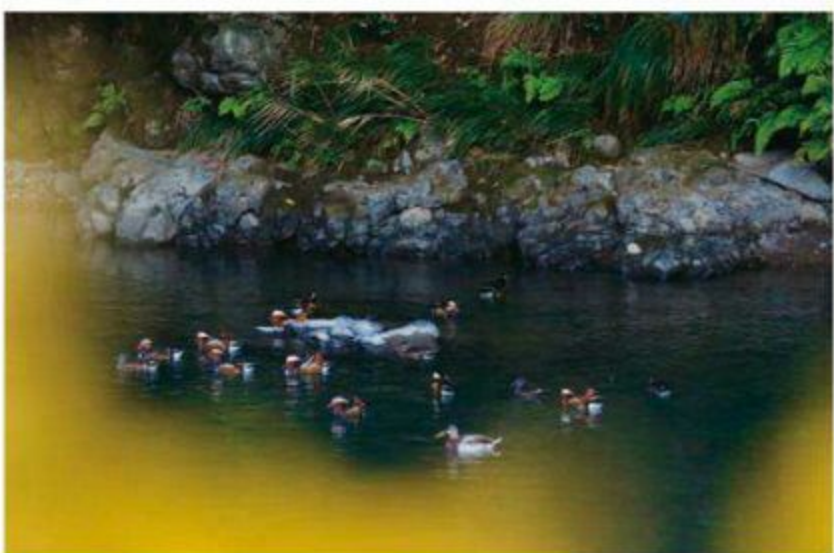
キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／ 300mm（480mm相当）／絞り優先AE（F5.6 、1/400秒、－0.3EV）／ ISO 320 ／ WB：オート **ライチョウの顔を正面からアップで狙う。黒いつぶらな瞳にピントを合わせて表情をはっきりと見せている**

AFポイントを選択する

野鳥をはじめ、生き物を撮影する場合は目にピントを合わせるのが基本。目にピントがないとなんとも間抜けな写真になってしまう。逆にしっかりと目にピントが合い、キャッチライトが入っていると生命感が強く感じられる。

カメラの自動選択AF機能を使用すると、鳥の小さな目にしっかりとピントを合わせるのは難しい

鳥の顔のアップを狙うときに注意したいのは、望遠側で鳥の顔をアップにすると、ぼけやすくなってしまうこと。顔の羽根の描写をしっかりと出すためには開放絞りから1～2段絞り込むと良い。目にしっかりピントを合わせるためにもAFポイントを移動選択してピントを合わせよう。

technique 3 前ボケを使って記録写真をイメージ写真へ

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／ 277mm（443mm相当）／絞り優先AE（F5.6 、1/500秒、－1.7EV）／ ISO 2000 ／ WB：オート **セイタカアワダチソウの花を前ボケで入れて、主題のオシドリたちを目立たせるとともに、暗い朝の風景の中で明るさを表現した**

色のある植物を前ボケに

カモの群れをひと味違った写真に仕上げたい。そんな時に前ボケは有効な要素だ。鳥を主題にする場合、前ボケに使えるのは緑の葉や花など。茶色の枯れ枝などは、逆に汚くなるのでやめた方が良い。

前ボケがないと、一般的な図鑑のような記録写真になってしまい、面白味には欠ける

前ボケを大きくするには、なるべく望遠寄りの焦点距離を使用して絞りは開放にすること。ピントは主役のカモに合わせながら、手前の色味のある被写体を前ボケにする。前ボケと被写体の割合がポイントとなるので、ボケで主題を消してしまわないよう、ズームで微調整をしながら構図を整えよう。

とづかがく：1966年愛知県生まれ。高校3年生のときに写真に興味を持ち、幼少の頃から好きだった自然風景や野生の生き物を被写体として撮影をする。20歳のときにアカゲラを偶然撮影できたことから、野鳥の撮影にのめり込み、野鳥を中心としたネイチャー系フォトグラファーを目指す。現在は野鳥にとどまらず、生き物を含めた環境の撮影を進行中。http://happybirdsday.jp/

チャーリィ古庄

圧縮効果を利用してスケール感はそのままに密度の高い写真を撮影する

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ ／ EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／ 300mm（480mm相当）／マニュアル露出（F8 、1/800秒）／ ISO 200 ／ WB：オート **撮影場所からジャンボ機までの距離は2km、手前の飛行機まで700mほどあるが、圧縮効果のおかげでその距離感が感じられない**

手前、中間、背景を探す

この写真はアトランタ国際空港で手前の飛行機、駐機中の機体、奥の滑走路を離陸する3種の機体を入れて圧縮効果を利用して、混み合う飛行場を表現した。

ワイド側で撮影したものや、背景までの間にバランス良く機体がいないと奥行きが感じられず、ただの機体写真になってしまう。圧縮効果を出すためには、望遠側でメインの機体と背景までの間の機体、そして背景の機体の3つの被写体を探すことがポイント。絞りは絞った方が、密度の濃さが描写できる。35mm判換算で480mm相当ならば、かなりの圧縮感が期待できる。

奥のジェット機までの間に被写体がないと、圧縮効果は薄れる

チャーリィふるしょう：1972年東京都生まれ。航空写真家、フォトジャーナリスト。ロサンゼルスにてパイロットライセンスを取得後、国内外の航空会社に勤務。2001年より旅客機専門の写真家として独立。「世界で最も多くの航空会社に搭乗した人」でギネス認定。キヤノン EOS 学園講師。http://www.charlies.co.jp/

山﨑友也

約4段分の手ブレ補正機構がスローとアンダーの表現を可能にする

暗いトンネルでも手ブレすることなく、ライトの鋭い光条が描写できる

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／ EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／ 166mm（265mm相当）／マニュアル露出（F5.6 、3/10秒）／ ISO 100 ／ WB：オート **三脚が使えない状況だったが、望遠側でもシャッター速度を遅くして、人ごみとたくさんのホームという都会の駅のイメージを撮ってみた**

ブレとシャープの対比がコツ

基本的に僕の撮影スタンスは、走っている列車を撮る場合は走っているように撮りたい。具体的には流し撮りであったり、列車をあえてぶらしたりする手法がある。EF70-300mm F4-5.6L IS USMは約4段分の手ブレ補正機構があるので、三脚が使えない駅のホームや車内などでも手持ちでスローシャッターを使ってガンガン撮影できるのだ。

左の大きい写真は駅の構内で行き交う人々をスローシャッターでぶらして、駅の忙しない様子を表現したもの。掲示板の文字をぶらさずにシャープに写し止めることができると、ぶれている部分が目立ってイメージ的な印象が強まる。また、隣の小さい写真は、地下鉄が駅に入って来るシーンをホームから狙ったもの。このレンズは光条がきれいに出るので、F5.6に絞って、電車のヘッドライトを光条として表現した。

やまさきゆうや：1970年広島県生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒。広告や雑誌をはじめTV 、ラジオなどへの出演から講師や講演など幅広く活動し、鉄道写真界の掌握を虎視眈々と狙っている。http://homepage1.nifty.com/yuya-yamasaki/

EF70-300mm F4-5.6L IS USM

希望小売価格：158,000円
（ケース・フード付き、税別）

Specification

- レンズ構成：14群19枚
- 絞り羽根枚数：8枚（円形絞り）
- 焦点距離：70～300mm
- 画角（水平・垂直・対角線）：29°～6°50'・19°30'～4°35'・34°～8°15'
- 開放絞り：F4～5.6
- 最小絞り：F32～45
- 最短撮影距離：1.2m
- 最大撮影倍率：0.06倍（70mm時）、0.21倍（300mm時）
- フィルター径：φ67mm
- 大きさ：約φ89mm×143mm
- 重さ：約1,050g
- 手ブレ補正効果：約4段分（キヤノン測定基準）*1

*1）これよりも低速になると手ブレが起こりやすくなるといわれる「1/焦点距離」秒のシャッター速度を基準としています（使用するカメラのセンサーサイズにより異なります）。

オススメポイント

チャーリィ古庄 35mm判換算で480mm相当の超望遠がコンパクトサイズで手に入ること。強力な圧縮効果で空のイメージが自在に表現できる。

戸塚 学 とにかく軽いのが良い！特に高山など機材を大量に運ぶことが難しい場所ではこのズームレンズ1本で野鳥、花、風景の撮影とオールマイティに使うことができる。

山﨑友也 約4段分の手ブレ補正機構が搭載されていること。480mm時に1/30秒近くのスローシャッターが可能だと、気軽に手持ちで撮影することができ、表現の幅が広がる。

協力：キヤノン株式会社／キヤノンマーケティングジャパン株式会社

［特集 1］ 傾けるとカッコ良くなる写真のメソッド

ナナメの構図

人気写真家10人がナナメに傾けるテクニックを大公開!

写真は水平・垂直を出すのが鉄則だと言われる。しかし、果たしてそうだろうか。ロバート・キャパや森山大道の傑作と言われる写真にはナナメに傾いていて、強いインパクトを与えるものがある。今月はそんなナナメの構図について考えたい。ナナメの構図は、水平をきちんと出した写真よりも撮影者の「主観」を写真に込めることができる。この特集を参考にしてイメージを表現するためのアプローチ方法を見つけてほしい。

CONTENTS

今回の特集で解説するナナメの構図の写真を読者の皆さまから募集します。
応募方法、期間など詳しいことはGANREFをご覧ください。http://ganref.jp/

ナナメの構図フォトコンテスト開催中!

写真：常盤 響　ソニー α7 ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 24mm ／マニュアル露出（F7.1 、1/320秒）／ ISO 100 ／ WB：日陰

カメラを傾けて伝わる印象とは?

カメラの右を下げて撮影すると、撮影した写真は画面の左が下がる。画面をナナメにして表現できるのは撮影者の主観。イメージを込めてカメラを傾けるのである。では、そのイメージにはどんなものがあるのだろうか?

ナナメによる印象
臨場感

ソニー α7S　Sonnar T* FE 55mm F1.8 ZA 55mm ／絞り優先AE（F3.2 、1/1,600秒、－0.3EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光　線路や道、橋のあるシーンはストーリーが感じられる。きっちり水平をとって撮影をすると、普通の日常風景に思えるかもしれないが、カメラを傾けることで臨場感が加わった。線路ギリギリの高さから踏切で狙っている。広角レンズを使ってローアングルで撮影することによって、迫力や動きがより強調されていることがわかる

ナナメによる印象
儚さ

ソニー α7S ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 70mm ／絞り優先AE（F9 、1/800秒、－1.0EV）／ ISO 8000 ／ WB：太陽光　おしゃれな店が入っているレトロなビルは、今どきの流行とも言える。古びた建物を表現するためにカメラを傾けて表現した。儚くて寂しげな雰囲気を埋め込みやすいのがナナメの構図だ。ここでは迫力や奥行きが強調されないように、傾ける角度は控えめにしている

ナナメによる印象
奥行き

キヤノン EOS 6D ／ EF24-105mm F3.5-5.6 IS STM ／ 24mm ／絞り優先AE（F3.5 、1/125秒、－0.3EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光　横浜港に係留されているレトロな船。異国情緒や寂しげな印象を埋め込むためにナナメに傾けた。ナナメに傾けることによって、主役にした鐘が風によって動いているようにも感じられるが、実際は動いていなかった。船体のラインを生かして奥行きを表現している

ナナメによる印象
モチーフ表現

ソニー α7S ／ Sonnar T* FE 55mm F1.8 ZA ／ 55mm ／絞り優先AE（F1.8 、1/100秒、－0.3EV）／ ISO 100 ／ WB：オート　どのような被写体でも、見下ろしたり見上げたりするアングルは、ナナメの構図でも自然に見せることができる。これは西洋館の金属の扉に、庭園の緑の色が写り込んでいたもの。ラインのモチーフをイメージとして切り取っている。かなりカメラを傾けてフレーミングしても、違和感は感じられない

ナナメによる印象
リズム

ソニー α7S ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 70mm ／絞り優先AE（F22 、1/80秒、＋0.7EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光
カメラを傾けてもあまり違和感を感じない花を被写体にポップなイメージで切り取った。できるだけ被写界深度を稼ぐため、F22で撮影。長い茎をフレーミングすると、傾きは強く感じられるようになる。リズミカルな動きが加わり、花が生き生きと感じられる

鈴木知子（すずきともこ）：神奈川県生まれ。東京工芸大学短期大学部卒業後、広告撮影プロダクションに入社。現在、フリー。雑誌への作品提供や書籍執筆、ワークショップなどを行っている。ライフワークの横浜を中心としたスナップ写真をブログにて毎日展開中。
http://suzucamera.exblog.jp/

カメラを傾けることの意味

前ページではナナメ構図はいろいろなイメージを表現するのに有効だということを説明した。では、そのイメージ表現による具体的な目的とテクニックについて考えてみたい。

ナナメに適した被写体を傾けて主観的なイメージを伝える

一般的に写真のフレーミングを考える場合、水平・垂直を出すことがセオリーとなる。水平線が少しでも傾いていると、違和感のある写真になってしまうからだ。確かにまっすぐに建っている建築物や、テーブルの上のグラスが傾いているのはあまり気持ちの良いものではない。しかし水平・垂直をきっちりと合わせることでやけに堅苦しく、説明的な写真になってしまうケースもある。写真構図の考え方として、すべての被写体で水平・垂直を合わせる必要はないが「意味のない傾きはNG」と理解しておこう。

写真の構図には「対角線（斜線）構図」といわれるナナメの構図がある。カメラをナナメに傾けて撮影しても、同様の効果があることを覚えておきたい。主な効果としては、奥行き、動き、スケール感の強調や、スペースの調整などがあげられる。簡単に言ってしまうと写真全体に動きであったり、被写体に躍動感をプラスできる。また、立体感や奥行きを表現しやすいから、ダイナミックな印象にもなる。ほかにも不安定感、緊張感、臨場感などを埋め込んで、情緒的なイメージを表現しても良い。傾ける角度によっても印象は大きく変わる。ここで注意したいのは、右上がりの写真を撮影したかったら、カメラは右を下げて、左を上げて撮影しなくてはならないということだ。

一般的に、人間の視覚は右上がりの写真を自然にとらえることができるとされる。反対に右下がりにすることで、不自然ともいえるインパクトを強調しても面白いだろう。また、被写体によっても自然に見えたり、違和感を感じさせるものはある。花などの植物は、ナナメに傾けても違和感は感じずに、むしろナナメにすることでまとまりがよくなることもある。被写体を見上げたり見下ろしたりする場合は、傾いていても不自然には見えない。建築物などを見上げて一部を切り取るようなときは、思い切って傾けるのも良いだろう。どのような被写体がナナメの構図と相性が良いのかを、見極めるようにしたい。カメラを傾ける意味を意識して撮れば、個性的で魅力的な写真になるだろう。

遠近感を強調して奥行きを作る

道や線路、橋などはナナメに傾けることで、奥行きを作ることができる。不安定な印象にはなるが、躍動感とインパクトが加わる。なるべく画角の広い広角レンズを使うことがポイントだ

パースを利用して動きと立体感を作る

画面内を1つの被写体が占める割合が多いときは、被写体に近づいて傾けることによってデフォルメする。そして、できたパースによって躍動感と立体感が生まれる

高さや広さを強調してスケール感を出す

タワーやビルなどの長細い建築物や縦長の被写体は、ナナメにすることで高さが強調されてスケール感が出る。対角線を意識して見上げるように撮影すると良い

スペースを調整して構図を整える

カメラを傾けることで不要なスペースを調整できる。空間を広く表現することや、フレーミングしたくない要素を整理することができる。テーブルフォトや街角のスナップなどで活用したいテクニックだ

カメラの上手な傾け方

ナナメの構図はそれぞれの効果を狙ってイメージを表現するものであることが理解できたと思う。次は、上手な傾け方について考えてみたい。カメラの右を下げて撮影すると、画面の左が下がった写真になることを忘れずに!

1 遠近感を強調するテクニック

道や建物の直線をナナメにする

遠近感を強調するには、道や建物のラインをナナメにして集中線を作る。画面の中にラインがないと、奥行きを効果的に見せることができないので、いかにライン状の被写体を探せるかがポイントになる。

下のシーンは建物の壁面と看板のラインを利用して、左奥の空間が広く見えるようにカメラを傾けると良い。また、通行人がたくさん歩いていたので標準レンズで背景を大きくぼかした。遠近感の強調は広角レンズの方が適しているが、看板の歪みや余計な要素を整理できないことがあるので注意しよう。

◀広い車道に併走している並木の歩道。ギャラリーの看板を主題に、奥行きのあるスナップを撮影したい

ポイント1 看板の上のラインに注目

ギャラリーの看板に近づいて、奥の抜けの分量を調整する。看板の上のラインが奥行きを作るような集中線になるようにカメラを傾ける

ポイント2 たくさんのラインを入れる

道を入れずに看板だけを撮影。背景の中にラインがないと、カメラを傾けても奥行きはほとんど感じられない。道を入れるか、見上げるような構図で建物を入れるのがベスト

ポイント3 画面の上に向かう線を作る

画面の左が下がると、奥の空間が狭くなり窮屈に感じられる。また建物のラインが奥に向かって下がっているため、消極的な印象だ。ラインは画面に対して上向きに見える方が、動きや奥行きが出しやすい

ナナメ

ソニー α7S ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 51mm ／絞り優先AE（F6.3、1/20秒、±0EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光　**建物のラインを斜線に配置することで、躍動感が感じられるはず。静物の被写体であっても、フレーミングによって動きのある印象になるのだ**

つながった線がないと遠近感は出にくい

画面に対して縦方向にラインがないと、遠近感は出しづらくなる。また、連続していないラインは効果が弱まってしまうこともある。長く続いているラインをフレーミングすることで、効果的に奥行きを表現できる

2 高さを強調する方法

対角線上にナナメの線を作る

高さのある被写体の場合、下から見上げるような構図でも高さを強調することはできるが、カメラを傾けることで動きが加わり、スケール感とともに迫力や威圧感と緊張感も表現される。ここでもポイントとなるのは直線のライン。ラインが長い方がより高さが感じられるようになる。

長方形の画面に対して一番長いラインが作れるのは対角線だ。そこで、対角線に直線ラインを配置するようにフレーミングをすれば、最も効果的な見え方になる。下のシーンではたくさんのラインが存在する。画面の中の明るい部分は視線を誘導するので、ビルの隙間の四角い空間をナナメにすることでスケール感を強調した。

◀コの字形の建物と、その間に建つビル。これらの建物の高さを強調して、スケールを出したい

ポイント1

ハイライトとラインを作る

ハイライト部分の空を入れずにナナメにしても、さほどスケール感は感じられない。画面を囲むようにビルを配置すれば放射状のラインができ、対角線と同様にスケール感や奥行きが強調できる

ポイント2

広角で長いラインを入れる

左の写真は39mmの標準域で撮影したもの。ビルのラインが短くなり、スケール感は乏しくなる。このようなシーンでは広角レンズを使って、なるべく長くラインを入れれば迫力のある写真になる

ポイント3

ラインが長くなる方向にナナメ

画面を右に傾けたもの。これでも問題はないのだが、ビルの隙間の空間のラインが短い。長い線が作れる角度でナナメにしたい

ナナメ

ソニー α7S ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 24mm ／絞り優先AE（F5.6、1/2,500秒、−0.3EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光　**ビルの隙間の空間とビルのラインによって、スケール感がしっかりと表現されている。画面の左を傾けることで不自然な緊張感も加わった**

低い建物は高さのスケール感が出にくい

低い建物の場合、広角レンズで見上げるようなアングルでカメラを傾けてもスケール感は伝わらない。傾けたことで不安定な印象になり、高さよりも建物の幅が強調されてしまう。高さのスケール感を強調するなら縦長の被写体であることがポイントになる

3 強いパースをつけるには

被写体をデフォルメする

像やモニュメントに限らず、直線で構成されていない被写体はパースをつけやすい。このような被写体の場合、撮影するアングルがポイントとなる。

目線よりも高い位置にある下の写真のような像は、広角レンズを使って見上げるようなアングルを作りたい。像の伸びた右足を思い切り傾けてインパクトを加えることもできるが、ここでは自然な動きが出るように角度を決定した。直線を意識して構図を考えるのがポイントとなる。また、像の背景にある直線（建物や木）によっても傾ける効果が強調されるので、角度をうまくコントロールしたい。

◀少し高い場所にある天使の像。ラッパとナナメに伸びた右足を生かして動きを作りたい

ポイント1 近づいてハイアングルで傾ける

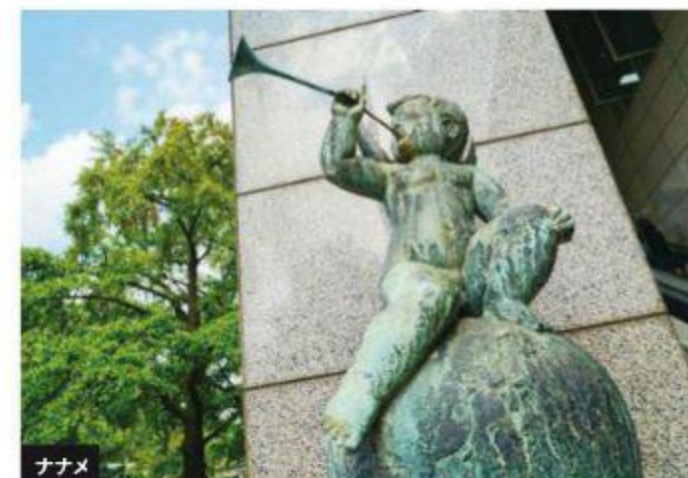
できるだけ像に近づいて、強いパースがつくようにする。ハイアングルで像の足元からあおるように狙う

ポイント2 背景の木の直線に気をつける

背景の柱と木がかなり傾いてしまうと、かなり不安定な印象となる。動きも感じられないし、像の顔が小さくなってしまい、存在感が弱まってしまう

ポイント3 画面の左を上げて動きを作る

画面を右上がりに傾けると、像が直立しているように見えてしまう。ナナメのラインを効果的に使って躍動感を表現したいので、左上がりにしたい

ナナメ

ソニー α7S ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 24mm ／絞り優先AE（F5.6、1/2,500秒、−0.3EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光　**天使の右足に躍動感が出て、背景の木には変なパースがつくことはなく、自然な見え方になっている**

丸い被写体はパースがつきづらい

被写体の形状によっては、カメラを傾けてもパースの効果は期待できない。丸や球では、形が歪むだけで遠近感は得られないのだ。ただしテーブルの上の皿やカーブしている道など、被写体の大きさやアングルによって見え方は変わる

4 不要なスペースを処理するテクニック

じゃまな背景を排除する

レストランやカフェなどで、食べ物の撮影をすることがあるだろう。テーブルフォトは、できるだけシンプルな構成を心がけたい。要素が増えれば増えるほど、自分は何を伝えたいのかが分かりづらくなってしまうからだ。

外食での撮影は、アングルや撮影ポジションなどに制約があって、なかなか思うように撮影することができない。右のような、フードが並ぶテーブルのシーンではカメラを傾けて、単純に背景を整理するテクニックを利用すると良い。ナナメに場面を切り取ることによって、余計な要素を引き算し、窮屈なスペースに空間を作ることができる。水平・垂直を意識すると、画面内における料理の割合が少なくなってしまうこともあるが、皿の配置とボリュームを意識してナナメに傾けると、画面にリズムが生まれて楽しい雰囲気を演出できる。カメラを傾けることで、グラスが不安定に見えるなどのデメリットもあるので、少し上目から狙うなどカメラのアングルにも気を配りたい。

◀円形のテーブルに並ぶ料理。自然な感じで配置されている様子をそのまま写し取りたいとき、背景にじゃまなものがあるときはナナメにすることで処理できる

ポイント1 全体のバランスを考える

少し上のアングルから見下ろすようにカメラを構えて、傾ける。このようなフードの撮影では水平を意識するよりも、全体のバランスを考えて傾けると良い

ポイント2 不要なものを消すために左に傾ける

画面の左を上げると、グラスの不安定感が強調される。また、手前のプレートの料理や左奥に椅子が見えているため、ごちゃごちゃした印象になっている。このシーンでは左を下げると良い

ナナメ

ソニー α7S ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 46mm ／絞り優先AE（F5.6、1/80秒、+1.0EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光　**画面の左を下げると、奥の椅子がカットされてまとまりのある構図になった。さらに手前のプレートの料理にボリュームが加わった**

真横からだと不安定感が強くなる

真横からのアングルで、斜めに傾けて手前と背景に空間を加えている。スペースをつくるために、カメラを傾けて構図を考えた。グラスなどは傾けることで不安定な印象になってしまうので、見上げるか見下ろすようなアングルにすると、自然に見せることができる

焦点距離別の傾け方

カメラを同じ角度傾けても、焦点距離によってその印象は違う。ここでは、広角、標準、望遠レンズに分けて、焦点距離別に上手なカメラの傾け方について考えてみたい。

焦点距離の特徴を知って大胆にナナメにしよう

構図を考える場合、レンズの焦点距離によって表現方法が変わる。被写体の見え方をはじめとして、被写界深度や歪みが変わるからだ。ナナメの構図においても、焦点距離の違いによって、何度傾ければ良いかが変わる。焦点距離が変われば、同じ角度に傾けても印象も異なる。印象としては、広角レンズの方が傾きを大きく感じるはずだ。広角レンズの場合、ほんの少し傾いているだけでも違和感を感じるのはそのためだろう。焦点距離が変わると、ナナメの構図の適正といえる角度は変わってくる。同じシーンを同じ場所から撮影すれば、被写体の見え方やバランスの変化がわかるので、レンズを換えて撮影してみることをおすすめする。

気をつけたい点は、傾ける角度が小さすぎると、目的を持って傾けたとしても、ミスでうっかり傾けてしまったと思われる可能性があることだ。基本的に、写真は水平がとれている方が良しとされているので、ある程度大胆に傾けた方が作者が意図を持ってナナメにしたということが伝わりやすい。

焦点距離の違いによる10度の傾きの見え方

広角24mmで撮影すると、フレーム内に水平線が広範囲に入り、対岸の建物などのディテールが「線」としてシャープに写る。そのため、傾きの印象が強く残る。200mmは水平線の一部分がアップとなり、建物の詳細がはっきりと見えるため傾きの印象は強くない。50mmはその中間の印象

広角 24mm　強いパースを生かしてアングルを意識する

広角レンズの特徴は、遠近感の強調や強いパースペクティブが挙げられる。同じシーンでもアングルを変えることで、被写体の見え方や印象が大きく異なるのだ。この特徴を生かすならば、ローアングルの方が遠近感や迫力は表現しやすいと言える。ただし主役となる被写体の位置によって、ローアングルがよい構図になるとは限らない。傾ける角度も同様で、被写体の形状によって変わってくる。構図を考える時点では傾けることを前提とせずに、まずは水平の状態で被写体が魅力的に見えるアングルを探すようにしよう。

この写真は手前にオレンジの浮き輪、そして緩やかにカーブする道を入れてフレーミングした。アングルが低すぎるとパースは強調されて奥行きはしっかりと伝わるものの、浮輪と道がよく見えない。反対にアングルが高すぎると浮輪はよく見えるが、道の奥行き感は乏しくなってくる。傾ける向きによっても、写真から受ける印象は変わる。奥行きを作る集中線の消失点が画面の上にあった方が、不安定なイメージが強調される。被写体の配置も同様だ。空間の分量も傾ける向きや角度で、増やすことも減らすこともできるので構図決定のポイントとなる。どちらにしても表現したい目的に合わせて、アングルと傾ける角度を考えるようにしよう。奥行きではなく広がりを表現したいときは、手前を大きく見せるローアングルが効果的だと言える。

ソニー α7S ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 24mm ／ 絞り優先AE（F5.6 、1/60秒、+0.3EV）／ ISO 3200 ／ WB：オート

浮き輪と道の見え方を重視し、画面の右を下げている。ほどよい遠近感と、手すりのパースによって広がりも感じられる

撮影シーン

運河沿いに規則的に並ぶ手すりの欄干の小道のシーンに奥行きを表現したい。強いパースが必要なため、広角レンズをチョイスする

ポイント1　低いアングルから狙う

高いアングルから撮影すると、遠近感が乏しくなってしまう。空間も狭くて窮屈な印象になってしまうので、低いアングルから狙いたい

ポイント2　ローアングルにしすぎない

道にすれすれのローアングルから撮影することで、手すりの傾きが強調されているが、かなり不自然な見え方になる

ポイント3　消失点は画面の下に配置

集中線の消失点が画面の上側になると、不安定な印象が強くなりすぎてしまう。消失点は画面の下に配置しよう

標準 50mm　自然な描写を意識して大胆に傾ける

標準レンズは、人間の目で見た感じに近い画角と言われている。ほかの焦点距離よりもクセがないぶん、工夫をせずに撮ってしまうと平凡な描写になってしまうというデメリットもある。ナナメの構図で標準レンズの特性を生かすには、傾きの角度を大きくすると良い。少し傾ける程度では、中途半端な印象になってしまうので注意したい。標準レンズは広角レンズと比較すると、パースや傾きの印象がおとなしいので、遠近感を強調する表現よりも、空間の調整などでも効果的な焦点距離といえるだろう。

この写真のように、さまざまな被写体が複雑に存在しているシーンでは、パースをつけるというよりも画面内を整理するつもりで傾けると良い。不要な空の空間を削除するためにナナメに傾けつつ、水平線と被写体をナナメにして不安定な水上を表現する。タワービルやポールなど高さのある被写体が多いので、少し傾いただけでも違和感を感じさせることはできる。しかし、ミスでうっかり傾けてしまったのではなく意図的に傾けていることをはっきりさせるためにも大胆に30度ほど傾けている。

ソニー α7S ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 50mm ／ 絞り優先AE（F4 、1/125秒、+1.0EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光

空の分量が少なくなるように、画面の左を下げた。反対に傾けると手前にあるポールが主張しすぎてしまう

撮影シーン

桟橋で右側には船が停泊し、奥側にはビルなどの建物が見えているシーン。自然な画角とナナメの構図で桟橋の不安定な雰囲気を表現するために標準レンズをチョイス

ポイント1　雑然とした雰囲気を生かす

ごちゃっとしていて雑然とした場面では、水平・垂直にこだわって撮影しても、その面白さが伝わらない

ポイント2　無用な空間は排除する

画面の右を下げると空の分量が多くなる。また、手前のポールの見え方が中途半端で、やけに目立っているのが気になる

望遠 200mm　おとなしい傾きの印象をボケで目立たせる

望遠レンズの主な特徴には遠くの被写体を引き寄せる効果であったり、遠近感が少なくて奥行きのない写真になる圧縮効果などがあげられる。そしてもうひとつ、大きなポイントとなるのが大きなボケ味。望遠になればなるほど、被写界深度が浅くなるのだ。望遠レンズでナナメの構図にする場合は、大きく傾けるというよりは、傾けることで情緒的な表現を加える目的がベストといえるだろう。被写体を傾けることで不安定な印象となり、寂しげな雰囲気や緊張感などを埋め込むことができる。遠近感の乏しい描写の焦点距離だからこそ、明るい絞り値を使用したり、被写体から離れることで、ボケの効果を生かした表現をおすすめしたい。視覚的なインパクトではなく、メッセージ性を重視した見せ方が楽しい。

この写真の場合は自転車を被写体にして、不安定な傾きを意識した。大胆に傾けても、角度は広角レンズや標準レンズと比べて、おとなしく感じられる。ニュアンスを加えるようなイメージで、角度を決定するようにしよう。また、露出をアンダーにすることで、路地裏の緊張感を表現している。埋め込むイメージにもよるが、大きく傾けることで非現実的なイメージにすることも可能だ。

ソニー α7S ／ FE 70-200mm F4 G OSS ／ 200mm ／ 絞り優先AE（F4、1/250秒、±0EV）／ ISO 1600 ／ WB：太陽光

開放値のF4にして背景を大きくぼかし、幻想的なイメージにした。自転車が倒れるように見える不安定に感じる向きに傾けている

撮影シーン

自転車が雑然と停められている路地裏。ほの暗い印象と、緊張感のあるイメージ表現を狙うために大きいボケが得られる望遠レンズをチョイス

ポイント1　ボケは大きく

絞りをF16にすると、背景の要素やラインが目立ってくる。ナナメの印象よりもほかの被写体の情報がうるさい

ポイント2　安定感は避ける

反対側に傾けると、自転車を壁に立てかけているように見えてしまう。ここでは路地裏の危ない雰囲気を演出するため、逆に傾けて撮影するのが正解だ

シーン別に見る角度の比較

角度の大きさによって効果も変わる。最後に、角度の変化による印象について考えてみたい。縦位置と横位置の2シーンで、水平から10度ずつカメラを回転させてその見え方を比較してみよう。

横位置の場合

ソニー α7S ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 33mm ／絞り優先AE（F4 、1/80秒、−0.3EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光

0度

10度

20度　ベスト

30度

40度

50度

60度

70度

奥行きを考えると、傾きの大きい40度が一番遠近感を感じることができる。しかし、人工的な被写体（建物や街灯など）が含まれているので、視界が回転してしまうと違和感がある。このシーンの場合、20度くらいが建物の角度と奥行きのバランスが良く、落ち着いて見えるようだ。左右の店もフレーム内に入りすぎずにバランスが良い

適切なナナメの角度は傾いた被写体の印象で決める

横位置と縦位置のシーン別の角度比較を見てもらうと、カメラの傾きだけでなくアングルによっての表現の違いも理解できるはずだ。奥行きを表現するために目の高さで撮影する時と、スケール感を表現するために被写体を見上げるローアングルでは、傾きの印象が大きく変わってくる。どちらにしても傾ける角度はカメラの角度ではなく、被写体の傾いた印象で決定しなければない。明らかに視界が回転するようなナナメの表現は避けたいところだが、その被写体が何であるかの情報を抽象化することができれば、70度傾けてもそのナナメの構図は成立するかもしれない。

ナナメの構図を作る上で、傾ける角度の目安になるものを活用するのは傾けすぎを回避するのに有効だ。近年に発売されたデジタルカメラの多くは電子水準器が搭載されている。また、グリッドラインを表示すれば、傾きや構図を決めるときの目安にもなる。これらはあくまでも目安なので、最終的にはファインダーや背面液晶モニターで見た被写体の傾きによって、意図した表現ができているかどうかを確認するしかない。被写体の形状、アングル、焦点距離によって適正と言える角度は変わる。また傾きの角度によっても、伝えたい表現も違ってくる。最終的にはセンスが問われる構図と言えるだろう。

縦位置の場合

ソニー α7S ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 24mm ／絞り優先AE（F5.6 、1/60秒）／ ISO 200 ／ WB：太陽光

0度

10度　ベスト

20度

30度

40度

50度

60度

70度

縦位置のシーンの場合、角度を比較すると10度がベスト。広角レンズで下から見上げているため、傾きの角度が強調されている。カメラを20度傾けると、被写体の角度はほぼ45度。ここまで傾いてしまうと傾きすぎてしまう。縦に高い被写体の場合、カメラの傾きではなく、被写体の傾きで判断するのがポイントだ

各社の電子水準器機能をチェック

最新のデジタルカメラのほとんどに電子水準器機能が搭載されている。メーカーごとにその機能や仕組みが違うので、それぞれ確認しておこう（ここでは水平機能だけをまとめた）。

オリンパス OM-D E-M1

主に水平を確認するために搭載されているレベラー。1目盛りの角度は公表されていない

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ

円形のグラフィカルな水準器機能。1目盛りは5度となっている

ソニー α7R

角度を計測することは難しいが、グレーの線に対角線で合わせると約20度となる

ニコン D810

90度ごとの傾きが分かりやすい円型の水準器。1目盛りは5度

パナソニック LUMIX GX7

角度を計測することは難しいが、外のグレーの線に対角線で合わせると約45度になる

富士フイルム X-T1

角度を計測することは難しいが、グリット線を利用すれば45度を確認することが可能だ

ペンタックスリコー K-3

水平を確認するためのレベラー。1目盛りは1度に設定されている

表現の上で決めた水平が結果的にナナメになる

大和田 良

Ryo Ohwada

ナナメで表現する
躍動感

ペンタックスリコー GR／18.3mm（28mm相当）／絞り優先AE（F2.8、1/1,000秒、＋1.0EV）／ISO 160／WB：オート
縦位置で傾きを生かすと、グラフィカルな再現を行うことができた。広い空と雲の画面に飛行機の翼が鋭く見える

カメラを傾けて撮影する場合の大きな理由は、それが被写体を写真としてとらえるにあたり自然だからである。目で見た場合、首を傾けてみても正常な平衡感覚を保っていれば目の前が傾いているとは感じないだろう。それでは写真はどうか。少しカメラを傾けるだけで世界の水平を簡単に変化させ、その様子を正確に写真は再現する。カメラを持つと人は基本的に水平を保ち撮影を行おうとする。しかしながら正確に水平を保つことは無意識には困難だ。

水平が保たれた写真は客観的な再現に優れ、構図としても安定することが多い。そのため通常は見た目、あるいは水準器を使い水平が保たれるよう意識するのだが、それが写真表現として最適かといえばそれは「そういうときもある」といった程度だ。表現として、あるいは撮影位置の立ちやすさだとかカメラのホールディングの仕方だとかを考えるとナナメになってしまうのが自然であることは多くある。さらに言えば、撮影時には確固たる理由なく水平に撮るのがなんだか気分に合わないということもある。あとからその写真を眺めると、フレーミングや構図、迫力などさまざまな理由でナナメにしたかったのだと理解できることもあるだろう。

カメラを傾けるということは、言い方を変えると写真に写る世界の水平を自分で選択するということだと考えている。水平を積極的に崩すことが苦手な人は、一度「自分で世界の水平を決めるのだ」という考え方で撮影に臨んでみると良いだろう。特に広角の伸びやかな画角を用いると、ナナメの線の躍動感が見えてくるのではないだろうか。四角いフレームの縦横ではなく、対角線を意識できるようにもなる。

写真に写ったナナメの世界に自然さを感じるようになると、フレーミングはさらに自由になるだろう。それはより豊かな写真表現につながるものでもある。考えなく水平だけを保つことは、写真を窮屈なものにしてしまう可能性があるのではないだろうか。

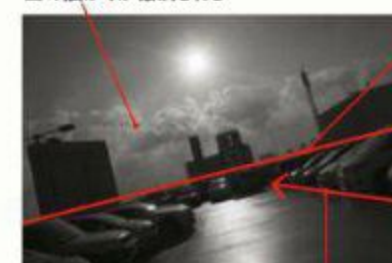
ナナメで表現する
日常

ペンタックスリコー GR／18.3mm（28mm相当）／プログラムAE（F4、1/50秒、－0.7EV）／ISO 160／WB：オート
窓から長く伸びる夕暮れの光をナナメの構図でとらえた。ナナメにハイライトが伸びることで、低い角度で広がる夕暮れの印象を強めることができる

大和田 良（おおわだりょう）：1978年宮城県生まれ。東京工芸大学芸術学部写真学科卒業、同大学院メディアアート専攻修了。2005年スイスエリゼ美術館による「ReGeneration. 50 Photographers of Tomorrow」に選出され、以降国内外で作品を多数発表する。2011年日本写真協会新人賞受賞。著書に『prism』『ノーツ オン フォトグラフィー』『FORM』などがある

Technique

逆光とナナメ構図で広がりと光を遮るような疑似体験を生む

このシーンで主題となっているのは太陽とその照り返しだ。強烈な光が広がる様子と道路の反射が作る光の線を意識して、肉眼では直視できないような光量に向けてカメラを向けている。光を遮るようにしながら見るその景色では、水平を保ち客観的な目線で眺めることはその場の自分の状況を表すものではないと感じ、傾けることでナナメの線を利用した。雲が広がる空の広さや車が並ぶ奥行きが、中心に向かう対角線の構図を感じさせる。また、光のラインを生かすためにはアンダー気味で撮影する必要があるが、強い逆光状態のため露出補正をすることなくカメラが測光した適性露出で撮影した。雲のシルエットにも輪郭にハイライトが描かれることで空に立体感が表れる。太陽から伸びる光条はナナメの構図を生かすのに必要であるため、絞り込んで撮影している。絞りを開けてしまうと光条が短く、光源が球状になってしまうため、太陽の光の強さの表現が弱くなってしまう。

このシーンでナナメ構図を用いると、その場にいる人がまるで強い太陽光や照り返しに動揺しているような効果や臨場感が生まれる。また、ナナメ構図によって雲の伸びやかさや並ぶ車の奥行きが出る

ベスト

水平

傾けすぎ

ペンタックスリコー GR／18.3mm（28mm相当）／プログラムAE（F8、1/4,000秒、±0EV）／ISO 160／WBオート　**太陽の強烈な光の強さを感じさせるシーンだ。眩むようなまばゆさの中で、カメラを傾けてその光景をとらえた**

水平を保ってとらえた写真では画面が安定してしまい、光を遮りながら撮影したような臨場感が生まれない。画面もナナメの伸びやかさに欠け、どこか窮屈なものに見える。一方、傾けすぎると不安定な要素が増えすぎてしまう

ベスト

水平

反対に傾ける

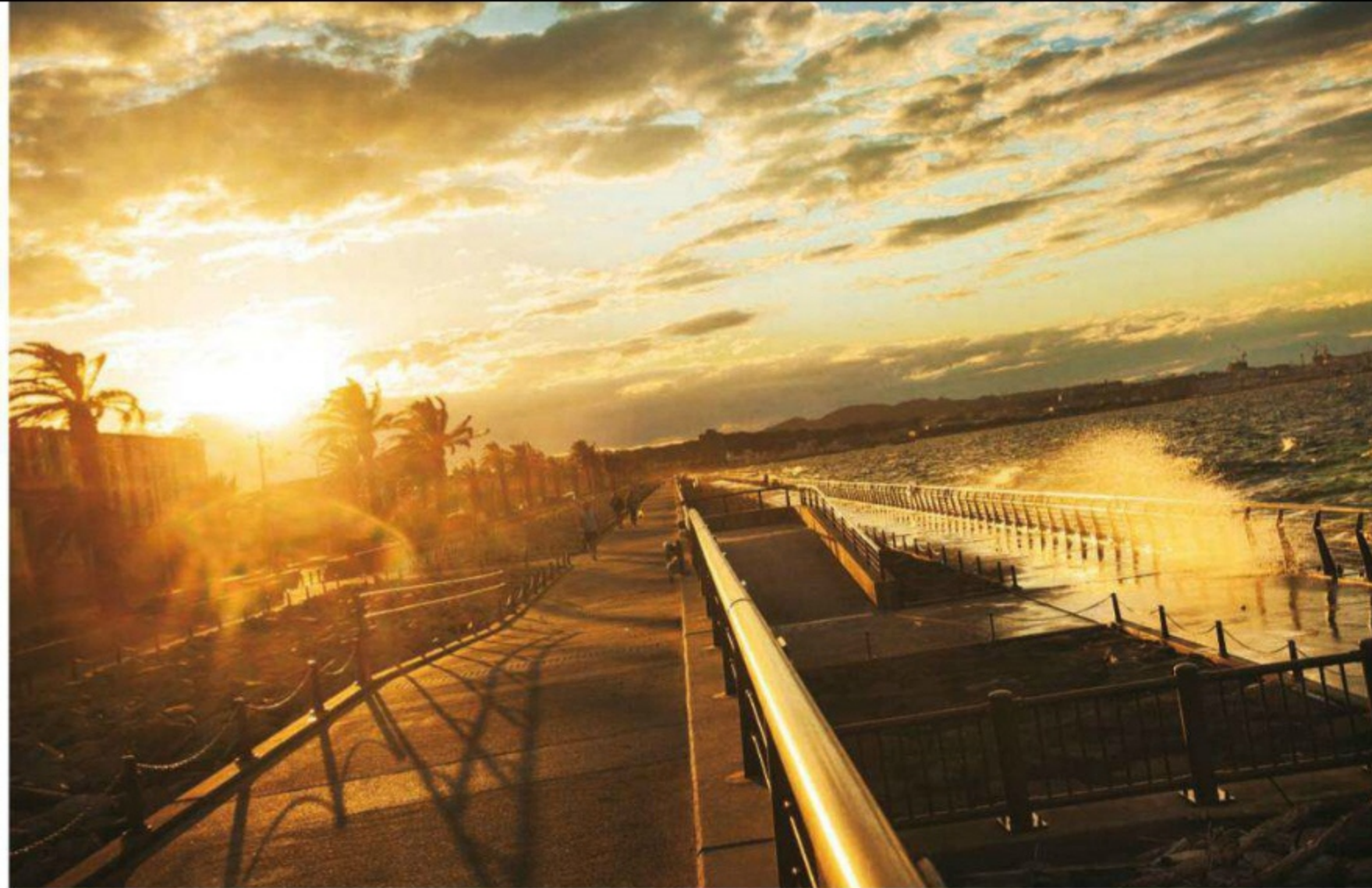
キヤノン EOS 6D／EF28mm F1.8 USM／28mm／絞り優先AE（F1.8、1/320秒、＋0.7EV）／ISO 1600／WB：オート　**窓からの逆光を使い、柔らかな雰囲気に仕上げている。子どもには右肩を少し上げてもらい、顔をその肩に近づけるように傾かせて立ってもらった**

水平に撮影したものでは安定感が感じられるが、空間の広がりがほかの2枚に比べて少ない。左に傾けた写真はナナメの構図がより強調され、画面の右下に向かって空間が広がるように感じられる

Technique

傾けた顔を基準に構図ナナメで躍動感や広がりを出す

人物の顔の傾きに対してカメラをどのように向けるかで印象は大きく変わる。顔の傾きとは反対にカメラを傾けることで、顔は真っすぐに正面からとらえたような印象に仕上がるが、背景はナナメの再現となる。水平にとらえた場合とは違った安定感があるとともに背景に動きが表れることで躍動感のある写真となった。また、顔の傾きと同じ側にカメラを傾けた写真ではナナメの構図がより強調され傾きがより強く感じられる。傾けた構図の2枚は背景の広がりにより、空間が伸びやかに再現されているのも分かる。背景だけでなく顔と身体のシルエットは、顔と逆側にカメラを傾けたものではその違いが効果的に表れているようだ。右上の天井部分までフレーミングされていることで空間的な高さを感じとることもできるだろう。シーンとしては窓からの逆光でとらえているため、柔らかな雰囲気を出すために＋0.7EVの補正を加えている。タングステン光とのミックス光下のため、ホワイトバランスは現像時に補正を行った。

顔を傾けたポートレートでは、顔を基準にカメラを傾ける（顔の傾きと逆方向に傾ける）と、水平とは異なる安定感を維持しつつ、画面全体に躍動感や広がりが生まれる

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／EF17-40mm F4L USM／40mm／絞り優先AE（F8、1/750秒、±0EV）／ISO 400／WB：5,900K
横須賀市の海岸。風が強くて遊歩道のテラスにまで波がかぶっている。こんな日でも遠くにジョギングをしている人影が見える。ナナメ構図にすることで夕日に向かって走る動感が得られた

写真を傾けるという行為はアプローチではなく衝動だ

郡川正次

ナナメで表現する
迫力

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／EF17-40mm F4L USM／19mm／絞り優先AE（F9.5、1/350秒、±0EV）／ISO 1600／WB：4,500K
横浜市本牧。雨に濡れた路上にはゴミが散らばり寂寥感が漂っている。広角レンズで画面を右に傾けて金網が覆いかぶさってくるような効果を狙ってみた

なぜ画面を傾けるのか。それは“カッコ良い”からだと私は思う。ただし、傾けた写真をカッコ良いと思うか不快に感じるかはその人の感性によるもので、傾けることの是非については正しい答えを導き出すことは難しい。しかし、そう言ってしまうと思考が停止してしまうので、ここではどうすればカッコ良く傾けた写真が撮れるのかについて少し考えてみたい。

まず最初は、その場面が傾けるに値するかどうか、傾けることで新たな何かを生み出すことができるかということだ。どんなものでも傾けて撮ればカッコ良く見えるなどということは絶対にない。むしろ静けさに満ちた自然風景やどっしりとした古い建築物などは傾けることにはそぐわない。その対象物を傾けて撮るべきかどうか、その場の判断が大切だ。次に、傾けたいう撮影者の意図が見る人にしっかり伝わるようにすること。私たちの目はわずか0.3度ぐらいの傾きでも感じとることができる。だからあまり少ない傾け方では水平に撮ったつもりが傾いてしまったのか、何らかの意思を持って傾けたのかが分からなくなってしまう。「これは傾けて撮ったんだ。どうだこの方がカッコ良いだろう」という声が作品から聞こえてこなければ見る人に何も伝わらないのだ。そして3番目。これが最も肝心なことなのだが、私たちが何か対象物に出合ったとき、どうしてもそれを写真に撮りたいという衝動に駆られる。そしてここだと思ってシャッターを切ったときにそれは作品として成立する。もちろん、その過程には露出の決定や構図といったいくつかのアプローチがある。しかし、ここでいう傾けるという行為はそのアプローチではなくて最初に自分が撮りたいと思った衝動に属しているのではないかと私は考えている。つまり、画面を傾けるということはその場で写真を撮りたいという衝動を感じたとき自然に沸き起こってくるものだ。私が目指すところは水平と傾きの両方を撮っておいたり、傾きの角度を変えていろいろ押さえたりするのではなく、最初の衝動の赴くままにコレだというところを一発で決めるいさぎよさだ。難しいことだけれど。

郡川正次（こおりかわまさつぐ）：奈良県生まれ。カメラ誌や音楽誌にて人物撮影や商品撮影を手がけるかたわら、東京湾臨海をテーマとした作品を発表している

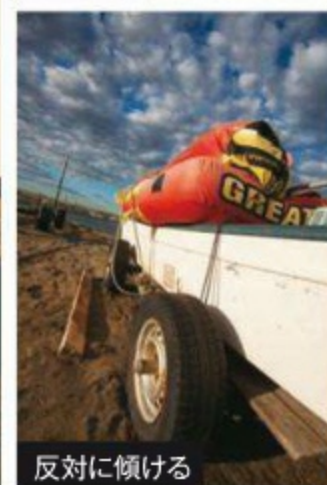
Technique

静止するものを傾けて被写体に動きを出す

心地良い画面の傾きは人それぞれで、これだという答えを出すことは難しい。だから右の写真は私が気持ち良いと感じた傾きだ。

よく晴れた海岸で午後の日を浴びて舟に載せられたゴムボートを見つけた。この写真の画面を構成しているのは、ゴムボートとそれを載せた舟、砂浜、雲の3つの要素なのだが、画面を左に傾けたことでその中の舟と砂浜が左側に雪崩落ちるように、また、雲は左上方に飛び去っていくような動きを見せてくれた。このように静的な被写体に対して画面を傾けるというのは、動きを導き出す上で非常に有効な手法といえる。傾ける際の角度についてはある程度の経験も必要だが、それよりも自分の感覚を信じてあれこれと迷わないで撮った方が良い結果が得られるだろう。自分の感覚に自信を持つこと、そして常にそれを研ぎ澄ましておくことだ。絞りについてはここではパンフォーカスにしたかったのでF8まで絞り込んでいる。また、秋の日差しの温かみが再現されるようにRAW現像時に色温度に注意を払い、5,200Kとした。

対角線方向の流れと15度の傾き

この写真の場合、雲の流れ、砂浜の流れ、ゴムボートと舟、タイヤの方向がすべて対角線方向に向いている。これは画面に奥行き感を出すのと、動きを増すのに大きく寄与しているのだが、これも画面を傾けた効果といえる

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／EF17-40mm F4L USM／19mm／絞り優先AE（F9.5、1/350秒、±0EV）／ISO 1600／WB：5,200K　**ゴムボートが置かれた海辺の風景をスタティックな写真にしたくなかった。画面を傾けたことでタイヤが後方に転がりだしそうな感じを出せたのではないだろうか**

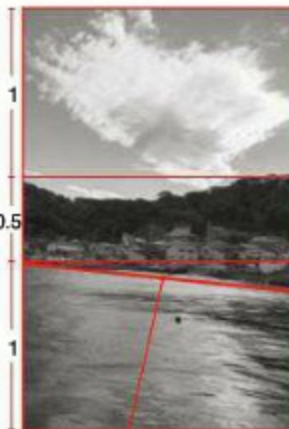
水平に保った写真。これはこれでワイド感もあって悪くはないのだが、少し面白味に欠ける。右に傾けた写真は舟の上縁が水平になってしまい遠近感が乏しい。また全体が右奥の方向に倒れていきそうで何だか気持ちが悪い

キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ／EF17-40mm F4L USM／34mm／絞り優先AE（F8、1/500秒、±0EV）／ISO 400／WB：4,950K　**青空に広がった不思議な形をした白い雲と静かな海面。その静寂さが漂う時間を写真にとどめておきたかった。そこで画面を傾けることから湧き出てくる揺らぎの力を借りてみた**

水平の写真は安定感はあるがどうということもない、言ってみればあまり面白くない写真だが、傾けることで浮遊感が強調される。傾け具合としては傾けすぎのものよりベストショットの方が自然に見えるが、ここは好みが分かれるところだろう

構図の不安定さを生かして海に漂う浮遊感を出す

何げないひとときのちょっとした瞬間。それに気づいて見逃さないことが写真を撮る上で何よりも大切なことだ。流れの速い雲が晴れ渡った空の太陽を遮ったとき、あたりの風景は一瞬陰りを見せた。そのときに感じた心もとなさからか、カメラは大きく傾いてあたりをとらえていた。一般的に水平に写し出された水面というのは安定感をもたらし、反対に傾いた水面は見る人に不安感を感じさせることが多い。この写真では傾いた海面は不安感よりもむしろ揺らいでいる船に乗って海を漂いながら陸地を見ているような、浮遊感とでもいったものが感じられるのではないだろうか。

このときは海面には白い雲の影が映って明るく輝いていた。このように海面は空の色を映し出す。青空ならばブルーに、曇り空ならば陰鬱な鉛色になる。海を撮るときはそこに何が映っているか見極めることだ。絞りはこの場合F8を選んで全面にピントを合わせているが、それが可能な明るいレンズであれば、開放絞りで手前の海をぼかすのも面白いだろう。

1:0.5:1の三分割構図

浮遊感を出す15度のナナメ構図

このように空、陸地、海で画面を3分割しているような場合は各部の分量のバランスを良く考えて構図を整えたい。この場合、それぞれ1:0.5:1に振り分けて、その上で海の分量をほんの少し多くしている

パナソニック LUMIX GM1 ／ LUMIX G 20mm/F1.7 II ASPH. ／ 20mm（40mm相当）／ラフモノクローム（F2 、1/1,300秒、＋0.3EV）／ ISO 200 ／ WB：オート
パリのメトロの車窓より北駅を撮影。鉄橋の柵の合間からシャッターを押すタイミングは難しく、意図せずともナナメの構図になっていた

正しいナナメの構図は身体の反応と直感が導く

中藤毅彦

ナナメで表現する
力強さ

オリンパス PEN E-P3 ／ M.ZUIKO DIGITAL 17mm F2.8 ／ 17mm（34mm相当）／ラフモノクローム（F11 、1/1,600秒、＋0.3EV）／ ISO 800 ／ WB：オート
ベルリンにて。これは何も意図せず身体の反応でバシバシとシャッターを切った中の1枚。気が付けばこんな構図で切り取っていた

カメラを傾けたナナメの構図は、諸刃の剣ともいえる危険な手法である。僕自身、写真を始めた最初の頃に随分とナナメの構図を多用してその恩恵にあずかってきた半面、多用しすぎたり、わざとらしい使い方をしたときには容赦のない批判を受けたことも確かである。今現在は、ひところのようにほとんどの写真が傾いているという多用は避けて、基本的には水平を保つことを心がけつつ、ここぞというときにのみナナメの構図を使用するようにしている。

テクニックとして考えると、ナナメ構図といっても撮影時にほんの少しカメラを傾ける、たったそれだけである。はっきりと言えば、何の手間もいらずに画面にインパクトを出すことができる、実に簡単極まりない安易なテクニックである。一方、今回の趣旨とは少々ずれる話になってしまうが、意図せずとも一瞬のシャッターチャンスにとっさに対応したため、結果的にナナメになってしまうという場合ももちろんあり、本当はこれが一番作為のない臨場感を生む本物のナナメの構図といえる。

画面にもたらす効果としては、あえて安定を崩すことにより疾走感や不穏な気配、力強い印象や鋭く尖った印象を与えることができる。ただし、ナナメの構図を本当に効果的に使うのは、場面やシャッターチャンスに合った微妙な傾きの調整を直感でこなさなくてはならず、意外と難しいともいえよう。別にこの場面では何度傾けるといった定石がある訳ではないので、経験と感覚のみを頼りにカメラを傾けるしかなく、正解は撮影者それぞれによって違うのである。ある撮影者にとってしっくりくる角度だったとしても、違う撮影者にとっては気持ち悪いということも多々あるわけで、また見る側の感性に委ねる必要もあるだろう。実際の撮影で自らの感覚に正直にトライ＆エラーを繰り返す中で見えてくる角度、頭で考えるのではなく、身体の反応と直感が導いた角度、いわばそれこそがあなたにとってのナナメの構図の正解値なのではないだろうか。

中藤毅彦（なかふじたけひこ）：1970年東京都生まれ。早稲田大学第一文学部中退、東京ビジュアルアーツ写真学科卒業。モノクロームのスナップショットを発表している。作家活動とともに、四谷三丁目にてギャラリー・ニエプスを運営。http://niepce-tokyo.com/

オリンパス PEN E-P3 ／ M.ZUIKO DIGITAL 17mm F1.8 ／ 17mm（34mm相当）／ラフモノクローム（F6.3 、1/800秒、＋0.3EV）／ ISO 1600 ／ WB：オート　**銀座のスクランブル交差点にて、行き交う人々の中で目についた女性の後ろ姿。歩き去るシルエットが印象的であった**

水平の状態で写したカットは、これはこれで問題ないのだが躍動感に欠ける。一方で傾けすぎてしまうと、やりすぎ感が目に付いてしまう。良い落としどころを見極めるのが大事である

Technique 最適なナナメ具合を選び人物に躍動感を与える

人物が入ったストリートスナップにおけるナナメの構図、これはありきたりのスナップに躍動感を生み、画面を活性化させるカンフル剤のような効果がある。本来は動きとシャッターチャンスの中でフレキシブルに構図を決めていくよりほかになく、またそれこそがスナップショットの醍醐味なのだが、あえてナナメ構図の角度について解説してみたい。ひと言でいえば「良い落としどころのナナメ具合」とでも表現できようか。どんな分野でもそうだが、何事も過剰に味付けをすると、狙いすぎたあざとさが目につき、かえって効果を損ねてしまう。一方で、余りに控えめにしてしまうとその効果が生きず、中途半端な効果になってしまう。フィルム時代はすべて勘に頼るしかなく失敗も多かったが、今は背面液晶モニターで確かめながら角度を見極めることができる。自然に身体が動いて自分の中でこれしかないという角度でシャッターを押せるようになるには秘訣も何もなく、経験を積むよりほかにない。

メインの被写体となる女性のシルエットを中心にした日の丸構図である。思い切って傾けて路面の横断歩道の模様を大胆に写し込み、画面に動きを出したのがポイントである

Technique 漠然となりがちな遠景にほど良い動きを与える

都市ランドスケープにおけるナナメ構図、これはスナップショットの場合よりもじっくりと構えて撮影できるのでやりやすいかもしれない。この場合は、高所から広大な風景を俯瞰した視線で写しているが、こうした遠景ショットをそのまま写すと漠然としたとらえどころのない写真になりやすい。また、無理して構図や切り取り方を変えてもあまり良い結果にならないことが多い。そこで、大きな効果を上げられるのが、ほかならぬナナメの構図なのである。スナップショットのように一瞬のシャッターチャンスという訳ではないが、風景でも太陽の位置など、刻々と変化する要素はある。雲や光の状況を見定めながら、ちょうど良いバランスの傾け角度で写せば、退屈な遠景のランドスケープにも見違えるような動きが出せるはずである。この場合も明確な正解の角度というものがある訳ではないのだが、それぞれの場所の風景によって自ずとちょうど良い傾け方が定まってくるから不思議である。

このシーンの場合、電車とモノレールの線路のラインがポイントだ。傾けることでナナメのラインが生き、ビルと線路群が複雑に交差するエネルギッシュな都市風景を表現できた

オリンパス PEN E-P3 ／ M.ZUIKO DIGITAL 14-42mm F3.5-5.6 II R ／ 14mm（28mm相当）／ドラマチックトーン（F10 、1/500秒、±0EV）／ ISO 1600 ／ WB：オート　**浜松町の世界貿易センタービルからの撮影。ビルと線路が交差する大都市のダイナミックな光景を俯瞰でとらえてみた**

水平の状態では当たり前すぎて漠然とした光景になってしまい、線路の交差が生きてこない。あまり傾けすぎるといかにも狙ったというあざとさが気になってしまう

ナナメで表現する 立体感

富士フイルム XQ1 ／ 6.4mm（25mm相当）／絞り優先AE（F6.5 、1/350秒、－1.7EV）／ ISO 100 ／ WB：晴天　**建造物は傾けて撮ると安定感が損なわれるとされる。だが、より存在が意識されて奥行きが増した表現が街をさらに立体的に見せる**

生き生きとした街の立体感や空気感、奥行きを演出する

藤田一咲

Issaque Foujita

ナナメで表現する リズム

オリンパス OM-D E-M10 ／ M.ZUIKO DIGITAL 25mm F1.8 ／ 25mm（50mm相当）／絞り優先AE（F5.6 、1/100秒、＋0.3EV）／ ISO 400 ／ WB：オート　**平行に整然と並べられたものは、刺激のない光景になりかねない。カメラを少し傾けるだけでリズム感を生み、生き生きとしてくる**

カメラは基本的に横に構えて撮ることがとても多い。それは人の視覚が横位置で世界を見ていることと関係しているのだろう。また、それによってもたらされる水平なものは水平に見えていることが、安定感のある気持ち良い感覚につながっている。それは写真表現においても表れている。写真が傾いていると気持ちが落ち着かない。私たちの視線は傾いてものを見ることには不慣れなのだ。そこをあえてカメラを傾けて世界を見る、撮るには、日常の視覚の意識を変革させなければならないだろう。

ナナメに撮るということは、すでにそこに意味が生まれる。つまり、普段の見え方とは異なる見え方で表現する、伝えようとする意識がそこにはある、ということだ。見る側にもそれはひと目で伝わる。傾いた視覚は普段の生活にはないからだ。傾いた写真は、それだけで見ることを意識させる。不安定感や新鮮さなど、ある種の感情を抱かせる。その意識や感情を利用する手段にナナメの構図があるのだ。

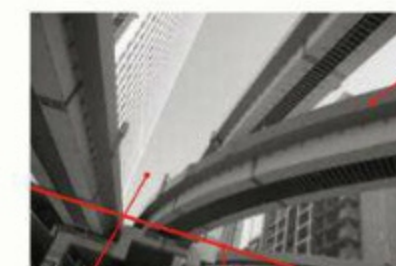
カメラを傾けて撮るのは一見すると簡単そうだが、背面液晶モニターの画面やファインダーから見える風景を傾けるのは、最初は意外と意識的に行わないとできない行為かもしれない。それも、ただやみくもに傾ければ良いものではない。傾ける角度は被写体との兼ね合いで決まるからだ。つまり、そこには傾ける、ナナメにするという明確な表現意図がなければ、ただのルーズに傾いた写真になってしまう。さらに、表現意図があっても傾けた効果が十分に発揮され、それが伝わらなくては意味がない。

私は街をスナップするときにナナメの構図でよく撮る。街に奥行きやワイド感が出てより立体的になる。水平な路地よりも奥行きのある路地になる。人々のざわめきが、ときには不安感をともなって生き生きとしてくる。街の空気感や雰囲気をより豊かに表現できる。だが、ナナメの構図は自然の視覚感覚とは異なるために、安易に傾けたり、やりすぎた表現は疲れや不快感を生むので注意が必要だ。

藤田一咲（ふじたいっさく）：東京都生まれ。脱力写真家。トイカメラやフィルムカメラ、旅と平和を愛し、力まず写真を楽しむことを提唱するフリーランスのフォトグラファー。写真は子どもの頃からの遊学。著書に『ハッセルブラッドの時間』『パリ散歩の時間』『ねこカメラ』（枻出版社）、『彼女を素敵に撮る15の方法』（玄光社）などがある。http://issaque.com/

Technique

広角の遠近感に傾きを加え都市のダイナミズムを強調する

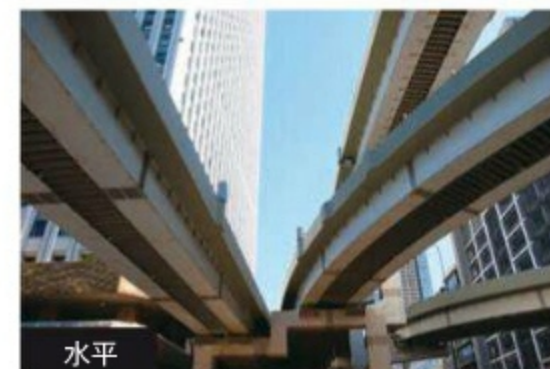
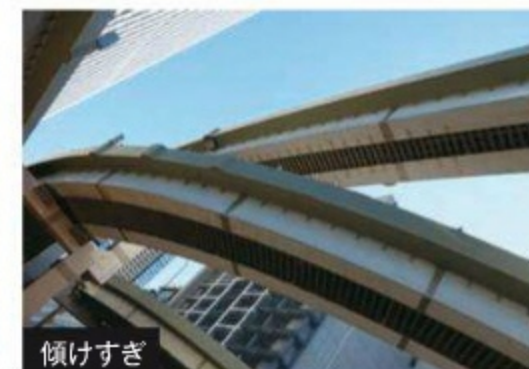
右のような都会の光景は水平、垂直の線がきっちり取れたビルや道路で構成され、味気のない印象がある。そんな光景では、カメラをいつもより大きめに傾けると、視覚がダイナミックに変化し、生き生きした表情に変わり、ハッと思わせる光景にも出合うことになる。レンズは広角系を使いたい。遠近感をより強調でき、広さや歪みを誇張させることで、意表を突くような新鮮な視覚が味わえ、表現も大きく変化する。また、絞りは深くして全体がハッキリ見える方が気持ちが良い。ここで注意したいのは、背景や周囲に空などの抜けた空間がないと、画面全体にピントが合って見えるため、ベタっと貼り付いたような光景になって奥行き感がなくなる。ダイナミック感の少ない、閉ざされた空間表現になってしまうのだ。また、傾けすぎると、どこを見たら良いのか分からない、視点の落ち着かない気持ち悪さにつながる。また、傾きに関心が向きすぎ、表現意図が分かりにくくなる。

広角で遠近感を出す

レンズはできるだけ広角側を使う。その方が遠近感や形が誇張されて、画面に広がりが出る。さらにカメラを傾けることで、ダイナミック感が演出される。ただし、空など抜けている空間がないと効果は薄い

空ヌケを入れて傾きを伝わりやすくする

伸びやかさが出る17度で傾けた

ベスト

水平

傾けすぎ

富士フイルム X-T1 ／ XF18-135mmF3.5-5.6 R LM OIS WR ／ 27mm（41mm相当）／絞り優先AE（F4 、1/600秒、－0.3EV）／ ISO 200 ／ WB：オート　**街の高速道路。水平だとおとなしい感じになるので、広角レンズで遠近感や道路の形状を誇張し、カメラを傾けて街のダイナミズムをより強調した表現にした**

水平の光景は普段目にする印象に非常に近いため、落ち着いて見ることができるが何も伝わらない。一方、カメラを傾けすぎると、背後や周囲の水平や垂直なラインも大きく傾く。視点を定められなくなり、バランスの悪い画面になってしまう

Technique

群衆の動きを増幅させて街の活気や表情を引き出す

左のような街のスナップでは、普段の水平な視覚を撮影にそのまま反映させると、そのあまりに素直な描写に写真的な面白さが欠けているように感じることが少なくない。そこで変化を求めて、カメラを傾けて撮るのは、街の見方を変える意味でも良いことだ。街が少し変わって見える。カメラを傾けるというのは、普段のものの見方、見え方に疑問を持つ良い機会にもなる。街の活気がより増して見えてきて、人が行き来するだけの単なる交差点が、表情豊かな喧噪の場になるのだ。そして、傾ける度合いだが、街の様子を傾けすぎて撮ると、画面の不安定さが増して不安感につながる。それも街の表現の面白さにつながりそうだが、過度な傾きは撮影者の街に対する悪意さえも感じられそうで、気持ち良く感じられないことも。この撮影では交差点の人々に注目。ナナメの構図で動きをより表現。また、ナナメ上方から撮ることで奥行きや立体感も狙い、群衆の密度にもこだわった。

20度の傾き

広角レンズを使い、腕を伸ばし、やや上方から空を入れて奥行きを出す。交差点を渡る人々が重なって見えるようにカメラを傾けて撮影。人の密度を出し、活気を感じられるようにした

建物の傾きが大きくなりすぎないように

人の密度に注目

ベスト

水平

傾けすぎ

富士フイルム X-T1 ／ XF14mmF2.8 R ／ 14mm（21mm相当）／絞り優先AE（F3.2 、1/210秒、±0EV）／ ISO 200 ／ WB：オート　**都会の交差点のスナップ。カメラを傾けることで、交差点を渡る群衆の流動感を演出でき、交差点の混雑した感じや街の表情がより豊かになった。街では傾きを意識的に大きめにしたい**

水平の出ている写真は、普段見る光景と比べて変化が少ない。特に街のスナップでは新鮮みに欠け、面白い表現になりにくい。かといって傾けすぎると安定感が失われて不安感の方が強くなってしまう

ナナメで表現する
不安定

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／カールツァイス Otus 1.4/55 ZE／55mm／絞り優先AE（F2.5、1/640秒、−0.3EV）／ISO 100／WB:5,200K
何気ない店先のディスプレイも、ナナメの構図にすると不安定になり、意識して撮ったことを感じてもらいやすくなる。傾きの微調整は必要だ

意図や傾け具合を意識して ポジティブな変化を生み出す

佐々木啓太 *Keita Sasaki*

カメラを傾けるのはNGだといわれることも多く、ナナメの構図にはネガティブな印象が付いてまわる。これは構図が傾いていると、その写真を見たときに不安になったり、落ち着かなく感じることがあるためだ。駅貼りのポスターなどによほどの狙いがない限り、傾いた写真がないのはこのためである。一方、見方を変えるとナナメの構図は画面に変化をつけやすいということになるが、この変化が強すぎたり狙いに合っていないと、なんとなくカメラが傾いていただけでNGになることが多い。ナナメの構図は変化が必要なときに使い、意図やさじ加減を意識しなければいけないデリケートなテクニックなのだ。

このように、理屈としては分かりやすいが、どの程度の傾きがベストなのかはその場面によって違ってくるので、撮影時に少し角度を変えていくつかのパターンを撮影しておくほうが良い。そんなことを何度か繰り返していると、撮影条件に応じた自分のベストな傾きを見つけられるようになる。撮影条件によっては1枚で決めなくてはならないときもあるので、さまざまなパターンを試して瞬時に判断できるようになっている方が、ナナメの構図を意識して使いやすくなる。

上の写真は、35mmフルサイズのデジタルカメラに55mmの標準レンズを付けて撮影している。誌面ではカラーにしているが、撮影時はモノクロに設定していたこともあり、色による変化をつけづらい条件でもあった。標準レンズの画角は人の視野角に近いので見た目と同じようになりやすく、アングルや絞りだけでなく、ナナメにするのも画面に変化をつけるのに効果的だ。画面にナナメの線が入るとその線に意識がいくので画面を広く感じさせる効果がある。さらに不安定になって気になるのを利用してその写真を目立たせたり、自分の見せたいポイントに視線を誘導することもできる。主要被写体の状況に合わせて、少しナナメにした方が画面全体のバランスが良くなることもある。ナナメ構図を意識していれば意外に使えると感じるはずだ。

ナナメで表現する **バランス**

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／カールツァイス Otus 1.4/55 ZE／55mm／絞り優先AE（F2.5、1/1,000秒、±0EV）／ISO 100／WB:5,200K
おしゃれな自転車が歩道の段差を利用して止めてあったが、まっすぐ撮ると自転車の傾きが強すぎると感じたのでバランスをとるためにナナメの構図にした

佐々木啓太（ささきけいた）：1969年兵庫県生まれ。日本写真芸術専門学校卒業後、貸スタジオ勤務、写真家のアシスタント生活を経て独立。「写真はモノクロに限る」が口癖で、写真学校卒業以来の暗室オタクも、デジタルでカラーにシフト。フィルムでも、デジタルでも、写真で楽しく遊べる世界を目指す。「街角写真家」として活動中。http://www.facebook.com/KeitaPage2

オリンパス OM-D E-M1／M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0／12mm（24mm相当）／プログラムAE（F9、1/1,600秒、−0.7EV）／ISO 200／WB：9,800K **傾いた太陽に向かって広角レンズを使っている。雲の様子も画面に変化を加えてくれたが、さらに広がりを強調するためにナナメの構図にした**

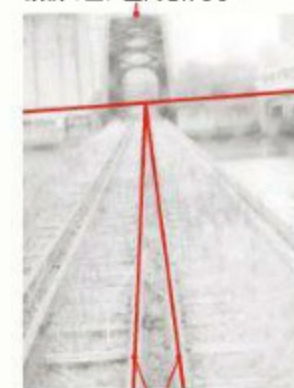
水平にするとなんとなく広がりが弱く、傾けすぎると広がりより不安感の方が強くなる。ほどよい角度は画面を構成する要素でも違ってくるが、今回は雲の形に注目して、雲が開いている方向に広がりを持たせた

雲を多めに取り入れて広がりをさらに強調する

「アートフィルター／クロスプロセスⅠ」と色変換用のフィルター、カスタムホワイトバランスを使って強い変化をつけている。明らかに見た目と違う風景にすると、ナナメの構図と相性が良い。使っているレンズはマイクロフォーサーズの単焦点12mm。歪みも少なく、安定感のある4:3のアスペクト比で使うときは、より広さを出すためにちょっとテクニックが必要なことが多いレンズなので、強い変化と合わせてナナメの構図を利用した。ナナメにすると広がりが出ることに加え、シルエットの建物の大きさも表現しやすくなるし、変化のある雲の動きにも意識が向くようになる。傾きが強すぎると広がりよりも不安感が強くなるので、このときは微妙に傾きを変えたパターンをいくつか撮っておいた。構図のバランスとしては、広がりを感じやすいように空の部分を多くしたいと考えていた。傾きを逆にしたのも試して最終的にこのパターンを選んでいる。ナナメの構図にはとりあえず試すという精神も大切だ。

雲と建物のバランスでも広がりを感じやすいように、雲を少し多めに取り入れた上で少し傾ける。傾きが強すぎると狙いに合わないこともあるので注意

角度＋構図のバランスで視線誘導のベストを探る

再開発のあとにそっと残されている引き込み線の跡。この線路にはさまざまな歴史がしみ込んでいて、多くの人々の思いが残っているように感じられた。金網越しにしか撮影できなかったが、そんな思いや歴史の余韻を画面に入れたいと感じた。構図を少し傾けて、写真を見たときの視線が傾いた方に向きやすい効果を利用している。また、線路の先に続く思いに気持ちを傾けてほしいという考えが強かったので、2本の線路も1本が真ん中に行くようにして構図的なバランスも崩している。基本的にはこの角度がベストだと感じていたので、撮影時には角度ではなく画面構成のバランスを変えている。鉄橋の上に空間を開けたパターンも撮影したが散漫に感じたので、鉄橋の頭をわざとギリギリにした方を選んだ。しみ込んでいる思いを意識していたので、仕上がりも少し緩い感じになるように「アートフィルター／デイドリーム Ⅱ＋ソフトフォーカス効果」で、中望遠レンズの絞りを開けて暖かみを感じるイメージにした。

2本の線路の1本を真ん中付近にしてナナメ構図とあわせて画面全体のバランスも少し崩している。鉄橋の上をギリギリにして、その先があることを意識しやすいまとめ方にした

オリンパス OM-D E-M1／M.ZUIKO DIGITAL 45mm F1.8／45mm（90mm相当）／デイドリームⅡ＋ソフトフォーカス効果（F2、1/1,250秒、+0.7EV）／ISO 200／WB:7,500K（A+4） **再開発後に残されている引き込み線の跡。少し哀愁を感じるような仕上げにして、ナナメ構図で線路の先に視線が繋がっていくようにした**

水平にすると画面の中に収まりすぎるので、画面の外に意識が向かず、物語性を感じづらくなる。傾きすぎると視線の誘導よりも不安感が強くなるので別の狙いになる。その場合はもう少し強い印象の仕上げの方が合っている

ナナメに適した被写体やアングルで面白さや違和感を伝える

福井麻衣子
Maiko Fukui

ナナメで表現する
動き

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF24-105mm F4L IS USM／50㎜／絞り優先AE(F6.3、1/1,000秒、±0EV)／ISO 400／WB：8,000K（M4）
夕日を見に急ぐ人々の背中と影が美しく、歩いている雰囲気をナナメで表現した1枚。センチメンタルになりそうな場面だったが、溢れる光の希望へ向かって歩いているような表現となった

意図的にカメラを傾けることの効果としては、動きの表現や不安定感、形の面白さの発見などが考えられると思う。私の場合、スナップでは動きや迫力のある臨場感、そして「おや?」と、違和感を与えたい場合、またナナメに傾けることによって形の面白さを表現できるときに使うことが多い。もちろん、仕事での人物撮影でもカメラを傾けることは多々ある。動きを表現するためにステージ撮影やインタビュー撮影でもよく使用するテクニックである。ただすべてをナナメにして撮影してしまうと、写真を並べた際にちぐはぐな印象となってしまうので、水平・垂直を出した写真の中で、効果的に数枚を使用している。

ナナメに適している被写体を考えた場合、道路や線路など放射線になる場所はカメラを傾けることの効果を得やすい被写体だと思う。広角レンズと放射線状の被写体はとても相性が良く、ナナメにするとそれらの被写体が持つ格好良さを引き立てることができる。パフェやグラスなど、高さのある被写体を見下ろしたり、タワーを見上げるアングルもナナメと相性が良いだろう。

ナナメで撮影する際に注意すべきポイントは、必ず水平の状態からカメラをナナメにすることだ。いきなりナナメで撮影すると、体がねじれていたりして、どうにも落ち着かない印象となってしまうことがある。水平・垂直を確認してからカメラを傾けて行くと失敗が少ない。また、光の向きは大変重要なので、カメラをナナメにして自然に見せたい時、不安感や不自然な印象を表現したいときはどのような光が効果的なのかを考えて撮影することを心がけよう。

ナナメで表現する
迫力

オリンパス PEN E-P3／M.ZUIKO DIGITAL ED 9-18mm F4.0-5.6／9㎜（18㎜相当）／絞り優先AE（F4.5、1/80秒、±0EV）／ISO 1250／WB：9,000K
ドーム状で照明が印象的なメトロのホームを撮影したくて、電車を待っていた。入ってきた電車の勢いとホームの臨場感あふれる雰囲気を、放射線状を意識した構図で少しカメラを傾けて切り取った

福井麻衣子（ふくいまいこ）：1983年大阪府生まれ。フォトグラファー。雑誌や広告などの撮影、書籍の執筆やワークショップ等で活躍中。人物、お散歩スナップ、ファンタジーな世界を作るのも得意。近著に「写真がかわいくなる　デジタル一眼　魔法の撮り方ブック」（インプレス）がある。http://caby.exblog.jp/

Technique 傾けて作る空間で誰かの存在を感じさせる

ママに向かって楽しそうに話しかける子どもの生き生きとした表情をとらえるため、視線の先に空間を空けてカメラを傾けることで楽しそうな雰囲気と動きが伝わるよう意識した。子どもが見上げて話している様子を表現するために子どもよりも少し低いレベルから、撮影をしている。105mmの望遠効果を狙い、余計なものを写さないように人物を際立たせるようにフレーミングしている。水平にカメラを構えたところから、少しずつカメラを傾けてベストな角度を探ると良い。あまり傾けすぎると、人物が後ろに倒れそうな印象となり、見ている方が不安を感じてしまいそうだったため、30度ぐらいがちょうど良かった。あくまで楽しそうで生き生きとした雰囲気にしたいので、露出は明るめに補正している。

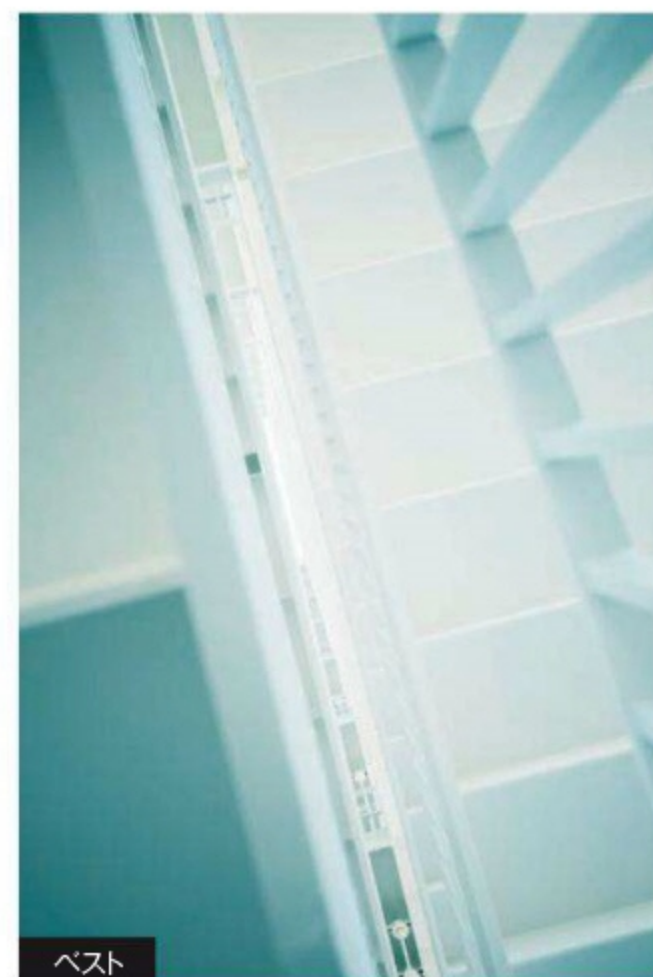
カメラをナナメに傾けることによって、子どもの左側に空間を作った。人物をナナメにする場合、傾きの角度は人が転んだり倒れているように見えない、自然な角度にする

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF24-105mm F4L IS USM／105mm／絞り優先AE（F7.1、1/1,000秒、±0EV）／ISO 400／WB：オート（G3、B1） **うれしそうにママに話しかける子どもの表情を切り取った。カメラを斜めに傾けて視線の先に空間を空けることでママの存在を感じさせている**

水平で撮影したカットはきれいに撮れてはいるが、落ち着きすぎていまいちな印象となった。逆に傾けすぎると後ろに倒れそうな不安定な印象となり、この場合は30度くらいがベストだった

Technique 単純なストレートのラインをリズミカルに見せる

身近な被写体は、視点を変えてカメラを傾けることでまったく違う姿を見せてくれることがある。

左の写真は白い非常階段の隙間を真下から見上げ、カメラをナナメに傾けることでスタイリッシュな模様として表現したもの。真下から見上げるだけだと、あまり面白くない印象を受けたが、少しカメラを傾けることで直線の重なりにリズムが感じられた。また、周りの手すりなどを構図に組み込むことができて、立体感のある絵作りになった。対角線上に階段のメインとなる直線が乗ってしまうといかにも「傾けました!」という感じになってしまうので「角と角の対角線状になるべく直線が乗らない」ことを意識して角からメインの直線をずらした。こうすると、自然にナナメを表現しやすい。

ベスト　水平　傾けすぎ

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF24-105mm F4L IS USM／47mm／絞り優先AE（F8、1/1,250秒、±0EV）／ISO 640／WB：オート（B3、G1）
真っ白な階段を真下から見上げて、カメラを傾けることによってラインが交錯してできるテクスチャのような雰囲気を表現した

水平の場合、階段の隙間を見上げた写真となってしまい、模様にならずいまいちだった。傾けすぎると不自然すぎて、よく分からない失敗写真のように見えてしまった

モデル：加納千尋（オスカープロモーション）

ナナメで表現する
目ヂカラ

ソニー α99 ／タムロン SP AF28-75mmF/2.8 XR Di LD Aspherical［IF］MACRO ／ 75mm ／マニュアル露出（F2.8 、1/200秒）／ ISO 250 ／ WB：オート
背景の道路を傾けることによって、写真全体のイメージの中に鋭さを演出。頭を大胆に額からカットして、目の印象を強めている

カメラを傾けて見せるのは画面から出るスピード感

魚住誠一 Seiichi Uozumi

ナナメで表現する
視線の行方

ソニー α99 ／タムロン SP AF28-75mmF/2.8 XR Di LD Aspherical［IF］MACRO ／ 75mm ／マニュアル露出（F2.8 、1/200秒）／ ISO 250 ／ WB：オート
傾けて下がった方に視線を向けてもらうことによって、アンニュイな雰囲気を作った。反対を見てもらうと、希望に満ちたイメージになるだろう

ポートレート写真において、カメラを傾ける撮り方は「危険な行為」だと思っている。なぜなら、ものすごくセンスが問われる撮り方だからだ。実際、ウオズミがナナメの写真を撮るのは30枚に1枚ぐらい。複数の写真で見せるときにアクセントとして流れの中で使うぐらいで、ナナメの構図がメインになることはほとんどない。野球に例えるならばナナメの構図は変化球。ストレートを投げずに変化球だけで勝負するのはなかなか難しい。しかし、モデルの表情が乏しかったり、洋服のバリエーションがなかったりするときに使える必殺技でもある。このアクセントとなるナナメの構図が、写真集や展示の中で効いているかどうかはその一連の作品群の善し悪しに深く関わってくる。キメ球の変化球とも言える。また、水平・垂直を表現できる被写体がなかったり、撮影距離がとれないなど、水平・垂直を出すことが難しいシーンでは大胆にナナメに崩してみるテクニックもある。

背景と人物をナナメにすることによって表現できるのはスピード感。「勢い」とか「動感」とか、そういった静的なイメージを壊すものだ。パースを強調するために広角レンズを使って角度をつけると、ポートレートの場合は顔の歪みが気になる場合があるし、背景のラインが顔に突き刺さったような構図になってしまっては元も子もない。そんなときは、少し望遠気味のレンズで傾いたラインをぼかしながら利用すると良いアクセントになる。

ポートレートは背景が命。背景こそポートレートの個性が出る一番のポイントだとウオズミは考える。背景にナナメのラインを入れたい場合、デザインの面から考えるとうまく作れる。中途半端に傾けるとダサくなってしまうし、やりすぎは鼻につく。とにかくその塩梅が難しく、ハイレベルな撮影テクニックなのでトレーニングあるのみだ!

魚住誠一（うおずみせいいち）：1963年愛知県生まれ。高校時代はインディーズロックバンドで活動。スタジオアシスタントを経て、1994年よりフリー。自身のホームページでは注目のモデルや女優を紹介する「ModelTalks」を毎週月曜日に更新中。http://www.zoomic.jp/

Technique

肉眼では見えない違和感の中で人物を浮き立たせる

街角の背景からモデルがぎゅっと浮き立つ表現を狙ってみた。背景のハイライトに視線が誘導されるため、その手前にモデルの顔を配置してカメラを傾け、レンガで集中線を作って表情が引き立つようにしている。奥のハイライト部分をほどよく引き寄せて、圧縮効果を利用したかったので75mmで撮影している。絞りはF5で、背景はぼかしながらも、手前のレンガのラインははっきりと描写している。この場所を肉眼で見るとこれほど奥行きの印象は強くない。

一点透視図法の集中線を作る上でのポイントは、画面の四隅を整理すること。四隅に余計なものが入っていると、視線の誘導をじゃましてしまうのだ。また、無理に下から煽ったりすることなく、素直に立ったままの目の高さで撮影しているのもポイント。あくまでもナチュラルな印象を大切にして、背景からモデルを浮き立たせている。

ナナメの四角いハイライトをポイントに

一点透視図法の集中線を作る

体と柱の交点を画面右下に配置 10度ほど傾ける

レンガで一点透視図法の集中線を作る。画面の四隅がすっきりしていることと、画面の右下に重心を置いたことがポイント

ソニー α99 ／タムロン SP AF28-75mmF/2.8 XR Di LD Aspherical[IF]MACRO ／ 75mm ／マニュアル露出（F5 、1/125秒）／ ISO 250 ／ WB：オート **レンガのラインが作る集中線の中でモデルが浮き立っている。背景のハイライトもナナメになっているので、違和感なく溶け込んでいる**

水平だと奥行きがなく、面白みのないポートレートになってしまった。また、傾けすぎるとモデルが寝ているようになってしまい、違和感しか感じられない

ソニー α99 ／タムロン SP AF28-75mmF/2.8 XR Di LD Aspherical[IF]MACRO ／ 75mm ／マニュアル露出（F4 、1/200秒）／ ISO 250 ／ WB：オート **スラッと伸びる美脚が印象的な1枚。ナナメのラインと空間をうまく使って細長い形を作り出している**

水平だと一般的なポートレート。傾けすぎるとビルが倒れてきそうな圧迫感がある。もし、これぐらいの角度で撮影したいのなら、もっと背景をぼかしてイメージ的な表現にすると良い

全身の立ちポーズでスタイルを良く見せる

全身のポーズはモデルのスタイルを良く見せたい。そのために、カメラを傾けることによって、両サイドに点対称となる三角形のスペースを作り、対角線上から少しずれたところにモデルを配置した。硬質なビルなどの建築物を背景にすると、清潔感や細長く被写体を配置することにより、スラッとした印象が強調される。

また、背景には地面のタイルとビルを利用。この複雑な直線をデザイン的に切り取りたい。このタイルのラインはほんの少し角度を変えただけで見え方が変わってしまうので、何パターンか複数枚撮影しておき、撮影後にチョイスするという方法をとると良い。モデルには少し首を傾けてもらいながらも視線は水平にすることによって安定感を出している。傾けすぎると、ビルが倒れてきたり、人物が転倒しているイメージになってしまうので注意。

首をナナメにすることで動きを出す

10度の傾きの中で視線は水平にしてアクセントを作る

点対称の三角形のスペースでバランスをとる

対角線から少しずらした部分に人物を配置。両サイドには三角形の空間を作る。タイルとビルの斜めのラインは被写体をじゃましない角度に調整する

ナナメで表現する
瞬間

キヤノン EOS M2 ／ EF-M55-200mm F4.5-6.3 IS STM ／ 200mm（320mm相当）／絞り優先AE（F6.3 、1/250秒、±0EV）／ ISO 400 ／WB：オート
バスを待つ女性。反対側の歩道から撮影した。実際は違うが、走る車の窓から見ているように、どんどん変わる風景のひとつのようにイメージした

ナナメで表現する **雑然とした空気**

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ ／ EF24-105mm F4L IS USM ／ 35mm ／絞り優先AE（F8 、1/80秒、−0.7EV）／ ISO 100 ／WB：オート　**落書きだらけで複数のポスターが貼られている壁。見つけた瞬間の目で見ているような雰囲気をそのまま描写したかったので、ナナメにカメラを傾けて撮影した。どちらかと言うとダークな印象の被写体なので、斜めの不安定な要素はマッチしている**

撮影現場で感じる 雑多な街の空気を写す

鶴巻育子 *Ikuko Tsurumaki*

写真を撮るときに水平・垂直を出して撮影するのは鉄則とされている。写真教室などでも、水平・垂直をしっかり確認するようにと教えられることが多いはずだ。特に、風景写真に関しては非常に重要なポイントであり、水平・垂直がしっかり出ていない写真は作品の良さが半減してしまうことがある。しかし、写真の歴史を振り返ると、傑作の中には斜めになっている写真もある。特にスナップ写真の中には多い。私も街をスナップするときにはあえてナナメの構図を活用することがある。

街のスナップにおいて、水平・垂直を確認して撮っている写真はその風景をじっくり観察し、最適なアングルを探して被写体としっかり向き合って撮影しているように表現される。しかし、カメラをナナメに傾けた瞬間に不思議と撮影者が肉眼で見たままの様子を写しているような描写になる。同じ場面でも主観的なイメージに変化するのだ。例えば下町や雑多な街の中では忙しい雰囲気や活気を感じたり、リアル感が出る。反対に、整然とした街であえてナナメにするのもひとつの方法だ。ビルや建物がまっすぐに並んでいる場所では、水平・垂直が一目瞭然である。そのため、ナナメにすればそれがさらに強調されて不安定な印象となる。そのように撮影すると風景写真というよりも「撮影者が見た光景」に変わるのが面白い。人物を入れてのスナップでも、カメラを傾けて撮影するだけで出合った瞬間をとらえたように感じたり、臨場感が生まれる。このようにナナメの効果はさまざまである。とはいえ、何でもナナメにすると勢いや不安定な要素が加わり魅力的な写真になるかといえばそうでもない。客観的に見せたいときは逆効果になる。また、傾ける角度でも印象は大きく変わる。大きく傾ければ効果も大きくなるわけではなく、被写体にもよるが、カメラを構えて少し首を傾けたくらいの感覚くらいだろうか。要は自然な傾きを狙う。考えすぎると不自然になるので、テンポ良くスナップしつつ、結局は感覚を身体で覚えるしかない。

鶴巻育子（つるまきいくこ）：1972年東京都生まれ。広告代理店に勤めながら写真を学び、アシスタントを経て写真家の道へ。現在は雑誌の写真撮影、原稿執筆のほか、写真教室やセミナーの講師としても活躍中。http://www.ikukotsurumaki.com/

Technique

アンバランスを演出して現場の臨場感を伝える

ロンドンの地下鉄に向かう階段を撮影した。自分も階段を下りながら、階段の上から下をのぞくような姿勢でシャッターを切っている。正面にある看板の水平を目安にしながら傾き具合を決定した。しかし、実際はさほど傾きを意識しすぎず、階段を下りながらの不安定なバランスのまま撮影したような感覚だ。手すりがあるため、ナナメによるアンバランスな印象は強調しやすい場面ではあった。階段の向こうの通路が見えるくらいの距離で狙うことで、流れや奥行きを感じさせる構図を狙っている。看板と平行して階段がナナメになるので、そのバランスも考えて角度をつけた。人物がまばらだったり、集団が固まりすぎると人の流れや画面に奥行きが出ないため、人の量がちょうど良いときに撮影した。

手すりで集中線を作ることにより、奥行きを表現している。人が駅に入って行く流れも強調できる。看板と階段をナナメにして、アンバランスな印象と臨場感を作った

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ ／ EF24-70mm F4L IS USM ／ 24mm ／絞り優先AE（F4.5 、1/40秒、＋1.7EV）／ ISO 2000 ／ WB：オート　**地下鉄に向かう階段。斜めにすることで階段を降りている感覚を表現できる。人の流れを見ながらシャッターを切った**

天井が水平になるように撮影したカットは奥行きも出て失敗ではないが、臨場感は感じられない。傾けすぎたカットは不安定というよりも、写真自体が見づらくなってしまう

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ ／ EF24-70mm F4L IS USM ／ 30mm ／絞り優先AE（F8 、1/320秒、＋0.7EV）／ ISO 100 ／ WB：オート　**傾けて下がった右側に車を配置することで、写真に立体感を出している。右から歩いてくる人物を待ちタイミングを狙った**

30mmの広角で撮影しているので、水平で撮影した写真は左右の建物の歪みが中途半端に感じる。また、傾けすぎた写真は左右の建物があまり写らないので、斜めの効果が薄れてしまった

Technique

人の動きに合わせて角度を決めるテクニック

若干、物騒な雰囲気が漂い、美しい街並みとは言えない場所をナナメにする。ナナメにすることで出る不安定感で、その場のちょっと危険な雰囲気を感じさせた。ここは狭い道なので両脇の建物の縦のラインが目立つ。ナナメにすると縦の建物の傾きが際立ち、よりいっそう傾きが強調されてイメージもはっきり伝わる。ここでポイントとなるのは左右どちらに傾けるか。この場合、右を下げる決め手となったのは人が向かう方向だ。左に向かって歩く人物たちを画面左が下がるように撮影すると、人が落ちていくように見えてしまうので違和感を感じる。一方通行の矢印もナナメ上を向くようにしたのもポイントだ。手前に車を入れたのは奥行きを作るため。道全体のラインがはっきりわかる方が、その様子が伝わりやすいのでF8まで絞っている。

人が歩く方向が上がるようにナナメにしている。広角気味のレンズによる奥行きを強調するために、手前に車を配置している。傾いた建物のラインが不安定な印象を作るが、あまり角度がつきすぎると違和感が残るので注意したい

モデル：山本由貴

ナナメで表現したいのは
天真爛漫な印象

ソニー α7 ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 26mm ／マニュアル露出（F9 、1/320秒） ／ ISO 125 ／ WB：日陰　**モデルと歩きながら撮影。モデルの快活さと動き、楽しさを表現するために大胆に傾けて撮影した**

ナナメの中に人物を配置して伝えたい感情を込める

常盤 響

ナナメで表現したいのは
シリアスな感情

ソニー α7 ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 70mm ／ マニュアル露出（F4.5 、1/200秒） ／ ISO 100 ／ WB:日陰
モデルを右側に寄せてナナメにした。顔が上を向くことにより、遠くを前向きに見つめているという雰囲気に

私の場合、動きを演出したり、写真を見る人に何らかの感情を与える必要があるときにナナメの構図で撮ることが多い。

特にポートレートを撮影することが多いので、いつも画面の中にどのようにモデルを配置するのかを考えている。もちろん、きちんと水平を撮った写真を撮ることの方が多いのだけれど、そればかりでは絵作りが面白くなくなってしまうことがあるからだ。また、ナナメにするという選択肢が増えることによって、空間の中のモデルの配置方法の自由度が上がるわけだ。いくつかの組になった写真の中でダイナミックな絵がほしいとき、モデルの目線を変えたいときなどは、思いきってナナメに傾けて撮影することがある。人物の場合は、ナナメのラインとモデルの視線のラインの絡みで表現が広がるのが面白いところ。室内で撮影するときには画面の中のデザイン的なレイアウトを考えるし、ロケの場合はモデルと一緒に動きながら撮影して、より動いている感じになるように演出したり、背景や被写体の影をどのように入れたら魅力的になるのかを考えている。背景に水平線や建物など、傾きがひと目で分かるような直線がある場合には、カメラを傾けることによって写真を見る人を不安定に気持ちにさせたり、躍動感を感じさせたりなど、なんらかの効果が生まれている。

水平・垂直をきっちり出すことにこだわりすぎている人は、少しでも画面が傾いていると失敗写真としてしまうことがあるが、それは失敗ではなく自分の絵だと思ってみたらどうだろうか。水平をきちんと出すことによって画面上の安定は生まれるが、ちょっとつまらない構図になってしまったり、モデルの配置に迷ってしまったりしたときには、思いきってナナメの構図を作ってみると面白い効果が生まれるときがある。今まで見慣れた「良い写真」という固定概念にとらわれずに、自分ならではの絵を作ってほしい。そのためにはセオリーを打ち破ることを恐れずに、いろいろ試してほしいと思う。

常盤 響（ときわひびき）：1966年東京都生まれ。1980年代半ばからバンド活動の傍ら雑誌を中心にライター、イラストレーターとして活動を開始。1997年旧知の作家、阿部和重氏の依頼で『インディビジュアル・プロジェクション』を装丁。これを機にフォトグラファーとしての活動をはじめる。近著に『ハズカシイアタシ』（三空出版）など。http://hibikitokiwa.com/

ソニー α7 ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 39mm ／ マニュアル露出（F5.6 、1/200秒） ／ ISO 125 ／ WB：日陰　**かなり傾けた写真だが、青空がメインになることでさほど不安定な感じはない。ナナメのラインをしっかり入れるのがポイント**

水平を出した写真は、なんてことのないただのスナップになってしまっている。傾けすぎたものは被写体のサイズや背景も含め単に不安定な構図になってしまった

Technique

斜め下から煽って見せるダイナミックなポートレート

海沿いの防波堤の上に座ったモデルを撮影。青空がきれいなので、下から煽って空を多めに入れた。ナナメにして撮影することにより、海からの風で髪が画面の上に向かってなびいている。水平で正面から撮影すればモデルはうつむいているのだけど、ナナメにすることによってなんとなく爽やかさを演出することができたと思う。左側にかなり傾いた斜めの防波堤をバランス良く入れることによって、不安定な印象よりも絵のダイナミックさや面白さが伝わり、防波堤に座っているという動きのないポーズでも躍動感があるように演出できた。ちなみにナナメにすることによって、フレーム内に空が多めに入る場合、AEモードで撮影すると露出が暗めになってしまう場合があるので、影になった部分が適正露出になるように心がけたい。ホワイトバランスも太陽光ではなく、日陰モードにすると肌の色が青くなりすぎずにきれいに撮影できる。

右半分に空以外の要素を全部収めた。顔はセンターに持ってきているのでバランスがとれている

Technique

視線と傾きを利用して背景を印象的に見せる

背景を見せるポートレート写真でもナナメの構図は有効だ。右の写真は晴れた空をきれいに表現するために、画面の半分以上を空で構成したもの。モデルが空に向かっているような演出をしたかったので、モデルの視線の方向が上がるように傾けている。角度は水平線の右端が画面の半分、左端が1/3あたりになるように計算して決めた。モデルは画面の中央近くに配置し、気持ち視線の方向の空間を広めにとって、空間の広がりを分かりやすく見せることに。画面が傾いているため、日の丸構図の単純な印象はない。太陽の光は左側から当たっているので、影も右側に伸びるし、空や海も右側の方が青くなる。また、右側の空間も広くとり、ナナメに上がった右側の要素を多くすることで不安定な感じをなくすようにバランスをとっている。海の水平線の位置をモデルの腰より少し高くしたのは、上半身が空に飛び出るようにすることで、爽やかな印象を作りたかったからだ。

ナナメに傾けて上がった右側は水平線で1：1に画面を分け、下がった左側は2：1に分けている。不安定な中にも安定感を意識して作っている。複数の平行のナナメ線でナナメを強調する

ソニー α7 ／ Vario-Tessar T* FE 24-70mm F4 ZA OSS ／ 24mm ／マニュアル露出（F9 、1/320秒） ／ ISO 125 ／ WB：日陰　**海に向かって気持ち良さそうな姿を強調するため、体や顔が多少上を向くように、左側を下げて撮影した**

水平で撮った場合、モデルの視線が真横になってしまい面白みがない。また傾けすぎることによって海が画面を圧迫している感じになってしまった

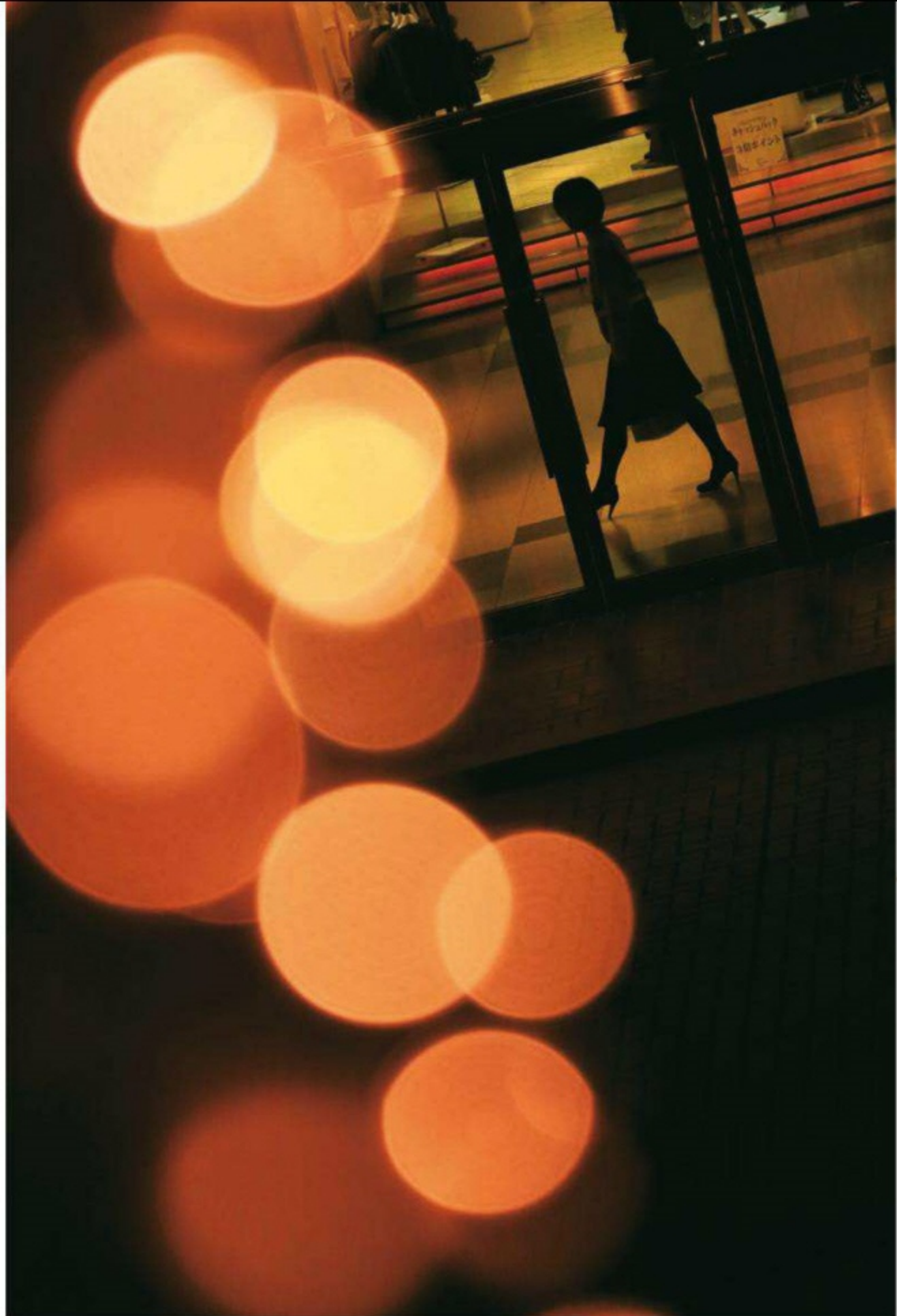
日常の光景を夢の世界に変貌させる

山岸代里子
Yoriko Yamagishi

ナナメで表現する
希望

キヤノン EOS M2 ／ EF-M55-200mm F4.5-6.3 IS STM ／127mm（203mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/640秒、－1.3EV）／ISO 1600 ／WB：くもり　**電飾の大きな玉ボケを添えて、キラキラと煌めく光に向かって大きく1歩を踏み出した姿を映し出した**

ナナメで表現する
動画的な印象

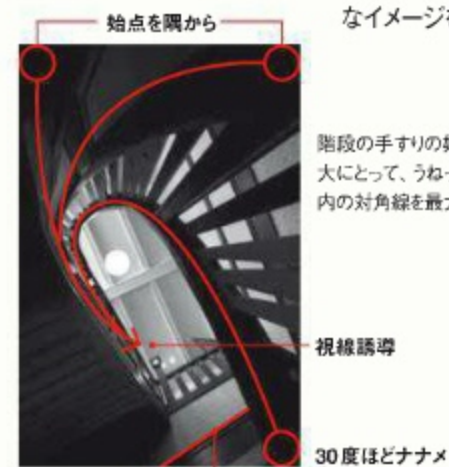
キヤノン EOS 70D ／ EF-S18-135mm F3.5-5.6 IS STM ／ 42mm（67mm相当）／絞り優先AE（F6.3、1/80秒、－0.7EV）／ISO 125 ／ WB：太陽光　**トンネル内が暗いので、奥の明るい風景に視線が誘導される。風景の中に映し出されたカップルが進んでいく様子が動画のようにも見える**

目の前に広がる風景や建物の写真を撮る場合、基本的には水平線や垂直線を意識して撮影している。しかし、写真に躍動感やリズム感を与えたり、アンバランスさから感じる非現実感を表現するときにはカメラを意図的にナナメにする。

私の場合、人物を入れたスナップのときにナナメの表現を行うことが多い。歩く人たちの動感を表現しやすいからだ。人物を取り入れたナナメの写真は動く被写体をさらにリズミカルにし、イメージやストーリーを連想させ、幻想的な雰囲気を作り出す手助けをしてくれる。また、被写体の形の面白さを表現するために、ナナメにすることもある。例えば、影や被写体を対角線上に入れて長く見せて視覚効果を加えたり、造形物を切り取るときに角度をつけることで見え方を変化させて、面白さや興味を与えたりすると、印象的な写真となる。

ナナメの写真は傾ける角度でまったく違ったイメージになる。水平・垂直とあまり変わらない角度だと、不注意で傾いてしまったように感じさせたり、やりすぎると違和感を感じさせることもあるが、カメラを傾けることで日常的な光景が夢の世界のようなフォトジェニックな仕上がりになることが面白い。

Technique

渦状の被写体を三次元的に見せる視線誘導

螺旋（らせん）階段の立体的なイメージを狙う。洋館の螺旋階段を見上げて、天井の電球と階段が重ならない場所からローアングルでとらえる。螺旋階段の長さが強調されるように2階へと伸びる階段の手すりが画面右下から入る角度にカメラを傾け、対角線上に階段の手すりを配置した。天井から照らし出す電球を取り囲んでぐるっと伸びる螺旋階段で視線を誘導する。視線の先には2階の開いた扉が見え、誰かがその奥から出てくるかのような錯覚も抱く。絞りは手前の手すりから天井までをシャープに見せるためにF13に設定し、奥行きのある空間をしっかりと見せた。螺旋階段の長さや美しさ、そして画面の中のスムーズな流れを生み出すにはこの30度ほど傾けた構図がベストで、三次元を思わせるような立体的なイメージを作り出した。

階段の手すりの始点は四隅に配置。長さを最大にとって、うねった感じを強調する。フレーム内の対角線を最大に利用するのがポイント

ベスト

水平

傾けすぎ

キヤノン EOS 6D ／ EF17-40mm F4L USM ／ 19mm（30mm相当）／絞り優先AE（F13、1/13秒、－1.0EV）／ISO 1600 ／ WB：日陰　**レトロな螺旋階段。下から見上げると2階の扉が開いているのが見えた。下から上へ視線を誘導させる視覚効果が出るよう、放射線を作るようにナナメにした**

2階の手すりと天井のラインが水平になるように撮ったものは2階に目がいってしまい、螺旋階段の存在が薄く奥行きがなくなり、勢いのない写真になってしまった。また傾けすぎると、手すりの長さが短くなり遠近感が少なくなる。階段の裏側が目立ち、1階から2階へ視線誘導はされない。画面の傾きに合わせて顔も左に傾けたくなる感じがする

水平

反対に傾ける

ベスト

キヤノン EOS 6D ／ EF50mm F1.4 USM ／ 50mm ／絞り優先AE(F2、1/250秒、＋1.3EV) ／ ISO 500 ／ WB：オート　**最近は見かけることが少なくなった公衆電話。白色の電話が新鮮で、驚いてシャッターを切った。ナナメによってそのときの気持ちを表している**

電話ボックスの窓を水平にして撮る。安定感があり、オーソドックスなスナップとしては「あり」だが、なんとなく平凡にも感じる。左下がりに10度傾けると、受話器に目がいき、不安定感を面白く感じるというよりは、受話器が落ちてしまいそうな不安定な構図になってしまう

Technique

日常のスナップに勢いと臨場感を作る

日常の何気ない静物も角度を変えてナナメの構図を作れば面白味のある被写体になる。この写真はガラス窓から中をのぞいた雰囲気を作るために、7度ほど右下がりに傾けて臨場感のある雰囲気に仕上げた。右に傾けているのは、受話器が不自然にならないようにしたため。また、ナナメになった窓枠のラインが主題の電話をじゃましないように、ぼかしている。白色の公衆電話を見たままの白色の世界で表現するために、WBはオート、露出は明るくするためプラスに補正した。曇り空で全体的な光はフラットだったので、奥のガラス窓の向こう側にある道の街路樹の緑色を入れて、真っ白な画面に彩りでアクセントを加えて爽やかなイメージを作った。ほんの少しの傾きでその場の気持ちを表現するような生き生きとした写真に変身した。

電話ボックスの窓枠からガラス越しに中をのぞきこんだ印象を作るため、右が下がるようなナナメの構図を作る。窓枠の縦のラインを傾けることでナナメであることを強調する

山岸代里子（やまぎしよりこ）：愛知県生まれ。1997年アメリカ滞在中に写真に興味をもち、その後本格的に撮影をはじめる。写真家田中達也氏に師事。2005年にはイギリスに1年間滞在し、ヨーロッパの国々を撮影。ポートレートスナップ・クローズアップネイチャーを得意とする。EOS学園名古屋校講師

EOS 7D Mark Ⅱ／400mm（640mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/800秒、±0EV）／ISO 800／WB：オート／AIサーボAF／領域拡大AF（上下左右）
飛び立つ瞬間を狙ったがAFの食いつきは良く、しっかりとピントを合わせ続けてくれた。焦点距離とF値の関係性から溶けるようなボケ味はないが自然な感じは好印象

◎発売予定日：2014年12月下旬
◎予想実勢価格：300,000円前後

レンズ構成：16群21枚
最短撮影距離：0.98m
最大撮影倍率：0.31倍
フィルター径：φ77mm
最大径×長さ：
φ94×193mm
重さ：約1,560g
（三脚座を含む）

画質・操作性が大幅に向上した望遠ズーム

キヤノン EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM

フィールド撮影にぴったりの超望遠ズームが約16年ぶりにリニューアルされる。今回はEOS 7D Mark Ⅱに装着して、その実力を検証。画質や描写性能をチェックしていきたい。

レポート：戸塚 学

旧型のレンズで不満に感じていた点は解決。高価なレンズだがオススメできる1本だ

待ちに待ったレンズがようやく発表された。初めて見た感想は、随分スタイリッシュになったなという感じ。レンズをカメラに装着したままで、三脚座のみを着脱可能になったため、手持ち撮影時の自由度が格段に向上している。レンズを回転させるときのスムーズさは滑るようなフィーリングで好印象だ。旧型（EF100-400mm F4.5-5.6L IS USM）ではレンズフードに関して一番の不満をもっていたが、今回はそれが解消された。脱落防止のロック機構が着いており、ワンタッチでの着脱が行える。フィルター用の小窓も開閉式になっていて、このフードだけでもよくぞここまで気を使ってくれたといいたくなる。

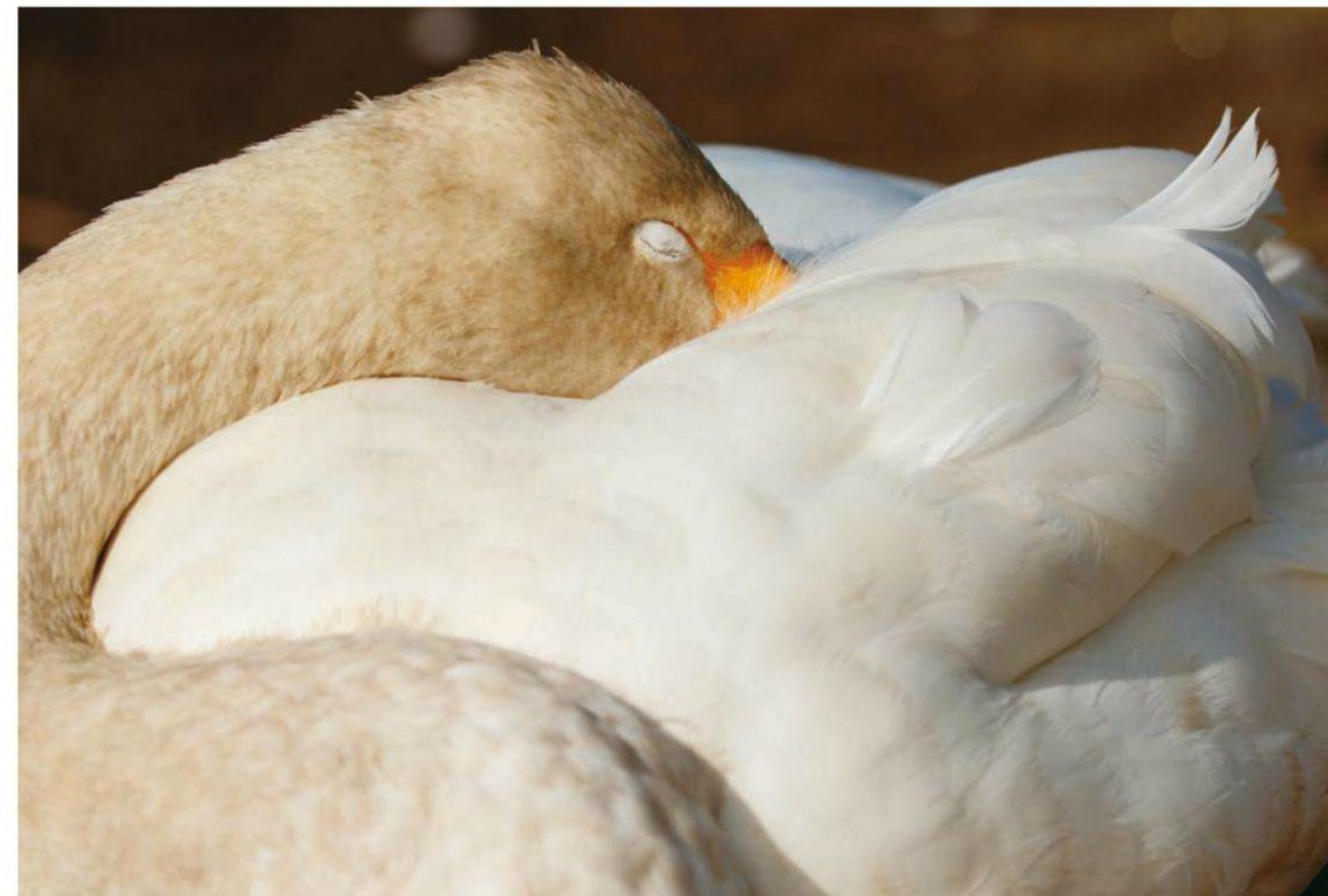
旧型は発売からすでに16年が経過。ISの第一世代で手持ち撮影ではかなりつらいシーンもあった。新型では最新のアルゴリズムを採用し、約4段分の効果がある。実際、今回の撮影では三脚は一切使わずに行った。また、車内から撮影する際、エンジンを切らずに窓から撮影してみたのだが、まったく問題なかった。描写力に関しては100～400mmまで、どの領域でもLレンズの名に恥じない結果が得られる。一般的には超望遠側がどうしても弱くなる傾向があるが、このレンズにはそれも当てはまらない。レンズコーティングにも最新技術が搭載されており、逆光時の撮影でもフレアやゴーストは、ほとんど気にならなかった。ただし、画面内に大きく太陽を入れた場面では、若干だがゴーストが発生。しかし、程度は軽微で見落としそうになったレベルだ。

旧型は直進ズーム式で雨降りの日に使うと、筒の中に雨が入り、動かなくなることがしばしばあった。また、筒が前後に動くことでレンズ内にゴミが入ってしまうときもあった。その点、新型は回転ズーム式に変更されているため、それらの心配もなくなった。エクステンダーとの相性も抜群で、1.4倍を装着した場合も中央1点だけだがAFが使える。最大で896mm相当の撮影が手持ちで可能になるとは驚きとしかいいようがない。もちろん描写力は本当にエクステンダーを装着しているのかと疑いたくなるほど美しい。

以上はすべてEOS 7D Mark Ⅱを使って撮影した感想だ。もしかしたら、EOS 7D Mark Ⅱに合わせて作ったレンズなのかもしれないと思ってしまった。

戸塚 学（とづかがく）：1966年愛知県生まれ。高校3年生のとき、写真に興味をもち、幼少のころから好きだった自然風景や野生の生き物を被写体として撮影をはじめる。現在は野鳥にとどまらず、生き物を含めた環境の撮影を進行中。http://happybirdsday.jp/

EOS 7D Mark Ⅱ／158mm（253mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/2,500秒、－0.7EV）／ISO 100／WB：オート／AIサーボAF／領域拡大AF（上下左右）　**約150mmでハクチョウを撮影。顔の部分や羽根の描写、くちばしのしわの質感などは、まるで生で見ているような錯覚に陥る。くちばしにかかる1枚の羽根の描写が想像以上にシャープに再現された**

※本企画は試作機を使用して制作しています。そのため実際の製品とは外観・画質などで結果が異なる場合がある点をご了承ください。

EOS 7D Mark Ⅱ／ **278mm（445mm相当）**／絞り優先AE（F5、1/800秒、＋0.3EV）／ISO 800／WB：オート／AIサーボAF／領域拡大AF（周囲）
オナガガモのオスが突然羽ばたきをはじめたので慌てて撮影した。このときは領域拡大AF（周囲）に設定してあったので激しい動きにも即座に対応できた

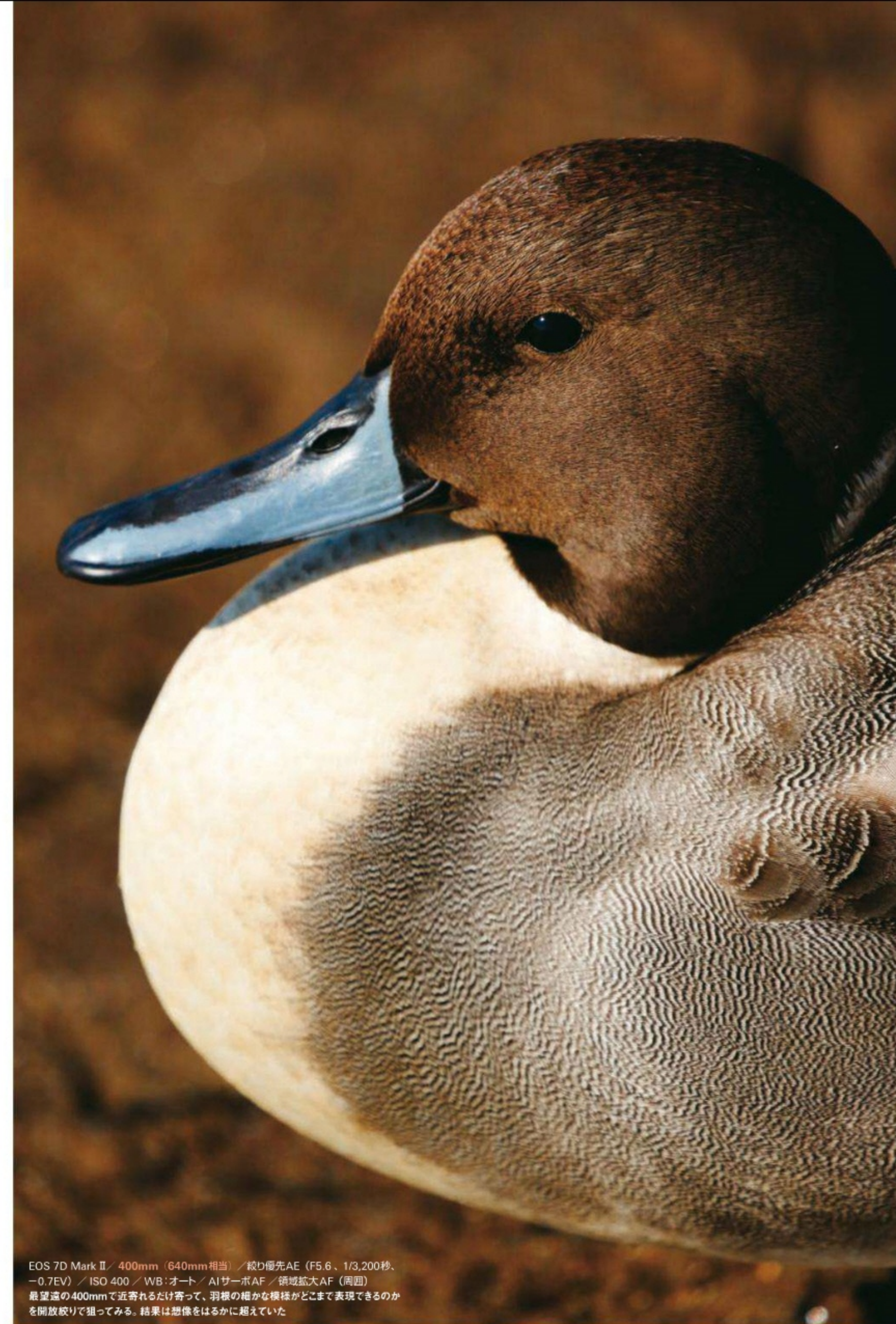
EOS 7D Mark Ⅱ／ **560mm（896mm相当）**／絞り優先AE（F8、1/800秒、±0EV）／ISO 400／WB：オート／AIサーボAF／スポット1点AF
キヤノンユーザーなら、エクステンダーとの相性も気になるところ。逆光でマガンを狙ってみたが、まったく問題はなかった。装着しているとは思えない仕上がりだ

最短撮影距離は 1.8m から 0.98m に！

旧型のレンズだと離れて撮影しなくてはいけなかったが、新型を使うと望遠マクロ的な撮影も行える。被写体を大きくとらえることができるようになった

最短撮影距離はズーム全域で0.98mを実現。最大撮影倍率は0.2倍（旧型）から0.31倍（新型）へとアップ。クローズアップ撮影も得意なレンズだ

EOS 7D Mark Ⅱ／ **400mm（640mm相当）**／絞り優先AE（F5.6、1/640秒、±0EV）／ISO 100／WB：オート／AIサーボAF／領域拡大AF（上下左右）
画面の隅々まで色ムラや周辺光量の減光もない美しい青空が表現された。影になっているマガンの体の模様もつぶれることなく的確に再現されている

EOS 7D Mark Ⅱ／ **100mm（160mm相当）**／絞り優先AE（F5.6、1/8,000秒、±0EV）／ISO 400／WB：オート／AIサーボAF／領域拡大AF（上下左右）
太陽を入れたかなり厳しい状況でマガンの群れを撮影してみた。新コーティング「ASC」により、フレアもゴーストも発生していない。雲のグラデーションもとても自然に表現された

EOS 7D Mark Ⅱ／ 400mm（640mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/3,200秒、−0.7EV）／ISO 400／WB：オート／AIサーボAF／領域拡大AF（周囲）
最望遠の400mmで近寄れるだけ寄って、羽根の細かな模様がどこまで表現できるのかを開放絞りで狙ってみる。結果は想像をはるかに超えていた

※このレンズをもっと知りたい人は、P.154の開発者インタビューへGO！

夢と現実との共存を可能にした

絞り優先AE（F2.8、1/500秒、+0.7EV）／ISO 200／WB：晴天　この距離でも睫毛の1本まできっちり解像されており、細部に異様な生々しさがあるのに、広角ながらも美しいボケも十分に楽しめる。大判の世界観をコンパクトカメラの気軽さで撮ることができる

Quattroが見せる破綻は珠玉の美しさ

絞り優先AE（F2.8、1/125秒、+1.3EV）／ISO 200／WB：オート
レンズは逆光に強くハレにくいが、光源の位置によってはもちろんフレアが出る。わざとフードを外して積極的に利用してみた。ここまで美しくフレアが出るデジタルカメラは本当に少ない

日常が特別に思えることの喜び

絞り優先AE（F2.8、1/125秒、+1.3EV）／ISO 200／WB：オート
寝そべっていたモデルの服の裾に葉が付いていて、美しいと感じた。質感の違いも見事に描き分けており、肌から背景までダイナミックレンジも広く、ポテンシャルの高さが分かる

Quattroシリーズの第2弾は広角28mm単焦点

シグマ dp1 Quattro

独特なフォルム、独自センサー搭載と唯一無二の光を放つQuattroシリーズ。標準画角のdp2に続き、10月に広角のdp1が発売された。Merrillからどこが進化して、dp2とはどう使い分けるのか。その点を中心にレビューしよう。　写真・文：内田ユキオ　モデル：紗也（ジャスティ）

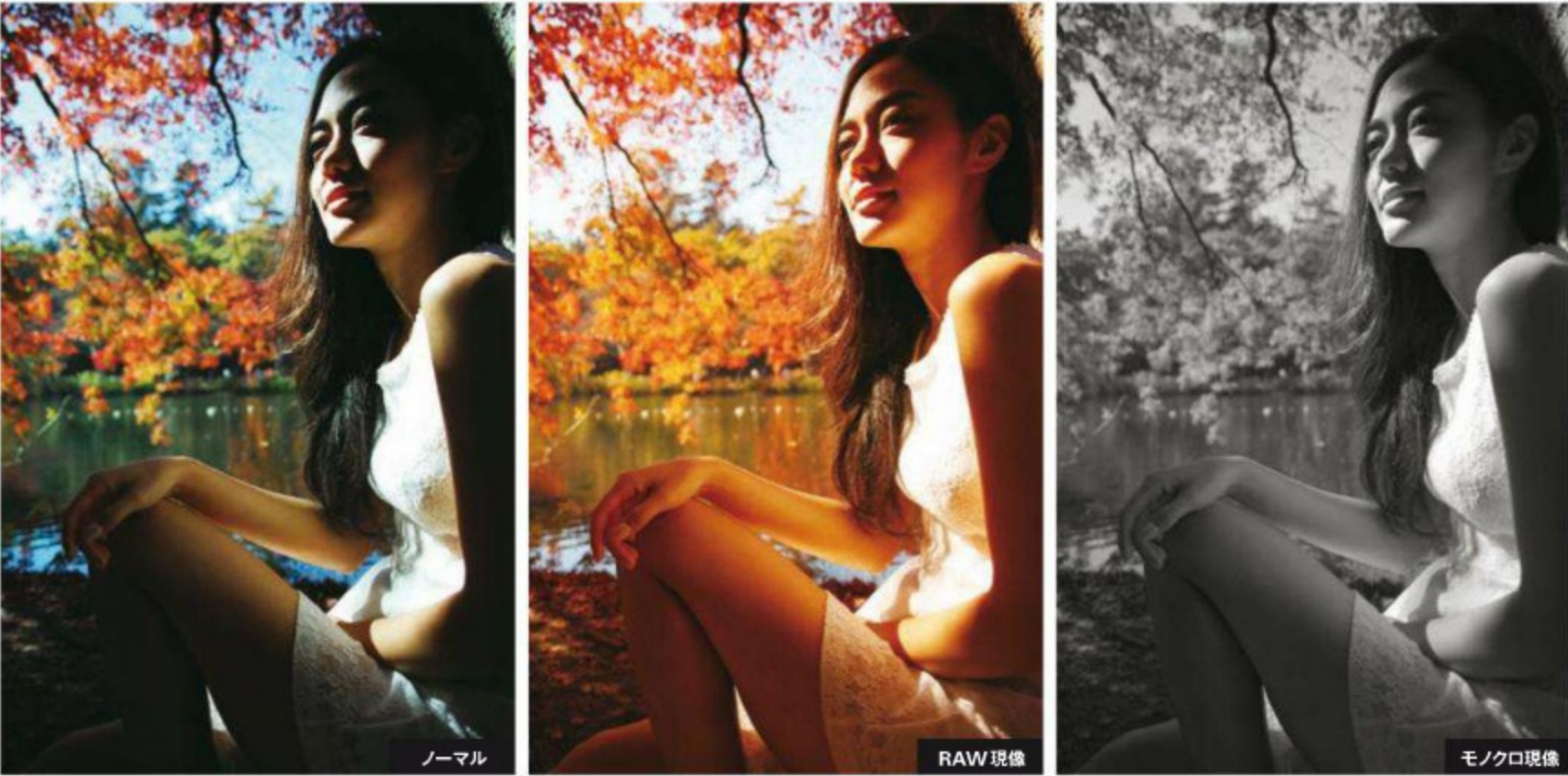
◎発売日：2014年10月24日　◎実勢価格：106,000円前後

撮像素子：Foveon X3 ダイレクトイメージセンサー／**画素数**：約2,900万画素／**解像度**：5,424×3,616／**焦点距離**：19mm（28mm相当）／**開放絞り**：F2.8／**レンズ構成**：8群9枚／**ISO感度**：ISO 100～6400／**メディア**：SD／**液晶モニター**：3インチ 92万ドット／**大きさ**：約161.4（W）×67（H）×87.1（D）mm／**重さ**：約425g（本体のみ）

MerrillからQuattroへの変化について、構造についてはdp2のときに取り上げたので省くとして、Quattroになって撮影データを最適化して高度な演算をすることにより、解像感だけでなく階調が美しく表現されるようになった。ピクセル等倍のチェックではなく大伸ばしのプリントで比較すると、Quattroのポテンシャルに驚くと思う。バッテリーが大きくなり、撮影枚数は飛躍的に向上したがボディも肥大化した。熱対策も兼ねてデザインでポジティブに転換したのは見事だといえる。

dp2 QuattroではMerrillと同じレンズを使用していたが、dp1ではQuattro用にレンズを新設計している。Quattroでは解像感がMerrillより高いため、Merrillと同じレンズを使用すると周辺での画質が落ちてしまうからだ。その新設計のレンズだが、周辺まで緩みがなく収差も良く補正されている。鏡胴が太めだが、最近のシグマレンズを見ると無理な小型・軽量化はしない方針のようだ。画像を見ると、深度は深いはずなのに立体感がすごい。抜けが良く緻密で、厚みを感じるほどの色のコクは一度は経験してもらいたい。髪の毛どころかマフラーの繊維まで見え、手触りまで伝わってきそうだ。本当の解像とはこういうことなのだと溜息が漏れる。

ニュートラルな色再現をするようになりJPEGでも不満は少ない。だがQuattroのRAWファイルは情報量が多くタフで、1つの正解を見つけ出すようにパラメーターの調整をしたMerrillに対して、複数の可能性を模索していく楽しさがある。

RAW現像することでdp1 Quattroの真価が発揮される

JPEGでも十分美しいが、これを整えたのが右の2枚。中央のカットは色温度を6,500Kに設定。50Kずつ上下して決めた。影が強いのでコントラストを下げ、エッジが立ちすぎるのを［色ノイズリダクション］を利用してマイルドにする。C:3 M:10のカラーで背景の薄い青空と紅葉のバランスを整えた。常に左頸下の肌を見て、違和感がないよう意識する。モノクロにすると気になるのが胸の部分のハイライト。そこでコントラストもハイライトも下げ、ワンピースの模様が見えるところまで落とす。全体が重くなりがちなので［フィルライト］で持ち上げる。階調が整ったところで露出をコントロールして好みの明るさにする。明るさから決めていくと迷宮入りしてしまう

Body Design

Front

今回採用されたQuattroセンサーに合わせて新設計されたレンズ。周辺の画質、光量落ちも見られないすばらしいレンズだ。シャープになりすぎるとボケがうるさくなるが、それもない

Back

グリップの形状から深めに握ることになるため、十字キーをコントロールするのに手を浮かす格好になる。グリップがじゃまになって、クイックメニューのように煩雑に使うボタンとの行き来がしづらい

Top

フォトキナで発表されたQuattro専用の液晶ビューファインダー。発売日、価格はまだ未定だ。中で使われているガラス、外装のゴムにもこだわった一品。年内には発売される予定だ

dp1とdp2の画質比較

dp1 Quattro

さすが新設計のレンズならではでQuattroの要求にきちんと応えている。周辺減光がほとんど見られないのと、隅々まで画質の低下がないのは見事。収差もよく補正されていていうことはない

dp2 Quattro

こちらも見事だが解像感はわずかにdp1が上だろうか。風景では気にならないがタル型の収差が目立つことがある。レンズ、センサー、プロセッサーの共同作業だが、階調のつながりの美しさは見事

dp1とdp2のボディ比較

Quattroシリーズはデザインコンセプトを踏襲し、機種ごとでの変化がほとんどない。dp2（右）に比べてdp1のほうがレンズが大きいので奥行き、重さが増えている程度だ。操作性もまったく同じ

dp1 Quattroの短所ははっきりしている。まず高感度に弱くISO 800ですでに画質低下が見られる。7枚まで連写が可能だが、シャッターを切ったあとのブラックアウトが長く、シングルでの連写は厳しい。画像は専用ソフトSIGMA Photo ProでのRAW現像が基本となるが、この挙動が安定しない。ワークフローは軽快とはいいがたい。

操作系で気に入っているのはMFとAFが共存できるところ。半押しでAFが駆動、その状態でピントリングを回すと中央がクロップされピントの確認ができて、動かすのを止めると全画面に戻ってシャッターに備えられる。イニシアチブが常に撮影者にあるのが良い。動画やエフェクトが省かれているのも、似たようなカメラが多くなっていく中でポリシーが感じられて好きだ。シンプルと貧しさは同じではない。

画質と引き換えに、多少の不便は受け入れるとする。それでもSDカードスロットのカバーが開閉しづらく、交換のたびにストレスを感じるのと、メニューボタンと十字キーの位置が離れすぎていて、ホールディングしたまま設定を変えるのが困難なのは、いつか改善してほしい。

dp2 Quattroは汎用性の高い焦点距離で、ポートレートからスナップまで多くの被写体に対応できる。それに対してdp1 Quattroの換算28mmの画角はふだん使いには広すぎるかもしれない。だが画質=情報量と考えれば、より多く残せる広角の役割は大きい。見えていたのに認識できていなかったものを、写真の上で再発見する驚きを体験してもらいたい。すでに一眼レフでシステムを持っている人のサブ機としてもすすめたい。

風の匂いや空気の肌触りまで写っている

絞り優先AE（F2.8、1/100秒、－1.0EV）／ISO 200／WB:晴天
JPEGも参照しながら色温度を整え、カラーマッピングで紅葉を美しく見える色を選び、フィルライトでシャドウをわずかに締めた。「借りた男物のジャケットを羽織る」というストーリー性を引き立ててみた

暗いところが苦手だからこそとらえられる繊細な光

絞り優先AE（F3.2、1/200秒、－0.3EV）／ISO 200／WB:晴天
誰もが指摘するようにFoveon最大の弱点は高感度が苦手なこと。だが、いくらでも感度が上げられるせいで見失いがちな繊細な光をとらえられる。肩に当たる光も美しい

内田ユキオ

新潟県両津市（現在の佐渡市）出身。公務員を経てフリーに。タレントなどの撮影のかたわら、モノクロでのスナップに定評があり、ニコンサロン、富士フォトサロンなどで個展を開催。執筆も手がけ、カメラ雑誌や新聞に寄稿。現在は、写真教室の講師も務める。自称、「最後の文系写真家」

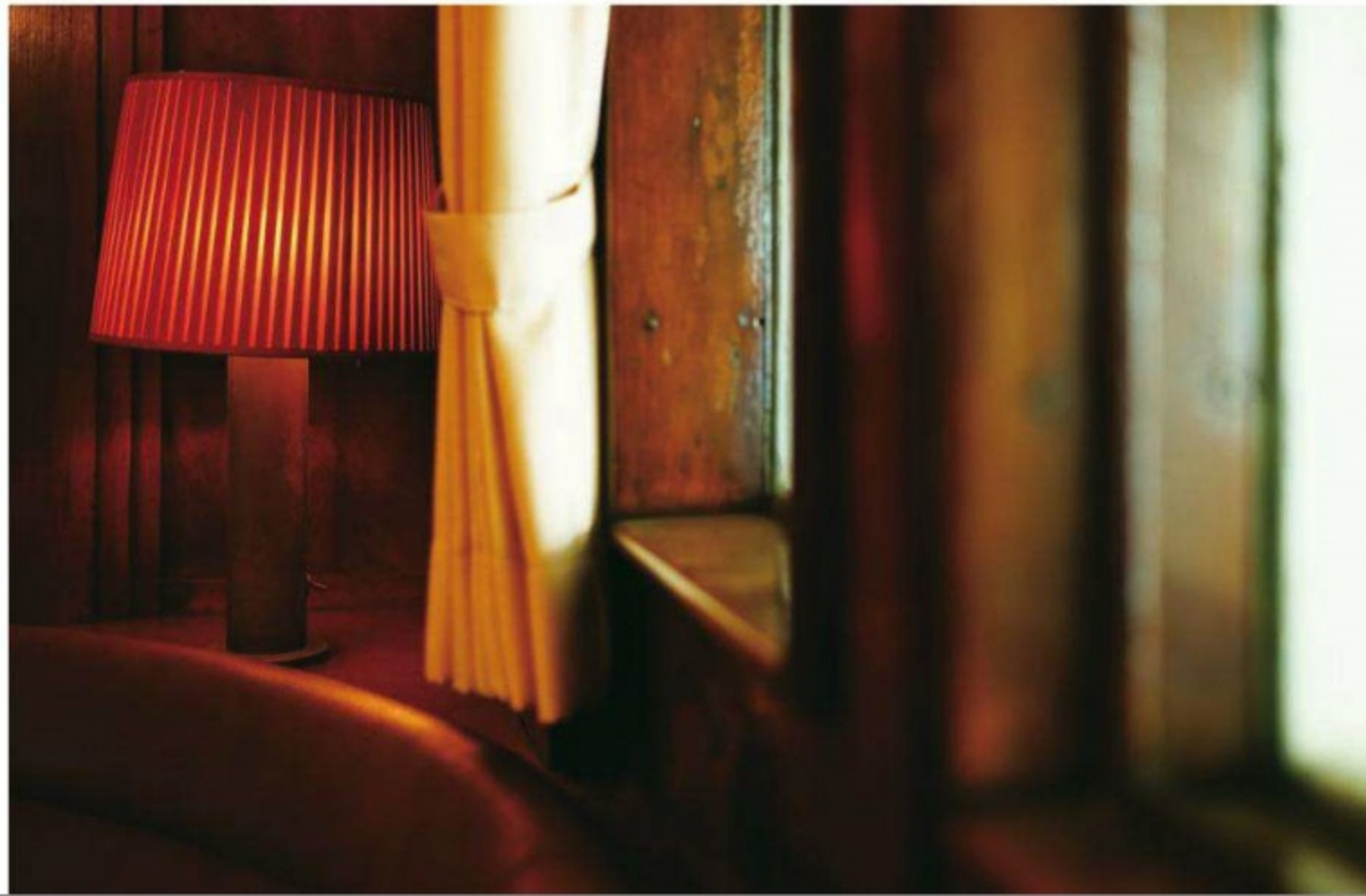
ソニー α7R ／ Loxia 2/50 ／ 50mm ／ 絞り優先AE（F2、1/640秒、－0.3EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光
紅葉した木々を見上げると、たくさんの鳩が羽を休めていた。やわらかい透過光が美しく、思わずシャッターを切った。日陰になっている幹や枝の部分がつぶれず、しっとりと表現されている。シャドウ部の階調が、とてもよい。逆光撮影やシックな表現などに使いたいレンズだ

ソニー α7R ／ Loxia 2/50 ／ 50mm ／絞り優先AE（F4.0、1/250秒、－0.3EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光
オフィス街にあった池に映る風景を撮影した。ピントは映り込みに合わせている。手前には水面に浮いていた落ち葉を、季節を伝えるアイテムとして加えた。レンズによっては輪郭のボケがきれいに表現できないケースがある。このレンズのボケはとてもなめらかで美しい。鮮やかな発色も魅力的だ

ソニー α7R ／ Loxia 2/50 ／ 50mm ／絞り優先AE（F2.0、1/800秒、＋0.3EV）／ ISO 64 ／ WB：太陽光
ベンチの間から顔を出していた一輪のコスモス。最短撮影距離まで近づき、開放F値で撮影している。焦点距離目盛りを最短に合わせ、自分が動いてピントを微調整した。小さな被写体にぐっと近づいても、質感はクリアに表現されている。積極的に開放で撮影したいレンズといえる

ソニー α7R ／ Loxia 2/50 ／ 50mm ／ 絞り優先AE（F2.0、1/60、±0EV）／ ISO 500 ／ WB：太陽光
クラシックな趣きの船内でスナップした。明るい単焦点レンズは、ISO感度をそれほど高めなくても手持ちでの撮影が可能になる。開放F値でもシャープさが感じられ、被写体のディティールがしっかりと表現されている。ほどよいボケが自然な奥行きを演出し、情緒あふれるイメージどおりの雰囲気で写すことができた

α7シリーズに最適なMFレンズ

カールツァイス Loxia 2/50

Touit（ツイート）、Otus（オータス）と意欲的に新製品を投入してきているカールツァイスから、さらに新しいブランドのレンズが登場した。今度はEマウントでMFと楽しみな仕様だ。わくわくさせてくれるそのレンズの実力を探ってみた。

レポート：鈴木知子

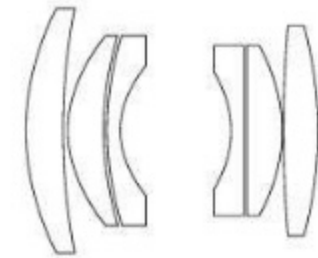
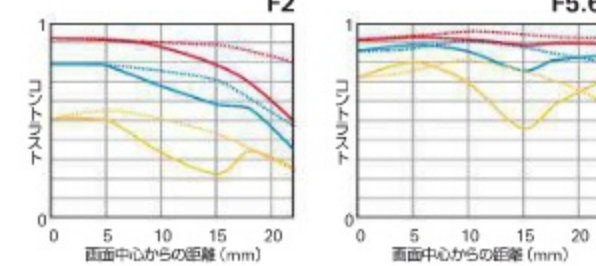
◎発売日：2014年10月24日　◎実勢価格：99,000円前後

レンズ構成図

MTF曲線図

空間周波数	開放 S	開放 M
10本/mm		
20本/mm		
40本/mm		

S：放射方向
M：同心円方向

レンズ構成：4群6枚 ／絞り羽根枚数：10枚 ／開放F値：F2 ／最小絞り：F22 ／最短撮影距離：0.45m ／フィルター径：φ52mm ／大きさ：約φ62.1×66.2mm ／重さ：約320g

カールツァイスからソニー EマウントでFE対応のLoxia 2/50（50mm F2）が発売された。「Loxia」（ロキシア）はフルサイズのMF専用の新ブランドになる。

50mmといえば、私たち人間の自然な視野に近いといわれる標準レンズだ。撮り方によって、広角レンズや望遠レンズのようにも表現でき、どのような被写体にも対応できる万能レンズといえる。今回はこのレンズ1本だけを携えて、さまざまなシーンやシチュエーションでテストしてきた。レンズ本体がコンパクトなのでα7シリーズとのバランスは良い。気軽に携行でき、すぐにカメラバッグから取り出せる。街角スナップはもちろんのこと、風景や花、単焦点ならではのボケを生かしたポートレート撮影にもおすすめしたい。このレンズの特徴はマニュアルファーカスレンズだということ。そのためフォーカスリングは当然だが、絞りリングといまはほとんど見られない被写界深度目盛りまでも搭載されている。あらかじめフォーカスと絞りを決めて、スナップをすることも気軽にできる。フォーカスリングを回すと電子ファインダーがMF拡大表示に切り替わり、ピント合わせが行える。この拡大表示はEVF搭載機でマニュアルフォーカスを使うメリットといえよう。ピントリングはトルクも滑りも良く、ほどよい操作感である。描写力は開放F値でもシャープさが感じられ解像力はとても高い。最短撮影距離は45cmで最短でもピントのキレが良く、輪郭や背景のボケも柔らかく美しい。開放F値でも周辺減光は、ほとんど感じられない。

多くのユーザーはオートフォーカス機能が搭載されているレンズを使用しているかもしれない。筆者もたいていの撮影では、AFでフォーカスを決定している。久しぶりにマニュアルフォーカスを使うと、「慎重にシャッターを切るようになる」といえば伝わるだろうか。被写体をじっくりと観察して、思いどおりのポイントにフォーカスを自分で合わせてシャッターを切る。写真を撮るうえでは当たり前のことが、リアルに実感できる。高い描写性能と優れた操作性で、写真を撮るのが、さらに楽しくなる1本といえるだろう。

Loxia 50とFE55mmの画質比較

ソニー α7R ／ Loxia 2/50 ／絞り優先AE（F2、1/3200秒、＋0.3EV）／ ISO 100 ／ WB：太陽光

Loxia 2/50

Sonnar T* FE 55mm F1.8 ZA

ソニーのSonnar T* FE 55mm F1.8 ZAと位置を変えずに、絞り値F2で比較した。50mmと55mmで焦点距離の違いはあるが、55mm F1.8の方が柔らかい描写だ。シャープ感は個性の違いなので、被写体によって使い分けたい

CHECK POINT

1 質感の高い絞りリング

絞りは絞り調節リングを使って手動で変える。操作に慣れてしまえばカメラで変えるよりもスピーディーに操作できる。操作感はとてもスムーズ。絞りは1/3刻みのクリックストップになっている

2 被写界深度目盛り表示がある

被写界深度目盛りは、まず絞り値を決定し、ピントリングでフォーカスを合わせる。絞り値の数字に対応する被写界深度目盛を見れば、被写界深度が分かるのだ。両側の目盛りが示す距離にある被写体にはピントがすべて合って見えることを意味している

3 クリックのない絞り操作にできる

カメラの絞りをスムーズに操作できるようになるデクリック機能が搭載された。同梱のツールをつかって、バヨネット面にある調整ネジを回せば絞り調整リングのクリックを外すことができる。動画撮影時にうれしい機能だ。絞りのクリックによる音や不自然な露出を避けることができる

4 FE 55mmよりもサイズは小さい

全長、最大径はSonnar T* FE 55mm F1.8 ZAに比べてLoxia 2/50の方がコンパクトになっている。重量は350gと40gほど重くなったが、これは質感の高い金属製鏡筒ゆえだろう。また小さくて存在感のあるレンズで、α7シリーズに装着したときのバランスはとても良い

FUJIFILM X100T　Panasonic LX100　FUJIFILM X30

ライカ Leica X（Typ 113）

●発売日：2014年10月4日　●実勢価格：289,000円前後

高級モデルだけに画質が気になる！

Momoi's Check

カメラとしての佇まいに注目！

Sasaki's Check

クラシカルなデザインと高い質感、そしてボディとレンズの一体化による画質の良さが特徴の高級コンパクトカメラ。スナップを知り尽くした2人の写真家が、いま最も熱い最新&人気モデル5機種を10項目で徹底チェック。まずは高級機の代表、ライカから見ていこう。

● 背面のボタンレイアウト

●イメージセンサー：APS-C　●有効画素数：約1,620万画素　●レンズ構成：8群10枚（非球面レンズ2枚）　●焦点距離：23mm（35mm相当）　●開放絞り：F1.7　●最小絞り：F16　●最短撮影距離：0.2m　●絞り羽根枚数：9枚　●手ブレ補正機構：搭載　●ISO感度：ISO 100～12500　●オートフォーカス：コントラストAF　●シャッター速度：最高1/2,000秒　●連続撮影速度：最高約7コマ／秒　●フィルター：フィルムモード（標準、Vivid、Natural、白黒Natural、白黒High Contrast）　●液晶モニター：3型約92万ドット　●ファインダー：非搭載　●Wi-Fi：非搭載　●撮影可能枚数：約350枚　●大きさ（W×H×D）：約133×73×78mm　●重さ：約486g

23mm（35mm相当）／絞り優先AE（F16、1/800秒、−2.0EV）／ISO 100／WB：オート　雲のない空から強い日差しが降り注ぐ中、何気なく撮ったのだが、フレアやゴーストが皆無。これには正直驚いた

23mm（35mm相当）／絞り優先AE（F1.7、1/40秒、−1.3EV）／ISO 200／WB：晴天　近接では絞り込まれるため、F1.7をキープできるギリギリで撮影。やや描写は緩めだが、ボケ味とのバランスを見越してのことだろう

Momoi's Check

項目	評価
デザイン	カラーはブラックとシルバーの2色があるが、シルバーに一目惚れ。スッキリとした端正な佇まい、赤いワンポイントのマークはライカの象徴。側面の美しい曲面から、手に馴染む表皮、親指のかかりの良い背面デザインなど、実用から考察されたことが分かる。文字がライカフォントである点で悩殺（笑）
質感	プレミアムブランドだけに作り込みは悪くないが、上面のダイヤルなどの触感や質感はもうひとつ。しかしながら、ホットシューカバーひとつをとっても金属でできており、細かいパーツ類に至るまで高品位なものを採用するこだわりには驚く
操作性	AF測距点の移動など、ボタンを押しながらの操作になるため、若干クセは見られるが困るというほどではない。また、AFとMFの切り替えはフォーカスリングで行うが、思いのほか感覚的に心地良かった。露出補正などの視認性も良い。F値はダイヤルではなくレンズ側で変えられた方が良かった
ファインダー	本体内にファインダーは非搭載だが、外付けの電子ビューファインダーが用意されている。なお、単なるファインダー機能だけでなくGPS受信機も備える
バッテリーの持ち	通常の使い方であれば特に不満はないだろう。ただ充電器のプラグが収納式でなく、プラグを出したままになる。家なら良いが、旅先などへ持ち歩くにはかさばる
解像力	Xバリオのズームレンズも定評があるが、本機は単焦点レンズ搭載機。特に太陽を画面に入れたシーンでは、フレアが少なく驚いた。焦点距離と開放F値の割に大きな外観だが、それだけにゆとりも見越しているのだろう
ボケ	開放F値はF1.7だが、近接になるにつれて、自動的に絞り込まれる。確認したところでは、実絞り表示でもなく、高画質をキープするための仕様のようだ。ちょっと不可解な気もするが、思想の違いと思えば納得できる
高感度画質	感度設定はISO 12500まで。ノイズを無理に消すタイプでなく、ISO 1600～3200あたりから除々に目立ってくるが、F1.7の大口径レンズで、暗いシーンでも高ISO感度を多用せずにすむのが救い
AF速度	日常でAF速度が気になることは少ないと思うが、俊速ではない。むしろ大きなピントリングでMFが扱いやすく、AFからの切り替えや部分拡大などを利用した操作もスムーズ。ピント合わせもじっくり楽しませようとする思想に感服する
デジタルフィルター	いわゆるデジタルフィルターは非搭載。フィルムモードにビビッドやモノトーンを備える程度の控えめなものだ。本来の撮影に必要なものだけを搭載した結果だが、一般的にはさほど使わない機能なので割愛したのだろう

Sasaki's Check

項目	評価
デザイン	ポイントはライカらしいボディサイドのカーブ。M型にも通じるデザインで多くのファンも納得のはず。カメラ全体の存在感も別格に感じた。レンズを含めると全体的に少し大きく感じるサイズも撮影しているときはそれほど気にならなかった
質感	背面から見ると、とてもスッキリと感じる。隙間などがないカメラ全体の工作精度の高さも影響しているが、しっとりと落ち着いた雰囲気があり、カメラ内部までしっかり作られているような安心感がある。文字の配置などもシンプルで心地良い
操作性	AFとMFの切り替えはレンズに付いているピントリングを回すだけ。MFの無限遠より先に回すとAFになる。少しトルクがあるので不用意に動く心配がない。MF時は液晶モニターの中央部だけが拡大されてピントが追い込める。レンジファインダー風に構図を確認しながらMFでピント合わせが行える
ファインダー	ファインダーは別売で高精細な外付けファインダー「ビゾフレックス」がある。チルト式でファインダーの角度が変えられるのでアングルの自由度も広がる
バッテリーの持ち	テクニカルデータには撮影可能枚数は約350枚となっており一般的な数字だ。ただし、メニュー操作などを頻繁に行うとバッテリーの減りも早くなる
解像力	開放絞りのF1.7から細かい像の分離能力は高いが、解像力のピークはF5.6～F8で、F11からは少しずつ回折現象の影響を感じる。デジタル的なシャープさよりも細線の解像を優先している印象を受けた
ボケ	F1.7の開放絞りからライカらしいシャープな描写を見せる。F2.8ぐらいまで絞ったほうがピント位置のシャープさとボケ味のバランスが良くなるように感じた
高感度画質	高感度テストは少し暗い室内で行った。ISO 1600まではほぼノイズフリーといっていい状態で、ISO 3200から少しノイズを感じる。最高感度のISO 12500ではノイズが多くなり、コントラストの上昇が見られる。画像処理ソフトでノイズ除去を行えば、ディテールの消失が少なくなるため、ISO 6400ぐらいまでは十分に実用域
AF速度	お世辞にも速いとはいえず、少し迷うと感じることもあった。その違いも比較すればの話で、このカメラだけを使っていれば、それほど気にならない範囲だった。そんな評価はおかしいといわれるかもしれないが、ライカならばそれも許される。Mシリーズでなくても、ライカでの撮影は儀式のような特別なもののように感じた
デジタルフィルター	フィルムモードに［白黒Natural］と［白黒High Contrast］がある点がライカらしい。迷わず［白黒High Contrast］を選んで撮影したが、少しコントラストが弱い夕方の条件でもしっかりとした陰影を表現できた

23mm（35mm相当）／絞り優先AE（F8、1/400秒、−0.3EV）／ISO 100／WB：オート　ビルの直線と葉っぱの細かい造形でこのカメラの解像力を試した。シャープな描写力で細かな像の分離も確認できた

23mm（35mm相当）／プログラムAE（F11、1/800秒、−0.7EV）／ISO 100／WB：オート／白黒Natural　夕方の空に映える工事中のビルのクレーンを見ているとき、このカメラのシャープな描写を生かせると感じた

撮影の本質に向きあえる特別な高級機

至れり尽くせりの日本メーカー製カメラと比べて、写真撮影の本質的な部分のみに注力する割り切った内容でありながら、デザインや質感にこだわるあたりは、ドイツ製高級車と似通う部分もあり、お国柄というほかない。プレミアムブランドだけにお値段もそれなりだが、納得できるなら、むしろ安い買い物かも……。一目惚れの筆者は残念ながら、見合う品格も財力も持ち合わせてないので、憧れだけにとどめておきたい（泣）。

特別な何かを感じさせる力がある

このカメラを語るとき、ライカであることを除くことはできない。背面の「LEICA CAMERA WETZLAR GERMANY」の文字がそれを許さないからだ。筆者自身はライカフリークではないが、箱から取り出したときの特別な感じ、カメラを構えたときに思わずボディ左隅に目がいく感覚は特別だ。本来はあるべきものがなく、デジタル的な要素においても決して最新とは言い切れない部分があるが、カメラを持ったときの感覚は悪くない。不思議なカメラだ。

①デザイン　外観の佇まい、カメラとしてのかっこ良さ
②質感　金属や革などの素材の高級感、グリップ時のホールディングの良さ
③操作性　ダイヤルやリングなどのクリック感、メニューなどの使い勝手
④ファインダー　OVFやEVFの見えの良さ、表示の見やすさ
⑤バッテリーの持ち　CIPA基準のスペック、使用時の印象
⑥解像力　細かい要素の再現力、収差補正や逆光特性、実写時の印象
⑦ボケ　ボケのなめらかさ
⑧高感度画質　高感度ノイズの具合、実用域と思えるISO感度の目安
⑨AF速度　ピントの合いやすさ
⑩デジタルフィルター　フィルターの充実度、撮影設定の自由度

富士フイルム
X100T

●発売日：2014年11月20日 ●実勢価格：156,100円前後

新搭載された色彩設定を試したい！

Sasaki's Check

光学ファインダーの進化を見たい！

Momoi's Check

シリーズ3代目を数えるX100Tは、アイデンティティであるレトロなフォルムはそのままに着実に機能を進化。OVFの中にピント位置を拡大表示するEVF「電子式レンジファインダー」や新しいフイルムシミュレーション「クラシッククローム」などの新機能に注目だ。

● 背面のボタンレイアウト

●**イメージセンサー**：APS-C ●**有効画素数**：約1,630万画素 ●**レンズ構成**：6群8枚（非球面レンズ1枚） ●**焦点距離**：23mm（35mm相当） ●**開放絞り**：F2 ●**最小絞り**：F16 ●**最短撮影距離**：通常時：約0.5m、マクロ時：約0.1m ●**絞り羽根枚数**：9枚 ●**手ブレ補正機構**：非搭載 ●**ISO感度**：ISO 200～6400（拡張でISO 100～51200） ●**オートフォーカス**：像面位相差AF、コントラストAF ●**シャッター速度**：最高1/4,000秒（メカシャッター）、最高1/32,000秒（電子シャッター） ●**連続撮影速度**：最高約6コマ／秒 ●**フィルター**：フイルムシミュレーション（PROVIA／スタンダード、Velvia／ビビッド、ASTIA／ソフト、クラシッククローム、PRO Neg. Hiほか） アドバンストフィルター（トイカメラ、ミニチュアほか） ●**液晶モニター**：3型約104万ドット ●**ファインダー**：OVF：視野率約92% EVF：0.48型約236万ドット、視野率約100% ●**Wi-Fi**：搭載 ●**撮影可能枚数**：約330枚 ●**大きさ（W×H×D）**：約126.5×74.4×52.4mm ●**重さ**：約440g

23mm（35mm相当）／プログラムAE（F2、1/90秒、－1.7EV）／ISO 250／WB：オート
路地から出てきたタクシーがほどよいアクセントになると感じた。AFもすばやくタイミングを逃さずに済んだ

23mm（35mm相当）／プログラムAE（F3.2、1/140秒、±0EV）／ISO 200／WB:オート **神楽坂の路地裏と［クラシッククローム］のシックな仕上がりの相性が良いと感じて、街の彩りと人物を絡めた**

デザイン
日本のプロダクトデザインとしては珍しく、X100から3代続けて外観がほとんど変更されていないのは、コンセプトに揺るぎがないからだろう。レンジファインダーカメラのデザインをうまく引き継いだ雰囲気で懐かしさも感じる

質感
角にはほどよいアールがつけてあり、金属の質感もかなり高い。文字はしっかりと刻み込まれているので視認性も良い。背面を見なければ、思わずフィルムカメラと間違えそうな趣が感じられる。ファインダー接眼部やAFの切り替えスイッチにもう少し質感があったほうが合っていると感じたが、シャッターボタンなどの作り込みも良く、レンジファインダーカメラファンにはたまらない雰囲気だろう

操作感
ボディ上面の右肩にある露出補正ダイヤルや、ボディ正面にあるファインダーの切り替えレバーなど、レンジファインダーカメラの愛好家からすれば、お約束の操作系がそろっている。ただ、筆者のような電子式の一眼ユーザーからすると少し戸惑いを覚える

ファインダー
ファインダーがさらに進化して、電子式レンジファインダーという機能が加わった。これは光学ファインダーの一部を遮蔽して電子ビューファインダーを組み込み、ピント位置を拡大。ピントの確認ができるようにしている。写真のようにファインダーの右隅に電子ビューファインダーが入る。とっさのタイミングで撮影するようなシーンでも安心して使える

バッテリーの持ち
カタログスペックでは約330枚。OVFでの撮影枚数は約700枚とバッテリーライフは有利。OVFをメインにすれば予備バッテリーの心配も少ないように感じる。充電器も付属しているが、USBケーブルでの本体充電にも対応している

解像力
開放絞りのF2は、レンズの持ち味をそのまま生かして、少し緩さを感じる描写にしてある。F2.8から次第に解像力が上がりはじめて、F5.6～F8でピークを迎える。F16でもそれほど回折現象の影響を感じないのは最新の画像処理技術のおかげだろう。明らかな誇張も感じられず、どの絞り値でも素直な描写が楽しめる

ボケ
開放絞り（F2）のボケは、ピント位置も柔らかく画面全体がとろけるような感じ。F2.8まで絞るとピント位置にシャープさが出て、柔らかさとの対比が楽しめるようになる。F4まで絞るとボケを楽しむという趣は弱くなる。デジタルでは開放絞りからシャープなレンズも多いが、フィルム時代のレンズのような味付けがこのカメラらしい

高感度画質
暗い室内でテストを実施。ISO 1600までは何も気にする必要がなく、ISO 3200から少しノイズを感じるがまだ実用範囲。拡張感度のISO 12800からはディテールの消失が多くなり、少し厳しくなる。最高感度のISO 51200は緊急用だ

AF速度
AF速度はかなり速くて迷いも少ない。ファインダーで触れた電子式レンジファインダーのおかげで、光学式のファインダーを使っているときのピントに対する不安が解消されて安心感も高い。暗い条件でもストレスを感じることはなかった

デジタルフィルター
アドバンストフィルターはなんとなく入っているという程度と考えてもよく、フイルムシミュレーションの［クラシッククローム］のほうがこのカメラには合っている。色みは富士フイルムお得意の記憶色より忠実再現に近く、しっとりと感じる風合いがある

アナログライクな操作感がポイントに

質感も高く、レンズの味付けも面白くて良いカメラだと思う。個人的にはファインダーの切り替えや露出補正ダイヤルなど、レンジファインダーカメラを意識しすぎていると感じる部分に扱いづらさを覚えた。これは個人的な問題ではあるのだが、アナログライクな操作感になじめないとあらためて感じた。光学ファインダーが気持ちいいだけに、アイセンサーを入れなければ、メニューもファインダー内で表示される点などになんとなく違和感があった。

デザイン
フィルムカメラのようなクラシックさで、当時を知るノスタルジーおじさんから、レトロを新鮮に感じる若者まで広い世代を魅了。手を収めても、優しい曲線で至って自然な持ち心地だ。レンズの出っ張りも少なく、携帯性にも優れる。また表記文字が若干太めで、視認性が高いのも評価できる

質感
デザインと重なる部分もあるが、クラシックスタイルの王道を行くだけに、外側表皮なども吟味。合成皮革だが、高級品だった当時を彷彿とさせる作り込みだ。トップカバーと底面にはマグネシウム合金を使用

操作性
オーソドックスな操作形態で、撮影に必要な基本的なものだけを用意したシンプル構成のため、迷うこともないだろう。3代目になり、随所に小さな改良が加えられて、より快適に仕上がっている。しかし、露出補正をはじめ、液晶モニターの文字が小さくて見にくい点が気になる

ファインダー
光学式ファインダー（OVF）と電子ファインダー（EVF）は珠玉のいいとこ取り。気分や被写体に応じて切り替えられるのは理想的だ。OVF時の部分拡大機能のみならず、EVFのレスポンスも心持ち向上しているようだ

バッテリーの持ち
公称は約330枚（EVF時）。特筆するスペックではないが、一般的な使い方では1日中楽しめるはず。OVFでは、さらに撮影可能枚数が伸びる。充電は同梱される専用充電器で行うが、携帯に便利なプラグ一体式でないのが残念だ

解像力
レンズ固定式の強みを生かして、開放絞りから四隅まで気持ち良い描写を見せる。開放近辺は若干柔らかめだが、レンズ構成には両面非球面ガラスや高屈折ガラスを用いたぜいたくなもので、ズーム非搭載の潔さが画質に現れている。また、小絞り時には点像復元処理機能で画質をキープ。意図的に被写界深度が欲しいときには強い味方になってくれる

ボケ
特性上、近接気味でないとボケ量は目立たないが、セオリーどおりに行えば立体感あふれる素直なボケ味が楽しめる。ちなみに、従来機では1/3段設定時に絞りリングと背面のレバーで行ったが、本機より絞りリング操作のみに改善された

高感度画質
高感度域もけっこう粘る。ノイズの消し方と解像感の生かし方のバランスも良く、ISO 6400程度でも、それほど躊躇することなく使える。手ブレ補正機構は非搭載だが、そのぶんはイメージセンサーと処理エンジンに頑張ってもらおう

AF速度
コントラストAFと像面位相差AFのこちらもいいとこ取り。動体を撮影するタイプの製品ではないが、動画撮影時の恩恵が大きい。もちろん常用においてもキビキビ動き、ストレスは特に感じない

デジタルフィルター
お楽しみ機能として、アドバンストフィルターの名称で完備。トイカメラ、ミニチュア、ポップカラー、ハイキー、ローキー、ダイナミックトーン、ソフトフォーカス、パートカラーが楽しめる。種類は多くないが人気どころはひととおりそろっている

23mm（35mm相当）／プログラムAE（F3.6、1/420秒、－1.7EV）／ISO 6400／WB：オート **歴代超高感度を得意とするX100シリーズ。夜のスナップも高感度を思わせないくらいの階調再現やノイズで、期待に応える**

23mm（35mm相当）／アドバンストフィルター（F3.6、1/420秒、－1.7EV）／ISO 6400／WB：オート **［ダイナミックトーン］は階調再現に脚色を加えたもの。雲の厚い空も、見事に印象的な光景に変わる。旅先で天気が悪い時にもオススメ**

熟成した機能の絶妙なバランスが光る

光学ファインダーと電子ビューファインダーのハイブリッド化による、OVF時の部分拡大機能ばかりが話題。確かに唯一無二のエポックメークだが、本機の魅力はそれだけでなく、基本性能や使い勝手など、バランスの良さが光る。多くのモデルは長所と同時に短所があるものだが、本モデルはその短所がほとんど感じられない。このあたりが3代重ねた、熟成というものだろうか。見かけばかりのクラシック風カメラでないことは間違いない。

①**デザイン** 外観の佇まい、カメラとしてのかっこ良さ
②**質感** 金属や革などの素材の高級感、グリップ時のホールディングの良さ
③**操作性** ダイヤルやリングなどのクリック感、メニューなどの使い勝手
④**ファインダー** OVFやEVFの見えの良さ、表示の見やすさ
⑤**バッテリーの持ち** CIPA基準のスペック、使用時の印象
⑥**解像力** 細かい要素の再現力、収差補正や逆光特性、実写時の印象
⑦**ボケ** ボケのなめらかさ
⑧**高感度画質** 高感度ノイズの具合、実用域と思えるISO感度の目安
⑨**AF速度** ピントの合いやすさ
⑩**デジタルフィルター** フィルターの充実度、撮影設定の自由度

パナソニック LUMIX LX100

●発売日：2014年11月13日 ●実勢価格：111,200円前後

4/3型センサーの写りが気になる！

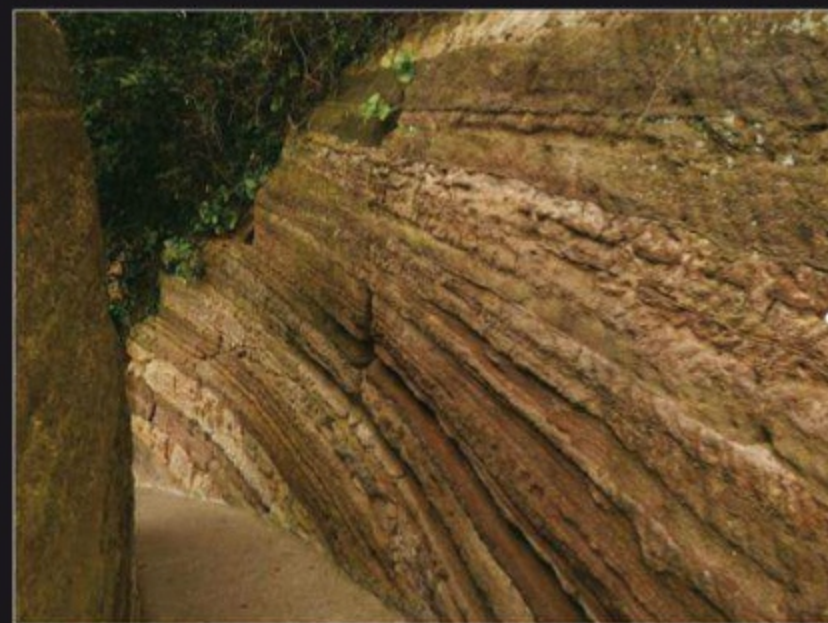
Momoi's Check

数多いボタン類の操作性が鍵を握る

Sasaki's Check

レンズ一体型として初めてマイクロフォーサーズを採用。イメージセンサーが従来のLX7より4倍以上大きくなったことで、画質や高感度特性、開放F1.7のボケ味に期待が高まる。また、設定の自由度が増して積極的に使いたくなるクリエイティブコントロールも要チェックだ。

● 背面のボタンレイアウト

●**イメージセンサー**：マイクロフォーサーズ ●**有効画素数**：約1,280万画素 ●**レンズ構成**：8群11枚（非球面レンズ8面5枚、EDレンズ2枚）●**焦点距離**：10.9～34mm（24～75mm相当）●**開放絞り**：F1.7～2.8 ●**最小絞り**：F16 ●**最短撮影距離**：通常時：約0.5m、マクロ時：約0.03m ●**絞り羽根枚数**：9枚 ●**手ブレ補正機構**：搭載 ●**ISO感度**：ISO 200～25600（拡張でISO 100）●**オートフォーカス**：コントラストAF ●**シャッター速度**：最高1/4,000秒（メカシャッター）、最高1/16,000秒（電子シャッター）●**連続撮影速度**：最高約11コマ／秒（メカシャッター）、最高約40コマ／秒（電子シャッター）●**フィルター**：クリエイティブコントロール（ポップ、レトロ、オールドデイズ、ハイキー、ローキーほか）●**液晶モニター**：3型約92万ドット ●**ファインダー**：0.38型約276万ドット、視野率約100% ●**Wi-Fi**：搭載 ●**撮影可能枚数**：モニター時：約350枚、ファインダー時：約320枚 ●**大きさ（W×H×D）**：約114.8×66.2×55mm ●**重さ**：約393g

10.9mm（24mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/60秒、－1.0EV）／ISO 320／WB：曇り　拡大すると砂粒1つまで確認可能で、地層の質感を細部まで堪能できる。実用域を超えた過剰な性能といえばそれまでだが……

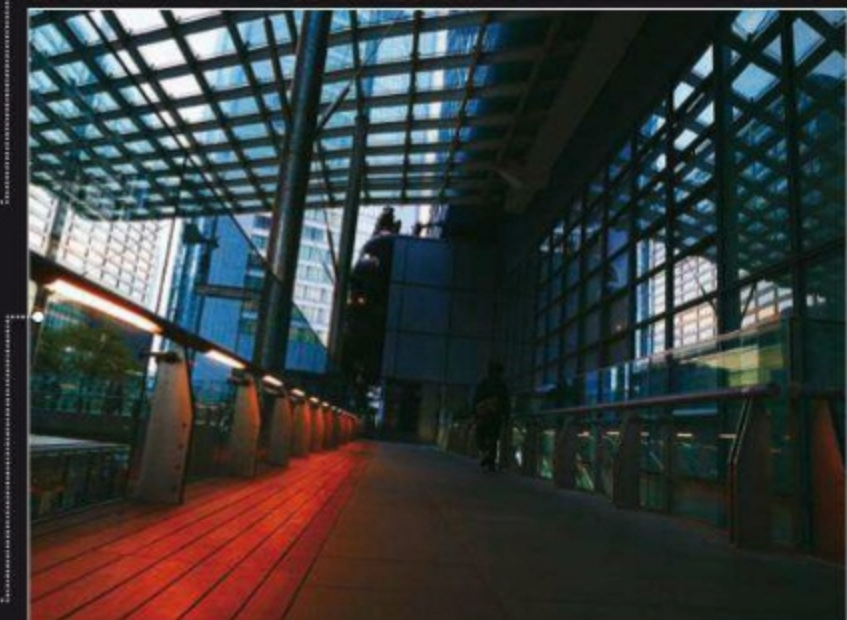
14mm（31mm相当）／絞り優先AE（F2.2、1/80秒、－1.0EV）／ISO 1250／WB:オート　ISOオートのままで、気軽に夜の街をスナップ。手ブレ補正の効きも良く、特別に気を尖らせることなく淡々とこなしてくれる

Momoi's Check

項目	評価
デザイン	ライカレンズを武器に高級機路線を歩むパナソニック。LUMIX GX7などの流れを感じるデザインでずいぶん見慣れたが、それでも無国籍感を感じてしまい、もっとアクが強くても良いと思う。鏡筒部にアスペクト比の切り替えのレバーが設けられているが、必要性に疑問。レンズ繰り出しの長さも気になる
質感	上面ダイヤルは刻みなどにも凝った高級感があふれる半面、ボディ正面の約半分に大型のゴム状素材（エラストマーと思われる）があとづけ風に占拠。使いやすいが、このあたりを是ととるか否ととるかで意見は割れるところだろう
操作性	絞りリングとシャッターダイヤルの組み合わせで露出モードを変えるのはベテラン向けだが、操作はシンプルで好感がもてる。ファンクションボタンも3カ所あり、使用者の好みに対応。警告表示（右写真）も見やすい。タッチパネルが非採用な点は不思議だ
ファインダー	LUMIX GX7のような可倒式ではないが、倍率なども大きく見やすい。特に夜景シーンでは、ざらつくこともなく、ファインダー像だけを見ただけで、美しく撮れる気分に浸れる。ちなみに液晶モニターもチルト式非採用だ
バッテリーの持ち	コンパクトカメラでも大口径レンズや大型センサー使用のため、それなりに電力が必要でGFやGX系と共通のバッテリーを使用。USB充電が可能なのもうれしい
解像力	4/3型センサーを採用して、レンズも非球面や高級ガラスを多用。もちろん、レンズだけで高解像が成立するものでなく、画像処理エンジンなども含めて優秀なのだろう。質感があるものを撮影すると思わず笑みがこぼれてしまう
ボケ	明るくてF値の変動が少ない大口径レンズは、ボケを楽しむにはピッタリ。近接撮影でない限り、丸くて大きなボケは望みにくいが、適度なボケ量で立体感を感じさせてくれる。また、絞りリングが大きく、感覚的にも使いやすい
高感度画質	最高ISO感度は25600まで。ISO 1600～ISO 3200あたりから、ノイズも見えてくるが、目障りなものでなく、気にせず使える範囲。手ブレ補正機構も強力で、夜景の手持ちスナップが楽しくなるはずだ
AF速度	LUMIX GH4より採用の空間認識AFが秀逸で、無駄な動きを見せずにスパッと止まる。また、－4.0EVまで対応するローライトAFも完備。筆者は精度重視で部分拡大を確認できるピンポイントAFを多用している
デジタルフィルター	クリエイティブフィルターは22種類。どれも個性的で、思わず目移りする。パノラマ撮影時にも18種類のフィルターが選択可能だが、フィルターの化粧ばかりに惑わされ、写真の本質を忘れないように心がけたい

Sasaki's Check

項目	評価
デザイン	パナソニックのデジタルカメラは家電的だといわれることもあるが、そんな印象はあまり受けなかった。文字の色の濃さに変化をつけてある点がそういう印象につながっているように感じた。レンズの飛び出し方は少々気になるが、そのほかは好印象だ
質感	マット調の塗装がボディに触れたときに感じる金属の冷たい印象を和らげてくれるように思えた。手に持ったときもしっくりとなじむ。また、シャッタースピードダイヤルや露出補正ダイヤルの文字が少し彫り込んであるため、視認性も高い
操作感	背面のボタン数は多いが、しっかりとした感触があって、すべて右手の親指で操作できるようになっている。この操作感は好みでわかれるが、左手でボディを支えたまま操作できるのは安心感がある。ボタンの多さには慣れるしかないだろう
ファインダー	少しコントラストが高く、ぎらつきを感じる。撮影中の見栄えはきれいなのだが、元々コントラストが高い屋外などでは、はじめのうちは少し疲れてしまう
バッテリーの持ち	カタログスペックは約350枚（モニター時）／約320枚（LVF時）。今回は主に液晶モニターを使って約150枚程度撮影したがバッテリーの減りは感じなかった
解像力	開放絞りからシャープでF4～F5.6がピーク。F8までは回折現象の影響もほとんど感じられないが、F11から少しずつシャープネスが低下し、F16でかなり顕著に
ボケ	M4/3のセンサーで開放絞りがF1.7になるのは35mm判換算で24mm相当の広角端。この条件でボケを生かすには主要被写体に近づくなど条件が限られる
高感度画質	こちらのテストも少し暗い室内で行った。ISO 3200まではノイズも少なくディテールの消失もほとんど感じられない実用画質。ISO 6400でノイズ感が少し強くなり、ISO 12800からはかなりノイズを消している印象に。最高感度のISO 25600はコントラストが強くなる印象は少ないが、この感度はあくまでも緊急用だと感じた
AF速度	空間認識AF（静止画のみ）の効果もあってか、迷いも少なく動きも速い印象だ。AFエリア数も49点に増えた。ピンポイントAFの「PinP」が気に入った
デジタルフィルター	クリエイティブコントロールは22種類と最多。［インプレッシブアート］のようなデジタル的な変化が強い設定もあるが、［レトロ］や［ハイキー］［オールドデイズ］など、穏やかで写真的な変化が多い点も特徴。シャッターボタン横の「FILTER」ボタンですぐに機能を呼び出せるのも使いやすく、RAW＋JPEGの記録方式にも対応している。実写では［ポップ］でほどよく色を出した

10.9mm（24mm相当）／絞り優先AE（F1.7、1/60秒、±0EV）／ISO 640／WB:オート　昭和の街角を再現した商業施設で懐かしいコーラを見つけて思わず衝動買い。せっかくなので記念撮影した。近接することで大きなボケを生み出した

10.9mm（24mm相当）／クリエイティブコントロール（F2、1/125秒、±0EV）／ISO 200／WB：オート　クリエイティブコントロール［ポップ］で見た目と違う風景に出合うことができた。この「赤」がなければ撮らなかった

ライカレンズと多性能の両方を享受できる

ライカレンズを搭載しても、本家はかたくなにカメラとしての王道を貫き、こちらは顧客の要望にすべて応えた、至れり尽くせりの多彩さが光る。良い意味で家電メーカーらしい製品だ。例えると老舗の名店とファミリーレストランのようなものか。もちろん、ファミリーレストランでも、質の高さはキープされているのでご安心を。しかし残念ながら、現状は高級機らしい哲学に欠ける。ここが確立されれば、さらに強い製品に昇華していくはずだ。

そつなくまとまっているが強い個性はない

よくいえば無難なカメラで、それがパナソニックらしさなのかもしれない。操作系などもそつなくまとまっていて、一眼のマイクロフォーサーズのレンズラインアップにないレンズは魅力的だ。ポイントで触れたファインダーの見え方も慣れてしまえばそれほど気にならなくなるし、レンズについている絞りリングも動かしやすい。厳しい見方をすると特筆すべき部分が弱いように感じた。このジャンルのカメラに必要な「このカメラでなければいけない」。そんな主張があまり感じられなかった。

①**デザイン**　外観の佇まい、カメラとしてのかっこ良さ
②**質感**　金属や革などの素材の高級感、グリップ時のホールディングの良さ
③**操作性**　ダイヤルやリングなどのクリック感、メニューなどの使い勝手
④**ファインダー**　OVFやEVFの見えの良さ、表示の見やすさ
⑤**バッテリーの持ち**　CIPA基準のスペック、使用時の印象
⑥**解像力**　細かい要素の再現力、収差補正や逆光特性、実写時の印象
⑦**ボケ**　ボケのなめらかさ
⑧**高感度画質**　高感度ノイズの具合、実用域と思えるISO感度の目安
⑨**AF速度**　ピントの合いやすさ
⑩**デジタルフィルター**　フィルターの充実度、撮影設定の自由度

富士フイルム

X30

●発売日：2014年9月19日 ●実勢価格：64,600円前後

潜在能力の高さを多角的に探る

Sasaki's Check

7.1mm（28mm相当）／プログラムAE（F2、1/300秒、+1.0EV）／ ISO 100 ／ WB:オート　歩道に植えてあった花。花の種類がたくさんあったため、じっくり撮りながら一番きれいなこの花に狙いを絞った

28.4mm（112mm相当）／プログラムAE（F2.8、1/38秒、－0.3EV）／ ISO 100 ／ WB：オート　窓に映り込んだ歩道を歩く人を狙う。高速連写でタイミングを変えながら撮影すると、簡単にベストタイミングが決まった

デザイン

直線と面を生かしたモダンデザインというと良いとらえ方だが、筆者には最近の日本車にも多いガンダムデザインに思える。デザインは最終的には好みの問題だが、上質やエレガントという表現は当てはまらないように感じる

質感

金属製のレンズキャップは質感も高く、個人的には気に入った部分のひとつ。ボディの金属部分の質感が高いのも好印象だ。問題はボディ前面のラバーの質感。コスト面の問題もあるので強くはいえないが、もう少しなんとかならなかったのかと感じた

操作性

背面液晶モニターはチルト式で、マクロ機能専用のボタンがあり、スーパーマクロ機能も使いやすい。実写でもこのふたつの機能を使って撮影している。フォーカス枠を最小にすると、ピントも追い込みやすかった

ファインダー

ファインダーは少し小さめだが、レンズの光軸に近い位置に配置されているため扱いやすい。見え方もかなり自然でざらつきも気にならなかった。実際の撮影ではチルト式の背面液晶モニターが使いやすく、望遠端以外では液晶モニターを見ながら撮影することが多かった。望遠端は35mm 判換算で112mm 相当になり、ファインダーをのぞいたほうが安定して構えることができる

バッテリーの持ち

カタログスペックは約470枚。充電器は別売で、USBケーブル＋ACパワーアダプターを使った本体充電が標準となる。この仕様だと予備電池は充電器と一緒に購入することになり、敷居が高くなるが、バッテリー1個でも不安にはならなかった

解像力

開放絞りからシャープで細かい像の分離能力は高い。F4～F5.6がピークでF8から徐々に回折現象の影響を受けはじめ、F11ではかなり顕著になる

ボケ

マクロ（広角端の開放絞り）や連写（望遠端の開放絞り）の写真でもわかるようにボケの印象は素直で嫌みがない。ただし、印象を強めるためには、センサーサイズの関係から撮影条件が限られるので、あまり意識しすぎないほうが良い

高感度画質

こちらも少し暗い室内でテストしたが、ほかのカメラと比較すると少し厳しい結果になる。ISO 1600ぐらいからノイズを抑えた影響でディテールの消失を感じるようになり、ISO 6400からはノイズも増えはじめて気になってくる。最高感度のISO 12800ではノイズ、ディテールの消失がかなり強くなる。コンパクトカメラだと考えれば優秀な結果でも、今回の相手だと分が悪い

AF速度

実写は約12コマ/秒の高速連写からのひとコマ。秒12コマでは1枚目でAFが固定されるので、ピントが迷う心配がなく、タイミングに集中できる。ピント位置はディスプレイの文字。動画のコマから抜き出すような感覚でセレクトした

デジタルフィルター

ダイナミックな階調表現で幻想的な効果が楽しめるアドバンストフィルターの［ダイナミックトーン］。機能の呼び出しはモードダイヤルを［Filter］に合わせる。変更は［MENU］ボタンから行う。思い切りイメージを変えたいときには重宝する機能だ

7.1mm（28mm相当）／アドバンストフィルター（F2、1/500秒、－0.7EV）／ ISO 100 ／ WB：オート　見た目にはそれほど面白くない風景だったが、［ダイナミックトーン］の効果は絶大だった

X100シリーズと上手に差別化されている

この機種から光学ファインダーが省かれた。正面のイメージが変わったのではじめは少し戸惑ったが、撮影を開始すれば気にならない。今回は黒のボディを使ったため、画像で見ていたときよりも落ち着いた雰囲気があると感じた。スーパーマクロ機能というコンパクトデジタルカメラお約束の機能も搭載されている。富士フイルムにはX100シリーズがあるので、そちらのシリーズとの差別化という意味では良いキャラクター付けになっていると思えた。

新しく搭載されたEVFをチェック！

Momoi's Check

OVFの代わりに搭載された約236万ドットの高精細EVF「リアルタイム・ビューファインダー」が大きな特徴のX30。撮影時の使い勝手を左右する、この見え具合やタイムラグが気になるところだ。従来のX20から大きく変更された外観デザインや質感にも注目したい。

● 背面のボタンレイアウト

●**イメージセンサー**：2/3型 ●**有効画素数**：約1,200万画素 ●**レンズ構成**：9群11枚（非球面レンズ3枚） ●**焦点距離**：7.1～28.4mm（28～112mm相当） ●**開放絞り**：F2～2.8 ●**最小絞り**：F11 ●**最短撮影距離**：通常時：約0.5m、マクロ時：約0.1m、スーパーマクロ時：約0.01m ●**絞り羽根枚数**：7枚 ●**手ブレ補正機構**：搭載 ●**ISO感度**：ISO 100～12800 ●**オートフォーカス**：像面位相差AF、コントラストAF ●**シャッター速度**：最高1/4,000秒 ●**連続撮影速度**：最高約12コマ／秒 ●**フィルター**：フイルムシミュレーション（PROVIA／スタンダード、Velvia／ビビッド、ASTIA／ソフト、クラシッククローム、PRO Neg. Hi、PRO Neg. Std、モノクロほか　アドバンストフィルター（トイカメラ、ミニチュア、ポップカラー、ハイキー、ローキーほか） ●**液晶モニター**：3型約92万ドット ●**ファインダー**：0.39型約236万ドット、視野率約100% ●**Wi-Fi**：搭載 ●**撮影可能枚数**：約470枚 ●**大きさ（W×H×D）**：約118.7×71.6×60.3mm ●**重さ**：約423g

デザイン

一見、レトロ風のデザインだが、兄貴分のX100Tと趣向を変えて、張りを持たせたソリッド感をプラスしている。ボディをぐるりと取り巻くゴム風の素材は、手触りや滑りにくさに貢献してくれるが、筆者には高級感に欠けて見えて少し苦手だ

質感

先代から光学ファインダーを捨ててまでのリニューアル。X100Tとの差別化やコストの絡みもあると思うが、その代わりに、コントロールリングやチルト式液晶モニター、EVFで武装。液晶モニターが取って付けた風でいただけないが、全体的な作りは価格相応の質感はキープされていると思う（……前述の外装は除く）

操作性

初めて使うときは、電源スイッチを見つけるのに戸惑うかもしれない。ズームリング兼用のスイッチは、合理的だが最初は面食らう。コントロールリングの機能割り当ても豊富で、シャッターのレスポンスも気持ちよく楽しめる。USB充電に対応し、スマートフォンなどで使う携帯電源が使えるのはありがたい

ファインダー

光学ファインダー廃止の代わりに視野率は100%に。フイルムシミュレーションなどの確認がファインダーで可能となった恩恵も大きい。タイムラグも少なくコントラストもあり、見やすいものだ

バッテリーの持ち

撮影可能枚数は約470枚。ハイピッチで撮影しても、残量をほとんど気にせず楽しめる。前述のとおりバッテリーはUSB充電が基本のため、パッケージに同梱されるのはACからUSBへの変換プラグとケーブルのみで電池充電器は同梱されない

解像力

35mm判換算28～112mm相当のズームレンズを搭載する。チルト式液晶モニターを活用した表現を楽しみたい。広角側のごく周辺部は若干弱いものの、望遠側は四隅までしっかり描かれて満足できる。ただし、2/3型のイメージセンサーのため、強豪がそろうほかの4台と真っ向から比べるのは少し酷か

ボケ

開放F値F2～2.8の大口径ズームレンズだが、焦点距離やセンサーサイズの兼ね合いで、ボケを多用するのはあまり得意としない。それでも近接撮影ではそれなりにぼけてくるのでうまく付き合いたい

高感度画質

今回の5台の中で、最も小さな2/3型センサーを採用。ガチンコ勝負では苦戦を強いられるが、ISO 800程度までなら大丈夫。超高感度域を多用しなければ、特に気にする必要もないだろう

AF速度

AF速度のみならず、起動から撮影までの一連の操作が快速なのが印象的。ズームも電動でない代わりに、手動でスパッと決めて即レリーズ。思わず笑みが溢れる。このせっかちな筆者が言うのだから間違いなし

デジタルフィルター

アドバンストフィルターと呼ばれる、いわゆるエフェクト機能も搭載するが、［クラシッククローム］を新設したフイルムシミュレーションが優秀。感材メーカーらしいアプローチで、ベテランユーザーの心をつかんで離さない

19mm（38mm相当）／プログラムAE（F2.5、1/850秒、－0.3EV）／ ISO 250 ／ WB:オート　ぼかすのは得意でなくても、開放絞りで近接、さらに背景の距離を離せば、これくらいはOK。ねこじゃらしの描写も上々だ。チルト式液晶モニターでローアングル撮影もラク

7.1mm（28mm相当）／プログラムAE（F5.7、1/800秒、－0.7EV）／ ISO 100 ／ WB：オート　新設の［クラシッククローム］は原色の色味を抑えた渋目の色調。南国の海も落ち着いた美しさを印象づけられる

ファン心理を理解する使って楽しいカメラ

まず、今回の5機種で並べれば、センサーサイズから画質面は若干不利な形勢となったが、同等機と比較すれば、階調再現も豊かで優秀な製品であることを述べておく。とにかく小気味良く思いどおりに動くのが本機の魅力。あえてマニュアルズームで操作を楽しませるあたりも、ファンの気持ちをよく分かっている。基本性能に加え、アングルを選ばない可動式液晶モニターやEVFも完備。ファミリーユースからスナップシューターまでカバーできる実力派だ。

①**デザイン**　外観の佇まい、カメラとしてのかっこ良さ
②**質感**　金属や革などの素材の高級感、グリップ時のホールディングの良さ
③**操作性**　ダイヤルやリングなどのクリック感、メニューなどの使い勝手
④**ファインダー**　OVFやEVFの見えの良さ、表示の見やすさ
⑤**バッテリーの持ち**　CIPA基準のスペック、使用時の印象
⑥**解像力**　細かい要素の再現力、収差補正や逆光特性、実写時の印象
⑦**ボケ**　ボケのなめらかさ
⑧**高感度画質**　高感度ノイズの具合、実用域と思えるISO感度の目安
⑨**AF速度**　ピントの合いやすさ
⑩**デジタルフィルター**　フィルターの充実度、撮影設定の自由度

ソニー

RX100Ⅲ

●発売日：2014年5月30日 ●実勢価格：95,000円前後

デザイン	RX100は3世代に渡るロングセラー。初代からは細部の変更だけで現在に至るが、レトロモダンでスマートな現代風デザインだ。先代はホットシュー採用でトップカバーに段差があったが、本機ではフラットに。これも美しさを追求してのことだ
質感	アルミを基調としたボディは曲線と直線を巧みに利用したもの。高品位な表面処理など、見た目だけでなく、指先から伝わる触感でも、所有欲を満たしてくれる。コントロールリングも小さいながら、動きはスムーズだ
操作性	5機種中、群を抜いてコンパクトなボディなのに操作は快適。ただし、高頻度に設定を変えたいにもかかわらず、メニューやファンクションから、それなりに操作しないとたどり着けないことも多い（写真右下）。多機能ゆえ仕方ないところだが、ファンクションやコントロールリングの設定などをうまくチューニングしたい

ファインダー	外付けオプションだったEVFも、本機では内蔵タイプに変更。側面のスライドスイッチは小ぶりだが、ポップアップと同時に電源も入る手の込みよう。画像はやや小さめだが、再現は美しい。電源が自動で入ると紹介したが、収納時には電源オフにも連動。ただし、こちらは液晶モニターに切り替えたいだけのときも多く、撮影意欲が削がれてしまう点が残念だ
バッテリーの持ち	ボディに準じて、バッテリーも小さめ。本機の性格上、ガンガン撮ることはあまりないと思うが、攻めて使うとそれなりのペースで減少する。それでもスマートフォン同様のマイクロUSB端子で、USB充電できるのが救いとなるか
解像力	従来機よりも望遠側を30mm捨てて、広角側を24mmにシフト。同時にさらなる高画質と望遠時のF値変動を減らした。描写力も確実にアップしており、望遠や近接なども安心して使える
ボケ	センサーサイズと焦点距離の関係から、もともとぼかすのは得意ではないが、セオリーどおりに行えば、近接や望遠撮影ではそれなりに楽しめる。NDフィルターも内蔵。オートでも作動する芸の細かさで、屋外でも多用できる
高感度画質	ソニー機の得意とする超高感度撮影だが、通常ISO感度撮影はもちろん、連写してノイズを取り除く、マルチショットノイズリダクションを利用すれば、さらに美しいが画像が得られる。夜のスナップも気軽に楽しめる実力派だ
AF速度	ほとんどのシーンで遅い、速いを感じる間もなく、スムーズに合焦するが、5台を横並びで試用したとき、暗いシーンでわずかに遅れが見られるときがあった。それでもストレスを感じるほどではないので参考程度にとどめたい
デジタルフィルター	13種類ものピクチャーエフェクトを搭載し、さらに専用サイトからアプリをダウンロードすれば、すべての内容を覚えられないほどの数から選べる。ただし、RAWデータで撮れないのが玉にキズ

11mm（30mm相当）／絞り優先AE（F2.5、1/1,250秒、±0EV）／ISO 125／WB:オート テーブル上でチルト式液晶モニターを使えば、いつもと違うアングルが発見できるかも。自分撮りにも対応する芸の細かさだ

25.7mm（超解像ズームで140mm相当）／プログラムAE（F4、1/160秒、±0EV）／ISO 125／WB：太陽光 望遠側が70mmの光学ズームも、2倍の超解像ズームを併用すれば、140mm相当まで延長可能。画質劣化もさほど気にならない

極限まで小型化を追求した小さな実力派

キープコンセプトはそのまま、外観変更も最小限度で3代目まで成長した小さな実力派。本機の登場でソニーの高級機への見方が変わった人も多いことだろう。毎日手にして持ち歩くには、なにかと荷物が多い人はこのあたりが限界。レンズの出っ張りも少なく、携行するにはピッタリだ。やむをえない片手撮影や自分撮りでは指のかかりが心配なときもあるが、そんなときにはアクセサリーにグリップも用意されている。完成度の高さゆえ、次の一手も気になるところだ。

コンパクトボディに高性能を凝縮するというコンセプトが人気のシリーズ。3代目のRX100Ⅲはポップアップ式EVFを備えてさらに魅力がアップ。その視認性は大注目。1型センサーの画質やさまざまな機能に割り当てられるコントロールリングの操作性なども検証したい。

● 背面のボタンレイアウト

●**イメージセンサー**：1型 ●**有効画素数**：約2,010万画素 ●**レンズ構成**：9群10枚（AAレンズを3枚含む非球面レンズ9枚） ●**焦点距離**：8.8～25.7mm（24～70mm） ●**開放絞り**：F1.8～2.8 ●**最小絞り**：F11 ●**最短撮影距離**：約0.05m ●**絞り羽根枚数**：7枚 ●**手ブレ補正機構**：搭載 ●**ISO感度**：ISO125～12800（拡張でISO 80） ●**オートフォーカス**：コントラストAF ●**シャッター速度**：最高1/2,000秒 ●**連続撮影速度**：速度優先連続撮影時：最高約10コマ／秒、連続撮影時：最高約2.9コマ／秒 ●**フィルター**：ピクチャーエフェクト（トイカメラ、ポップカラー、ポスタリゼーション、レトロフォト、ソフトハイキー、パートカラー、ハイコントラストモノクロ、ソフトフォーカス、絵画調HDR、リッチトーンモノクロ、ミニチュア、水彩画調、イラスト調） ●**液晶モニター**：3型約123万ドット ●**ファインダー**：0.39型約144万ドット、視野率約100% ●**Wi-Fi**：搭載 ●**撮影可能枚数**：約320枚 ●**大きさ（W×H×D）**：約101.6×58.1×41mm ●**重さ**：約290g

デザイン	直線と曲線がうまく組み合わされていて、表面の凹凸も少ない。コンパクトでありながら、さりげない存在感を感じるので個人的には好きなデザインだ。手に持ったときもフラットなボディの割にはしっくりとなじむ感じがある
質感	内蔵フラッシュの飛び出しもすばやく、ブレーキもきちんと効いている。ボタンやダイヤルなどにはほどよいトルク感がある。カメラの質感は、アナログ的な操作感によるところも多いため、小さくなればなるだけ難しくなるものだがさすがだ
操作性	収納しているときは固定式と見間違うほどの一体感で、使うときは滑らかに動くチルト式の背面液晶モニターの操作感は秀逸。自分撮りが可能な可動範囲がありながら質感も高い。全メーカーに見習ってほしいと感じる部分だ
ファインダー	見た目は小さく頼りないが、のぞくと案外使いやすい。ファインダーを引き出すと、カメラの電源が入る点はうれしいのだが、収納すると電源が切れる点はいただけない。このサイズで扱いやすさも悪くないため、この点だけは改善してほしい
バッテリーの持ち	カタログスペックは約230枚（ファインダー使用時）と約320枚（液晶モニター使用時）。充電はUSBケーブルを使った本体充電を採用。アクセサリーキットは充電池とバッテリーチャージャーがセットになっている。しっかり撮ると予備電池があったほうが良いと感じるのでこのセットはお得だ
解像力	開放絞り（F1.8）から像の分離はしっかりとしており、F4～F5.6でピークになる。F8ぐらいから少しずつ回折現象の影響を受けはじめるが、ディスプレイの等倍拡大などで気になる範囲。プリントなどの鑑賞サイズになれば、最小絞りのF11でもそれほど気にならないはずだ。これも最新の画像処理技術のすごさだ
ボケ	ボケは自然で嫌みがなく、広角端のワーキングディスタンスはわずか5cmだ。被写体間の距離の差を大きくしやすいため、ボケには有利（望遠端のワーキングディスタンスは約30cm）。コンパクトで扱いやすいのでボケを意識しすぎないほうがいい
高感度画質	ほかのカメラと同様のチェックを行った。ISO 1600ぐらいからノイズ処理の影響でディテールの消失が感じられる。実写はISO 3200。ディスプレイの等倍拡大では、ディテールの消失を感じるので、ちょっと厳しいようにも思うが、鑑賞サイズ程度なら問題ないだろう
AF速度	フォーカスエリアを［ワイド］にしておけば、25点のフォーカスエリアから必要な場所をカメラが自動で選択してくれて合焦も速い。［フレキシブルスポット］でピント位置を選ぶこともできるが、気軽に撮れる［ワイド］がこのカメラには合っている
デジタルフィルター	ピクチャーエフェクトの種類は13種類と無難な数。［ポスタリゼーション］や［イラスト調］（作例はこの2つ）、［絵画調HDR］など、デジタルらしい処理のフィルターも多い。さらに「PlayMemories Camera Apps（有料、一部無料）」からダウンロードもできる。無料のピクチャーエフェクト＋から試してみるのもいい

8.8mm（24mm相当）／プログラムAE（F2.8、1/80秒、±0EV）／ISO 3200／WB：電球 夜の商業施設前の風景。手持ちで気軽に撮影できるのがこのカメラらしいと感じた。WBは［電球］を利用して青味を強調した

8.8mm（24mm相当）／ピクチャーエフェクト（F2.8、1/30秒、±0EV）／ISO 320／WB：オート ヨーロッパの街並みを再現した商業施設の中。［ポスタリゼーション］を使えば、ひと味違った表現を楽しめる

8.8mm（24mm相当）／ピクチャーエフェクト（F1.8、1/30秒、±0EV）／ISO 200／WB：オート 昭和の街を再現した商業施設の中。店の造形と［イラスト調］の相性が良いと感じて撮影した

作り込みやサイズ感はさすがのソニー

製品サイズやしっかりとした作り込みは、実にソニーらしい製品だと思う。カフェやバーなどでさりげなく見せびらかしたくなるカメラだ。個人的には撮影をはじめると、ちょっと盛り上がらなくなることもあったが、これはソニー製のカメラの操作に慣れていないのが主な原因だろう。撮影中は設定などを頻繁に変えるわけではないのだが、ここぞというときにテンションが下がる。持ち歩きたいカメラの筆頭ではあるが、撮りたいカメラという視点に立つとややポイントがダウンする。

①デザイン 外観の佇まい、カメラとしてのかっこ良さ
②質感 金属や革などの素材の高級感、グリップ時のホールディングの良さ
③操作性 ダイヤルやリングなどのクリック感、メニューなどの使い勝手
④ファインダー OVFやEVFの見えの良さ、表示の見やすさ
⑤バッテリーの持ち CIPA基準のスペック、使用時の印象
⑥解像力 細かい要素の再現力、収差補正や逆光特性、実写時の印象
⑦ボケ ボケのなめらかさ
⑧高感度画質 高感度ノイズの具合、実用域と思えるISO感度の目安
⑨AF速度 ピントの合いやすさ
⑩デジタルフィルター フィルターの充実度、撮影設定の自由度

Nikon D810
×
八幡平

静寂なる秋日

萩原俊哉 TOSHIYA HAGIHARA

松尾八幡平

はじめてこの場所を訪ねたのは15年ほど前。それ以来、この斜面の彩りの美しさに魅了され、足しげく通うことになった松尾八幡平の紅葉だ。フラットな光を期待したのだが朝の斜光も悪くはない。以前は広々とした展望で視界も良かったのだが、ずいぶんと手前の木々が成長して撮影ポジションも限られてきている。いつまでも変わらない美しさでいてほしいと願うばかりだ

ニコン D810 ／ AF-S NIKKOR 70-200mm f/2.8G ED VR II ／ 8mm ／ 絞り優先AE（F11、1/8秒、±0EV）／ ISO 100 ／ WB：晴天

大谷地

今回の撮影の最終日は天候にかかわらず長沼に行こうと決めていた。この大谷地はその途中にある湿原だ。湿原の歩道を進むと左手にシラカバが見えてくる。どうやら今年はすでに葉を落としたようだが、湿原に佇む白い姿がとても美しく思えたのでレンズを向けることにした。めまぐるしく変わる光線を楽しみつつシャッターを切った　ニコン D810／AF-S NIKKOR 70-200mm f/2.8G ED VR II／150mm／絞り優先ＡＥ（F11、1/1,000秒、+0.3EV）／ISO 100／ＷＢ：晴天

曽利の滝

朝から山頂付近は濃い霧と強風のため、まるで撮影にならない。そこでいったんアスピーテラインを離脱して玉川温泉方向に向かう。お目当ては曽利の滝だ。定番のポジションでしばらく撮影した後、到着間際に見かけた木々の合間から滝が見え隠れしていたことを思いだして撮影したもの。こういうアングルも悪くない　ニコン D810／AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8G ED／32mm／絞り優先ＡＥ（F16、1秒、−0.7EV）／ISO 64／ＷＢ：晴天

熊沼　幾度となく通う道から俯瞰できる熊沼。夕照を期待してここで待機するのは今回の撮影では2度目だ。夕陽が次第に沈み始め、それまで水面に当たっていた光が逃げてゆくのに呼応して、背景の山並みに夕照が差し込んできた。前景のダケカンバの光も心地良い。最終日にふさわしい、ダイナミックな夕景に出合えた
ニコン D810　AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8G ED　2 mm　絞り優先AE（F11、1/15秒、－1.0EV）　ISO 100　WB：太陽光

第18回

長良川鉄道（岐阜県）

ながらがわてつどう

今回は長良川鉄道。その名のとおり、長良川流域を走る鉄道。長良川を何度も渡り、紅葉の季節は色づいた山をバックに美しい風景が望める。色も光も美しいこの季節に中井さんが訪れた。　イラスト：阿部伸二（カレラ）

ニコンD750／AF-S NIKKOR 70-200mm f/4G ED VR／145mm／絞り優先AE（F13、1/3,200秒、－1.3EV）／ISO 400／WB：晴天日陰／赤池～美並苅安／午後４時

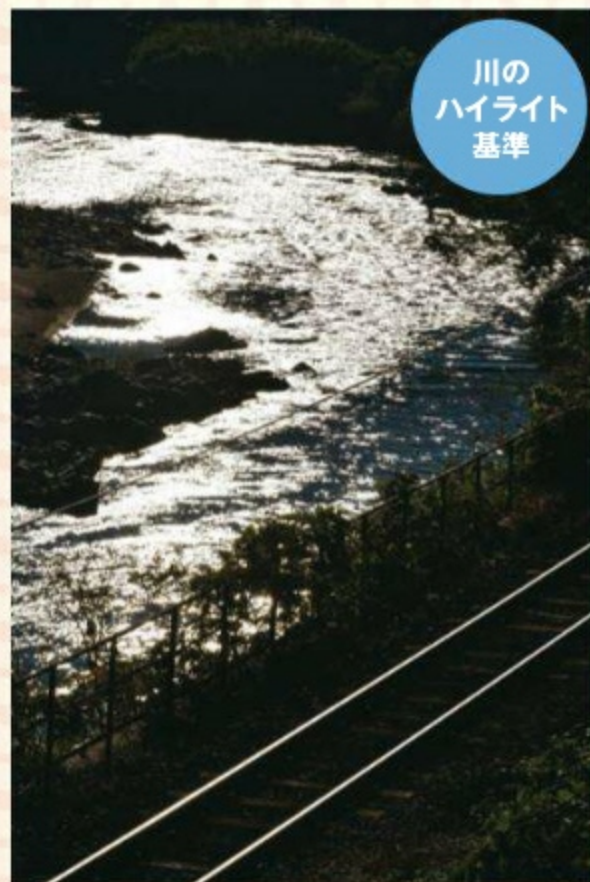
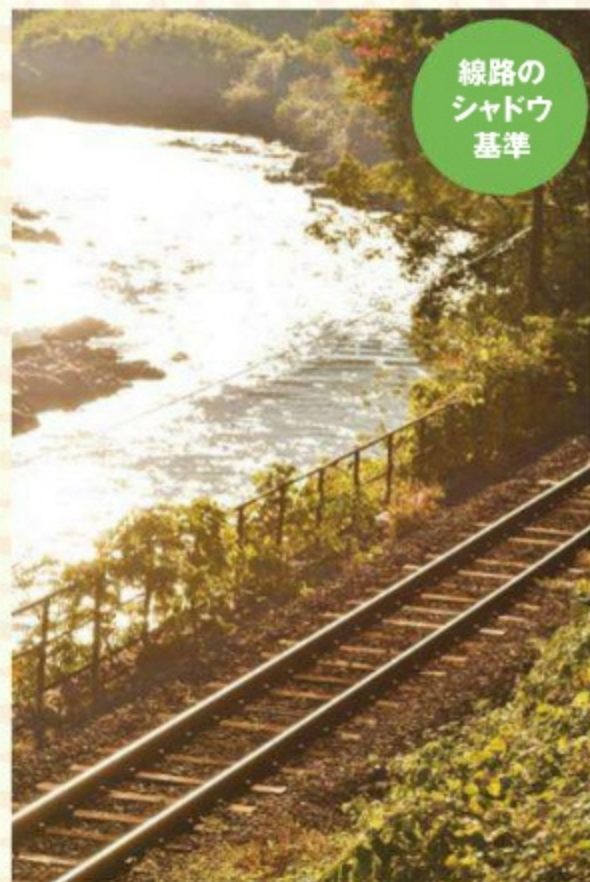
太陽が山の端に隠れる刹那、川面はいっそう鮮やかに輝いた。感動の瞬間

長良川鉄道のホームページはこちら
▶ http://www.nagatetsu.co.jp/

長良川鉄道越美南線は高山本線の美濃太田駅から北濃駅に至る72.1kmの第三セクター路線。国鉄時代は同じく越美南線という名称の赤字路線で、福井県を走る越美北線とつなげて、越美線になる壮大な計画がありましたが、全通は果たせず1986年に廃止され、第三セクター鉄道として生まれ変わりました。沿線には名水が湧く城下町であり、郡上おどりで有名な郡上八幡や、「うだつ」のあがる町並みで知られる美濃市などがあります。

美濃太田から美濃市にかけては、田園の風景の中に新興住宅が点在する市街地を走りますが、美濃市から北濃にかけての区間は、その名のとおり長良川に沿って走る区間が多く、車窓からも長良川の清流を眺めることができます。その風景を堪能したい人におすすめなのが、1日に１往復で運転される「ゆら～り眺めて清流列車」。車両は通常の列車と同じですが、女性アテンダントが乗車し、沿線の見どころを解説してくれるほか、景色のいい湯の洞温泉口から郡上八幡にかけての景勝ポイントでは徐行運転をしてくれます。

ニコンD750／AF-S NIKKOR 24-120mm f/4G ED VR／70mm／絞り優先AE（F4、1/1,600秒、－0.3EV）／ISO 200／WB：晴天日陰／関富岡～関口／午後４時　**休耕田を飾るコスモスに、秋を実感。列車の色も、まるで花とコーディネートしたかのよう**

清廉な長良川の流れを味わうように、列車はゆっくりと進んでゆく。

ニコンD4／AF-S NIKKOR 14-24mm f/2.8G ED／18mm／マニュアル露出（F4.8、1/15秒）／ISO 1600／WB：晴天日陰／郡上八幡駅前／午後８時　**郡上おどりで有名な郡上八幡。お盆のころになると、駅も踊りの会場になる**

ゆる鉄をゆる〜く撮る

ゆる鉄レシピ

川の輝きを使った2つの表現

この2枚は同じ時間に写した作品ですが、その雰囲気は大きく違います。右側は線路の部分をメインとしたシャドウ基準で撮影したので、ハイキーで爽やかな雰囲気になっています。左側は川面のハイライトを基準にすることで、ローキーでシャープな雰囲気に仕上げました。このように同じ風景でも、自分の意図に合わせて露出の基準となる被写体を変えれば、まったく違う雰囲気の作品を生み出すことができます。大胆に露出補正をしながら、理想の明るさを追求しましょう。

川のハイライト基準

線路のシャドウ基準

ニコンD750 ／ AF-S NIKKOR 16-35mm f/4G ED VR ／ 22mm ／マニュアル露出（F4 、1/1,600秒） ／ ISO 320 ／ WB：晴天／郡上八幡〜自然園前／午前11時
清廉な流れを強調したくて、水しぶきが立つ場所を選んで、ローアングルで撮影

中井精也（なかいせいや）：1967年東京都生まれ。2004年春から毎日1枚必ず鉄道写真を撮影するブログ「1日1鉄!」を継続中。広告、雑誌写真の撮影のほか、講演やテレビ出演など幅広く活動している。株式会社フォート ナカイ代表。著書に『世界一わかりやすいデジタル一眼レフカメラと写真の教科書』（インプレス）がある。http://railman.cocolog-nifty.com/

郡上八幡で偶然出会った子どもたち。車庫では、はじめての体験にみんなの笑顔がはじけた

みんなの笑顔が、この鉄道を支えている。

長良川鉄道を撮影するとき、僕がメインのテーマにしたのは、やはり長良川でした。とはいえ、ただ川の絶景と列車を撮影しても面白くないので、もう少し狙いを絞ってみます。まずは清流を連想させる水しぶきをメインにしたのが、左ページの作品。D750はチルト式の背面モニターを採用しているので、こんなローアングルの撮影時にとっても便利です。ただし河原からだと画面手前を水しぶきにするのは難しいので、靴を脱いで川に入って撮影しました。撮影時は10月とは思えない暑さでしたが、川の水は強烈に冷たかった〜! でも臨場感のある作品が撮れたので、良しとしましょう。続いての作品は96ページの作品。これは夕日が山の端に沈むギリギリの時間に、川面のキラキラとした光をメインの被写体にして撮影しました。このときは川面のハイライトを基準としてローキーにしますが、シルエットのように列車が浮かび上がるシーンでないと、シャドウ部にある列車は闇にとけ込んでしまいます。でもこのシーンでは強烈な斜光を受けて列車の屋根が光り、列車の存在感が失われないと判断。思い切ってローキーで撮影しました。なかなかドラマチックでしょ?

長良川の撮影を堪能して、郡上八幡駅で偶然出会ったのが、列車に乗って車庫見学に行くという小学生の一団。さぞや鉄道が好きな男子が多いのかと思いきや、なんと全員女の子。でもとっても楽しそうに、汽車旅を楽しんでいました。ここで会ったのも何かの縁。せっかくなので車庫見学まで同行させてもらいました。1時間ほど乗車した関駅の車庫で見学するのは、列車を洗ったり、ポイントを切り替えたりという通常の作業ですが、子どもたちにとってはまるでテーマパークのようにワンダーな体験。笑顔がキラキラと輝く、とっても素敵なイベントになりました 。これは沿線市町村が予算を持ち、沿線の学校の子どもたちに乗車体験してもらおうという試み。鉄道の旅を楽しみながら、公共の場でのマナーを学び、しかも鉄道の収入にもなるので一石二鳥! そして何より、こうして鉄道と親しむことで、鉄道を身近に感じ、自分たちに必要な乗り物であることが心に刻まれることが、大切なことだと感じました。

自然の美しさと、子どもたちの笑顔に癒される、撮影になりました。

今回の機材

今回の機材は、ニコンD750と小三元ズーム。長良川の撮影では、FXフォーマット初となる、チルト式液晶モニターが威力を発揮。小型軽量でワンダーな作品を生み出してくれました

ゆるみやげ

今回のゆる土産は長鉄オリジナルの「ブレーキハンドルストラップ」。とってもかわいいミニチュアハンドルを携帯電話につけて、さりげなく鉄道好きを主張しましょう。抽選で4名さまにプレゼント

「ゆるみやげ」はデジタルカメラマガジンのプレゼントページ（http://ganref.jp/magazine/dcm/howto/）よりご応募できます。

photo essay 米 美知子 from season to season
風と木と水が教えてくれたこと

〈P.100〉キヤノン EOS 6D ／ EF24-70mm F4L IS USM ／ 70mm ／マニュアル露出（F16 、1/60秒）／ ISO 800 ／ WB：太陽光
干潮で浮かび上がった干潟模様に、オレンジの輝きが入る時間はそれほど長くない。ゴーストに注意しながら立ち位置を決定し、目の前の美しい光景を撮影した
〈P.102〉キヤノン EOS 6D ／ EF16-35mm F2.8L II USM ／ 16mm ／マニュアル露出（F16 、1/125秒）／ ISO 800 ／ WB：太陽光
平尾台のキス岩にやっと太陽の光が入った。あまり近くに寄るとキスしている二人（石）に失礼なので（笑）、少し離れた所から手前の岩も入れて撮影した
〈P.103〉キヤノン EOS 6D ／ EF70-200mm F2.8L IS II USM ／ 70mm ／マニュアル露出（F16 、5秒）／ ISO 200 ／ WB：太陽光
菊池渓谷のロケが終わり車に戻る途中、岩かげで黄葉がクルクルと回っていた。ISOを200に下げ、流れに身を任せた落ち葉の軌跡を渦にして表現した

奇岩の造形や夕日に輝く干潟模様
そして、ひと気のない渓谷では黄葉が楽しそうに舞っていた。

第十八回

晩秋から初冬へ 九州北部テレビロケの旅

平尾台	……… 福岡県北九州市小倉南区平尾台
真玉海岸	…… 大分県豊後高田市臼野
大観峰	……… 熊本県阿蘇市山田
菊池渓谷	…… 熊本県菊池市原深葉
御輿来海岸	… 熊本県宇土市下網田町

昨年の12月初め、テレビ番組のロケのために福岡、大分、熊本の3県を回った。ロケは一泊二日と決まっていたのでいかに効率良く、そしてこの時期の九州の魅力を伝えられる場所選びに神経を使った。ロケのメインにしたかったのが、真玉海岸と御輿来海岸の夕日に輝く干潟模様だったので、潮見表と日の入りの時間を入念にチェックしてロケ日を決定。あとは天気しだいだったが、それは気を揉んでも仕方ないので運を天に任せて、雨でも撮れる場所も計画に入れながら九州に飛んだ。

番組を観て頂いた方はお分かりだと思うが、初日は晴れているものの雲が多く、平尾台では青空バックにカルスト台地を撮りたかったので、雲が切れるのを待ちながらの撮影となった。フレーミングを決めてもなかなか光が当たらず、テレビ収録という限られた時間の中では内心ヒヤヒヤしていた。光と雲に翻弄されながらの撮影だったが、それでも何とか爽やかな初冬のカルスト台地を表現することができた。そして真玉海岸の夕日の時間に間に合うように急いで移動。途中、市街地を通るので交通量が多く、海岸に着いた時にはすでに撮影時間になっていた。ロケバスを飛び出して海岸を右往左往し、太陽の位置と干潟模様の美しい部分を考慮しながら立ち位置を決めて撮影を始めた。このロケに同行したスタッフが、私の撮影する姿をカメラで撮ってくれていたのだが、オレンジに染まる干潟模様の美しい光景を目にした彼は、私ではなくこの夕景を夢中で撮影していたため、この時の私を撮影したカットは極端に少なかった（笑）。やがて太陽も沈み、17時半頃この日のロケは終了。また急いで車に乗り込み、阿蘇の宿に着いたのは20時を回っていた。

翌早朝は大観峰で夜明けを狙ったが雲海は出ず、あまり良い状況ではなかった。その後、ひっそりとした晩秋の菊池渓谷に入り、水面でクルクル回る落ち葉の舞いなどを撮影。夏の光芒で有名な渓谷だが、サクサクと落葉を踏みしめながらゆっくりと散策するのもなかなかいいものだった。そして最後に御輿来海岸を撮影して一泊二日の強行ロケは無事に終了した。

2日間とも夕日に輝く干潟が撮れたのは、ラッキーとしか言いようがない。撮影に関してはよく「引きが強い」とか「持っている」と言われるが「やっぱり私は運が良いのかもしれない」と、帰りの飛行機でウトウトしながら思った。

米 美知子（よねみちこ）：1967年東京都生まれ。アマチュア時代には全国規模コンテストで数々の賞を受賞。「夢のある表情豊かな作品」をテーマに日本の森と色彩美を撮り続けている。写真集「森に流れる時間」（文一総合出版）など著書多数

キヤノン EOS 6D ／ EF28mm F1.8 USM ／ 28mm ／絞り優先AE（F1.8 、1/160秒、－1.0EV） ／ ISO 800 ／ WB：太陽光
太陽が落ち、ほのかに赤い光が残る時間に撮影を行った。台風が過ぎたこの日は風が強く、髪が揺れて表情が出る。人物に寄ることで広角でも十分背景をぼかすことができ、立体感のある仕上がりになった

いつもと違う写真が撮れる

第18回｜レンズの絵作りを学ぶ

広角レンズの構図づくり

今回から2回にわたり、レンズによるフレーミングのコツを学んでいく。前半はレンズ全般と広角レンズについて、後半は望遠レンズとマクロレンズについて解説していく。レンズはその効果で選びがちだが、フレーミングそのものが変わるため、構図を決める上での基盤として選びたい。大和田 良さん流のレンズワークを教えていただこう。

レポート：大和田 良　構成：山崎理佳

大和田 良（おおわだりょう）：2005年、スイスのエリゼ美術館による「明日の有望写真家50人」に選出され、以降国内外で作品を発表。写真集に「prism」（青幻社）、「ノーツ オン フォトグラフィー」（リブロアルテ）、「FORM」（深水社）など

知っておきたい今月の構図TOPICS

1 広い画角を生かし、月を点景として取り入れる

28mmの画角は標準レンズに比べて背景を広くフレーミングすることができる。夕暮れのシーンでは空に浮かぶ月を点景に用いることができた

2 ナナメ構図で画面に流れを作る

ナナメの構図を用いて画面に動きと伸びやかさを出した。風に揺れる髪の動きも合わさり、画面に流れが見えるようになる

3 人物を中心に配置して表情に視線を誘導する

人物を中心にとらえて余計な表現を抑える構図にすることで、人物の表情に注目させることができる。また、四方に空間が広がることで画面が伸びやかになる

**最短撮影距離で撮影し
広角レンズでボケを作る**

24mmのレンズを用い、最短撮影距離で撮影を行った。広角レンズを使った場合でも、近い距離で撮影することで大きなボケを使うことができ。また狭い場所でも広がりのある背景を得ることが可能だ

**空間を大きく設けることで
被写体との調和を図る**

逆光のシルエットを生かすために－2.0EVの露出補正をして撮影した。犬の身体が真っすぐに見えるようにカメラを傾けている。また画面左に大きく空間を設けることで、画面右側の被写体と左の風景との調和を感じさせることができる

レンズは表現効果よりも画角の特徴を考える

基準になる焦点距離を決めてその画角に慣れる

レンズの画角は、前回の連載で解説した「フレーミング」を考える上で大きな役割を果たしている。写し取れる範囲が変わるため、同じ撮影位置から適したフレーミングを得るためには、レンズの画角を調整する必要があるからだ。例えば、狭い室内で広い範囲を撮るためには広角レンズが必要になり、遠くにあるものを大きく写すには望遠レンズが必要になる。広角レンズで強いパースを得たり、望遠レンズで圧縮効果を利用するなど、レンズの選択によって得られる表現も変わってくるが、まずはこの**「写すことのできる範囲」を意識して、適した画角を得られる焦点距離を持ったレンズを選択することが肝要になる。**

それぞれのレンズについて見ていこう。まず標準レンズとは、焦点距離が画面の対角線長に近いレンズ（画角で見るとおよそ40～55度程度）を指し、一般的には人間の見た目に近い画角を持ったレンズとされている。フルサイズの場合、対角線長はおよそ43mmになるため、焦点距離50mmのレンズは写る範囲がやや狭い標準レンズ、35mmのレンズはやや広めに写る標準レンズという具合に分けられているようだ。**感覚的には何かをじっと凝視したときの画角は50mmが近く、ぼんやりと広く見ているときは35mmの画角が近い。**これに対し広角レンズは、画角が60度以上のレンズになる。焦点距離で言うと28mmあたりからが広角レンズと呼ばれている（35mmまではほぼ広角に入るのだが、広角レンズのカテゴリーには入らないことが多い）。反対に、望遠レンズは標準レンズに比べて写る画角が狭いものを指す。

レンズの種類によってさまざまな画角があるが、まずは**自分の目の基準となる焦点距離を1つ決めて、その画角に慣れるのが良い**だろう。例えば、私の場合は50mmの画角を目が覚えているため、どのようなフレーミングが行えるのか、どの程度まで入るのかといったことを、50mmの画角を基準の尺度として考えている。

今回は広角レンズを中心に、フレーミングや構図のコツを考えてみたいと思う。使いやすく、広角らしさが現れるのは24mmや20mmといった画角だ。伸びやかな対角線や広く小さく写る特性を生かすには、どのようにフレーミングしていけば良いのか。また、広角レンズは広い範囲が写るため、意識しないと散漫な絵作りになりがちだ。これらの特徴を考慮しながら、広角レンズの良さを最大限に生かすフレーミングを考えていきたいと思う。

伸びやかさを生かす **STEP 1**

広角レンズで画面に入るものを整理する

［28mmで撮影］

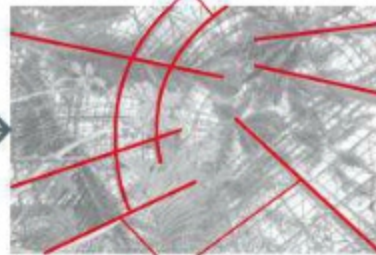
ドームの曲線を入れる

放射状に伸びる木々のラインを生かす

ニコン D800E ／ AF-S NIKKOR 20mm f/1.8G ED ／ 20mm ／絞り優先AE（F4、1/125秒、±0EV）／ ISO 100 ／ WB：オート　**建物が描く線と植物の緑の調和を考え、リズムのある絵作りを目指した。四方からの木が描くナナメの線と建物の曲線を生かすためにカメラに角度をつけ、高さや広さが出る構図を見つけた**

木々の伸びやかさとドームの骨組みを考える

ダイナミックさを感じさせるには、画面全体の調和が重要となる。このシーンでは四方から伸びる木々をどのような位置で切り取るか、ドームの骨組みが作るリズムをどう生かすかを考えた

［50mmで撮影］

同じシーンで50mmを用いた作例。適切な構図を得るために角度を変えて画面周辺に抜けが無いように調整している。風景全体というよりは中心の木が主題となっているのが感じられるだろう

広い範囲を切り取ることで画面全体の調和を図る

広角レンズの大きな特徴の1つは被写体がより小さく写り、広い範囲をとらえられることだ。伸びやかさが感じられるダイナミックな表現ができる。広角レンズで風景を撮影すると、標準や望遠に比べて特定の被写体を強調することは難しいが、画面全体の調和や広がりを感じさせることができる。

広がりのある空間を作る **STEP 2**

光と影を意識してナナメの線を入れる

ニコン D800E ／ AF-S NIKKOR 24mm f/1.4G ED ／ 24mm ／絞り優先AE（F2.8、1/2,000秒、±0EV）／ ISO 100 ／ WB：オート　**台風が過ぎた後の強烈な光によるコントラストが印象的だ。遠景まで霞むことなくシャープに描かれ、空の深い青が再現される。光と影が作り出す立体感により、明瞭な仕上がりになった**

空の抜けとシャドウのバランスを考慮する

目立つ看板をカットする

右上から左下へ抜けるラインを意識する

画面を突き抜けるラインを生かし広い空間を想像させる

右下から左上に伸びるようなラインを意識してナナメの角度を決めた。右のシャドウと左の空間のバランスが重要になる。画面外左の目立つ色を切るように構図を調整した

水平にとらえると、右側の建物と左の空の抜けのバランスが良くない。また、画面に動きが感じられない。画面左の上下にある黄色の看板が青空の色に対して主張が強いように見える

自分の感覚としての水平を探す

ナナメの構図を作るときは、カメラをナナメにするという意識ではなく、自分の感覚としてどの線をファインダー内で「水平とみなすか」という意識で画面を整えると良い。ファインダーで見える世界と目の前の世界の水平が表現上同じではないという考え方だ。また、見せたくない部分を切るという意味でもナナメ構図は役立つ。

このカメラ機能を使おう » 構図づくりの基準にしたい「**50mmのレンズ**」

▶キヤノン EOS 6Dにオススメの標準レンズ

EF50mm F1.4 USM

- 実勢価格：49,000円前後
- 最小絞り：F22
- 最短撮影距離：0.45m
- フィルター径：φ58mm
- 重さ：約290g

1993年の発売から20年経った今もラインアップされているスタンダードなレンズ。EF50mm F1.2L USM に比べ、価格が安く画角感覚の訓練にはちょうど良い。さらに手頃なラインアップにEF50mm F1.8 Ⅱがあり、こちらは1万円前後で購入できる

▶ニコン D800Eにオススメの標準レンズ

AF-S NIKKOR 50mm f/1.4G

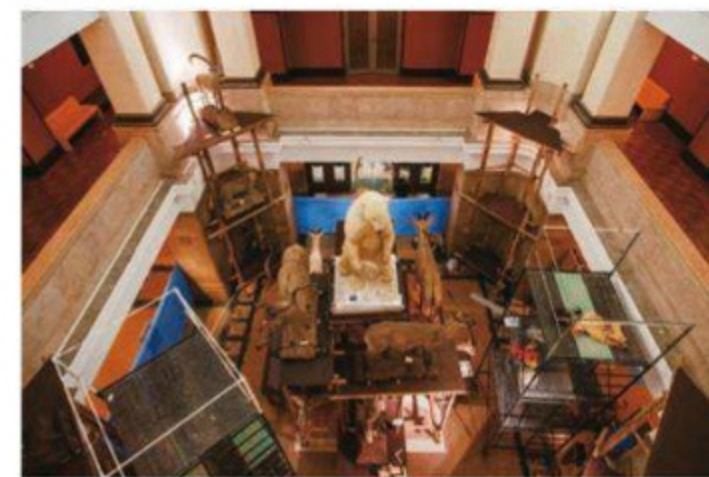
- 実勢価格：44,500円前後
- 最小絞り：F16
- 最短撮影距離：0.45m
- フィルター径：φ58mm
- 重さ：約280g

発売は2008年。スナップからポートレートまで幅広い用途に対応している。大口径ならではのF1.4のボケ味を楽しみたい。手頃なラインアップには、AF-S NIKKOR 50mm f/1.8Gがある。開放値はF1.8と1段下がるが、2万円程度という価格は魅力

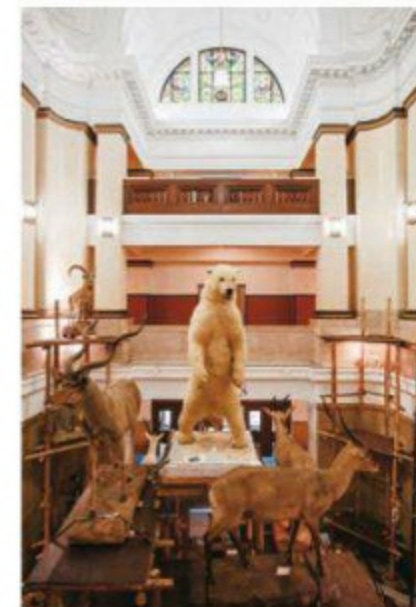
画角に関して視覚的な訓練を行うのであれば、まずは1本のレンズを徹底的に使いこなして感覚を養うと良い。撮るものによって違いがあるが、個人的には50mmがオススメだ。画角としても見た目の範囲に近く、誇張が少ない。50mmに慣れてから28mm、35mmあたりのレンズを使うとその差が良く理解できるようになるだろう。

開放値の明るいレンズは高価なものが多いが、単焦点の標準レンズはコストパフォーマンスが高い。画角の基準にするレンズとして1本持っておきたい。

☑ ONE POINT 高さを変えると写る範囲はどう変わるか

3Fから撮影

足場と剥製の状況を上から眺めた。剥製が乗せられた台や足場の状況などが分かるため、その場の記録としても良く機能している

アングルとともに構図づくりに重要な「高さ」の選択

ある風景をどのように撮るか、どのようなフレーミングにするかを決定する上で、重要な要素に「高さ」がある。例えば建築の吹き抜けを撮影するとき、建物の1F、2F、3Fから写すと景色はそれぞれどう変化するだろうか。今回は、剥製（はくせい）が置かれた建造物を、1F、2F、3F以上の高さから撮影してみた。3点それぞれカメラの水平は崩さず、上下の傾きを調整した。これは極端に高さを変えた例だが、シーンによって数センチ、あるいはもっと小さな高低差でも見え方は大きく変化する。撮影位置の高さはアングルとともに写真の仕上がりを変化させる重要な要素だと覚えておこう。

2Fから撮影

2Fから撮影した場合、吹き抜けの高さを見せるために縦位置を選択した。ほぼ水平に撮影しているため全体がフラットに見える。そのため吹き抜け全体がどのような状況になっているのかがよく分かる

1Fから撮影

吹き抜けに置かれた足場と剥製を1Fから見上げて撮影した。鹿の角が天井へ向かい伸びるような構図になり、動きのある構図になった。レンズの遠近感も生かされ、主題がはっきりとした写真に見える

☞ RAW現像のワンポイント

白黒ミックスを調整し、コントラストの高いモノクロームに仕上げる

グリーンやブルーは暗くレッドやオレンジは明るく調整する

カラー画像を参考に、より白く再現したい部分、あるいは暗くしたい部分の色に関係したパラメーターを調整していく。この写真では木の緑や空の青は暗く、道路や車の赤やオレンジは明るくなるようにしている

効果を見ながら粒子を加えて立体感を出す

粒子を加える際には画面を拡大して効果が強くなりすぎないように注意する。ただ粗くしてしまうとノイジーな写真に見えてしまう。少し弱めにかけるくらいでプリントしたときにはちょうど良い

強いコントラストで描かれたスナップを硬いモノクロームに仕上げた。まず白黒ミックスを調整して全体の階調を変化させていく。青空を暗く落としたいため、グリーン、アクア、ブルーのパーセンテージを減らしていく。コントラストをつけるために道路のオレンジなどは明るくなるよう増やした。その後ハイライトとシャドウを白飛びや黒つぶれに留意しながら調整していく。この際、警告表示を使って重視する部分の階調を中心に考えると良いだろう。画面中央の消失点に向かって明るくなるように円形フィルターで焼き込みの効果を加え、粒子を加えている。粒子感があることで、特に空のグラデーションなどに自然な立体感を生むことができる。最後に円形ツールで画面左側の明瞭度やハイライトの補正を行い、全体の調子をフラットな印象に整えていく。この時、画面右側には効果が出ないよう、適用範囲を確認しておこう。

ゆる鉄レシピ

川の輝きを使った2つの表現

この２枚は同じ時間に写した作品ですが、その雰囲気は大きく違います。右側は線路の部分をメインとしたシャドウ基準で撮影したので、ハイキーで爽やかな雰囲気になっています。左側は川面のハイライトを基準にすることで、ローキーでシャープな雰囲気に仕上げました。このように同じ風景でも、自分の意図に合わせて露出の基準となる被写体を変えれば、まったく違う雰囲気の作品を生み出すことができます。大胆に露出補正をしながら、理想の明るさを追求しましょう。

ニコンD750 ／ AF-S NIKKOR 16-35mm f/4G ED VR ／ 22mm ／マニュアル露出（F4 、1/1,600秒） ／ ISO 320 ／ WB：晴天／郡上八幡〜自然園前／午前11時
清廉な流れを強調したくて、水しぶきが立つ場所を選んで、ローアングルで撮影

郡上八幡で偶然出会った子どもたち。車庫では、はじめての体験にみんなの笑顔がはじけた

みんなの笑顔が、この鉄道を支えている。

長良川鉄道を撮影するとき、僕がメインのテーマにしたのは、やはり長良川でした。とはいえ、ただ川の絶景と列車を撮影しても面白くないので、もう少し狙いを絞ってみます。まずは清流を連想させる水しぶきをメインにしたのが、左ページの作品。D750はチルト式の背面モニターを採用しているので、こんなローアングルの撮影時にとっても便利です。ただし河原からだと画面手前を水しぶきにするのは難しいので、靴を脱いで川に入って撮影しました。撮影時は10月とは思えない暑さでしたが、川の水は強烈に冷たかった〜！　でも臨場感のある作品が撮れたので、良しとしましょう。続いての作品は96ページの作品。これは夕日が山の端に沈むギリギリの時間に、川面のキラキラとした光をメインの被写体にして撮影しました。このときは川面のハイライトを基準としてローキーにしますが、シルエットのように列車が浮かび上がるシーンでないと、シャドウ部にある列車は闇にとけ込んでしまいます。でもこのシーンでは強烈な斜光を受けて列車の屋根が光り、列車の存在感が失われないと判断。思い切ってローキーで撮影しました。なかなかドラマチックでしょ?

長良川の撮影を堪能して、郡上八幡駅で偶然出会ったのが、列車に乗って車庫見学に行くという小学生の一団。さぞや鉄道が好きな男子が多いのかと思いきや、なんと全員女の子。でもとっても楽しそうに、汽車旅を楽しんでいました。ここで会ったのも何かの縁。せっかくなので車庫見学まで同行させてもらいました。1時間ほど乗車した関駅の車庫で見学するのは、列車を洗ったり、ポイントを切り替えたりという通常の作業ですが、子どもたちにとってはまるでテーマパークのようにワンダーな体験。笑顔がキラキラと輝く、とっても素敵なイベントになりました 。これは沿線市町村が予算を持ち、沿線の学校の子どもたちに乗車体験してもらおうという試み。鉄道の旅を楽しみながら、公共の場でのマナーを学び、しかも鉄道の収入にもなるので一石二鳥! そして何より、こうして鉄道と親しむことで、鉄道を身近に感じ、自分たちに必要な乗り物であることが心に刻まれることが、大切なことだと感じました。

自然の美しさと、子どもたちの笑顔に癒される、撮影になりました。

今回の機材

今回の機材は、ニコンD750と小三元ズーム。長良川の撮影では、FXフォーマット初となる、チルト式液晶モニターが威力を発揮。小型軽量でワンダーな作品を生み出してくれました

ゆるみやげ

今回のゆる土産は長鉄オリジナルの「ブレーキハンドルストラップ」。とってもかわいいミニチュアハンドルを携帯電話につけて、さりげなく鉄道好きさを主張しましょう。抽選で４名さまにプレゼント

中井精也（なかいせいや）：1967年東京都生まれ。2004年春から毎日１枚必ず鉄道写真を撮影するブログ「1日1鉄!」を継続中。広告、雑誌写真の撮影のほか、講演やテレビ出演など幅広く活動している。株式会社フォート ナカイ代表。著書に『世界一わかりやすいデジタル一眼レフカメラと写真の教科書』（インプレス）がある。http://railman.cocolog-nifty.com/

「ゆるみやげ」はデジタルカメラマガジンのプレゼントページ（http://ganref.jp/magazine/dcm/howto/）よりご応募できます。

日本風景の色を探す

写真・文：萩原史郎

風景にはさまざまな色がある。青色1つをとってみても、薄い青色、濃い青色、くすんだ青色など実に多彩だ。そして、日本には色を表す言葉が多くある。この2つ、風景の中にある色と日本の色を組み合わせて、風景の色を探してみよう。今回は青色の中の1色、紺青だ。

【其の伍】

紺青 こんじょう

「暗い紫みの青」とJISの色彩規格で規定されている色で、一般的には青色顔料の1つとして知られている。1704年にドイツで初めて人工的に合成された無機顔料だが、日本では天然顔料の紺青は平安時代から存在し、岩群青（いわぐんじょう）と呼ばれた。冬の澄み切った空の、深い深い青を想起させる色だ。

紺青の見つけ方

よく晴れてクリアな空で見つけることができるが、標高が高い場所のほうがより見つけやすいだろう。逆光気味の空ではここまで色が濃くないが、サイド光や順光方向で、さらにPLフィルターを使えば「紺青」の色を表現することができるだろう

紺青の与える影響

もともと青色を代表とする寒色系の色は、暖色系の穏やかで暖かな雰囲気とは対照的に、爽やかなイメージを持っている。そのうえ色が暗く濃い「紺青」は、どこかに爽やかさを内包しながらも、重厚な雰囲気も併せ持っている。冬の風景表現にはぜひ使いたい色だ

霧氷を求めて、まだ冬の扉を開けたばかりの12月上旬に志賀高原を訪ねた。低気圧が通過中だからだろうか、朝のうちは雲が多くさえない空模様だったが、樹々には霧氷がついていることが見てとれる。惜しいかな、風景は白一色なので、本来美しいはずの霧氷はまったく引き立っていない。だが、天気予報によれば低気圧は通過するはず。晴れればチャンスはある。そう期待して、雲がまとわりついている間は近距離の被写体を中心に撮影をしていた。昼近くになったころだろうか、空が急に晴れ始めた。みるみる広がる青空を背景にした霧氷はとたんに饒舌（じょうぜつ）になり、白い華が強い主張を始めた。まるで「撮ってほしい」と言わんばかりだ。気温が低いせいか、よく晴れていても霧氷はなかなか解けず、格好の被写体であり続けてくれた。空は青色を濃くして霧氷を引き立ててくれている。おかげで、あちこちをさまよいながら時間の限り霧氷を撮影できた。

この写真を撮影した場所は普段なら素通りしてしまうのだが、この日は霧氷と青空のおかげで良い風景が見えた。ちょうど光が真横から入るので、空にグラデーションができたのも好都合だった。濃厚な青は「紺青（こんじょう）」というが、白を引き立てるには最高の背景色である。凛とした空気感を放つ切れ味の鋭い冬の風景を撮るなら、紺青色の空を使いたい。主役を霧氷とするなら、これ以上に相性の良い色はないのではないかと思うほどだ。

【撮影データ】

項目	内容	項目	内容
撮影日	2010年12月10日	露出モード	絞り優先AE
撮影時間	14時35分	絞り値	F11
場所	長野県山ノ内町志賀高原	シャッター速度	1/40秒
カメラ	キヤノンEOS 5D Mark II	露出補正	+0.7EV
レンズ	EF17-40mm F4L USM	ISO感度	200
焦点距離	17mm	ホワイトバランス	太陽光

紺青の存在感を生かす構図

白い霧氷と紺青の空のどちらを撮るか考える

①最初は霧氷の美しさに目を奪われ、23mmの画角を選択して画面いっぱいにとらえた

②霧氷を撮っているうちに、その背景に広がる紺青の空の存在感を生かしたいと考えた。霧氷を主役にしつつ空を広く入れることにした

主役を際立たせるようにバランスを工夫する

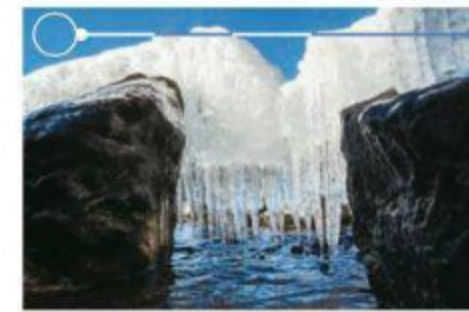
③17mmの画角で同じ場所から広めに空をとらえると、左側が空いてバランスが悪くなってしまった

④紺青の空を背景に霧氷を写すと白さが際立って力強い印象になる。そこで左側に霧氷を入れてバランスをとり、空を囲う構図にした

見る者の心の内に響く、初冬の空の色

群青 ぐんじょう

R 76／G 108／B 179

少々紫みを帯びた濃い青色といったニュアンスだ。日が沈んだ直後に撮影した冬の空だが、ちょうど中央部が群青の色になっている。木が葉を落としているので、物悲しい雰囲気をたたえているが、そんな風景には少し濃い青である群青がよく似合う。日没の前後の時間帯に探してみよう

薄群青 うすぐんじょう

R 83／G 131／B 195

文字どおり、群青を薄めたような青のことだ。朝夕の濃い青空ではなく、日中の明るい雰囲気を持った青で、冬の清々（すがすが）しい空気感を伝えるのに適した色といっていい。冬には見つけやすい色だと思う

萩原史郎（はぎはらしろう）：1959年山梨県生まれ。日本大学卒業後、『風景写真』の創刊に携わる。編集・発行人を経験、退社後フリーのカメラマンに転向。現在自然風景を中心に撮影、執筆活動中。日本風景写真家協会（JSPA）

高橋良輔が注目レンズを徹底吟味

レンズ鑑定奉行が斬る!!

時は商いが活況を呈したとある時代。巷では景色や人をそのまま絵のように残せる「カメラ」なるものが大はやり。そして、その出来を大きく左右する装置を「レンズ」という。当代きってのレンズ奉行・高橋良輔が人気レンズを厳しく吟味!

レポート：高橋良輔　イラスト：涌井陽一

今月の鑑定レンズ　ニコン AF-S NIKKOR 20mm f/1.8G ED

2014年9月に発売されたAF-S NIKKOR 20mm f/1.8G ED（以下AF-S NIKKOR 20mm）は、実に20年ぶりとなる20mmの新作広角単焦点レンズだ。20mmはニッコールレンズの歴史とともにある焦点域で、これまで多くの名玉が生み出されている。超広角レンズでありながら、落ち着いた画角のほどよいパースで絵をまとめやすく、筆者も若き日に"懐刀"として常にカメラバッグに忍ばせていた。多くのバリエーションが作られてきたが、F1.8という明るさは初めてで、ニッコールレンズの歴史に新たな1ページが加わった。ズーム全盛の時代ではあるが、ニッコールにとって20mmは特別な存在であり、それがゆえに新製品が投入されたのであろう。ここは、本レンズを厳しく吟味して、21世紀の20mmの実力を試したい。

専用フード：HB-72（付属）

焦点距離こそAi AF Nikkor 20mm f/2.8Dと同一だが、レンズ構成を一新。EDレンズや非球面レンズが採用されてレンズ全長も増している

D810に装着

発売日：2014年9月25日　実勢価格：97,000円前後

●レンズ構成：11群13枚（EDレンズ2枚、非球面レンズ2枚、ナノクリスタルコート採用）●最短撮影距離：0.2m ●最大撮影倍率：0.23倍 ●対角線画角：94° ●絞り羽根枚数：7枚（円形絞り）●最小絞り：F16 ●フィルター径：φ77mm ●最大径×長さ：φ約82.5×80.5mm ●重さ：約355g ●防塵・防滴機構：非搭載 ●手ブレ補正機構：非搭載

吟味一　ズームレンズとの解像力比較

ズーム全盛の現在においても、単焦点レンズの利点は数多く存在する。しかし、最新の光学設計で作られたズームレンズの実力も侮れず、設計の古い単焦点レンズが敗れてしまう場合もある。そこで、参考レンズとして2013年発売のAF-S NIKKOR 18-35mm f/3.5-4.5G ED（以下AF-S NIKKOR 18-35mm）を召喚。画質を比べた。結論としては、中央部の解像力がピークとなる各F値において、細線の描写力はAF-S NIKKOR 20mmが優勢で、周辺部の流れも少ない。AF-S NIKKOR 18-35mmにおいて、周辺部の描写を同等にするにはF11以上絞る必要があるが、回折の影響から高周波数帯の描写が鈍る。最新設計で単焦点レンズを作ると、かくも凄まじく斬れるのだ。

テスト方法
D810にそれぞれのレンズを装着。画角を合わせて撮影した。撮影モードは絞り優先AEを使用し、解像力比較に影響のある設定変更は行っていない。記録画質はJPEG（Large/Fine）

判定　最新設計の單集点は斬れ味鋭くズームを寄せ付けず

吟味二　ボケの描写傾向

開放付近では良好なボケが得られるが、焦点距離の短さから絞り込みには弱い。美しいボケを得たいならF2.2付近が限界であろう。特に、反射物によって生じる点光源のボケ（玉ボケ）に角が立ちやすく、直線物の周囲にも二線ボケの兆候が見られる。また、非球面レンズの影響からボケのエッジはやや硬めの傾向がある。解像力の高さと二律背反的な関係にあるが、広角レンズの性質を考えると欠点であると断言はできない。放射方向と同心円方向での画質のムラが少なく、画面周辺部でボケが渦巻くことはなく描写は素直だ。ボケを生かすなら絞りの選択は慎重に。

テスト方法
D810にレンズを装着。画面手前の自転車のフレームにピントを合わせ、絞り優先AEで撮影した。カメラ機能は初期設定を基本とし、ボケに影響する設定変更は行っていない

F1.8　F2　F2.2
F2.5　F2.8　F3.2

判定　ボケを生かした表現には小刻みな絞り選択が吉

吟味三　逆光特性の傾向

AF-S NIKKOR 20mmは基本的に逆光に強く、画面内光源を苦としない。これは、ナノクリスタルコートの威力もさることながら、絶妙なレンズ配置の賜物であろう。絞り値を大きくすると光源の対角に薄いゴーストが発生するが（F8以降）、程度は軽微であるので本レンズの評価を損ねるものではない。ただし、光源の周囲に発生する光条は、絞り値が小さいほど上下に尾を引く傾向があるので、絞り羽根の交差部から均等に光条が出るF5.6付近で使うのが得策。F5.6ならゴーストの発生を逃れやすいこともあり、どちらにとっても都合が良い。絞り値の選択は合理的に行いたい。

テスト方法
D810にレンズを装着。太陽を構図に収めながら、絞り優先AEで開放から1段ずつ絞って撮影。光条とゴーストの傾向を見た。記録画質はJPEG（Large/Fine）

A / B　F1.8　F5.6　F16

判定　光条とゴーストを巧みに操り表現力を高めるべし

AF-S NIKKOR 20mm f/1.8G ED　上達虎の巻

ためらうことなく絞りを開けて広がりと奥行きを同時に表現せよ

画面全域をシャープに写したいならF5.6付近が王道だろうが、F1.8という明るさを生かした表現にこそ、AF-S NIKKOR 20mmの面白さがある。広角レンズは画角の広さと被写界深度の深さから、どうしても平坦な表現になりがち。しかし、開放絞りでワイドマクロ的に使うことで、広がりと奥行きを同時に表現できる。もちろん、このような使い方は14mmや16mmでも可能なのだが、広がりと落ち着きが同居する20mmの表現が、やはりしっくりとくる。また、なによりF1.8の明るさが生む被写界深度の浅さは魅力だ。もちろん、14mmや16mmを否定するわけではないが、20mmの描写にはどこか趣がある。千利休は茶道を「数寄道」と称したが、AF-S NIKKOR 20mmはレンズの「数寄者」にとってかけがえのないお道具。特に、このAF-S NIKKOR 20mmは、現代名物帳に列せられて不思議はない逸品だと言える。広角レンズを使い倒して辿り着く先は、やはり20mmしかない。

ニコン D810／AF-S NIKKOR 20mm f/1.8G ED／20mm／絞り優先AE（F1.8、1/80秒、±0EV）／ISO 100／WB：オート　**魚市場で見かけた新鮮なサヨリ。市場内を動き回るターレットトラックを背景にぼかしながら、朝の喧騒を表現した。狭い路地が連なる現場では、超広角単焦点レンズが一番だ**

高橋良輔（たかはしりょうすけ）：1960年愛知県生まれ。広告写真スタジオ、出版社勤務を経て1987年よりフリー。写真撮影のほか経済記者としての経歴もある。これまで多くの広告制作に参画。主要雑誌において国内外で多くの撮影を担当し日本と中国を拠点に全世界を渡り歩く。日本写真家協会（JPS）会員

プロの撮り方&仕上げ方 第5回

プロの撮り方&仕上げ方

気持ちが伝わるポートレート

テーマ:森の中で見つけた澄んだ瞳

※Photoshop CCのCamera Raw 8.6を使用して解説

ポートレートを撮影するとき、ただやみくもに撮影するのではなく、仕上がりをきちんと想像して撮ると、写真の楽しさがより増す。この連載では毎号テーマを設定して、そのテーマに合った撮影方法と、PhotoshopのCamera RAWを使った画像の仕上げ方を学ぶ。茂手木氏ならではの感情や気持ちを乗せた写真の表現方法を伝えていく。

レポート:茂手木秀行　モデル:青木麻里(ヴィズミック モデル エージェンシー)

How To Shooting 撮影編

ニコン D750/AF-S NIKKOR 85mm f/1.8G/85mm/マニュアル露出(F2.2、1/640秒)/ISO 200/WB:オート

撮影現場の舞台裏

秋のはじめ、心地良い森の中で撮影を行った。柔らかなトーンに仕上げることを意識。傾いた日差しを背にして、逆光になるように立ってもらった

撮影時のポイント

逆光なのでここでは丸レフを使用したが、顔を明るくするというよりは、瞳にキャッチライトを入れることが目的である。こうした場合は、レフ板に直射光が当たっている必要はない。レフ板があるというだけで十分だ

印象的な目に視線を誘導する

レフ板を使って瞳にキャッチライトを入れる

良い表情とは必ずしも笑顔であるとは限らない。その人らしい表情や撮影者が感じる思いを表す表情も良い表情である。モデルには静かにカメラを見つめるということを行ってもらった。現実の中では、長い時間視線を交わし合うことはあまりない。それは恋愛などの心が通い合う瞬間であったり、逆に悲しみや苦しみを訴えかける瞬間であるからだ。だからこそ、視線を写し止めて固定することで、長い時間、視線を交わし合うようなポートレートは、見るものの心にささってくるのだ。無論、今回は恋愛なり、友情なり心が通い合う瞬間である。しかし、こうした写真は現実の関係の中で撮影しようとすると、お互いに照れがありうまくいかないものだ。そこで、モデルという一歩引いた存在に演じてもらって表現することもテクニックのひとつなのだ。

撮影テクニックとしては、いつも通りハイライトを飛ばさない露光をしたので、肌に対しては2段ほどアンダーだ。ハイライトを飛ばさないことと、カメラキャリブレーションを使って仕上げることで柔らかく明るく、しかし連続した階調を失わないようにした。柔らかく明るいことが、心惹かれる人と気持ちが通い合う瞬間のシチュエーションとして、ふさわしいと思ったからだ。

How To Retouching レタッチ編

After

ただ、視線を交わすことがうれしく思えるとき、それは誤解なのかも知れない。けれど、忘れられない視線の向こうにあるものは、紛れもなく自分自身の姿でもある

STEP 1 [基本補正]で柔らかな印象となるベースを作る

[露光量]を[+2.20]として明るめの肌の色にした。[露光量]は主に中間調を変更するのでハイライトへの影響が少ない。そのため、ほかの調整は行っていない。柔らかい雰囲気となるように[明瞭度]と[彩度]を下げた

STEP 2 [カメラキャリブレーション]を使って優しい雰囲気に

[カメラキャリブレーション]はピクチャーコントロールなど、カメラに搭載されている設定に相当するため、機種によって使えるメニュー内容が違う。また、変更できない機種もある。ここでは[Camera Flat]を選び、シャドウの描写が良い絵作りとした。[Camera Flat]がない場合は、[Camera Neutral]を選ぶと良いだろう

Adobe Standard
Camera Flat
Camera Landscape
Camera Monochrome
Camera Neutral
Camera Portrait
Camera Standard
Camera Vivid

STEP 3 感情を色として乗せるため色温度と色かぶり補正を調整

ブルー味を乗せて肌の透明感を作り、グリーン味で森の色合いを強調した。また、マゼンタ味にすると肌に赤味が乗り、森の色合いが失われて落ち着かない色合いになってしまう

茂手木秀行(もてぎひでゆき):1962年東京都生まれ。日本大学芸術学部卒業後、マガジンハウス入社。フォトグラファーとして雑誌「ポパイ」などを経て2010年フリーランスに。写真雑誌への執筆、セミナー講師など精力的に活動中。近著に「美しいプリントを作るための教科書」(朝日新聞出版)がある

キヤノン EOS 5D Mark III／EF24-70mm F2.8L II USM／28mm／マニュアル露出（F16・0.8秒）／ISO 400／WB：太陽光

Photoshop Lightroomで 写真を仕上げるRAW現像テクニック 簡単レタッチ［シーン編］

レポート：吉田浩章

Vol. 4 》朝日に照らされて光輝く風景

複雑な形で効果を調整するときは［補正ブラシ］を活用する

山の上での日の出は感動的だ。太陽が地平線から出る前の、空がオレンジやパープルに染まる瞬間はため息が出るほど美しい。ただ、東側の空とほかの被写体の間には輝度差があるので、露出の決定が難しい。シャドウ部は現像時にある程度起こすことができるので、白飛びを回避して撮影する。

今回のポイントは［補正ブラシ］によるシャドウ部の明るさ調整だ。［流量］を低めに設定することで、ドラッグやブラシストロークの回数で補正の効果に強弱をつける。また、ブラシは［段階フィルター］では対応できない複雑な形で編集ができるので、どんなシーンでも使いやすい。手前は補正効果を強くして明るめにし、中央付近は弱めにすることで、陰影のある朝の雰囲気を強調するのがコツだ。

1 全体の明るさを整えたい

>>> コントラストやシャドウ、ハイライトを調整

全体の明るさやトーンの調整を行う。コントラストを強めつつ、白飛びを抑えてシャドウを明るくする。

［基本補正］パネルの［コントラスト］を［+30］、［ハイライト］を［−15］［シャドウ］を［+40］とする。また、色を乗せるため［彩度］を［+15］とした

まずはベースとなる明るさを作る。ほんのりとシャドウが明るくなる

2 水平が曲がってしまった

>>> 切り抜きツールで角度を調整する

わずかに右が下がっているように見えるので、雲海が水平になるように角度を調整する。

［切り抜き］ツールを選び、［角度］の数値を［−0.50］とする

地平線、水平線、雲海などが見えている場合はきちんと水平を出したい

3 明るさの強弱をつけたい

>>> 補正ブラシのストローク回数で調整する

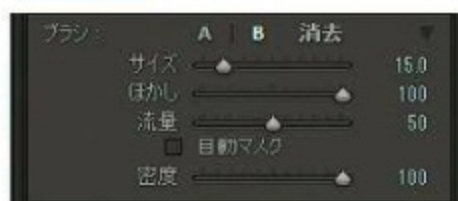
昇りつつある太陽にぼんやりと照らされた手前の斜面を明るくする。ポイントによって効果の強さを変えたいので［補正ブラシ］を使う。

［補正ブラシ］を選び［露光量］を［1.50］、［コントラスト］を［25］、［シャドウ］を［15］、［彩度］を［15］［ノイズ］を［20］とする。さらに［ブラシ］欄で［A］を選び、［サイズ］を［25.0］、［ぼかし］を［100］［流量］を［50］、［密度］を［100］とする。以上の設定で手前の斜面に対しては3回ドラッグ、その奥を2回ドラッグ、さらにその奥を1回ドラッグする。ドラッグ回数によって効果の強さが変わるのは［流量］の値を低くしているためだ（上記の設定だと5～6回程度のドラッグでブラシ中央部の効果が最大）

手前と奥で明るさに強弱を付けて奥行きやリズムを作る。ここでは3段階で効果の強さを変えた

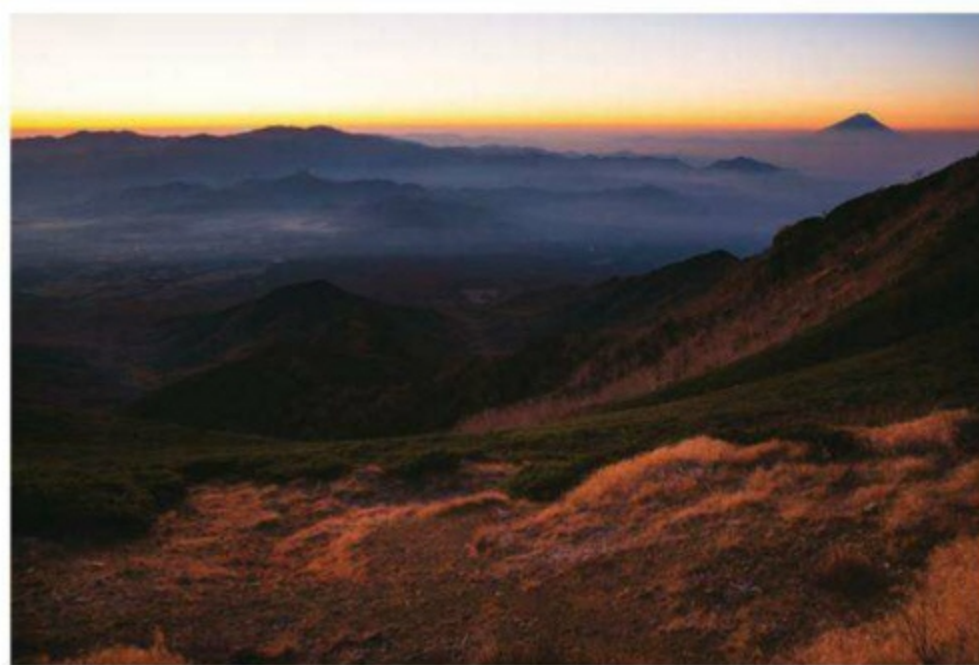
4 さらにある部分を明るくしたい

>>> サイズを変えた補正ブラシを使う

［サイズ］を小さくした［補正ブラシ］で手前の斜面の枯れ草など気になる部分をクリック。そしてドラッグして薄日を浴びている雰囲気にする。クリックやドラッグをし過ぎて効果が強すぎた場合は［ヒストリー］で操作を戻してやり直す。

［ブラシ］の［B］を選んで［サイズ］を［15.0］程度にする。そのほかの設定はステップ3と同じ。明るくしたい部分で数回クリックやドラッグする。必要に応じてまた［A］に切り替えるなどしよう。効果が強すぎる場合はさらに［流量］の値を下げて操作する

枯れ草や木立など光を浴びて明るくなりそうな部分をクリックとドラッグして光の強弱をさらに描き出す

Finish!

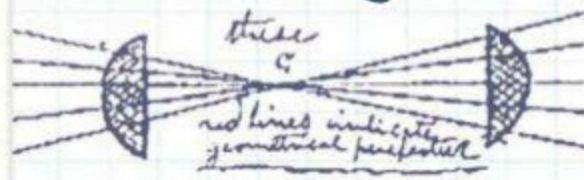
このページで使用した RAW データがダウンロードできます。http://ganref.jp/magazine/dcm/download/

手前の斜面と奥側とで明るさに強弱を付けたことで、明るさのグラデーションによって奥行きや荘厳さが出てくる。［補正ブラシ］の［流量］の値を小さくするのは、補正のムラを目立たなくするためにも効果的だ

このテクニックは……
- 光をコントロールできない風景写真
- 逆光（気味）のポートレート写真
- モノクロ写真の覆い焼きなど

にも使える!!

吉田浩章（よしだひろあき）：1965年福島県生まれ。RAW現像ソフトや画像処理ソフトに精通したフリーライター。写真を撮るのが好きで、最近はFOVEONかマイクロフォーサーズで撮り歩いている。近著に『キヤノン Digital Photo Professionalクイックハンドブック』『キヤノン Digital Photo Professional 4 パーフェクトマニュアル』（インプレス）がある

デジタル一眼大研究

いいレンズってなんだ?

第17回

レンズ硝材の種類と作り方

当然のことながらレンズはガラスレンズで構成されている。非球面、異常分散などいろいろ種類はあるが、それは実際にどんな素材で、どうやって作られているのかはあまり知られていない。そこで今回はレンズ部品を作っているHOYAを訪ねた。

取材・文:田中希美男

レンズに使われるガラスはさまざまな種類がある

交換レンズにはさまざまな「精密部品」が使用され、高い精度で組み上げられている。こうした交換レンズ部品の中で、最も重要かつ中心的な存在が光学ガラス(硝材)だといってもいい。

私たちの身の回りには多くのガラス製品があるが、写真用レンズに使用されるものが「光学ガラス」である。光学的な機能を備えた透明度の高い均質なガラスで、一般的に使われるガラス材とは品質、性能とも大きく異なる。光学ガラスの種類には「屈折率」「分散値(アッベ数)」「異常分散性」などの光学的特性の異なるものが数多くあって、それが約200種類以上もあるといわれている。さらに、曲率、サイズ、厚み、凹面凸面の違いなど、実に多種多様ある。

今回は、最新の光学ガラスはどんな工程で作られているのか? 今、光学ガラスにどんな進化が起こっているのだろうか? そんな疑問に答えていただこうと、光学ガラス製造のトップメーカーであるHOYAの昭島事業所(東京)を見学、取材させていただいた。

レンズ用硝材メーカーは主に4社 HOYAはその中でもトップメーカー

現在、国内で交換レンズを作っているメーカーは、カメラメーカー、レンズ専門メーカーなどいくつもあるが、自社内で光学ガラス材からレンズの製造を行っているメーカーは、ほぼないのではないだろうか。かつてはガラス原料から熔解、切削やプレス成形を行っていたレンズメーカーもあったが、今ではほとんどが専門の光学ガラスメーカーから「レンズ部品」として購入し、それを自社で研磨や加工をして光学レンズに仕上げている。

今、国内の主要な光学ガラスメーカーとしては、HOYA以外に、オハラ、光ガラス、住田光学ガラスなどがある。オハラはキヤノン系、光ガラスはニコン系、住田光学はパナソニック系といわれているようだが、実際には系列以外のメーカーにも自由に製品を供給していて、国内の交換レンズメーカーは主にこの4社から必要な光学ガラスを調達している。中でもHOYAは生産量、製造技術ともにトップクラスで、国内のレンズメーカーのすべてに光学ガラスを提供している。HOYAの光学ガラスを使っていないメーカーはない、といってもいいだろう。

ところで、光学ガラスメーカーによって製品の光学的な品質の差(性能差)は一般的には「ほとんどない」といわれている。一部、あるメーカーにしかない特殊な光学特性などを備えた光学ガラスもなくはないが、極めて少ない。あえてメーカーの違いをいうとすれば、Aメーカーのレンズは研磨しにくいとか、Bメーカーのレンズはヤケにくい、Cメーカーのレンズはコーティング材がのりやすい、などといった製造現場での加工レベルの違いぐらいだという。

■ 図1 光学ガラス素材の製造過程の概略図

光学ガラスメーカーから、カメラメーカーや交換レンズメーカーに納品されるガラス素材の製造工程を簡単に図解したもの。実際はもっとたくさんの工程や検査などがあるのだが複雑になるので省略した。製品には大きく分けると、「研磨用球面レンズ素材」と「ガラスモールド非球面レンズ素材」の2つの光学ガラスがある。それに応じたガラス素材が熔解され製造される。現在は、「前熔解」をしてできあがったガラス素材を再び熔解する方法と、いきなり「連続熔解炉」を使って一貫生産する方法の両方式を採用しているメーカーが多い

田中希美男(たなかきみお):京都市生まれ。多摩美術大学・多摩芸術学園写真科卒業後、フリー。撮影分野は、人、モノ、クルマ、料理、風景、スナップ、ファッションとジャンルを問わない

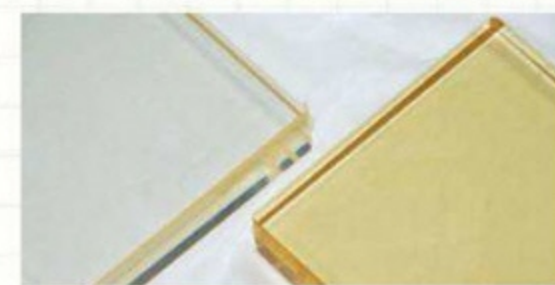
HOYAから登場した2つの新しいガラス硝材

メーカーによる品質特性の差の極めて少ない光学ガラス製品の中にあって、HOYAが最近、大変に特徴のある「新製品」を開発した。将来、交換レンズの描写性能を大幅に向上させる可能性もあって注目されている。

HOYAの新製品は2つある。1つは、透過率をアップさせた新ガラスである(図2。製品名・FDS18-W)。従来の光学ガラスは高屈折・高分散になるほど透過率が悪くなるという"宿命"があったのだが、HOYAはその透過率を大幅に向上させた。高屈折ガラスはレンズを小型にするために必要で、高分散ガラスは低分散ガラスと組み合わせて色収差を補正するために使用するのが一般的だが、透過率の悪いレンズは複数枚の組み合わせに大きな制限が出てくる。高屈折・高分散ガラスの透過率をアップさせたことでレンズ設計の自由度が広がったといえる。

もう1つは「NRP」と呼ばれる新製品(図3)。後ほど光学ガラスの製造方法のところで解説するが、カットされたブロック状のガラス材を型に入れて再加熱しながらプレスして、球面レンズに近いカタチに仕上げるリヒートプレス(RP)という製法がある。研磨時間を短縮するために可能な限りレンズの完成形状に近いカタチにしておくためである。そのRPレンズの外観と表面の精度を大幅に向上して、より完成形状に近づけたのがNRP(エヌアールピー)である。

NRPの利点は、形状精度がアップしたことで結果的に研磨時間を大幅短縮し、研磨工程でのコストダウンにもなる。さらに研磨の精度そのものも向上させることができて、より高精度なレンズに仕上げられる可能性も秘めている。NRPはすでに国内の主要なレンズメーカーが採用を検討している。いずれすべてのメーカーが使用するだろうともいわれている。

■ 図2 透過率を大幅に向上させた新光学ガラス

右のアンバー色になった光学ガラスが旧製品の高屈折高分散の「FDS18」。左がその改良版で透過率を大幅に向上させた「FDS18-W」である。透過率をアップしたことで複数枚のレンズを組み合わせての使用が可能になった

■ 図3 HOYAが新開発したNRP品と従来品との比較

左が従来のRP(リヒートプレス)で、中央が新開発のNRP(エヌアールピー)。右端の研磨済みの完成品と比べてみると、従来RP品とNRP品との形状の違いがよくわかるだろう。形状だけでなく表面精度もNRP品では大幅に向上している。もし、従来RP品と同じ手間と時間をかけて研磨すれば、NRP品ではより高精度なレンズが作れるといわれている

さまざまな原料を炉で熔かして元になるガラス素材を作る

さて、話が前後してしまったが、ここであらためて現在の光学ガラス製造の工程を眺めてみることにしたい。

ガラス原料は珪石(けいせき)、硼酸(ほうさん)、アルミナ、炭酸バリウム、酸化ランタンなどだ。70種類ぐらいあるといわれている高純度の鉱物系の原料の中から5~15種類ほどを選び、厳密に計量して混合するところから始まる。製造する光学ガラスによって混合する原料は微妙に異なる。そうして調合された原料を「炉」の中に入れて高熱(約1,200~1,500℃)で熔解する。それをゆっくりと冷却してガラス材に作り上げる。

炉を使ってガラス原料を熔解する方法には、二度の熔解をしてガラス素材を作り上げる方法と、連続熔解炉を使って一度の熔解でガラス素材に仕上げる方法(図4、図5)の2種類がある。二度熔解をするのはガラス素材の品質をより安定させるためである。一度目の熔解(粗熔解、前熔解)で作った粉々状のガラス材を再び炉の中に入れて再度熔解(本熔解)してガラス素材を作る。手間も時間もかかるがそのぶん良質の素材が得られる。しかし今では、いっきに本熔解までを自動的にやってしまう「連続熔解炉」が開発されて、それを使うメーカーも多くなった。ガラス原材料からほぼオートメーションでガラス素材ができあがる利点がある。HOYAでは硝種(しょうしゅ)(ガラス素材の種類)や品質要求に応じて、二度熔解方法と連続熔解方法を使い分けているという。

その昔は、粘土で作った素焼きの釜で高温熔解し、釜を割って壊してガラス材を取り出していたり(粘土ポット式)、高価な白金を使った釜で熔解していた(白金ポット式)時代もあったが、いずれも過酷な労働条件の中で高い職人技が必要とされた。それが連続熔解炉の出現や熔解の技術革新により不良品の発生率は大幅に減少し、さらに高性能で特別な機能を持った光学ガラスも容易に作れるようになった。

■ 図4 連続熔解炉の仕組み

HOYAが採用している連続熔解炉の様子。左上から、正確に混合されたガラス原材料を炉に投入。それを約1,300℃の高温で熔解し、さらに約1,500℃に温度をアップして熔融ガラス内の泡を取り除いたり屈折率を安定させる。それを金型枠に流し込み、プレスしてダイレクトプレス素材となる。その後、時間をかけてアニール処理工程を経て製品となる。Eバーも同じようにして作られる

■ 図5 連続熔解炉の外観

メンテナンスのために2~3年に一度だけ火が止められる。それまでの期間は24時間、連続稼働している。左下に見える穴からガラス原材料が投入される。熔解炉の内壁には純度の高い白金(プラチナ)が使用されているという

■ 図6 熔融ガラスからEバーの製造工程

連続熔解炉から出てきた高温どろどろの熔融ガラスは、ここで長いEバー（ストリップ材）となる。約20mの距離をゆっくり徐冷されてアニーリングが行われる

■ 図7 Eバーを目視検査する熟練担当者

20m以上あるEバーは約30cmの長さにカットされる。このEバーは、ブロック状にカットされるなどしてリヒートプレスなどのガラス素材に加工される。Eバーの中に泡、ひずみ、脈理がないかをベテランの検査員がすばやく目視チェックしていく。もし、不良箇所が見つかれば、その部分にチェックを入れて製品の対象から外すようにする

■ 図8 アニール処理を終えたダイレクトプレス素材

熔融ガラスからダイレクトにレンズ形状の金型枠に流し込まれ、プレス加工して仕上げられるDP品がアニール処理を終えて出てきた。このあと検査や測定などのチェックを済ませてカメラメーカーやレンズメーカーに納品される

熔かしたガラスを用途に分けて加工する

熔解炉から出てきた高温のどろどろ状態のガラス（熔融ガラス）は、大別すると、球面レンズ用とガラスモールド非球面用の2つの光学ガラス素材になる。

球面レンズ用のガラス素材は、まず、厚さ1～1.5cm、幅が13～17cmの長いガラス板（ストリップ材とかEバーと呼ばれる）に仕上げられる（図6）。長い板状のEバーは（約20m）、時間をかけて（約10～15時間）ゆっくりと常温に近づけながらアニーリング（焼き鈍し）される。アニール処理はガラス内のひずみを取り除いたり、屈折率を調整したりして光学性能を均一にする大切な工程である。その後、30cmほどにカットされ、ベテラン検査員が目視で泡・脈理の有無などをチェックする（図7）。また、その後の検査で屈折率や分散が一定しているか厳しくチェックされる。

こうしてできあがったEバーは2つの加工工程に分かれる。1つは、要求のレンズサイズに応じて小さなガラスブロックにカットされ、それを再加熱し柔らかくしてから型枠でプレスして目的の形状（外形、肉厚）に仕上げる。これがリヒートプレス品（RP）である。同じガラス素材から、必要に応じて外形や肉厚の異なったレンズを効率的に製造できるメリットがある。

2つめは、ガラス板のEバーを細長くカットして丸い棒状（径は約1cm以下）にする。それを正確に小さくスライスしてロッドスライス品（RS）に仕上げる。小さなレンズを大量に、低価格に製造できるメリットがある。

どろどろの熔融ガラスの状態のままレンズ形状の金型に直接流し込みプレスして仕上げる方法もある。これがダイレクトプレス品（DP）である（図8）。通常のRP品に比べて、できあがりの外観や肉厚の精度が優れている。先ほど述べたHOYAが開発した「NRP」は、RP品と似た製法であるがDP品よりもさらに仕上がり精度を高めた画期的な製品だといわれている。

非球面レンズ用のガラス素材は数が限られている

以上、4種類の光学ガラスの素材はすべて研磨して仕上げる球面レンズ用である。さらにもう1種類、ガラスモールド加工による非球面レンズのためのプリフォーム素材がある。

ガラスモールド非球面は、ガラス素材を精密金型に入れて加熱しながらプレスして仕上げる。そのためプリフォームガラスは、金型に適した形状であること、比較的低温でガラス素材が柔らかくなること（高温だと金型にダメージを与える）、プレスしたあとに研磨工程を経ないで製品になること（非球面レンズは研磨することが極めて困難）、などの条件を満たしたガラス素材である必要がある。

プリフォーム素材に使用できるガラスは限られていたのだが、近年その改良も進んでいる。従来までは超低分散ガラスなど特殊硝材をプリフォーム材にするのは難しいといわれてきたのだが、製造技術の進化により超低分散のプリフォーム材も作られるようになってきた。例えば、超低分散ガラス素材を使った非球面レンズを作ってそれを使用すれば、球面収差と色収差を1枚の光学レンズで同時に補正することもできる。レンズの構成枚数を少なくできて、高性能を維持したままコストダウンにもつながる。あるいは、曲率の大きな大型の非球面レンズが容易にプレス加工できるようなプリフォームガラスが生まれてくれれば、私たちが使う交換レンズの性能は今よりもずっと高性能・高画質になるばかりか、より小型で軽量になる可能性もある。

ガラス素材の目標は超高屈折・低分散ガラスの開発

非球面レンズ用のプリフォームガラス材の改良だけでなく、研磨球面ガラスでも素材の改良が進んでいる。先日、岩谷産業が発表した人工合成による蛍石ガラス製造もその1つ。現在、多くの光学設計者たちが最も望んでいるのは「超高屈折で超低分散」の光学ガラスだ。そのような「特殊光学ガラスレンズ」が生まれてくれば交換レンズの光学性能も大きさも、今よりも一歩も二歩も前進するに違いない。HOYAなどの光学ガラスメーカーの今後に期待したい。

■ 図9 HOYAで製造されている光学ガラス素材の一部

上部に見えるのがEバー（ストリップ材）、その下にある細い丸棒がEバーから作られたロッドスライス（RS）用の素材。この丸棒から小さくカットされる。写真中央にあるのがガラスモールド非球面レンズ用のプリフォーム材。右下にある2枚の光学ガラスは、左のやや透明感のあるものがダイレクトプレス品、その右がEバーからカットされて再熱加工プレスしてできたリヒートプレス材である

「いいレンズはなにか」を読者のみなさんとともに考えていきたいので、本連載についてのご要望やご意見を編集部宛〈digitalcamera@impress.co.jp〉にどしどしお送りください。

REAL BONES

骨格と機能美 |vol.5|

湯沢英治
Eiji Yuzawa

戦闘機のようなフォルムからは想像できない背骨と5部位のヒレだけのシンプルな骨格

アオザメ Shortfin mako shark

1975年に公開されたスティーブン・スピルバーグの名作『JAWS』によって、世界は「サメ」を海に住む恐怖のシンボルとした。映画に登場する人喰いザメはホホジロザメだが、この骨格はアオザメである。

アオザメはサメ類の中で、最も高速の18ノット（時速35km）以上の速さで泳ぐといわれる、非常に活動的な種。体は流線型。まるでクラシック戦闘機のような迫力あるフォルムイメージだ。しかし、この全身骨格からは、それらを想像することができない。どこかシュールで、物足りなく、未完成であるように感じてしまう。中心部に1本真っ直ぐな背骨があるだけで、肋骨もない。棒のような背骨の末端に尾ビレ、上部に背ビレ、胸ビレがあるだけだ。特にサメの特長でもあるシャークフィン（背ビレ）は宙に浮いていて、背骨と繋がっていないことが分かる。しかも、正確に言えばサメの骨は石灰化したアゴと歯のみで、それ以外はすべて軟骨でできている。

では、なぜこのような骨格をしているのか。それはサメが古代から進化せず、魚になりきれなかったため浮き袋がなく、独自の方法で浮いている。その正体が肝臓。この部位に大量の脂を蓄えて浮力を得ているのだ。サメの肝臓は身体全体の実に1/4を占めている。そのため、当然骨格も異なっている。このシュールな全身骨格をファインアートとして見ることや、また、インダストリアルデザインやアプライド・アート（応用芸術）といった見方から、今後の未来へのモノ作りのヒントに結びつくのではないかと私は考えている。

Profile：1966年、神奈川県生まれ。独学で撮影技術を学ぶ。表現の一環として2006年より動物の骨格標本の撮影を始め、2008年に初の写真集となる「BONES 動物の骨格と機能美」（早川書房）を出版。これがアートと生物学双方の観点から話題となって多くの新聞・雑誌で高い評価を得る。2009年5月には財団法人三宅一生デザイン文化財団21_21 DESIGN SIGHT 第5回企画展 山中俊治ディレクション「骨」に参加。2011年には「BAROCCO 骨の造形美」（新潮社）、2013年に「REAL BONES 動物の骨格と機能美」（早川書房）を出版

M.ZUIKOレンズと旅する1泊2日

— もう一度あの場所へ —

写真家たちがM.ZUIKOレンズとともにそれぞれの思い出の場所を訪ねる。ファインダーから見えるのは今の自分か、昔の自分か。

オリンパス OM-D E-M1 ／ M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0 ／ 12mm（24mm相当）／絞り優先AE（F2、1/15秒、±0EV）／ISO 1600 ／ WB：オート
バーにしては広めの南国の夜。でも、なぜか隅っこに集まる屈強な男達。こんなお店が近所にあったら、まるで自宅の居間のように通ってしまうだろう

第5回 M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0 × 常盤 響

沖縄県 コザ

ゆったりと音楽に浸る南国の夜

沖縄音楽の奥深さと温かさを教えてくれたあの人たちがいる店へ

沖縄には写真集の撮影やグラビア、広告の仕事で何度も行った。とはいえ、そこで出合うのは自然や古い街並みばかりで、沖縄の人々と親しくなることはなかった。もう5年前になるが、Ustreamという動画共有サービスで「レコ部」という番組を勝手に始めた。僕がレコードを何枚かかかえてボソボソしゃべるだけの番組だが、開始当初から結構な数の視聴者がいた。そんな中、「ライブを見に沖縄に行く」とツイートしたら、面識のない沖縄のお店「南国の夜」のマスターから、うちの店でレコ部をやってほしいと連絡があったのだ。初めてそのお店でDJをしたときの衝撃は忘れられない。同時に、沖縄の人々と知り合うきっかけにもなった。

沖縄で作られたローカルのレコードたち。Keng-Shingくんや興古田さんにもらったものもある。どれも一風変わっていながら素晴らしい音楽なのだ

常盤 響（ときわひびき）：1966年東京都生まれ。1980年代半ばからバンド活動の傍ら雑誌を中心にライター、イラストレーターとして活動を開始。1997年旧知の作家、阿部和重氏の依頼で『インディビジュアル・プロジェクション』を装丁。これを機にフォトグラファーとしての活動を始める。近著に『ハズカシイアタシ』（三空出版）など。http://hibikitokiwa.com/

（左）オリンパス OM-D E-M1 ／ M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0 ／ 12mm（24mm相当）／絞り優先AE（F1.8、1/25秒、±0EV）／ISO 1600 ／ WB：オート
一緒にDJをした3人。手前からYu-chan3、Keng-Shing、Nob-Shit!　初めてDJを聞いたときの衝撃はいまも忘れられない
（右）オリンパス OM-D E-M1 ／ M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0 ／ 12mm（24mm相当）／絞り優先AE（F2、1/25秒、－0.7EV）／ISO 1600 ／ WB：オート
突発的なDJだったのに、みんな朝まで残ってくれた。ありがとう。とても楽しかった!

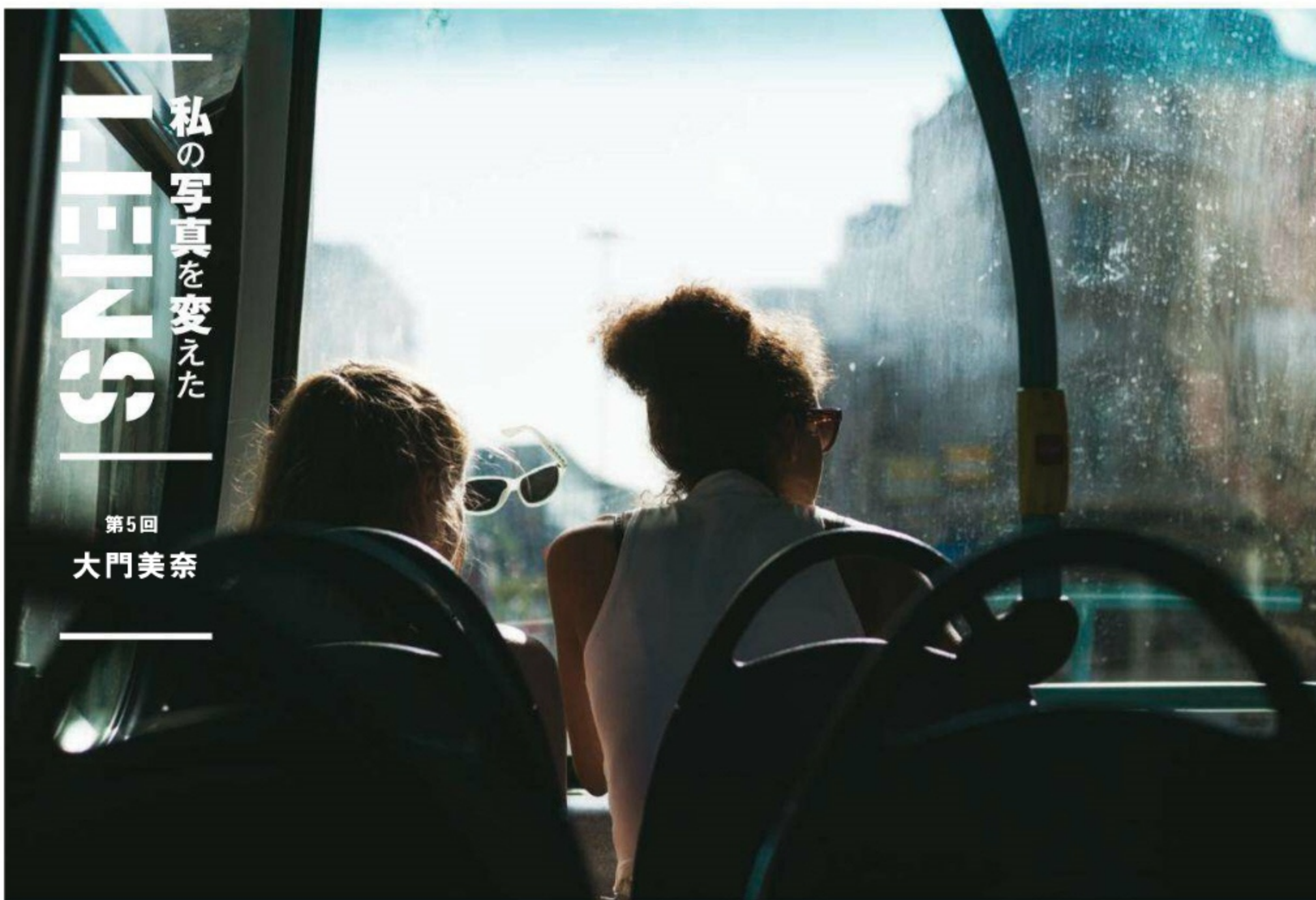
（左）オリンパス OM-D E-M1 ／ M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0 ／ 12mm（24mm相当）／絞り優先AE（F2、1/60秒、±0EV）／ISO 320 ／ WB：オート
Keng-Shingくんに教えてもらったコザにあるレコードを売っている施設に行った。なにしろ壁一面のレコードが目を引く。欲しいレコードがいろいろあった
（中）オリンパス OM-D E-M1 ／ M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0 ／ 12mm（24mm相当）／絞り優先AE（F2、1/500秒、±0EV）／ISO 200 ／ WB：オート
台風でビーチパーティーができなかったので、急遽「南国の夜」の裏口の階段でチキンを焼き始める興古田さん
（右）オリンパス OM-D E-M1 ／ M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0 ／ 12mm（24mm相当）／絞り優先AE（F2、1/2,500秒、±0EV）／ISO 200 ／ WB：オート
昼間から開いているコザ、吉原のスナック。のぞいてみるとどの店も数名の老人がまるで影のように静かに酒を飲んでいた

心地良い音楽に浸り、人懐こい笑顔に囲まれながら南国の夜は更けていく

巨大台風が直撃しそうな10月初旬のある日、福岡から那覇に向かった。なつかしい面々に会うために。4年前に初めて「南国の夜」に行った。マスターの興古田（よこた）さんは一見強面なのに、まるで旧知の友人のように人懐っこい。お店に集う人たちも温かくもてなしてくれた。ともにDJをしたKeng-ShingとYu-chan3の素晴らしいDJにも魅了され、沖縄の音楽の奥深さ、面白さにすっかりハマってしまった。空港でレンタカーを借りて宜野湾市にある「南国の夜」に向かう。本当はこの日の午前中から準備をしてビーチパーティーを開いてくれる予定だったが、あいにくの台風のためビーチは強風で残念ながらお店での開催に。それでも、久しぶりに会う友人たちが集ってくれてチキンを焼いたり、アヒージョを作ったりの室内パーティーになった。夜はDJパーティーを開いてくれて、仕事を終えたYu-chan3、Keng-Shing、Nob-Shit!も駆けつけてくれた。急な開催に、台風ということもありお客さんはそんなに多くなかったけれど、まるでホームパーティーのように和やかに音楽に浸る時間。朝まで音楽を聴き、おしゃべりをして笑いあう。翌日はコザの町をブラブラ。前日にKeng-Shingから教えてもらったレコード店などをまわる。沖縄の60年代の音楽には驚くべきものがある。イメージする沖縄民謡や島唄だけではなく、沖縄のメロディーや雰囲気は残しつつさまざまな試みがされているのだ。その後また「南国の夜」に行き、コーヒーを飲んで空港へ向かい短い旅は終わった。また、寂しくなったら会いに来ようと思いながら。

私の写真を変えた LENS

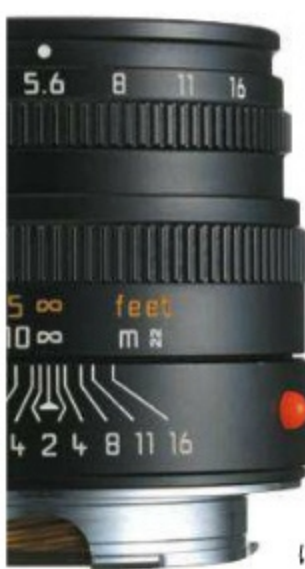
第5回

大門美奈

Leica M-E ／SUMMICRON-M F2/50mm ／絞り優先AE（F3.4 、1/4,000秒、－0.7EV）／ISO 200 ／WB：オート　**ロンドン市内を走るダブルデッカー車内。快晴続きの7月の暑い日。同じく観光客であるだろう少女たちが2階の特等席からまぶしそうに外を眺めていた。何度かシャッターを切ったうちの1枚。振り向いたその顔は、まだあどけなさが残る印象だった**

1 Leica M-E ／SUMMICRON-M F2/50mm ／絞り優先AE（F3.4 、1/180秒、－0.3EV）／ ISO 160 ／WB：オート　**スペイン、グラナダの世界遺産であるアルバイシン地区。兄弟らしい野良犬が体を寄せ合いながら小道へと入っていったので私も後を追ってみることにした。ふと女性が通りがかったのでカメラを向けると、犬は困惑顔、女性は笑顔を向けてくれた**

2 Leica M-E ／SUMMICRON-M F2/50mm ／絞り優先AE（F3.4 、1/1,000秒、－1.0EV）／ISO 200 ／WB：オート　**通勤時間を過ぎたあたりにホテルを出て、いつもどおりサンドイッチと紅茶の簡単な朝食を公園でとった帰り道。人の気配を感じて目線を上げるとスマホを眺める女性。朝陽がその顔を美しく照らしていた**

3 Leica M-E ／SUMMICRON-M F2/50mm ／絞り優先AE（F4 、1/180秒、－0.7EV）／ISO 200 ／WB：オート　**ロンドンのバングラデシュ人街、ブリックレーン。さまざまなスパイスが香る街なかをスナップしながら歩いていると老夫婦が同じポーズ、同じ表情でアイスをかじっていた。長年一緒にいるとやはり似てくるものなのか**

使うほどに手になじんで、離したくなくなる魔法のレンズ

初めて手にしたライカレンズが50mmのスタンダードであるSUMMICRON-M F2/50mmである。描写、コンパクトなサイズ、カメラに装着した際のバランス、すべての点においてしっくりくるレンズだ。というわけで愛用のLeica M-EにはSUMMICRON-M F2/50mmをほぼ付けっぱなしにしている。スナップにはカメラのスタイルも重要。大きなボディに大砲のようなレンズでは誰でも警戒する。慣れない街でも浮くことなく、さりげなくスナップできる、そんな理想の組み合わせだ。

このレンズを手に入れたのはLeica M-Eと同じ約2年前。白い手袋をはめた手で宝飾品のように扱われるカメラを見て、胸が高鳴ったのを今でも覚えている。このカメラとレンズで自分の写真がどのように変化してゆくのだろうかと。今までカメラを単なる道具の1つとしか見ていなかった私にとっては新鮮な感覚だった。

アルチザンのストラップにDeffの革ケース。グレーがかった黒がLeica M-Eのカラーによく似合う

SUMMICRONはしっとりと濃く、SUMMILUXは浅めの色味と乾いた風合いが気に入っている

Leica M-Eはそれまで使用していたカメラとは勝手が違ったため慣れるまでには少々時間を要した。慣れてくると大方の距離を合わせてから確認程度にファインダーをのぞき、独特のシャッター音を響かせてシャッターを切る動作は非常に心地良いものとなった。まるで弓道の所作のような、一連の作法のようにも感じる。また、レンズがコンパクトである、というのは私にとっては重要だ。旅先では荷物も多く、かさばらないというのは行動範囲を広げてくれる。ほぼSUMMICRON-M F2/50mm、たまにSUMMILUX-M F1.4/35mm ASPH.を使用するだけなら、小さなカメラバッグで十分。足の赴くまま歩き、疲れたらビールで喉を潤し、たびたび立ち止まってはシャッターを切る。シャッターチャンスは街のいたるところにあるものだ。手になじんだカメラとレンズなら、撮りたいシーンを逃すこともない。うっすらと青みがかった色味と少し強めのコントラストは、撮ったときに感じた光の印象をより鮮やかに再現してくれる。

昨年の7月に訪れたロンドンは、雨が恋しくなるほどの晴天続きだった。聞けばこれほどのお天気は3年振りのことだという。あれこれとカメラもレンズも持ってきてはいたが、結局いつものSUMMICRONに落ち着いたのは、やはり「いつものレンズ」という安心感によるところが大きかったのだろう。強い日差しの中で逆光にもよく耐え、どんなシチュエーションでも安定した描写を紡ぎ出してくれる。もうこれ1本で十分だと思うほどロンドンでは味わい尽くしたと言ってもよい。使えば使うほど離れられなくなるレンズ、それがSUMMICRON-M F2/50mmの一番の魅力だと感じている。

ライカ
SUMMICRON-M F2/50mm

●発売日：2006年10月9日　●価格：248,400円

レンズ構成：4群6枚　絞り羽根枚数：8枚　開放絞り：F2

最小絞り：F16　最短撮影距離：0.70m　フィルター径：E39

大きさ：約φ43.5×53mm　重さ：約240g

大門美奈（だいもん　みな）：1977年横浜市出身。第1回キヤノンフォトグラファーズセッションファイナリスト。主な写真展に『Portugal』（リコーフォトギャラリー RING CUBE）、『本日の箱庭展』（72 Gallery）、写真集に『Al-Andalus』（桜花出版）がある。http://www.minadaimon.com

デジタルフォト部門

選者：藤田一咲

INFORMATION
・2014年度DCMフォトコンテスト応募要項……P.168
・2014年度DCMフォトコンテスト累計ポイント……P.169

「何が見えますか？」

作者＝Kata（東京都）

カメラ：ソニー Xperia ZL3　レタッチ：Photoshop CS5にて連写を合成、色調整、トリミング
撮影地：大阪府豊中市

講評　虫めがねをのぞくお孫さんに、「何が見えますか？」とおばあさんが静かにほほ笑みながら問いかけている、どこの家庭でもごく自然に見られるような情景。お孫さんとおばあさんの和やかな時間の1コマです。何気ない瞬間ですが、どこか遠い昔のように懐かしくて温かい。しかし、色調が調整されている効果でしょうか、いまどきのテレビドラマや映画の中の演出された1コマのような、妙に非現実的でクールな感覚の残る、不思議な雰囲気を醸し出している作品です。それは現代アート作品に通じるような表現スタイルを感じさせます。

アドバイス　一見すると、普段のままの室内で、お孫さんとおばあさんに向けて素直にシャッターボタンを押してとらえられた1枚のように見えます。しかし、撮影はスマートフォン、その後、レタッチソフトで2枚の写真を合成、色調整して仕上げたとのこと。撮る感性と、見せる表現技術による素晴らしい作品になっています。

副賞
エクストリームプロ
SDHCカード 16GB
提供：サンディスク株式会社

準優秀賞 「横浜中華街の夜」 作者 = 小野田浩司(東京都)

カメラ:ソニー Cyber-shot DSC-RX1　レタッチ:Photoshop Lightroom 5にてRAW現像、Photomatix Pro 5.0にてHDR化、Photoshop CCにて合成、色調補正　撮影地:神奈川県横浜市

講評 夜の横浜中華街の建物と人ごみの様子を、この作者独自の絵画のような作風で表現しています。どのくらい手が込んでいるのでしょう? この作品はカラーとモノクロ、それぞれについて約10枚程度撮影し、RAW現像、HDR化し、それを1枚に合成して、最終的に色調補正を加えているそうです。作品作りにかける、作者の強い情熱を感じずにはいられません。「1シャッター撮って出し」の作品が持つ瞬発力の強い表現とは異なる、持続力で表現される世界を作者は作り出しているのです。

アドバイス この手の込んだ作風から、この作品の作者が一目でわかる人もいるでしょう。独自の作風を持ち、表現し続けることは、強み、苦しみ、また励み、楽しみにもなって作品力をアップさせます。

佳作 「立ち枯れ」 作者 = Kuyt(東京都)

カメラ:ニコン D800E　レンズ:AF-S NIKKOR 70-200mm f/2.8G ED VR II
レタッチ:Photoshop Lightroom 5にてRAW現像　撮影地:北海道上川郡 美瑛

講評 立ち枯れの木々が水面に映る様子を、あえてコントラストの強いモノクロで表現。より静謐(せいひつ)な世界を強調させながら、動きも感じさせる、抽象絵画のような面白さがあります。

アドバイス 構成の素晴らしいこのような完成度の高い作品では、ときとしてタイトルを見るまで何が写っているのか分からない人もいます。何か、ヒントがあっても良いかもしれません。

佳作 「ミラーの街」 作者 = フォト自由人(神奈川県)

カメラ:ニコン COOLPIX P7800
レタッチ:Photoshop 7.0にてレベル補正
撮影地:神奈川県海老名市

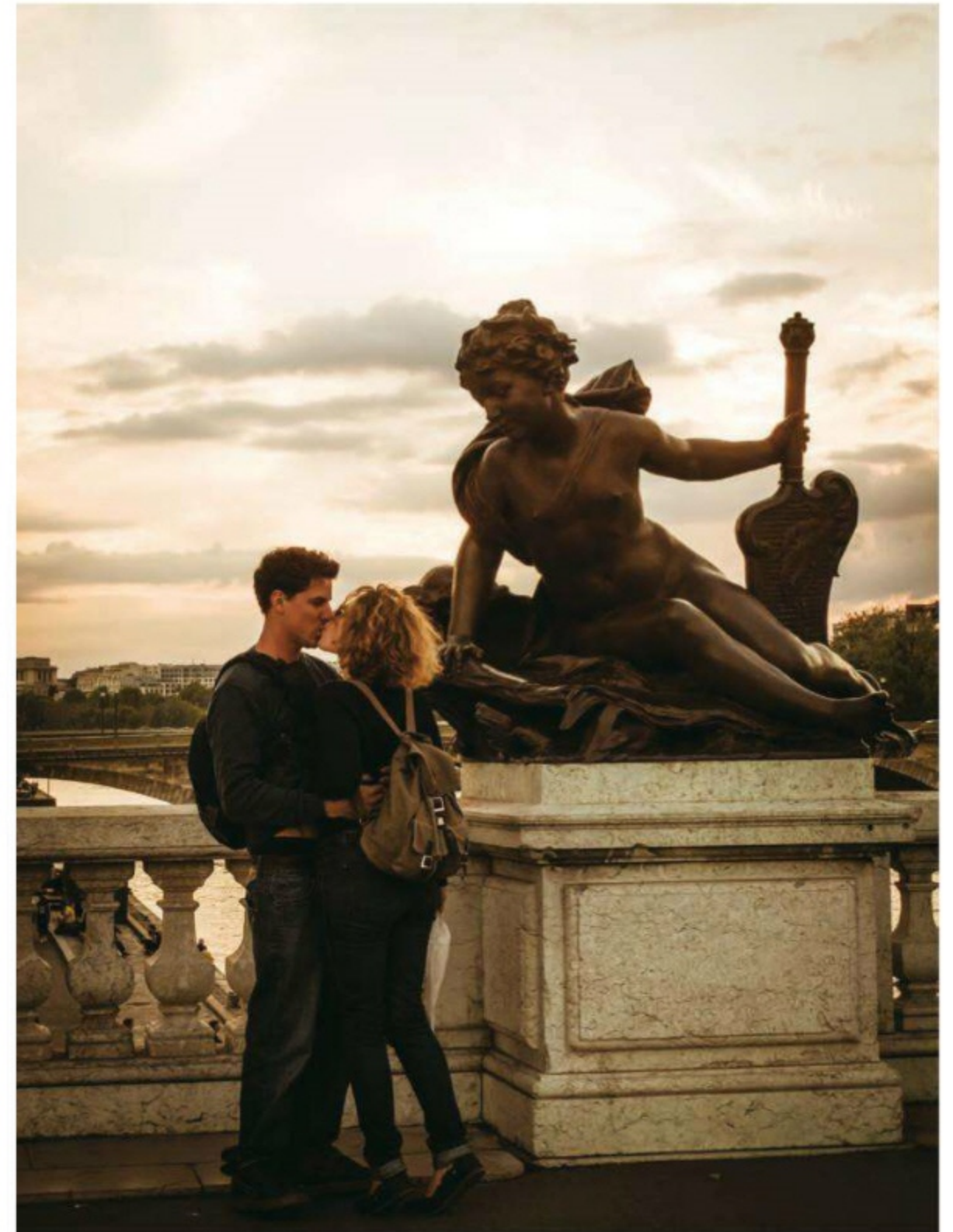
講評 ミラーに映るゆがんだ風景が面白い作品。こんなにゆがんでミラーの役目を果たしているのか気になりますが、街の中の面白いものに目がいく、作者の写真ライフをマネたいですね。

アドバイス 画面にミラーの枠を一部入れて、ミラーを撮ったことを示しても良いでしょう。また、背景や、周囲のゆがみのない風景も入れると、不思議な感じが一層際立ち、面白さも倍増しそうです。

準優秀賞 「eternal moment」 作者 = 本田厚子(栃木県)

カメラ:オリンパス OM-D E-M1
レンズ:M.ZUIKO DIGITAL ED 12-40mm F2.8 PRO
レタッチ:Photoshop Lightroom 5にてRAW現像、階調、コントラスト、WB、彩度を調整
撮影地:フランス共和国 パリ

講評 パリのアレクサンドル3世橋のニンフ像の前でキスするカップル。パリを歩くと、キスする恋人たちを目にすることがしばしばあります。しかし、異国でキス中の見知らぬカップルにカメラを向けるのは、なかなか度胸がいるものです。作者によると、この2人はニンフ像の撮影をしていたら、たまたま現れて写真に撮ることが出きたそうですが、隠し撮り風ではなく、堂々と撮っている点に好感が持てます。背景の雲の色味や雰囲気、ニンフとカップルの構図が絶妙で、すてきにまとまっています。愛が感じられる写真って良いですね。

アドバイス 人にカメラを向けるときは、たとえ公道上でのスナップでも「肖像権」が頭をよぎります。悪意ある表現でなければ良し、とするのもひとつの考え方としてアリかもしれませんね。

佳作 「ネオンの中を走る」 作者 = かぶちん(神奈川県)

カメラ:キヤノン EOS 6D
レンズ:EF70-200mm F2.8L IS II USM + CANON EXTENDER EF2×III
レタッチ:Digital Photo Professionalにて彩度、コントラスト、露出を調整、トリミング
撮影地:東京都新宿区

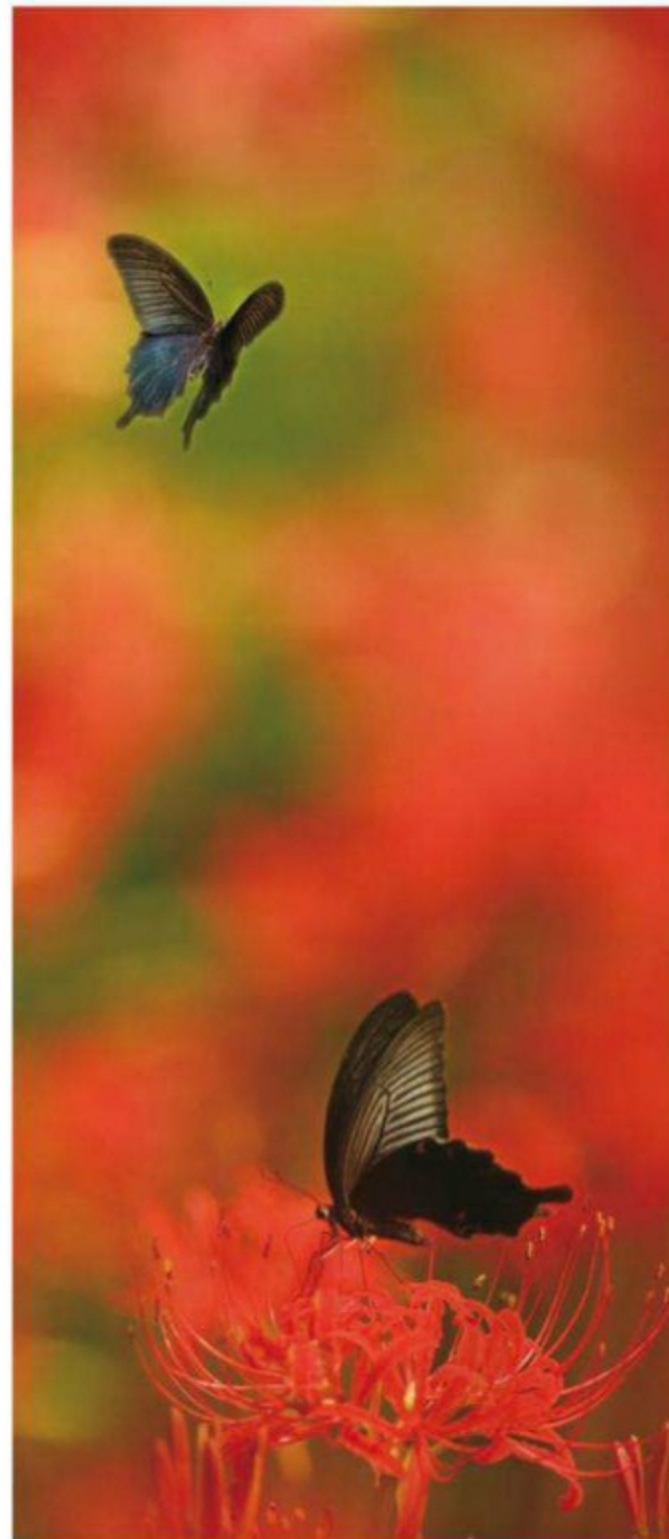
講評 都会のネオンをバックに走る電車を、横方向の流し撮りで幻想的にとらえています。画面は水平を保ち、ネオンがきれいに流れ、電車がはっきり見えているのが高いポイントです。

アドバイス 流し撮りは、技術力と感性が問われる撮影手法。この作品も何度もトライした結果でしょう。電車がもう少し画面中央寄りで、下側がもう少し見えていても良いでしょう。

佳作 「並び」 作者 = 磯崎輝彦(大阪府)

カメラ:ニコン D7100
レンズ:タムロン AF 18-250mm F/3.5-6.3 Di II LD Aspherical [IF] MACRO
レタッチ:Photoshop 4.0にて濃度を調整
撮影地:滋賀県高島市

講評 合成写真かと見まごうほどの、あまりの猫の並び方の素晴らしさに、思わず、ニャニャ? と声をあげそうになる人も少なくないのではないでしょうか。そんな楽しさがあります。

アドバイス くつろぐ数匹の猫に警戒心を抱かせずに、良い表情、姿勢で撮れています。できれば、もう少し上方から角度をつけ、奥の猫まではっきり見えるように撮ってみたかったですね。

「花蝶絵図」

作者 = 市川達夫(埼玉県)

カメラ：キヤノン EOS 7D　レンズ：EF300mm F2.8L IS USM　レタッチ：Photoshop 9.0にてフレアー合成、レベル補正
撮影地：埼玉県日高市 巾着田

講評 「曼珠沙華」と「チョウ」は、季節柄か、今回、非常に多くの作品が寄せられました。この作品は望遠レンズの特性をよく生かしながら、シンプルな構図、花の静とチョウの動の対比、そして色のバランスが絶妙です。作者ならではの、絵画と写真の融合を意識した作品作りが見事です。

アドバイス 独自の作風やテーマを維持し、追求していくと、どうしてもマンネリ化に陥りやすくなります。この作者の柔軟な視線と、さまざまな題材で表現世界を広げているところを見習いたいですね。

「飲みたいケロ」

作者 = 川浪敏明(佐賀県)

カメラ：パナソニック LUMIX DMC-GF2
レンズ：オリンパス M.ZUIKO DIGITAL 14-42mm F3.5-5.6 Ⅱ R
レタッチ：SILKYPIX Developer Studio Pro 4にてコントラストを調整
撮影地：佐賀県佐賀市

講評 早朝でしょうか。赤味のある空の色と、カエルの緑の体色、さらに明けゆく空を映す自販機の明かり。この色の組み合わせがとても印象的で、透明感と空気感があふれる作品です。

アドバイス カエルは早朝の寒さに、自販機に張り付いて暖を取っていたのかもしれませんが、そこに気づき、うまいタイトルをつけました。光のつかみ方、絞りの選択も、良いですね。

「里山に降る雨」

作者 = 中村 勲(大阪府)

カメラ：ニコン D300
レンズ：AF-S VR Zoom-Nikkor 70-300mm f/4.5-5.6G IF-ED
レタッチ：Capture NX 2にてRAW現像 コントラスト　シャープネス　傾きを調整
撮影地：岡山県岡山市

講評 雨は狙ったものではなく、急に降り出したのでしょう。そんな雨の中、ズームレンズの望遠側の圧縮効果を生かし、根性とでも言いたくなるような粘り強さで見事に撮っています。

アドバイス タイトルのように、里山の様子を表すためにほぼ全ピンですが、目は列車に向かいます。列車を主被写体にし、背景はもう少しぼかし、タイトルもひと工夫するのも悪くなさそうです。

あと少しでランクアップ！ 光芒や透明感のある花が魅力的。トリミングで花の密度を高めてみては？

「秋桜」

作者 =綾(北海道)

カメラ：ニコン D7000　レンズ：シグマ 10mm F2.8 EX DC FISHEYE HSM
レタッチ：Windows Live フォト ギャラリーにて明るさ調整　撮影地：北海道札幌市

講評 白い雲が浮かぶ秋の青空の下、魚眼レンズの特性や逆光を生かしてコスモスを透かし、空の色との対比も美しく撮っています。光芒が良いポイントになり作品力を高めています。

アドバイス コスモスは写真に撮る人が非常に多い、人気の花です。それはまた、作品として成立させるハードルが高いことを意味します。特に気をつけたい点は、空間の処理です。コスモスの花は密集しているように見えて、実際にカメラを向けると、意外とスカスカに間のびした空間があるように見えます。魚眼レンズを使うと、特にその空間処理が難しくなります。地面や左右の空間の入り方に気を配ると画面が引きしまって良いでしょう。

「雲より高く」

作者 = 駒村優宇(千葉県)

カメラ：ニコン D810
レンズ：AF-S NIKKOR 70-200mm f/2.8G ED VR Ⅱ
レタッチ：Photoshop Lightroom 5にて彩度、コントラストを調整
撮影地：千葉県柏市

講評 横に細長い画像の上下を黒く落として、さらにパノラマ感を強調したような都会の風景写真。たれ込めた雲のニュアンスと、いく筋もの光芒の様子が、墓場に光が差す光景のよう。不気味な感じと、一抹の希望が待つ未来を暗示するかのような面白い趣があります。

アドバイス 光と陰をうまくとらえています。それもそのはず、これは偶然の１枚ではなく、光芒のようすを見ながら何回もシャッターを切ったそう。粘る、たくさん撮る、選ぶ。大切ですね。

「デリーお宅訪問」

作者 = 櫛田雄一郎(インド)

カメラ：ニコン D700
レンズ：AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8G ED
レタッチ：Photoshop Lightroom 5にてWB、コントラストを調整
撮影地：インド共和国 デリー

講評 少年と、奥の方で白い歯を見せて笑う、少年のお父さんらしき人の表情が、素朴でほのぼのしていて良いですね。全体の色調も落ち着いた鮮やかさがあり、異国的でいい雰囲気です。

アドバイス 人にカメラを向けても嫌がられずに撮影できるのは、写真以前の作者の人柄によるものでしょう。瞬時に人と良好な関係性を築けるのも、写真術では大切なポイントです。

「ひと休み」

作者 = NEO373(滋賀県)

カメラ：ニコン Nikon 1 V3
レンズ：1 NIKKOR VR 70-300mm f/4.5-5.6
レタッチ：Capture NX 2にてRAW現像、明るさ、コントラスト調整
撮影地：京都府亀岡市

講評 写真を見る側も、ホッとため息がもれるような癒やしの１枚。ズームレンズの望遠側の特性を生かし、農家の人の前後にある彼岸花をきれいにぼかした遠近感や、圧縮効果が効いています。

アドバイス 人物が画面左側にいる構図は、中央よりも良いですね。ただ、画面は上下に２分割した構図よりも、ほぼ３分割にして、下の方の緑の部分を削り、上の方に空間を作ると落ち着きが良さそうです。

「密談」

作者 = 坂元治代(三重県)

カメラ：ソニー Cyber-shot DSC-RX100
レタッチ：Photoshop Lightroom 5にてモノクロ化　撮影地：岐阜県大野郡 白川郷

講評 雨が振っている中、ひとつの傘の下に身を寄せる、とても仲の良さそうな３人の少女。何をしているのでしょう？ 何だか謎めいていて、少女期を題材にした映画の１コマを見るような、詩的で幻想的な雰囲気がある作品です。少女たちを画面の左側に寄せた構図が効いています。

アドバイス 背景の木々や、まきが物語性を高めていますが、もう少し、ぼけていても悪くないように思います。また、モノクロはセピアにしてみると、雰囲気をさらに強く演出できそうです。

入選「屏風絵寸景」

作者 = 野口重吉（福岡県）

カメラ：ニコン D810
レンズ：カールツァイス Distagon T* 1.4/35
レタッチ：ACDSeePro5にてゆがみ、構図、色彩、コントラストを調整、トリミング
撮影地：福岡県福岡市

講評 タイトルの「屏風絵」にあるように、あたかもびょうぶ絵の最もポピュラーなスタイル、六曲一隻（ろっきょくいっせき）風に6枚の美しい植物のシルエットを16：9のひとつのフォーマットに納めたような作品。びょうぶ絵風の背景の色調も効果的です。目のつけどころや発想が良いですね。

アドバイス 蛍光灯など明かりの写り込みで絵画的な作品に現実感が出ていますが、できたら消灯するなどひと工夫しても良いでしょう。人物のシルエットを入れても悪くなさそうです。

佳作「幽玄の朝 其の四 目覚め」

作者 = 亀田晃幸（北海道）

カメラ：ソニー α700
レンズ：70-200mm F2.8 G SSM Ⅱ
レタッチ：SILKYPIX Developer Studio Pro 6にてRAW現像、覆い焼き、焼き込み、コントラスト、アンシャープマスク、彩度を調整
撮影地：北海道足寄郡

講評 秋色に色づいた木々が映る水面。そこを静かに流れる朝靄（あさもや）に日が差してピンク色に染め上げ、森が目覚めるかのような美しい世界。色彩や空気感など、深い味わいがあります。

アドバイス 水面を境に画面を上下に2分割し、幅1/3に色づいた木々を配した、作者の構図への高い意識が伺われます。左の木々はもう少し中央に寄っていても落ち着きは悪くなさそうです。

佳作「Line」

作者 = 井上幾雄＜めるちゃん1＞（大分県）

カメラ：キヤノン EOS-1D X
レンズ：EF24-70mm F2.8L Ⅱ USM
レタッチ：Photoshop Lightroom 5にて明るさ、コントラスト、トーンカーブを調整
撮影地：大分県

講評 傘を差した女性のうしろを、3羽の鳥が追いかけているようにも見えるユニークなモノクロ作品。画面を白と黒で大胆に2分割した構図が、どこかレトロでオシャレ。物語を感じます。

アドバイス 平面的で端正な構成が、演出写真で知られる植田正治作品に通じるような雰囲気を醸し出しています。偶然のシャッターチャンスをこの構図でものにする腕前はとても見事です。

佳作「night flight」

作者 = Naoki Tomiyama＜Noktom64＞（沖縄県）

カメラ：ニコン D610
レンズ：シグマ 12-24mm F4.5-5.6 Ⅱ DG HSM
レタッチ：Photoshop Lightroom 5にて色温度、露光量、コントラスト、明瞭度、彩度を調整
撮影地：沖縄県宮古島市 池間島

講評 満天の空と灯台。今でこそ、このような撮影はさほど難しくなくなりましたが、ひと昔前は絵本や絵画での表現世界です。それだけに、夢があってロマンチックですてきな作品です。

アドバイス 星の動きを止め、ノイズは少なく、とされる夜空撮影。星は中途半端に流さない方が良いでしょう。しかし、ノイズは作品の味になるようにも思います。いろいろ試してください。

佳作「Cotton Days」

作者 = 菅野雅夫（埼玉県）

カメラ：キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ
レンズ：シグマ 35mm F1.4 DG HSM
レタッチ：Digital Photo ProfessionalにてRAW現像、シャドウ、コントラストを調整、Photoshop CCにて調整
撮影地：東京都港区

講評 撮影会での作品。コットンのような柔らかい日差しの中でほほ笑む、モデルの優しい表情をうまくとらえています。コットンに包まれたハートのようにハッピーな気分になれます。

アドバイス 大人数でのモデル撮影会では目線をもらうのが難しいようですが、これは個人撮影なのか、表情をうまくとらえています。ソファにかかった手の白飛び傾向が少し気になるので注意したいところです。

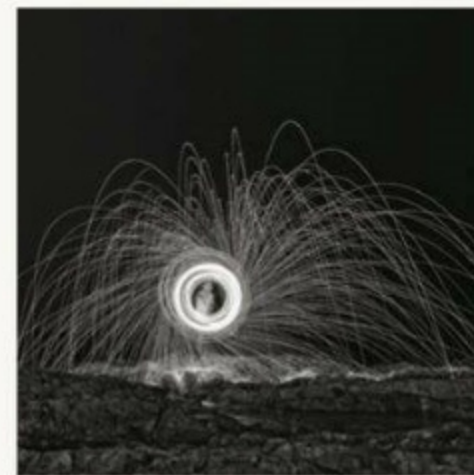
佳作「楽園につづく鉄路（みち）」

作者 = 松本共栄＜T.Y.R＞（岩手県）

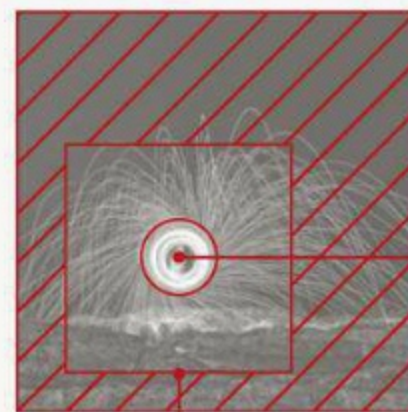
カメラ：ニコン D800E
レンズ：AF-S NIKKOR 70-200mm f/2.8G ED VR Ⅱ
レタッチ：Camera RawにてRAW現像、Photoshop CCにて色調調整、ソフトフォーカス風処理
撮影地：岩手県中西部

講評 オレンジ色に染まった画面の色調と、リズム感良く並んだ4匹のトンボ、その背景の玉ぼけになって光るたくさんのトンボが、晩夏のローカル線のイメージを豊かに演出しています。

アドバイス 自然を対象に狙い通りに撮るには、粘り強く、数多くシャッターを切ることが大切です。この作品もそうやって生まれたのでしょう。タイトルはもう一考したいですね。

子どもの姿に温かみを感じる作品。円を中心にして真四角写真をさらに魅力的に

佳作「放物線」

作者 = 橋本武昌（大分県）

カメラ：キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ
レンズ：EF24-105mm F4L IS USM
レタッチ：Photoshop CCにてモノクロ化、照度、コントラストを調整
撮影地：大分県大分市

講評 火の粉をグルグル回しながら、その放射線状の光跡をモノクロで表現。モノクロにすることで、夜の闇の静謐（せいひつ）感と花火の白い光跡を、より強く、印象的に美しく見せています。

アドバイス 火の粉を回す円の中心に子どもの姿が見えていることが、この作品を単にデザイン的な面白さで終わらせず、人間的な温かみを感じさせる作品になっています。せっかくの真四角写真による表現ですから、この子どもの姿が見える円を画面の中央付近に持って来てはどうでしょうか? 日の丸写真的な面白さも加わります。また上下の空間をもう少し狭くして、真四角写真の持つ緊張感や、視線を中央に誘導する効果を狙うのも悪くなさそうです。

入選「Tonight・・」

作者 = 小向朋恵（東京都）

カメラ：キヤノン EOS 6D　レンズ：EF24-105mm F4L IS USM
撮影地：東京都

講評 月明かりが差し込む建物の、深夜の情景をモノクロで表現。静謐（せいひつ）な夢を見るような、シュールで超現実的な世界に誘われます。この作品もまた、光と陰の大胆な構成が巧みで素晴らしい。そしてアイデアに富み、独創的、夢や物語性の高い作品に仕上がっています。

アドバイス このような作品のアイデアはどこから生まれ、どこで撮影されるのでしょう? 階段は自宅マンションでの撮影とのこと、撮影のアイデアや場所は、案外身近にありそうです。

藤田一咲先生の今月のひとこと

今期のコンテストも、今回を含め残すところ、あと3回。回数を重ねて見えてくるのは、みなさんの写真の楽しみ方です。毎回、いろいろな被写体に挑戦する人もいれば、特定のジャンルや被写体にこだわる人、自身の作風、撮影スタイルを追求する人などさまざまです。これは全体的に見れば、表現の多様なスタイルが寄せられる点で非常に良いことだと思います。特に、毎回自身の作風を追求する人の作品にはマンネリがなく、さらに深化、変化が見られることは素晴らしいことで、心から応援したくなります。その一方で、多様性に富んでいるように見える多くの作品群は、個別に見ていくと、平均化された表現であることが少なくありません。平均化とは技術的には上手なのに、それぞれに差がないということです。作品に際立った個性や独自の表現スタイルが必ず必要だとは思いませんが、ほかの人とは異なる視点を意識的に持つことは、作品力を高める上で良いことです。というと、難しそうですが、撮影の時間帯やアングル、レンズなどを変えるだけで、作品は目を引くものになります。そんな、いつもとちょっと違う作品をお待ちしています。

※作者名の< >内はGANREFネームを表します。応募に関する詳しい説明は、http://ganref.jp/photo_contestsをご覧ください

2013年の紅葉フォトコンテスト 結果発表

選者：石橋睦美

毎年恒例の「紅葉フォトコンテスト」。今回も紅葉の魅力が伝わる力作が多数寄せられました。今回の選者は、昨年のデジタルフォト部門選者でもあった石橋睦美氏。ここではその選考結果を石橋氏の選評とともにご紹介いたします。

「晩秋にけむる里山」

作者 ＝ 大嶋義孝（愛知県）

カメラ：キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ　レンズ：EF24-105mm F4L IS USM　レタッチ：Photoshop Lightroom 5にてコントラストを調整　撮影地：愛知県豊田市

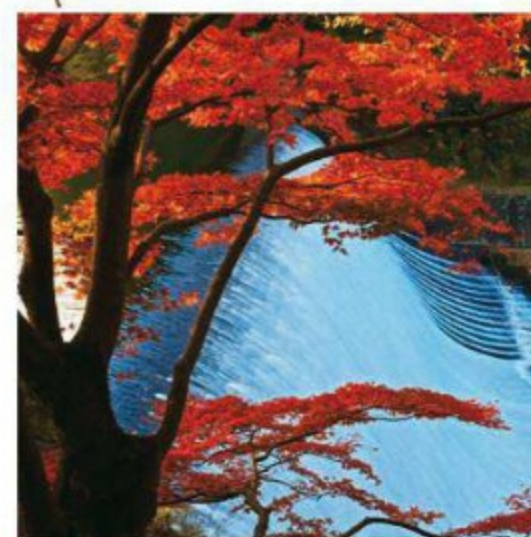
講評　この作品を見ていると、昔懐かしい山里から秋の香りが匂い立ってくるように感じます。荒削りな構図が現実味を帯びさせ、その場の雰囲気を画面に投影させているからなのでしょう。前景となる紅葉にだけピントがあっていて、遠景は輪郭がわかる程度にぼかしている。この画面構成が、清涼な秋の朝の空気感を、画面に反映させているのです。さらには、背景の青藍を帯びた色調が、紅葉を映えさせる上で大きな役割を果たしています。

「なんやろか……」

作者 ＝ 柳谷行勇（奈良県）

カメラ：キヤノン EOS 7D　レンズ：EF70-300mm F4-5.6L IS USM
レタッチ：Digital Photo Professional にてRAW現像、彩度、コントラストを調整
撮影地：奈良県奈良市 奈良公園

講評　作者は、私が本誌フォトコンテスト デジタルフォト部門の審査を担当していたときから、毎月素晴らしい作品を応募されていました。奈良公園周辺が主な撮影地らしく、鹿をモチーフにした秀作も多数ありました。そんな記憶の中でも、この作品は傑作です。画面構成が素晴らしく、前景となる木立をかすかにぼかし、鹿だけにピントをあわせている。そのために森の中から鹿を見ているといった臨場感が伝わってきます。

「満染」 作者 ＝ 田上 徹（熊本県）

カメラ：ニコン D800E
レンズ：AF-S NIKKOR 50mm f/1.4G
レタッチ：Apertureにて露出を調整
撮影地：大分県竹田市

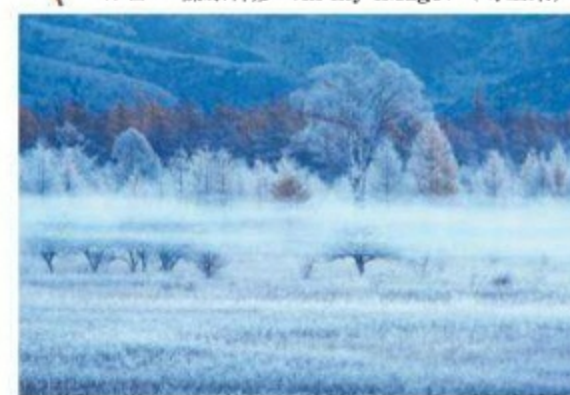
講評　作者はこの場所へ幾度も脚を運び、画面構成を練って撮影されたそうです。そのこだわりが、秋を表現する素晴らしい作品に仕上げたのです。紅葉の樹形と流れの曲線が１枚の画像の中に調和して、安定感のある構図が描かれています。

「宵の霊場」 作者 ＝ kochan（大阪府）

カメラ：ニコン D800
レンズ：AF-S NIKKOR 24-120mm f/4G ED VR
レタッチ：Capture NX 2にて露出、コントラスト、WBを調整
撮影地：奈良県吉野郡

講評　雲海を背景に、明けやらぬ吉野山の門前町を撮影した作品です。理想的な風景を目にした作者の感動が伝わってくるようです。さりげなく前景に配した桜の紅葉が秋の季節感を映し、作品価値を高めています。

「第一章・霧氷と黄葉の小田代」

作者 ＝ 篠原幹彦<in my iMage>（埼玉県）

カメラ：キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ
レンズ：EF70-200mm F4L IS USM
EXTENDER EF1.4×Ⅱ
レタッチ：Digital Photo Professionalにて RAW現像、彩度を調整
撮影地：栃木県日光市

講評　霧氷に彩られた湿原に漂う朝霧、その奥には黄葉したカラマツの木立が写し込まれています。こんな情景を目にしたら、誰もが感動することでしょう。作品は素直な目線で、晩秋に生じた美しい自然を映像化しました。

石橋睦美（いしばしむつみ）：1947年千葉県生まれ。10代後半から日本の自然を知る目的をもち、各地を歩く。1975年ごろから東北地方の自然にテーマを絞りはじめる。以後、湿気に培われた日本独特の自然美を表現することをライフワークとする。森をテーマにした著書を多数出版

「岩の上にも」

作者 = Fallen-Roses(埼玉県)

カメラ：オリンパス OM-D E-M5　レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-50mm F3.5-6.3 EZ
撮影地：埼玉県東松山市

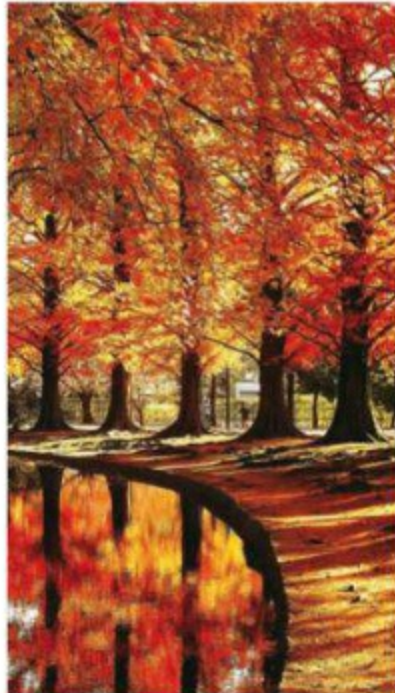
講評　黄葉盛りのイチョウの大木を大きく取り入れて、奥にさりげなく本堂の一部を配した構図が見事です。この画面構成によって、秋の風情に包まれる寺の静けさが感じ取れるのです。一見するとインパクトが弱いようにも思える映像なのですが、この作者の感性はかなりハイセンスだと推察いたします。黄葉と樹形とお堂を配した映像から、気品が香り立ってきます。

「鏡の庭」作者 = youkey(北海道)

カメラ：ペンタックス K-5 Ⅱs　レンズ：FA31mmF1.8AL Limited
レタッチ：Capture One Pro 7にてWB、コントラスト、露出を調整　撮影地：北海道札幌市 中島公園

講評　茶室の庭先に置かれたちょうず鉢に散り落ちた黄葉と、水面に映る秋色の葉形をモチーフにして、和の情緒を描いた作品です。ただ、この映像の場合はパンフォーカスで撮りたいところです。

「最高の秋まで待てない！「ジョギング編」」

作者 = 相賀望弘(岡山県)

カメラ：富士フイルム FinePix HS30EXR
撮影地：岡山県岡山市

講評　樹間の人物に焦点を当てて、秋の散歩を楽しむのどけさを表現しようと試みた作品だと思いました。ただ、コメントを読むと、作者は水辺の風景に興味があったようです。だからでしょう。前を行く人物の配置が中途半端になってしまいました。

「ほっこり紅葉絨毯」

作者 = 金泉貴之(千葉県)

カメラ：ニコン D60
レンズ：AF-S DX NIKKOR 35mm f/1.8G
レタッチ：Photoshop Lightroom 5で露光量を少し下げました。
撮影地：京都府京都市 三千院

講評　コケの上に散り落ちたモミジの落ち葉に包まれるように、一体の像が置かれています。それだけで、心が和んでくるように思える映像です。きっと作者の心も穏やかだったことでしょう。季節の移ろいを控えめに表現しています。

「美馬牛晩秋」

作者 = 笠島英雄(北海道)

カメラ：ニコン D700　レンズ：シグマ APO 120-400mm F4.5-5.6 DG OS HSM
レタッチ：Capture NX 2にてRAW現像、露出、ハイパス、シャドウ、コントラスト、ハイライトを調整
撮影地：北海道上川郡

講評　北海道へ出かけるといつも感じるのですが、風景の広がりと、人間の生活圏のバランスが健康的だと思うのです。自然空間が大きく、そこに人間と動物が共存できる環境が生じている。作品は美馬牛小学校の周辺に広がる秋の林野と、象徴的な建築物を組み合わせて清らかな空気感を表現しています。こんな場所で教育を施されたら、子どもたちの心にゆとりが生まれることでしょう。

「Rivalry」作者 = 駒村優宇(千葉県)

カメラ：ニコン D600　レンズ：シグマ APO 50-500mm F4.5-6.3 DG OS HSM　レタッチ：Photoshop Lightroomにて　彩度、コントラストを調整　撮影地：東京都台東区 上野恩賜公園

講評　不忍池の水上を飛び交うユリカモメをモチーフにした作品です。作者はイチョウの黄葉を映す水面を背景にして、深まりゆく秋を表現したのです。都会にも、野鳥が飛行することのできる環境が存在することを教えてくれる作品です。

「紅椛」作者 = 後藤龍二(福島県)

カメラ：パナソニック LUMIX DMC-GH3
レンズ：LEICA D VARIO-ELMAR 14-150mm/F3.5-5.6 ASPH./MEGA O.I.S.　撮影地：福島県福島市

講評　紅葉した「椛」の葉が地面に散り敷かれ、細やかな文様を描き出しています。そこにつるべ落としの斜陽が差し込み、秋の午後の風情を浮き上がらせました。とても情緒的な作品です。彩度が強すぎて質感描写が弱いところだけが残念です。

「紅葉」作者 = 櫻井 武(石川県)

カメラ：ニコン D4　レンズ：AF-S NIKKOR 58mm f/1.4G
レタッチ：Photoshop CS6にて彩度、コントラストを調整、2枚を合成
撮影地：石川県金沢市

講評　スタジオで撮影した女性を、神社で撮影した映像にはめ込んでつくり出された作品です。そのせいでしょうか、この作品を見ていると、どこかあでやかで、現実とはかけ離れた空気感があります。モデルのたたずまいが良く、そんな思いを抱かせるアートな作品です。

「今日も来たのですか」

作者 = sumipoko(北海道)

カメラ：キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ　レンズ：EF300mm F2.8L USM
レタッチ：Digital Photo Professionalにて彩度を調整　撮影地：北海道江別市

講評　イチョウの落ち葉が散り敷かれた場所で、ほほを膨らませて食べ物をほうばるエゾリスがとてもかわいらしく、思わず笑みがこぼれてきます。そして黄色い落ち葉がリスを優しく包む布団のようにも見えてきます。冬が来る前に、栄養を蓄えようと必死に動き回る野生動物の息づかいが聞こえてくるよう。作者の動物への優しみが伝わってきます。

選考を終えて

今年は例年に比べると、やや早く秋が訪れているようです。デジタルカメラマガジンが毎年開催している「紅葉」と「桜」の各季節をテーマとしたフォトコンテストの審査を、今回から担当することとなりました。「紅葉」がテーマの今回は1,200点ほどの応募があり、秋色をモチーフにしたさまざまな作品を拝見させていただきました。ただ紅葉の写真というのは、どうしても秋色の鮮やかさに目を奪われてしまい、テーマ性がぼやけてしまう傾向があります。入賞作品をご覧になっていただければわかると思うのですが、すべて撮影意図がはっきりした映像で、そこに秋色が添えられている、といった画面構成になっています。私は、秋色は画面を飾る上の装飾であって、紅葉が画面に映し込まれることで、映像が華やかになる被写体だと考えています。簡単に言えば、画面構成上での主役になりづらい被写体だと思っているのです。秋色に惑わされず自分の感性を働かせて、秋の風景を見つめて見れば、自己表現が顕著な映像表現ができるはずです。次回も秀作をお待ちいたしております。

2014年度の紅葉写真を大募集!

デジタルカメラマガジンでは、2014年にデジタルカメラで撮影された紅葉の写真を募集します。ご応募いただいた作品の中から、入賞作品を選定し、2015年末発売の本誌に掲載予定です。みなさまからのご応募をお待ちしています!

応募期間　2014年11月20日～2015年3月20日
応募方法　Webサイト「GANREF」(http://ganref.jp/)内の「コンテスト」からご応募ください

プリント部門

選者：岡嶋和幸

各作品の枠線はプリント用紙の縁部分を表しています

優秀賞 「斜陽の部屋」 作者＝夏目冬彦（北海道）

カメラ：キヤノン EOS 5D MarkⅢ　プリンター：キヤノン PIXUS PRO-10　用紙：ピクトリコ ピクトリコプロ・ホワイトフィルム
撮影地：北海道夕張市

講評　発電所として使用されていた施設で撮影されたそうですが、使われなくなったその瞬間から時間が止まってしまったような、でもゆっくりと流れていて、そこにあるいろいろなものが少しずつ風化してゆく様子が感じられます。そのような光景が、まぶしい光に照らされて美しく目に飛び込んできました。人がここにいたはずなのに、その気配はまったくなく、それよりも電話機や鉛筆削りなど取り残されたものの存在感がそれぞれに強く感じられます。サビやカビなどのディテールがこの空間を演出する模様のようでうまくなじんでいて、その細部までを再現したプリントに目を奪われました。

アドバイス　顔料プリンターだとホワイトフィルムのポテンシャルを十分に引き出すことはできません。染料プリンターを使用するか、あるいはマット系で白色度が高めのファインアート紙などのほうがこの作品の雰囲気に合っていると感じました。

副賞
Lowepro
パスポートスリングⅡ
マイカ／グリーン
提供：ハクバ写真産業

準優秀賞 「situation number 4」 作者＝清水茂行（千葉県）

カメラ：キヤノン EOS 5D MarkⅢ　プリンター：キヤノン PIXUS PRO-10　用紙：ピクトリコ ピクトリコプロ・フォトキャンバスペーパー　撮影地：千葉県船橋市

講評　視点や発想が独創的な作品です。作品名が何を意味しているのかよく分からないのですが、見ていると自然に画面の中のパズルのような世界へ引き寄せられる感じがします。町中でのこのような色づかいは海外ではよく目にしますが、日本でも着眼点と画面構成しだいで、うまく切り取ることで面白い作品になりますね。正対して真っすぐにとらえた中の緑のアクセントも効果的です。白い壁も上の方は色が少し違っていて、下の方はひびが入っているなど、じっくり観察すると色だけでなく各部のディテールも楽しめます。

アドバイス　手前にある植物の画面下側がほんのわずかにぼけていて描写が甘くなっています。絞りを絞り込んだり、ピント位置を変えたりしてさらに被写界深度を深くし、パンフォーカスに仕上げた方が作品の完成度が増します。

佳作 「お不動さん」 作者＝円山貴（神奈川県）

カメラ：ニコン D600　プリンター：キヤノン PIXUS MG6130
用紙：PCM 竹尾 DEEP PV モロー　撮影地：岩手県花巻市

講評　じっくり時間をかけて見ていると、どんどん浮き彫りになってくるようです。長い年月をかけてようやくここまでの形になったのだから当然でしょう。写真ってやっぱり目の付けどころなんだなあと思わせる味わい深い１枚です。

アドバイス　石の質感を表現するためにテクスチャー系のファインアート紙を使用されています。さらにはその光沢具合までも感じられるような、こだわりの用紙選びにもチャレンジしてほしいと、完成度の高いプリントを見て思いました。

佳作 「冬の肖像」 作者＝本田勝彦（北海道）

カメラ：キヤノン EOS 5D MarkⅡ　プリンター：エプソン PX-5500
用紙：写真用紙クリスピア<高光沢>　撮影地：北海道岩見沢市

講評　北海道の真冬の寒さがプリントから伝わってくるようです。濃淡のバランスのとれた画面構成で、安定感のある落ち着いた仕上がりです。同様に切り取られたほかの作品とあわせて、組写真で見てみたいと思わせる魅力もあります。

アドバイス　階調のつながりがいまひとつで、画像処理により空や雪の調子を乱しているようです。階調表現にもっとなめらかさが感じられたり、粗粒子にするならもっとエッジを効かせたりする方が効果的です。用紙にもこだわってみましょう。

「睨視」

作者 = ウッチーパパ(東京都)

カメラ：ニコン D7000　プリンター：キヤノン PIXUS Pro9000　用紙：富士フイルム 画彩 写真仕上げ Pro　撮影地：東京都

講評 画面の中からにらまれています。カメラ目線で撮られた写真だから当然なのですが、これ以上近づくな! と目で訴えていますね。子猫を守ろうと必死なのでしょう。その臨場感がダイレクトに伝わってくる力強い作品です。ご家族からいつも似たような感じで見られているのですか? 私と同じですね(苦笑)。

アドバイス 画面周辺部を少し暗く落とされているのは、主役に視線を集めるために効果的ですが、背景が平たんかつ無彩色なのでカラーノイズが少し気になります。主役に影響しないよう、このあたりもきめ細かく補正されるとよいでしょう。

「T」

作者 = 橋爪 通(神奈川県)

カメラ：キヤノン EOS 5D MarkⅡ
プリンター：キヤノン PIXUS PRO-100
用紙：FRUBO Photo Glossy Paper
撮影地：神奈川県藤沢市

講評 「T」より赤と青に目が向いてしまいがちですが、鮮やかな部分と色あせた部分がバランスよく切り取られていて、その対比や配色が効果的です。染料プリンターと光沢紙による高光沢のプリントも目をひきます。

アドバイス 画面周辺部の質感描写が少し甘い印象です。もう少し絞り込むなどして、トタンのディテールを画面の隅々までシャープに見せたほうが効果的です。彩度はもう少し控えめの方がより自然に見えるでしょう。

「微かなる息吹」

作者 = prego(兵庫県)

カメラ：キヤノン EOS 7D　プリンター：エプソン PX-7V
用紙：エプソン プロフェッショナルフォトペーパー＜厚手微光沢＞　撮影地：兵庫県尼崎市

講評 スポットライトに照らされた植物やチョウなどが美しくとらえられていて、息をのむような美しい仕上がりです。画面内にいくつか見どころがあって、それらを別々に切り取って組写真で見せるのも有効かもしれません。でも、単写真としてひとつの画面に凝縮した力強さがこの作品の魅力といえるでしょう。

アドバイス とはいえ、複数の写真で構成した作品も見てみたいです。観察力や構成力なども必要となるため、やりがいも感じられます。創造力を刺激して、その高い技術力を最大限に発揮してみてください。

PICK UP あと少しでランクアップ!

きしむ音が聞こえてくる一枚。プリントのクオリティーをさらに上げたい

「階段下る」

作者 = 平康 厚(大阪府)

カメラ：ニコン D300S　プリンター：エプソン PX-G930
用紙：エプソン 写真用紙＜絹目調＞　撮影地：奈良県なら町

講評 ラインをうまく生かすなど、切り取り方がとても良いです。連続撮影された中から選ばれた1枚なのでしょうか。足が効果的にぶれていて、動きが感じられるだけでなく、画面から足音や階段がきしむ音が聞こえてくるようです。

アドバイス 主題ばかりに気をとられすぎているからなのか、モノクロのプリント作品としてはあと一歩の印象です。トーンのコントロールなど画面全体のバランスを考えながら、もっときめ細かく画像処理を行われると良かったです。あるいはお使いのプリンターでは限界があると思われるので、モノクロではなくカラーでもよかったのでは? 縦や横のラインも画面構成のポイントとなっているので、傾きやゆがみをしっかり補正されるとさらに完成度が増していたでしょう。

「female」

作者 = 井上幾雄(大分県)

カメラ：ソニー α7R　プリンター：エプソン PX-5V
用紙：ハーネミューレ ファインアート　撮影地：大分県

講評 ハイコントラストによる個性的な作品。主役の女性の描写が美しく好印象です(画面の下側3分の1はない方がバランスが良いでしょう)。銀塩バライタプリントのような味わいもあり、この作品の魅力をうまく引き出しています。

アドバイス コメントが「妻」だけなので、表現意図がちょっとわかりづらいです。どのようなコンセプトで画像処理を行い、プリントを仕上げられたのか。それの内容によってはもっと評価でき、より具体的なアドバイスができると思います。

「Shadow in my shadow...」

作者 = 吉井 健一＜ken-1＞(大阪府)

カメラ：ニコン Nikon 1 V1
プリンター：プリンター：エプソン EP-804A
用紙：エプソン 写真用紙クリスピア〈高光沢〉
撮影地：東京都千代田区

講評 自分自身のガラス面への映り込みをうまく利用されています。胴回りが引き締まっていて、私だったらそのあたりのシャドウ部分の面積をもっと稼げますよ(笑)。黒が引き締まり、シャープで透明感のあるプリントが印象的です。

アドバイス 左上の空が入らないくらい、画面の上側は少しカットした方がよりバランスの良い画面構成になるでしょう。その方が画面全体がさらに引き締まった印象で、画面の下側の人びとにもっと視線誘導しやすくなるはずです。

「頑張りの記憶」

作者 = 田村祐二(滋賀県)

カメラ：ニコン D800E　プリンター：エプソン PX-G5300　用紙：ピクトリコ ピクトリコプロ・セミグロスペーパー　撮影地：滋賀県近江八幡市

講評 手前に伸びるふたりの影をとらえて、天地を逆に見せているわけですね。デフォルメされた影の形がどこか絵画的で、そのユニークさが目をひきます。一生懸命に自転車を練習する娘さんと、それをサポートするお母さん、その様子をレンズ越しに見守るお父さん。このような家族の記録写真もとても良いものです。

アドバイス シャッターチャンス優先だと思うので仕方がないのでしょうが、画面右上の四角い部分がなければ、よりシンプルで統一感のある画面構成になっていましたね。左下の足もとのハイライトは消してしまっても良いでしょう。

「気配」

作者 = 冨永貴則＜takabo＞(兵庫県)

カメラ：オリンパス OM-D E-M1　プリンター：エプソン PX-5V　用紙：ピクトリコ GEKKO シルバー・ラベル　撮影地：兵庫県三田市

講評 ただ人が写っていないだけでなく、たしかに何かの「気配」が感じられます。静かで落ち着いた感じに見えますが、お子さんたちが小さいころよく遊ばれていた公園とのこと。その元気な様子が思い浮かび、笑い声が聞こえてくるようです。モノクロ作品に仕上げられたあたりも、この表現に合っていますね。

アドバイス もう一歩後ろに下がって、もう少しだけ周りの情報が入っている方が、子どもたちがはしゃぎながら元気に遊んでいる様子などがより目に浮かびやすいような気がします。でも、気配を打ち消すような余計なものが入らないようにした結果なのかもしれませんね。

※応募に関するくわしい説明は、http://ganref.jp/photo_contestsをご覧ください

「弧を描く」

作者 = 岩下昌平(鹿児島県)

カメラ：キヤノン EOS 5D MarkⅢ
プリンター：キヤノン PIXUS MG6230
用紙：キヤノン キヤノン写真用紙・微粒面光沢 ラスター
撮影地：鳥取県鳥取市 鳥取砂丘

講評 お子さんが元気に走り回る様子をうまく表現されています。撮影場所は鳥取砂丘とのことですが、植田正治さんに憧れて訪れられたのでしょうか。そのスケール感をあえて取り込まずに、砂丘をキャンバスに個性的な作品に仕上げられている点が良いですね。夏の日差しや暑さが感じられるプリントも印象的です。

アドバイス ほんのちょっとだけ陰影を強調するなど、足跡のディテールがもう少し感じられるとさらに効果的でしょう。その方が、お子さんが走り回りながら砂の上に弧を描いている様子がよりストレートに伝わってくるはずです。

PICK UP あと少しでランクアップ！

まるで「リュウグウノツカイ」！ 全体の階調のつながりには要注意

佳作 「Deep sea fish」

作者 = 檀上純一(愛知県)

カメラ：ニコン D300
プリンター：エプソン PX-5600
用紙：写真用紙クリスピア<高光沢>
撮影地：群馬県吾妻郡

講評 深海魚をイメージしながら魚眼レンズで撮影されたあたり、なかなか発想がユニークですね。このデフォルメされたらせん階段から私がすぐに連想したのは「リュウグウノツカイ」です。そんなふうに見えてきませんか？

アドバイス プリントだと細部のほんのちょっとしたあらも目についてしまうものです。ノイズによるざらつきもできるだけ抑えられている方が望ましいですが、それよりも全体的に階調のつながりがいまひとつなのが気になります。特に青い部分の色や階調の再現性が不自然で、色飽和も見られます。色域外警告表示を確認しながらコントラストや彩度の調整を控えめにして、プリント設定も正しく行われているかどうかをきちんとチェックしましょう。

佳作 「Stripes on the snow」

作者 = 刈部 博(宮城県)

カメラ：キヤノン EOS 7D プリンター：キヤノン PIXUS Pro9000
用紙：ハーネミューレフォトラグ ブライトホワイト
撮影地：宮城県仙台市

講評 雪の日のシマウマだなんてとてもステキです。意外にもぴったりのシチュエーションですね。雪を食べているのでしょうか。そんな表情やしぐさも愛らしいです。画像処理や用紙選択も作品のコンセプトにうまくマッチしています。

アドバイス 画面の左右と下側が余白と同化してしまっています。このような作品こそ四辺フチなしにするのが効果的です。プリンターの機能を利用するのではなく、このまま上側の余白をカッターナイフでカットすると良いでしょう。

岡嶋和幸先生の今月のひとこと

9月に写真展を行いました。毎年秋に必ず行っているのですが、今回はデジタルカメラで撮影したものをカラーインクジェットプリンターで印刷して展示しました。用紙は数種類を試してみた結果、新しく発売になったものを選びました。近年、夏は暑すぎて撮影どころではなくなるので、7月と8月の約2カ月間はテーマやコンセプトなど展示作品の構想を練ったり、毎日のように撮影場所を探したりしながら涼しくなるのを待ちました。あとは撮影するのに最適なすべての条件を満たすタイミングを待つだけ。そうして9月初旬のある晩に、必要なカットを一気に撮影しました。

私はカメラを手に何の当てもなく撮影に出掛けたりすることはほとんどありません。完成形をしっかりとイメージして、それを達成するためのプロセスをきちんと決めてから行動します。これは広告や雑誌などの撮影の仕事をするときとまったく同じです。行き当たりばったりだとあまり効率が良くないですから。でも、インパクト勝負の単写真だとどうなのでしょう。魅力的なシーンや被写体は突然目の前に現れることが多い気がします。みなさんを見習って、カメラを手にとにかく動き回ることが大切なのかもしれませんね。2015年はもっとアグレッシブに作品作りをがんばりたいです。

世界一わかりやすい動物写真教室 イベントレポート

協賛：ニコンカレッジ (株式会社ニコンイメージングジャパン)

ニコンカレッジ協賛のもと、全国４会場（動物園）で行われている『世界一わかりやすい動物園写真教室』の前半編をレポート！　もちろんゆきぴゅーも全会場に行ってます

レポート：ゆきぴゅー

“デ写教”シリーズの新刊『世界一わかりやすいデジタル一眼レフカメラと写真の教科書　動物園&水族館の撮り方編』の発売を記念して、動物写真家・内山 晟さんによる撮影実習イベントが全国各地の動物園で行われている。今月は日本平動物園編と富士サファリパーク編をレポートしよう。今回の参加者全員にニコンからD7100が貸し出された。レンズは動物園撮影に必須の望遠レンズとしてAF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VRⅡ　と、AF-S NIKKOR 70-200mm f/2.8G ED VRⅡをはじめ、色々な望遠レンズ用意するという大盤振る舞い。まずは“動物園で撮ったとは思えない動物写真”を撮るテクニックを学び、その後は実際に園内で撮影実習。背景に人工物を入れない工夫やナイトサファリの狙いどころなど先生から指導を受ける。最後はお待ちかねの講評会だ。両会場とも力作ぞろいで、それぞれの感性が光る作品ばかりだった。

参加者にはD7100と望遠レンズをお貸し出し！

当日貸し出した機材

一眼レフと望遠レンズのセットがずらりと並んだ様は壮観だ。望遠レンズを初めて使うという方もいて最初は少々緊張気味の様子だったが、背景をぼかして動物をアップで撮る醍醐味を存分に味わってもらえたはずだ

撮り方の講座を聞いたら、撮影開始！

ユーモアたっぷりで大好評の内山先生の座学講座。サイン会ではイラストを担当した私もどさくさに紛れてペンを持たせていただくという一幕も

10月25日 日本平動物園 撮影編

園内を移動して思い思いの動物を撮影中、時折内山先生からのアドバイス。後半はレッサーパンダのおやつタイムに遭遇! リンゴを手で持って食べる姿に「かわいい〜♪」の声が飛び交って大盛り上がりだった

10月26日 富士サファリパーク 撮影編

格子のない特別バスの車内は、窓が広くて撮影しやすい環境。参加者の皆さんはお互い席を譲り合いつつ、右に左にと必死にシャッターを切っていた。実はこの日は今シーズン最後のナイトサファリ開催日だった

中村米太郎さん

佐藤萌花ちゃん（10歳）

宇佐見亜美さん

動物が充実している日本平動物園だけあってさまざまなバリエーションの作品が見られた。一眼レフ初体験という小学生の撮ったレッサーパンダの目には、先生のアドバイスどおりキャッチライトが入っていて一同拍手!

山田霞月ちゃん（11歳）

飯塚憲洋さん

早坂光太くん（14歳）

小林純子さん

この日もお子さん達の作品が際立っていた。チーターの流し撮りや、縦位置で狙ったライオンの後ろ姿など、大人顔負けの力作に内山先生も思わず唸ってしまったほど。昼間とは雰囲気の違う夜の動物写真が楽しめた

ニコン Df

金色パーツをアクセントにしたラグジュアリーモデル

ニコン Df ブラック Gold Edition

◎発売予定日：12月4日
◎予想実勢価格：315,000円前後

限定600台

ニコン Df 50mm f/1.8G Special Gold Edition キット

◎発売予定日：12月18日
◎予想実勢価格：335,000円前後

限定1,000セット

クラシカルな外観とダイヤルによる操作性が人気を集めたニコン Dfの発売1周年記念モデルが数量限定で新登場。AF-S NIKKOR 50mm f/1.8Gのリングカラーが金色になったレンズキットモデルも用意される。また2015年3月31日まで、前面サブコマンドダイヤルの名入れサービスの新しい文字色として金色が選べるようになった（4,860円）。Gold Edition以外の既発売モデルも対象だ。

撮像素子：35mm判フルサイズCMOSセンサー（FXフォーマット）／**有効画素数**：約1,625万画素／**シャッター速度**：1/4,000～4秒、バルブ、Time、X200（シャッタースピードダイヤル使用時）、1/4,000～30秒、バルブ、Time（メインコマンドダイヤル使用時）／**ISO感度**：ISO 100～12800（ISO 50、ISO 204800相当まで増減感可能）／**大きさ**：約143.5（W）×110（H）×66.5（D）mm／**重さ**：約765g（バッテリー、メディアを含む）

金色づくしのアクセサリーや化粧箱 名入れサービスで特別感がアップ

Nikonの刻印入りのソフトシャッターレリーズ（AR-11G）

文字の金色が黒に映える名入れサービスのサンプル

金色のあしらいが施された限定デザインの化粧箱

金の刺繍でロゴをあしらったストラップ（AN-DC9G）

持っていて楽しい 個性派カメラが欲しい！ 色とりどりの注目カメラ新製品レポート

新しいカメラを選ぶなら機能性や操作性だけでなく、見た目にもこだわりたい。そんな人のためにこの冬、さまざまなボディカラーをまとった新製品が発売される。個性的な顔ぶれをチェックしていこう。　レポート：編集部

リコーイメージング K-S1 Sweets Collection

◎受注期間：2014年10月23日～2014年11月30日
◎発売予定日：2014年12月19日
◎予想実勢価格：83,000円前後

お菓子の名前を冠した3種類のファッショナブルなモデル

●ストロベリーケーキ

●ブルークリームソーダ

●ライムパイ

白ベースのカメラ本体に赤、青、黄緑の3色のあしらいが施され、お菓子の名前がつけられた受注限定モデル。本体カラーに合わせてキットレンズのカラーもホワイトに統一。長さの調整が簡単に行えるストラップ（O-ST842）や、北欧のインテリアブランド「ILLUMS」のオリジナルミニタオルが付属する。

撮像素子：23.5×15.6mm CMOSセンサー／**有効画素数**：約2,012万画素／**シャッター速度**：1/6,000秒～30秒、バルブ／**ISO感度**：ISO 100～51200／**大きさ**：約120（W）×92.5（H）×69.5（D）mm／**重さ**：約558g（バッテリー、メディアを含む）

ソニー α6000（ホワイト）

◎発売予定日：2014年11月28日
◎予想実勢価格80,000円前後（パワーズームレンズキット）、100,000円前後（ダブルズームレンズキット）

高速AFがうれしいカメラにホワイトモデルが新登場

●パワーズームキット

●ダブルズームキット

わずか0.06秒でピントが合う「ファストハイブリッドAF」を採用したミラーレス機にホワイトモデルが新登場。撮りたい瞬間を簡単にとらえられるので扱いやすく、はじめてのミラーレス機としてオススメの1台だ。ボディ単体での発売は行われず、パワーズームキットとダブルズームキットをラインアップ。基本スペックや付属品は既発売のブラックやシルバーと同じだ。

撮像素子：APS-C"Exmor"CMOSセンサー／**有効画素数**：約2,430万画素／**シャッター速度**：1/4,000～30秒、バルブ／**ISO感度**：ISO 100～25600／**大きさ**約120（W）×66.9（H）×45.1（D）mm／**重さ**約344g（バッテリー、メディアを含む）

撮影現場で試しながら分かる！

デジタルカメラ 3 Lesson Stepレッスン

カメラを初めて買った人にもおすすめ！

デジタルカメラ初心者の方も、ハイアマチュアの方も、基本を身につけることは大切！ ここでは全12回でカメラと撮影の知識を解説。3つのステップで撮影現場ですぐに使えるテクニックを手に入れよう。　レポート：種清 豊

●このレッスンで使用するカメラ
キヤノン EOS Kiss X7i ダブルズームキット
実勢価格：79,000円前後

第5回 「露出」の明暗で写真の印象が変わる

キヤノン EOS Kiss X7i／EF-S18-55mm F3.5-5.6 IS STM／18mm（29mm相当）／絞り優先AE（F4、1/6秒、＋3.0EV）／ISO 800／WB：太陽光

キヤノン EOS Kiss X7i／EF-S18-55mm F3.5-5.6 IS STM／28mm（45mm相当）／絞り優先AE（F6.3、1/200秒、－2.0EV）／ISO 200／WB：オート

写真の仕上がりの明るさをつかさどるのが露出だ。この露出の加減ひとつで写真を明るくも暗くもできる。通常の撮影モードではカメラが自動的に露出を調整してくれるが、意図的に明るくしたり暗くしたりするのが露出補正という機能だ。露出補正をすることでより自分のイメージに近い写真の明るさに設定できる。なお、露出には必ずしも正解はない。暗い露出が向くシーン、明るい露出が向くシーンというのはあるにせよ、あくまでも撮り手が被写体に抱くイメージによって明るさを決めていくのがポイントだ。シチュエーションごとに露出を変えた写真を比べたり、プラス補正マイナス補正の有効的なシーンを知ることで、明るさの変化によるイメージの伝え方を知ろう。

露出を考えることは撮影の中でも一番大切だよ！

全12回スケジュール

01	カメラアングルで見える世界が変わる！	07	オートフォーカスをもっと使いこなそう
02	主役と脇役でストーリーを作る	08	ホワイトバランスと仕上がり設定でイメージ写真に挑戦
03	絞りで背景のボケぐあいを変える（絞り優先 AE）	09	レンズを変えて写真の世界を広げよう
04	シャッター速度で瞬間を狙いうちしよう（シャッター優先 AE）	10	光の向きで立体感やきらめき感を出そう
05	**「露出」の明暗で写真の印象が変わる**	11	内蔵ストロボを上手に使ってきれいに撮ろう
06	ISO 感度を大胆に上げて暗い場所でも強気で攻める	12	【総集編】三脚を使って美しい風景写真を撮ろう

種清 豊（たねきよゆたか）：1982年大阪府生まれ。京都産業大学外国語学部ドイツ語学科卒業後、竹内敏信氏のアシスタント経験を経て独立。日本各地に残るクラシックな素材やドイツの街並みを撮影中。カメラ専門誌に多数寄稿。キヤノンEOS学園講師

Step1

基本レッスン

露出補正で写真を思いどおりの明るさに仕上げよう

カメラ任せでは適切な明るさにならないことも

基本的にはカメラ任せの露出でも問題ないが、条件次第ではイメージと違う明るさになってしまう。何か違うなと思ったら、露出補正の出番だ！

プログラムAEなどで撮影して、自分のイメージと違った明るさになったことはないだろうか。カメラ内蔵の露出計で示された、カメラ任せの露出のまま撮影すると、時には見た目のイメージと違った明るさに仕上がることもある。そんなときは露出補正の出番だ。露出補正の目盛りを動かすことで、プラス側では明るく、マイナス側では暗く表現できる。当然動かした目盛りの量に応じてシャッター速度もしくは絞りの数値が変動することにも注目しておこう。

× 暗くなりすぎた

白い帆が印象的なヨットを見かけて撮影したが、周りの明るさに合った露出に調整され、帆がグレーになってしまった。爽やかなイメージで撮影したが、重たい印象だ

× 明るくなりすぎた

懐かしい黒電話を見かけて撮影したが、見た目より明るくなってしまい、黒くて重たい質感が伝わらず、間の抜けた写真になった

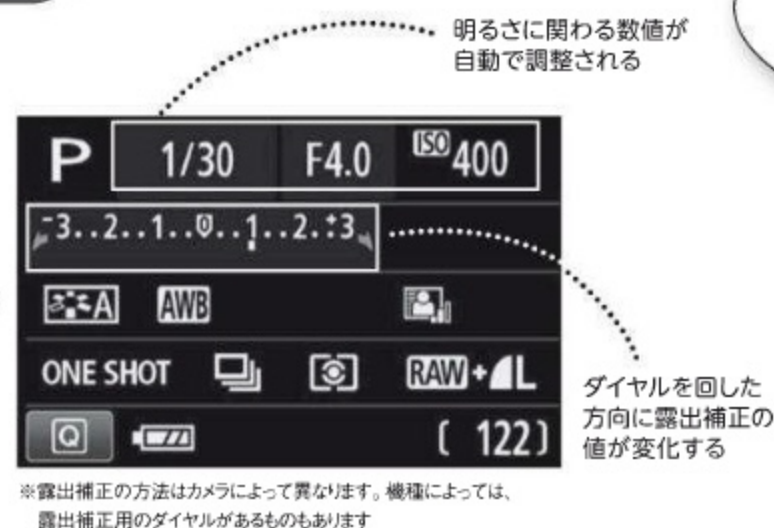
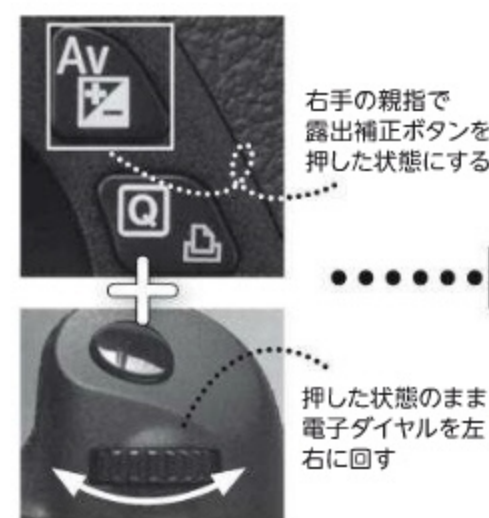
どうすれば露出補正できるの？

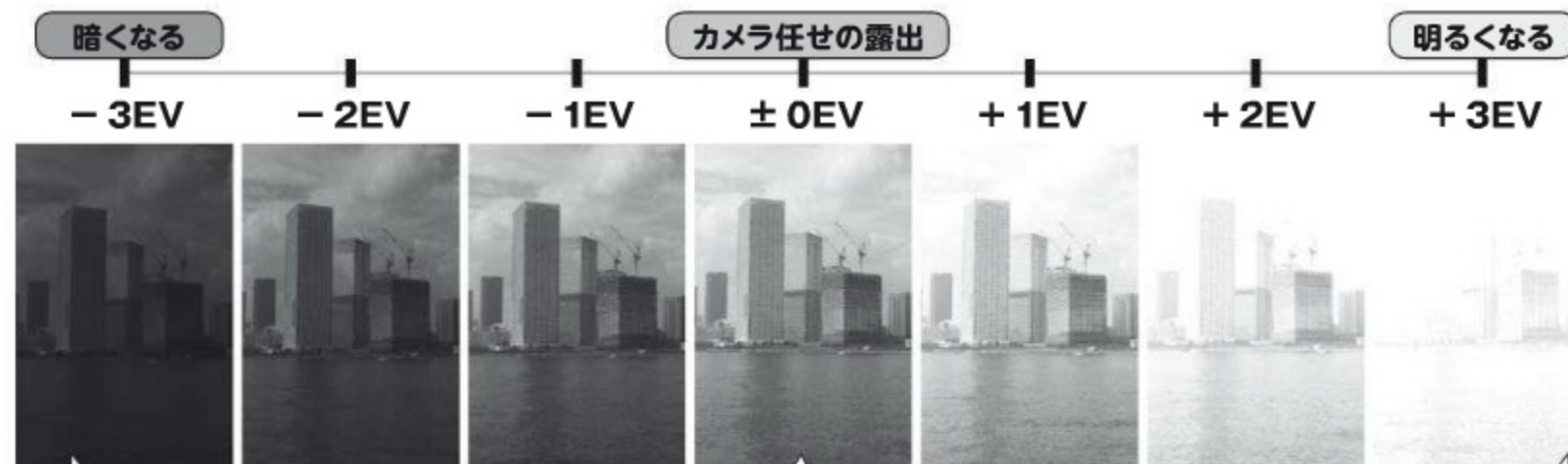
右手の親指で露出補正ボタンを押した状態にする

押した状態のまま電子ダイヤルを左右に回す

明るさに関わる数値が自動で調整される

ダイヤルを回した方向に露出補正の値が変化する

※露出補正の方法はカメラによって異なります。機種によっては、露出補正用のダイヤルがあるものもあります

露出補正の数値に合わせて明るさが変化するように設定値が自動で調整されるよ。

露出補正の効果を確認しておこう

全体が暗くなり、もともと暗い場所は黒くつぶれている

明るい場所も暗い場所も見た印象に近い明るさになる

明るい場所は真っ白に飛んでしまい情報がなくなる場合も

Step2

フィールドワーク

逆光の中で狙った被写体を明るく写そう

1 銅像を撮りたいが逆光で影になっている

斜め上から注ぐ光で逆光気味になった銅像。手前が影になってしまうかも知れないが、まずはそのまま撮影

2 露出補正なしで撮影すると像が暗くなった

補正なしで撮影すると見た目の印象そのままに、やはり影の部分はやや暗く落ち込んでしまった。もう少し顔を明るくしたいので、次はプラス側に露出補正を行ってみる

ヒント 適正露出を見極めて設定しよう

- 暗い部分をどの程度明るくするかを決める
- 質感やディテールが消えないようにする

露出補正時は自分が被写体に抱くイメージを中心にして明るさを決定していく。自分なりの適正露出を探っていこう。今回は銅像を明るくしつつ、像の質感も伝えたかったので、髪の質感などが残りつつ、目が明るくなる露出を探った。基準を決めてから露出補正をしていこう。

■ 髪の質感を残す

頭頂部に目を向けると、＋2EVでは明るく髪の毛の質感がなくなってしまい、明るくなりすぎていることが分かる

■ 目を明るくする

一番くぼんでいる目の部分が最も暗くなる。この部分が明るくなるように露出をプラス側に調整した

3 ＋2EVで撮影すると明るくなりすぎた

＋2EVにすると、銅像も周囲の状況も明るくなりすぎてしまった。明るくする目的は達成したものの、銅像の質感が薄らいでしまったようにも見える

＋1EVにして完成！

自分のイメージに近い明るさに調整することで、撮影意図が伝わる写真になるよ！

露出補正が重要な場面を知っておこう

あらかじめ露出補正が有効なシチュエーションを知っておくと、適切な露出を決めやすい。白や明るい被写体が多い場面ではプラス側に、反射率の低い黒や濃い色が多い場面ではマイナス側に補正すると良い結果が得られやすい。

白いものを白く写したいとき

白い雲など、反射率の高い（明るく白い）被写体を撮影した場合、カメラ任せだとどうしても暗く、グレーがかってしまう傾向がある

印象通りに明るくしたいときは＋1EV程度の補正から始めると良い。補正値は反射率の高い被写体の画面に占める分量に応じて変更していく

黒いものを黒く写したいとき

蒸気機関車など反射率の低い黒っぽい被写体ではマイナス補正がポイント。あまりマイナスにしすぎてディテールがつぶれないように注意しよう

マイナス補正するとしまった黒に。テカリなど反射があれば－0.7EV程度から補正を始めよう。ほかにも樹の幹や木造の建物もマイナス補正が有効だ

ステップアップ

大胆に明るさを変えて印象深い写真に仕上げよう

海辺を露出オーバーで撮影してふんわり幻想的に仕上げる

曇天でグレーがかる天候であったが、白い砂浜やフラットなライティングのおかげで、＋3EVに設定して大胆に補正することでハイキー調に仕上げられた

こうして撮っています

ライブビューを使って、ローアングルで大胆に砂浜を取り込んだ画面構成に。通常のアングルで撮影すると背景の建物などが入り込んで幻想的な雰囲気がなくなる

明るいもので統一するとふんわりした仕上がりに

極端な明暗差がないフラットな光で明るい要素で画面を統一する際はプラス補正にすることで柔らかい雰囲気のハイキー調の写真を狙える。画面内の一部に極端に暗いものなどがあるとイメージが損なわれるので、明るいものだけで統一して撮影しよう

露出アンダーで暗がりを強調してシルエットを生かした構図に

高架下の暗がりに背景から差し込む明るい光のおかげで輝度差が生まれシルエット写真が狙いやすい。暗い要素を多く取り入れることでローキー調に仕上げられる

トンネルなど極端に暗い場面とそこに入る光との明暗差（輝度差）があるシーンでは、マイナス補正が有効だ。より引き締まったシルエットの写真が狙える

明と暗の両方を入れよう

明暗差の強い（コントラストの高い）シーンではマイナス補正にする事で光と影の印象をより強烈に伝えられる。ただ暗いだけでなく、暗い中に光が差し込んでいる場所などに目を向けよう

窓から入る西日が板張りの床を強く照らして陰影を作っている。こういう場面では、明るい部分で露出を合わせてからマイナス補正をしている

次回は暗いシーンで助けになるISO感度について解説！

今月のまとめ

● **カメラ任せではない自分なりの適正露出を探そう**

明るくしたい、暗くしたいという被写体に抱く明るさは自分でしか決められない。正解の露出はなくても、自分自身がベストと思う露出を探りながら撮影してみよう。

● **被写体の明暗の割合を見極めて露出補正を行おう**

多くの被写体には明暗があり、その割合を見極めることでプラス側なのかマイナス側なのかの露出補正値を導ける。一度で決めようとせずいくつか数値を動かして撮影しておくことも大切。

以上のことを忘れずに撮影時には必ず実行しよう!

いま知りたいトピックや注目技術の開発意図がよく分かる

メーカー直撃インタビュー 伊達淳一のもっともっと知りたい!!

EOS 7D Mark Ⅱで見事に結実したキヤノンのメカ&AF技術詳報

1～2年という短いスパンでモデルチェンジされる昨今のデジタルカメラの中で、5年という異例の長寿を果たしたEOS 7Dがついに刷新された。惜しみなく投入された最新技術、特に注目度の高いミラーやシャッターなどのメカ機構、AF性能を中心にそれらの核心に迫った。

レポート：伊達淳一

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱって何?

画面周辺まで広くカバーするF5.6対応オールクロス65点AFと最高約10コマ／秒の高速連写性能が魅力のAPS-Cフォーマットモデル。色で被写体を追尾するEOS iTR AFや、水銀灯や蛍光灯下で露出がばらつかないフリッカーレス撮影など、フラッグシップモデルに迫る最新の機能を搭載。キヤノン独自のデュアルピクセルCMOS AFにより、一眼レフとしては最速クラスのライブビューAFも実現している

――EOS 7D Mark Ⅱ（以降7D2）の開発コンセプトについて、EOS 7D（以降7D）ユーザーのどんな声を受け、どのような点を改良してきたのでしょうか?

大中　7Dの後継機ということで“動体の決定的瞬間を逃さない”スピードやレスポンスを追求し、APS-Cのフラッグシップ機としてふさわしい性能を備えたカメラにする、というのが7D2の開発コンセプトです。既存の7Dユーザーからの要望で多かったのは“高感度画質”と“AF性能”でした。AFに関しては、EOS 50Dのオールクロス9点AFからオールクロス19点AFに進化したということで、満足度の高い項目でもあったのですが、その一方で、もっと高いAF精度や動体に対する食いつき、さらにはより広い測距エリアや測距点の高密度化を求める声も多くいただきました。また、動画性能についても、7Dが発売された5年前は“EOS MOVIE”の先駆け的な存在でしたが、動画撮影中にAFが使えないなどの制約があり、動画撮影機能について期待する声も多かったです。

――7.2Vのリチウムイオンバッテリーと限られたボディスペースで約10コマ／秒の高速連写を実現するのは、当然簡単な話ではないですよね? そのあたりの技術的な工夫などを教えてください。

山名　ミラーとシャッターが電流を多く使う部分ですが、ミラーもシャッターもそれぞれ消費電力を下げるように工夫をしています。例えば、シャッターにボールベアリングを入れて、スムーズに動くようにすることで、少ないパワーで駆動でき、20万回とシャッター耐久も向上させることができました。また、従来の7Dはバネの力でミラーを跳ね上げていたのですが、このバネをチャージするのに多くの電流が必要でしたが7D2では、モーターの動力をミラーに直接連動してミラーアップ・ダウンを行う機構を採用することで、より効率的な駆動を行えるようにしています。また、これまではミラーチャージとシャッターチャージをほぼ同じタイミングで行っていましたが、約10コマ／秒の高速連写を実現しようとすると、ピーク電流が大きくなり、7.2Vの電源ではまかないきれなくなってしまいます。そこで、ミラー

伊達淳一㊕EOS 7D Mark Ⅱの気になるポイント

- 撮りたい構図でAF撮影できるF5.6対応オールクロス65点AF
- 7.2Vのコンパクトなバッテリーで約10コマ／秒の高速連写を実現
- バウンドが少なく、動作音も静かなミラー／シャッター機構
- デュアルピクセルCMOS AFによる高速なライブビュー撮影が可能

デジカメWatchでインタビューの全文が読める!

http://dc.watch.impress.co.jp/

誌面の都合で本連載に掲載できなかった記事を含めたインタビューの全文がインプレスのニュースサイト「デジカメWatch」で公開しています。ちょっとマニアックなネタやこぼれ話も要チェック!

伊達淳一（だてじゅんいち）：1962年広島県生まれ。千葉大学工学部画像工学科卒。写真誌などでカメラマンとして活動する一方、専門知識を生かしてライターとしても活躍。黎明期からデジカメに強く、カメラマンよりライター業が多くなる

ボールベアリングを採用したシャッター機構

シャッターユニット内に4個のベアリングを採用し、少ない力でなめらかに動くようにすると同時に耐久性の向上も図っている

連写時の高速化を実現するミラー機構

ミラーの動きそのものを高速化するよりも、モーター制御やバウンド防止機構でミラーアップ・ダウン時のバウンドを抑制することで、速やかに次のシーケンスに移行できることが連写の高速化につながっている

サブミラーバウンド防止機構
サブミラーマスダンパー機構
メインミラードライブレバーユニット
メインミラーバウンド防止機構
ミラー駆動モーターユニット

ブレーキレバーによるミラーの減速

ミラーダウン時にモーター制御とブレーキレバーで減速してバウンドを抑制することで、即座に次の測距が行える

メインミラーのバウンド防止機構

メインミラーが戻る際、受け止める軸がわずかに下がり、運動エネルギーを相殺することで、バウンドを防止する機構も備わっている

効率的にシャッターやミラーを動かす 機構の全面見直しで高速連写を実現

が上がった段階でミラーチャージ、ミラーが下がった段階でシャッターチャージというように、それぞれ電流を消費するタイミングをずらすことでピーク電流を下げています。さらに、連写の高速化を図ろうとすると、ミラーをより速く動かす必要があります。しかし、ミラーの動きを速くすると衝撃も大きくなり、ミラーバウンドも大きくなってしまいます。ミラーバウンドが収まらなければ、レリーズも測距も行えませんので、バウンドが収まるのを待つぶん、時間的なロスが生じます。そのため、7D2ではミラーの駆動速度にメリハリをつける手法をとっています。特に、ミラーダウン動作では、動き始めはミラーを高速駆動させ、動き終わりつまり衝突直前にミラーの速度を減速しています。これにより、ミラーの衝撃を緩和し、ミラーバウンドを低減させています。

また、ミラーダウン動作（駆動+バウンド）をトータルで考えると、バウンド時間が短縮されているため、駆動の時間を長くとることが可能となり、ギヤ比を低速側に持っていくことができて、ピーク電流をさらに低減させています。

——ミラーバウンドを抑えるためにゆっくりとミラーを動かすと、レリーズタイムラグや像消失時間的には不利になるような気がしますが……。

山名　ミラー動作（駆動+バウンド）をトータルで考えると7Dよりも短縮しています。レリーズタイムラグが短縮できている理由の1つはこの短縮によります。また、先ほどご説明したように、速く動かしてもミラーバウンドがあると、それが収まるのを待つ必要があります。7D2は、ミラーダウン時に適切な減速を行うぶん、ミラーダウンにかかる時間はわずかに長くなりますが、バウンドが収まるまでの時間はむしろ短くなっているため、像ブレは低減しています。そういう意味では、連写時のファインダー像の見え方は従来よりも安定しています。また、像消失時間も7Dと比較して若干改善しています。ちなみに1D系は、ミラーをできるだけ速く動かしているので、キヤノンのフラッグシップ機にふさわしい像消失時間を実現しています。

——ところで、AFも7Dのオールクロス19点AFから、7D2はオールクロス65点AFに進化していますが、従来の7Dと変わらないボディサイズで、多点化とワイドエリア化を実現できたポイントとは？

山本　AFセンサーの製造工程に微細化プロセスを採用し、限られた面積の中により多くのラインセンサーを配置できるようになった点が大きいです。それにより、19点から65点へと測距点が増え、測距エリアも大幅に広がっている割には、AFユニットサイズを極端には大きくせずに設計できています。しかし、画素を微細化できたからといって、すぐに65点と多点化ができるわけではありません。ある1つの技術的なブレイクスルーがあったわけではなく、小さな工夫の泥臭い積み重ねで実現しています。例えば、従来、金属であったAFプレートをモールド化しています。一見、モールド化は強度が弱くなると思われがちですが、形状の自由度が増すため、綿密な計算に基づいて設計することでより強く小型にできます。そのほかにも、組み立ての際にAFユニットの位置調整を容易に、かつ高精度にできるようにしたり、温度や湿度の変化、衝撃が加わった際にも精度を保てるような構造を採用しています。このように数多くの地道な改良と工夫を積み重ねることで、7Dと同等のボディサイズに収まる65点AFユニットを作ることができました。

近藤一隆氏
キヤノン株式会社
イメージコミュニケーション事業本部
ICP第二開発センター
「2,000万画素で連写10コマ／秒、最高ISO 16000が最適と考えました」

山名一彰氏
キヤノン株式会社
イメージコミュニケーション事業本部
ICP第二開発センター
「レリーズシーケンス短縮やミラーバウンド減少でレリーズタイムラグ55msを実現しました」

吉田明光氏
キヤノン株式会社
イメージコミュニケーション事業本部
ICP第二開発センター
「DPP 4で現像すると解像感が増して高輝度側の階調も出しやすくなります」

大中達浩氏
キヤノン株式会社
イメージコミュニケーション事業本部
ICP第二事業部
「動体の決定的瞬間を逃さないための速さとレスポンスを追求しました」

門原輝岳氏
キヤノン株式会社
イメージコミュニケーション事業本部
ICP第二開発センター
「測距点の多点化とEOS iTR AFで高い捕捉性能を実現しています」

山本英明氏
キヤノン株式会社
イメージコミュニケーション事業本部
ICP第二開発センター
「小さな工夫の泥臭い積み重ねでAF多点化とサイズの維持を両立できました」

AFセンサーユニットの仕組み

ボディ下部にあるAFユニットにサブミラーで光を反射。コンデンサーレンズで光束を分離し、AFセンサー上に十字に配置されている各ラインセンサーに光が導かれるように工夫されている

AFセンサー上には、上下または左右に向かい合った2つのラインセンサーが一対となって並んでいる。これが十字に配置されているのがクロスセンサーだ。このラインセンサーを分割して、複数の測距点にしている

広範囲に測距点を置けるAPS-Cこそ 周辺部のオールクロス測距が効く

——AFユニットが7Dよりも大きくなっているにもかかわらず、7Dのボディサイズにどうやって収められたのですか？

山本　周辺ユニットとの位置関係を7Dからすべて見直しています。部品と部品の隙間や、部品の肉厚を求められる強度に応じて最適化するなどして、AFユニットを収納するスペースを稼ぎ出しています。7Dとのユニット配置の違いの例を挙げると、7DではAFユニットの下に基板がありましたが、7D2ではその機能を別の基板に統合し、AFユニットの下の基板をなくしています。それにより、7D2のAFユニットは、7Dより1.2倍ほど背が高くなっているにもかかわらず、カメラ全体としては7Dのサイズを維持できています。このように、7Dのボディサイズを維持できたのは、周りのユニットを担当している皆さんに協力していただけた、というのもかなり大きいです。全体のレイアウトを考えている山名とは、何度も衝突しながら開発しました（笑）。

大中　どのスペースを誰がどう使うか、取り合いになるんですね。

山名　特にミラー担当とAF担当はスペースの奪い合いになりますね。レイアウトが決まると仲良くなりますけど（笑）。

——7Dに比べ、横と斜め方向に測距エリアが広がり、特に縦位置撮影時の構図の自由度が格段に向上していますが、測距エリアを広げるためにAFユニットのどの部分を改良しているのでしょうか？

山本　先ほどはメカ設計的な観点で説明しましたので、次はラインセンサー配置や光学設計的な観点から、7D2のAFの特長を説明させていただきます。こちら（上図「ファインダー」）は7D2のファインダーをのぞいたときに、ラインセンサーがどのように配置されているかを示した概念図です。一方、こちら（同「AFセンサー面」）は、実際のAFセンサー面でのライン配置を示す模式図です。AFセンサー面では、ラインセンサーが上下方向や左右方向に、それぞれ一対に並んでいるのが分かると思います。ここで、対になるラインセンサーの間隔が広いほど高精度に測距できます。AFセンサーの中央に×状に配置されているのが、ラインセンサーの間隔が広く、最も高精度に測距可能なF2.8対応のクロスセンサーです。中央1点は、このF2.8対応の×型クロスセンサーと、F5.6対応の+型クロスセンサーとを合わせ、縦横斜めのデュアルクロス測距が可能です。

——F2.8対応のセンサーはこんなに距離を離す必要があるんですね。周辺にF2.8対応の測距点があったらいいのにと思っていましたが、とても周辺にF2.8のラインセンサー、ましてやクロスで配置する余裕なんてないですね。

大中　1D XでもF2.8対応の測距点は中央縦5点のみですが、左右計20点にF4対応のクロス測距点を採用しており、こちらもF5.6対応の測距点よりも高精度に測距が可能です。1D Xはいわゆるオールクロスではありませんが、F2.8、F4.0対応の測距点数が多く、総合性能は7D2のそれよりも優れています。

1D Xはフルサイズなので、画面全体に対して測距エリアが狭く、AFエリア全体を使って被写体を追尾させるというよりは、撮影者の意思で測距点を決めて撮影するスタイルを想定していて、ピントの精度を重視する仕様になっています。一方、7D2は、APS-Cなので、より周辺まで広く測距点が配置されていて、画面内を左右に動き回る被写体を追尾させるなど、より周辺の測距点が果たす役割が重視されると考え、周辺までオールクロス測距にこだわりました。

山本　測距エリアを広げるには、各ラインセンサーを長くする必要がありますが、他のラインセンサーに入射する光が混入しないようにしなければなりません。例えば、AFセンサーのライン配置を見ると、ほんの少しくらいラインセンサーを伸ばしても、AFセンサーがわずかに大きくなるだけのように見えます。しかし、実際は、伸ばしたセンサーにほかのセンサーへの光が混入してしまいます。クロス測距では特に、縦線検出センサーへの光が横線検出センサーに混入してしまうという、設計的な困難があります。それを避けるためにAFセンサー面を後ろに下げてAFユニット全体を大きくすると、わずかなラインセンサーの延長が、全体に大きく影響を与えます。そこで7D2では、各ラインセンサーの間隔やセンサー面に届く光学像の大きさについて入念に最適化し、AFユニットの大型化を最小限にとどめています。また、撮影レンズの光束を有効

フリッカー光源の光量変化

フリッカー光線の影響による光量変化

蛍光灯や水銀灯は、電源周波数に同期して明滅している。AEセンサーでこの明滅を検知し、最も明るくなる瞬間にシャッターが切れるようレリーズタイミングを自動的に調整するのが、フリッカーレス撮影機能だ

に使うために、AF光学系は中央と左右の3つに分割し、中央は中央、周辺は周辺で、それぞれ専用の光学系としています。それにより、広くなった測距エリアの端部まで適切に光が届き、精度良く測距できるようになっています。ただ、コンデンサーレンズで光を3つに分割しているため、その境目では光が遮られてしまいます。測距点の配置で、中央と左右のゾーンの間に少し隙間が空いているのは、この境目に当たる部分です。↙

測距点が増えてもカメラが迷わない 新しいアルゴリズムを採用したAF技術

↘**——なるほど。左右と中央のゾーンで少し隙間が空いているのは、そういう理由だったんですね。ただ、領域拡大時にはこの隙間でアシスト測距点が切れてしまうし、ゾーンAFでも測距点を1つずつ左右にずらせないのが残念です。どうしてこのような仕様になっているのでしょう?**

門原 使おうと思えば使えますが、アシスト測距点として利用するには、基準となる測距点に対し間隔が空きすぎていると考え、ゾーンをまたがないような仕様にしています。

——7D2では測距エリアが周辺まで広がり周辺の被写体にもAFで追えるようになった一方、これまでよりも余計なものにピントが合ってしまうリスクも高くなり、それを排除するアルゴリズムを強化する必要があったと思いますが、そのあたりはどうでしょう?

門原 7D2では、演算結果の連続性や信頼性を重視して、どの測距点を選択すべきかを判断しています。確かに7D2は測距エリアが広がっていますが、測距点自動選択時は至近優先が基本とはいえ、特異なケースは排除するようにしています。また、7Dと70Dはどちらも19点AFを搭載していますが、特にワンショットAFでの測距点自動選択のアルゴリズムは70Dでかなり改善を図り、7D2にもその思想を採り入れています。そういう意味↙

↘では、7D2は、1D Xよりも測距点自動選択が使われるケースが多いと考え、1D Xで培ったAF技術にエントリー系のAF技術も統合し、さまざまな要素を採り入れたAFに仕上がっています。

——歪曲収差補正を行うと、AFフレームが表示されません。理由は分からないでもないのですが、AFフレームの位置が大きく変わるほど歪みが大きなレンズがあるとも思えませんし、大まかでも良いのでどのAFフレームが選択されていたかが確認できれば、AFカスタム設定を考える際に判断材料が増えると思うのですが……。

近藤 歪曲収差補正を行うと、周辺部が少しトリミングされるため、どうしても元の画像と微小なズレが発生してしまいます。それほど大きなズレではないのですが、不正確なAFフレーム情報がデータとして残ってしまうと、お客さまに誤解を与え無用な混乱を招いてしまう恐れがあります。キヤノンとしては、不正確な情報を残さないというスタンスで、カメラ内で歪曲収差補正を行った場合にはAFフレーム情報を残さない仕様にしています。ただ、RAWもしくはRAW＋JPEGで撮影した場合には、RAWの方にはAFフレーム情報が記録されていますので、歪曲収差補正もAFフレーム表示も両方欲しいという場合は、RAWで撮影していただければと思います。

——EOS iSA SYSTEMとはどういう機能ですか? EOS iTR AFと何が違うのでしょう?

大中 被写体を認識する機能です。測光センサーに、画像認識できるRGBセンサーを用いて人間の顔や被写体の色を認識して、その情報をAEやAFに生かすシステムです。EOS iSA SYSTEMを活用したAF機能が"EOS iTR AF"です。被写体情報をAFの測距点選択・追尾に活用しています。AE機能には特別な名称を付けていませんが、RGBセンサーで画像認識したデータを解析して、主要被写体や光源の色を判別し、それに応じて適切なAE制御を行っています。また、EOS iSA SYSTEM とは別になりますが、7D2で新たに搭載したフリッカーレス撮影も、測光センサーを利用しています。蛍光灯や水銀灯のフリッカーをこのRGB測光センサーで検知し、フリッカーによる露出や色合いへの影響が少ないタイミングでシャッターが切れるようレリーズタイミングを調整する機能です。

——先ほど測光センサーでフリッカー検知を行っているという話が出ましたが、ライブビューでも撮像センサーを使ってフリッカーを検知できないのですか?

吉田 フリッカーは電源周波数の倍の周波数(50Hzの場合は100Hz)で明滅するので、明るさの変動を読み取るためには、少なくともその倍以上での高速な読み出しが必要です。撮像センサーからの読み出しはそこまで速くないのが現状です。

——将来的にはライブビューでもフリッカーレス撮影ができると良いですね。

取材を終えて　明解なターゲットと機能がAPS-C一眼レフの存在意義を高めている

野鳥や飛行機、スポーツなど、動く被写体を撮影するアマチュアカメラマンにとって、最高のAFと連写性能を誇るフラッグシップモデルは憧れの存在。しかし、実売で50万円を軽く超える価格と、陳腐化が早いデジタルカメラだけに、ポンとフラッグシップを買える人はそう多くはないだろう。それだけに、APS-Cフォーマットの高速連写モデルに、フラッグシップに限りなく近い性能を求めてしまうのだが、最近は（高い値段で売れる）フルサイズに新製品が集中。APS-Cフォーマットは安くなければ売れない（とメーカーは思っている）ので、なかなか気合いの入った高性能機が登場せず、いわゆる性能と価格のバランスを重視した鋭さに欠ける製品ばかりで、ミラーレスに市場を奪われかねない状態にある。

そんな閉塞的状況の中、5年ぶりのモデルチェンジを果たしたEOS 7D Mark Ⅱ。EOSシリーズ最多のオールクロス65点AFとEOS iTR AFを搭載してくるとは完全に予想外。約10コマ／秒の連写スピードや常用ISO 16000の高感度も、一世代前のフラッグシップモデルEOS-1D Mark Ⅳを超えている。しかも、EOS 7Dとほぼ同サイズのボディで、だ。今回の取材では、高速連写と多点AFを実現するための技術的な工夫だけでなく、そのAF性能を引き出すためのポイントについてもいろいろ質問してみたが、いかがだっただろうか?

ちなみに、パワーのあるバッテリーで力任せにミラーを動かすEOS-1D Xの方が、像消失時間が短く力強さが感じられるのに対し、EOS 7D Mark Ⅱは瞬発力は欠けるものの、ミラーやシャッターの動きにムダがなく、動作音も非常に静かだ。AFカバーエリアも左右斜め方向に大きく広がり、フォーカスロックを併用しなくても撮りたい構図のままでAF撮影できる。フラッグシップモデルにはない魅力だ。

今売れているカメラや交換レンズはこれだ!

最新売れ筋カメラ・レンズ通信

今人気のカメラやレンズはなんだろう? 毎月ヨドバシカメラとフジヤカメラに突撃取材を敢行! 気になる売れ筋情報をランキング形式で紹介する。現在人気の製品が一目でわかるので、カメラやレンズを購入する際の参考にしていただきたい。

レポート：編集部

新製品 カメラランキング　ヨドバシカメラ

取材協力：新宿西口本店 カメラ総合館
東京都西新宿 1-16-13 桑原ビル 1F
担当：阿部淳一さん

EOS 7D Mark Ⅱが1位に堂々ランクイン!

順位	動向	製品名	価格
1	NEW	キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ	224,630円
2	STAY	ニコン D750	221,550円
3	UP	ニコン D750 24-120 VR レンズキット	296,700円
4	NEW	キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ EF-S18-135 IS STM レンズキット	267,830円
5	DOWN	ニコン D810	337,430円
6	DOWN	キヤノン EOS 70D EF-S18-135 IS STM レンズキット	167,880円
7	DOWN	キヤノン EOS 6D EF24-105L IS USM レンズキット	235,410円
8	DOWN	ソニー α7S	235,100円
9	NEW	キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ EF24-70L IS USM レンズキット	365,030円
10	DOWN	キヤノン EOS Kiss X7ダブルズームキット	78,980円

発売されたばかりのキヤノン EOS 7D Mark Ⅱがトップの座を獲得。2種類のレンズキットもそれぞれ上位にランクインした。「予約数が非常に多く、待ちに待った期待のカメラということで好調な滑り出しです」と阿部さん。ニコン D750は前号に引き続き2位の座をキープし、3位にはニコン D750 24-120 VR レンズキットがランクイン。幅広い年齢層から注目が集まっているとのことで、阿部さんは「D750を購入する予定だが、D810も手にとってみて比べたいという若いお客さまが多いです」と話していた。

中古製品 カメラランキング　フジヤカメラ

取材協力：フジヤカメラ店
東京都中野区中野 5-61-1
担当：横田善男さん

※フジヤカメラ店はボディのみの販売です

根強い人気を誇るEOS 5D Mark Ⅱが首位

順位	動向	製品名	価格
1	UP	キヤノン EOS 5D Mark Ⅱ	132,840円
2	UP	オリンパス OM-D E-M5	35,640円
3	UP	ニコン D700	91,800円
4	DOWN	キヤノン EOS 7D	64,800円
5	UP	オリンパス PEN E-P5	37,800円
6	DOWN	オリンパス OM-D E-M1	78,840円
7	UP	キヤノン EOS M	16,200円
8	UP	ニコン D3s	210,600円
9	DOWN	ニコン D800	192,240円
10	UP	ソニー α77	44,280円

今月は、前号2位だったキヤノン EOS 5D Mark Ⅱが1位にランクイン。この1カ月で価格は約5,000円ほど上昇しているが「キヤノン EOS 5D Mark Ⅲへの買い替えを受けて在庫が豊富になったので入手しやすくなりました」と横田さんは話す。在庫の豊富さと手ごろな価格が支持されて、オリンパス OM-D E-M5とニコン D700もそれぞれ大きくランクアップ。圏外から8位にランクインしたニコン D3sについては「意外な機種がランクインしてきました」とのこと。入れ替わりの激しい中古ランキングに来月も注目だ。

新製品 レンズランキング

秋の行楽シーズンで望遠系レンズが人気

順位	動向	製品名	価格
1	STAY	キヤノン EF24-70mm F2.8L Ⅱ USM	222,220円
2	UP	キヤノン EF70-200mm F2.8L IS Ⅱ USM	277,440円
3	UP	ニコン AF-S NIKKOR 24-70mm f/2.8G ED	224,090円
4	STAY	タムロン 16-300mm F/3.5-6.3 Di Ⅱ VC PZD MACRO キヤノン用	67,860円
5	UP	ニコン AF-S NIKKOR 70-200mm f/2.8G ED VR Ⅱ	272,690円

キヤノンのEF24-70mm F2.8L Ⅱ USMが4号続けて1位を獲得。紅葉や野鳥の撮影に備えて、各社の望遠ズームレンズにも人気が集中した。また、品薄状態が続き、ランキングからは外れているが「タムロンの28-300mm F3.5-6.3 Di VC PZD、キヤノンのEF-S10-18mm F4.5-5.6 IS STMやEF16-35mm F4L IS USMも人気があります」とのこと。在庫が豊富になれば、順位は様変わりしそうだ。

中古製品 レンズランキング

安定した人気があるキヤノン 24-105mm

順位	動向	製品名	価格
1	STAY	キヤノン EF24-105mm F4L IS USM	64,800円
2	UP	キヤノン EF17-40mm F4L USM	56,160円
3	UP	キヤノン EF40mm F2.8 STM	12,960円
4	UP	キヤノン EF50mm F1.8 Ⅱ	8,640円
5	DOWN	シグマ 50mm F1.4 EX DG HSM	24,840円

連載が始まって以来、5号連続でキヤノン EF24-105mm F4L IS USMが1位にランクイン。2位にジャンプアップしたキヤノン EF17-40mm F4L USMについては「このレンズからキヤノン EF16-35mm F4L IS USMに買い替えるお客さまが多いです。しかしこちらも大変人気のあるレンズですね」と横田さん。このほか、前号では圏外になったキヤノン EF50mm F1.8 Ⅱが4位に再浮上している。

ヨドバシカメラ 阿部さんの注目製品! 今月はこれ!

Bokeh Freedom Filter

クリスマスシーズンを迎えてイルミネーションが楽しめる時期になりますので、撮影小物として「Bokeh Freedom Filter」に注目しています。光を通さないフィルターの中央に星やハートなどの穴が空けられており、これで点光源をとらえると変わった形のボケを作ることができます。玉ボケをきれいにつくれる50mm F1.4や、50mm F1.8のレンズで使うのがオススメです

販売価格：2,980円（298ポイント還元）
同梱枚数：8枚 ／フィルター径：φ52mm

ヨドバシカメラ新宿西口本店
カメラ専門チーム マーケットイノベーター
阿部淳一さん

フジヤカメラ店 横田さんの注目製品! 今月はこれ!

シグマ 150-600mm F5-6.3 DG OS HSM | Sports

シグマから焦点域150-600mmのズームレンズが2本発表されました。私は先に発売になったこちらのモデルに注目しています。店頭に製品が届いたときは、サイズや重量感に驚きました。趣味で飛行機を撮影しているので、ブルーインパルスを寄り引きでとらえるときに便利そうだと感じました。ぜひ使ってみたい1本ですね

販売価格（新品）：197,800 円
レンズ構成:16群24枚／絞り羽根枚数:9枚（円形絞り）／最小絞り:F22 ／最短撮影距離：2.6m ／最大撮影倍率：0.2倍／フィルター径：φ105mm ／大きさ：約φ121 ～ 290.2mm ／重さ：約2.9kg

フジヤカメラ店
営業部 商品企画室 課長
横田善男さん

掲載している販売価格は10月30日現在の価格（税込）です。店頭販売価格は変動するため、掲載価格と実際の販売価格は違う場合があります。フジヤカメラ店の中古カメラ・レンズは全てA（最高）ランクの販売価格です。

キヤノン EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM

人気の超望遠ズームレンズが約16年ぶりにリニューアル

ネイチャー系のカメラマンたちから絶大な支持を受けるEF100-400mm F4.5-5.6L IS USMが、約16年の歳月を経てリニューアルされる。光学設計やメカ設計などの開発者のインタビューから、新型EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USMの実力を読み解いてみたい。

開発者インタビュー

インタビュアー・人物撮影：高橋良輔

——まず、EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USMのポジショニングと、想定する被写体や撮影シーンについて教えてください。

横田　前モデルのEF100-400mm F4.5-5.6L IS USMは1998年11月に発売されて以来、プロをはじめ、ハイアマチュアのお客さまからの支持が高いレンズです。しかし、発売から約16年が経過していますので、リニューアルの要望がとても多く寄せられていました。レンズのポジショニングは前モデルと同様で、ネイチャー系の撮影を得意としていますが、飛行機の撮影やモータースポーツ、風景撮影などにも幅広くお使いいただけます。リニューアルをするからには、皆さまにご納得いただける性能のレンズを作りたいと考えていました。

——約16年間リニューアルされなかった理由はどこにあるのでしょうか。

横田　満足していただけるよう性能の検討に時間を要しました。リニューアルするのであれば光学性能の向上は絶対に外せませんが、レンズが大きくなったり重くなったりすると使い勝手が悪くなりますので、その検討に時間をかけていたわけです。今回のレンズは超望遠シリーズやEF70-200mm F2.8L IS Ⅱ USM等で培ったノウハウと技術を詰め込んでいます。

——前モデルのユーザーからの改善要望項目を具体的にお教えいただけますか。

横田　ご要望がそのまま製品の特徴にもなっていますが、大きく挙げて5つあります。1つ目は解像力の向上です。前モデルは16年前の製品のため、現在のデジタル環境に合わせたLレンズにふさわしい高画質化を目指しました。2つ目は逆光対策の強化で、新コーティングのAir Sphere Coating（エアー・スフィアー・コーティング）を採用しています。逆光対策はお客さまからの要望もあった部分ですが、こちらからの提案でもあります。3つ目が最短撮影距離の短縮で、従来の1.8mから0.98mまで縮めることができました。4つ目はレンズサイズの維持です。特に海外へ動物やスポーツを撮りに行かれるお客さまから、「現在使っているカメラバッグにすっぽりと入り、機内持ち込みがしやすいサイズをキープしてほしい」という声をいただいていました。可能な限り光学性能を高めながらも、サイズ感が大きく変わらないように配慮しています。最後がズーム方式の変更で、従来の直進式から回転式に変更し、操作性のアップを図っています。

（写真左より）ICP第一事業部 横田 渉氏／ICP第一開発センター 主任研究員 杉田茂宣氏／ICP第一開発センター 主任研究員 長尾裕貴氏

——直進式ズームから回転式ズームに変更した理由について、より詳しくお話をお聞かせください。

横田　直進式のほうがいいという方もいらっしゃいますが、メリットとデメリットを考えながら、世界中のプロやハイアマチュアの声を聞き、回転式ズームを採用しました。第一の理由は現在のズームレンズは回転式が主体ですので、ほかのレンズと操作系を合わせるという目的があります。また、回転式のほうが意図した焦点距離に合わせやすいというメリットがあります。

——直進式ズームはスピーディーに焦点距離が変えられるという利点がありますが、回転式ズームに変更したことで快適さを損なわないよう、どのような工夫をされていますか。

長尾　やはりこのクラスの望遠ズームでは、物理的に第1群レンズの繰り出し量が大きくなります。レンズの繰り出しはカム機構で行っているのですが、一定の回転角でより大きく繰り出すためには、一般的にカムの傾斜角を大きくする必要があります。しかし、いたずらに傾斜角を大きくしてしまうと、ズーム操作が非常に重くなってしまいます。そこで、実用上十分な操作性を確保しながら、より効率的に繰り出せるようなメカを取り入れています。

——つまり、カムとは螺旋階段のようなもので、傾斜角が大きくなるというのは、勾配が急になるということと同意ですね。

長尾　はい。その通りです。このレンズの機構を簡単にご説明しますと、減速機構のようなものが仕込まれています。具体的にはカムとコロを使った機構です。ズームリングの内側にカムが切ってあるのですが、このレンズはその内側にあるカム筒とさらにその内側の筒にもそれぞれカムが切ってあります。つまり多段式のカムを組み合わせて、ズーム操作の力が大きくならないようにレンズの移動距離を稼いでいます。多段式というとタケノコのように1段目が出てきて、その次に2段目が出てくるように思われるでしょうが、その動きが見えないように内部で行っています。

——多段式にすることによって、具体的に何が変わるのでしょうか。

長尾　ひとつあたりのカムの傾斜角を小さくすることができます。直進式ズームでは手で直接引っ張って第1群鏡筒を動かしますが、今回の回転式ズームではズームリングの内側にカムが切ってあり、そのカムの軌跡に沿わせて第1群鏡筒を動かします。本レンズでは第1群鏡筒の動きに追従して、内部のカム筒が回転しながら繰り出し、焦点距離移動に必要なすべての光学系が動くように設計されています。

——この機構は初めて搭載されているものですか。

長尾　まったく同じものではありませんが、同様の技術はEF70-300mm F4-5.6L IS USMにも採用しています。操作時のトルクをほぼ一定に保てることから、望遠ズームに向く技術です。

——ズーミングの途中で急に操作感が重くなったりしないというわけですね。

長尾　はい。そうです。

——このレンズにはズーミング時のトルクを調整するリングが搭載されていますが、どのように使いこなせばいいのでしょうか。

長尾　撮影時におけるズームの操作感は、撮影者にとって重要な要素だと考えています。調整リングは回転させることでズームトルクを重たく（軽く）できるシステムです。具体的には、レンズを水平に構えることが多いスポーツ撮影などでは軽めにセット、またレンズを上向きにして撮影するときなどは重めにセットしておくと、衝撃で画角が変化することを防げます。持ち歩き時に強めにセットしておくことで、自重でレンズが伸びてしまうことを防止する効果もあります。

——前モデルでも同様のシステムが搭載されていますが構造は同様ですか。

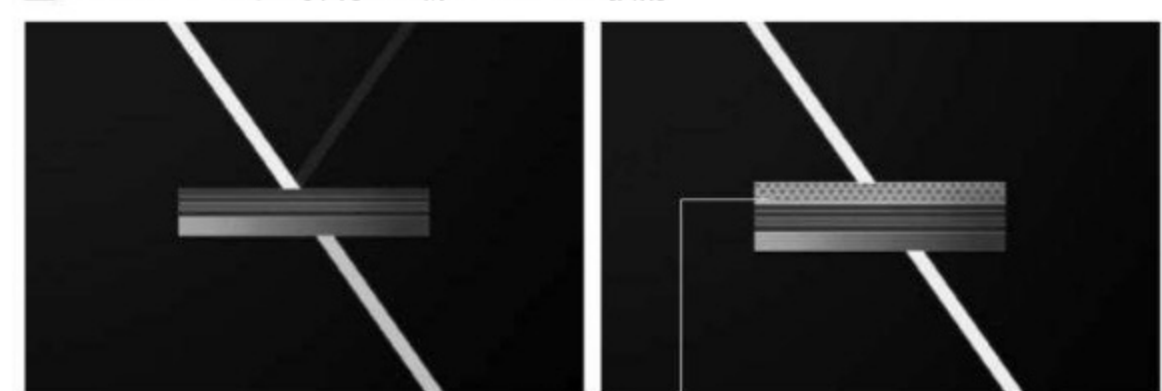
長尾　いいえ。ズームリングと調整リングの間にあるリングをじっくり見ていただくとわかるのですが、調整リングを回すとこのリングが前後するようになっています。リングが移動して内部の弾性体がズームリングを押さえ付ける構造になっています。

——自動車のクラッチのような動きですね。

長尾　はい。摩擦クラッチの押し強度を変えるようなイメージです。前モデルではリングを回転させることで"径の方向"に締め付けていましたので、基本的な構造そのものが異なります。弾性体の素材についてはお話しできませんが、バネなどを使った複数の部材でトルクが制御されているとお考えください。

■ レンズ構成図

基本的なレンズレイアウトは前モデルと似ているが、各群においてレンズが増して16群21枚で構成されている。フォーカス群などのパワーが高められているのと同時に、新開発のASCは第17レンズの物体側に採用。光学的にストレスのかかる部分での反射防止を担う。また、第1・21レンズの外側面にフッ素コーティングを実施している

■ フレア・ゴーストを抑制する新コーティング技術

多層コーティング（蒸着膜層）　ASC（超低屈折率層＋蒸着膜層）

通常の多層膜コーティングでは空気との境目に"界面"が発生して、一定量の反射が起こってしまう。しかし、最新技術であるAir Sphere Coating（エアー・スフィアー・コーティング）ではコーティングの表面に空気の球を配置することで界面の形成を和らげ、光を効率的に内部へと導いている。なお、トップ層以下のコーティングは、蒸着による従来の多層膜コーティングと同様だ

——前モデルと比較して解像力はどう上がり、どのようなシーンでそれを感じることができるのでしょう。

杉田　一言で申し上げるならば"すべて"です。ズーム全域でMTFを上げました。望遠ズームですので、特に望遠端の画面中心付近やメインの被写体が来る部分の解像力に自信をもっています。周辺部の解像力についても、前モデルより大幅に向上しています。

——望遠ズームレンズでは色収差の制御が画質向上のポイントですが、具体的に光学設計で重視している部分はどこでしょうか。

杉田　蛍石とスーパーUDレンズを1枚ずつ使用して、倍率色収差と軸上色収差を徹底的に抑えたことが大きいといえます。さらに、従来モデルのレンズ構成枚数は17枚でしたが、新型ではレンズを21枚使用して、それらを最適に配置することで性能を向上させています。

——蛍石やスーパーUDレンズは、キヤノンの望遠ズームではスタンダードな技術として確立していますが、光学的に向上している部分はどこでしょうか。

杉田　具体的な内容は申し上げづらいのですが、16年の間に培った設計技術と製造技術の蓄積が大きいと思います。17枚から21枚にレンズ枚数を増やしたことで収差補正がしやすくなり、結果として性能が上がっています。しかし、単純にレンズの枚数を増やすだけでは、部品点数の増加に伴う精度誤差の振れ幅も大きくなります。そのようなことが起きないように設計と製造技術に工夫があり、21枚のレンズ枚数をフルに生かしきることが可能になりました。

——精度誤差を極力抑えることで高度なレンズ設計がトータルにできるようになったことが高画質化につながっているわけですね。つまり、特効薬のようなものでボーンと画質が上がっているわけではないと……。

杉田　まったくその通りです。

——EF70-200mm F2.8L IS Ⅱ USMの画質と同等とのことですが、ズーム比が大きいにもかかわらず、そこまでの高画質化がどうして可能なのでしょうか。

杉田　原理原則的な話になりますが、望遠レンズの性能は焦点距離に対するレンズの長さで決まってきます。EF70-200mm F2.8L IS Ⅱ USMはインナーズーム方式のため、ズーム全域でレンズ長は一定ですが、EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USMは、望遠側ではレンズが繰り出しますので、光学系の基礎的な実力が上がるわけです。しかし、前玉を繰り出す望遠レンズでは、鏡筒にガタが生じやすいのも事実です。そこで今回はメカ設計と協力して、ガタを極限まで抑え込んだことが、画質向上上のポイントであるといえます。

——なるほど。そのための鏡筒内部の多段式カム構造でもあるわけですね。

長尾　そうなりますね。

最短撮影距離は従来レンズの約半分（0.98m）に短縮

――最短撮影距離が従来の約1/2に短縮されていますが、短縮化を可能にした技術的な背景や秘密はどこにありますか。

杉田　技術者の意地ですかね（笑）。まず、最短撮影距離を短くするためには、フォーカスレンズ群をいっぱい動かす方法と、フォーカスレンズ群のパワーを強くする方法があります。前者は移動量を稼ぐことで至近までピントが合うようにし、後者は少しの移動でも至近までピントが合うようになります。今回は、そのどちらも採用しました。特にフォーカスレンズのパワーを強くすると、ちょっと動いただけでもピントが大きく変わるということなので、ガタツキがなく駆動させることが非常に重要になります。また、フォーカスレンズの動きはAFの精度とも深く関係しており、すばやく動かしつつ、所望の位置に精度良く止めるという、高精度な制御も要求されます。その辺りをメカ設計と協力してガタツキがない機構を採用することで克服しています。机上の光学設計だけなら、従来のフローティング技術の延長で、ある程度寄れる設計ができていましたが、それをいかに精度良く駆動できるかという、光学設計とメカ設計との調和こそが、0.98mを達成した大きなポイントになります。

長尾　メカ設計の立場で申し上げます。今回の達成は、敏感度の高いフォーカスレンズの移動量を増やしたいという光学設計からの要求をどれだけ叶えられるかというところがポイントでした。最終的に、今回の設計仕様で、メカ構造の成立に必要な条件を満たすことができました。フォーカスレンズもズーム同様にカム機構で駆動する構成にしていますが、条件としてはまず、カム機構が配置できるかという点でした。次に、フォーカスレンズをカムの軌跡どおりに精度良く駆動できるかということ。こちらについては、フォーカスレンズを精度良く保持しつつ、ガタツキがなく駆動できるように「ガタ寄せ機構」を入れて可能にしました。次に、レンズ駆動に必要なトルクですが、アクチュエーターで動かすことができる範囲のトルクに収めないといけません。フォーカスの回転角度を増やせば、トルクを小さくすることは可能なのですが、そうすると限られたスペースの中でカムを配置することが難しかったり、ガタ寄せを含めたメカ構造を収めることが難しかったりと、諸問題がありました。また、鏡筒を薄くする方法も考えましたが、そうすると必要な剛性を得られなくなります。狭い空間の中にすべてを入れ込むことができるように工夫することで、光学設計の理想どおりの動きをするメカ設計が完成したことが、ポイントだったと思います。

――最短撮影距離が短くなると収差も同時に増大すると思いますが、どのような技術でそれを抑制しているのでしょうか。

杉田　その件に関しましては、一部のレンズをフローティングさせることも含めつつ、トータルなレンズ配↙

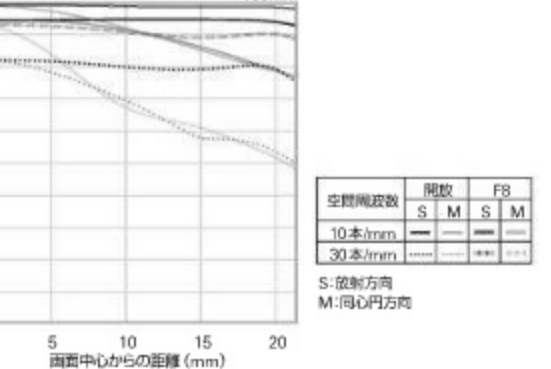
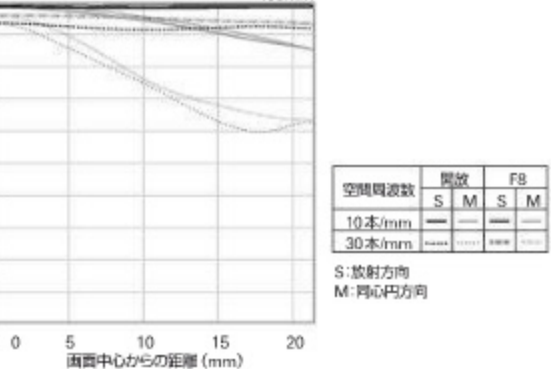
トルクの負荷が変えられる調整リング

前モデルと同様の機能だが、押さえ付けの方法が変更されて操作感が高まった。リングを回すことでズーム操作の重さを変えることができ、撮影中に不用意にズームが変化してしまうことを防げる。また、重めにセットすることで、携帯時にレンズの自重でズームが伸びる現象も防げる

取り外しが容易な三脚座

中央部のネジを回すことで、三脚座を二分割できる。前モデルで三脚座を外す場合は、レンズの後端からリングごと抜き取る必要があったが、新型ではレンズを装着したままでスピーディーに着脱が可能。また、三脚座を外すと突起が少なくなるため、カメラバッグへの収納が容易に

開閉式の操作窓付きレンズフード

スライド式の操作窓が新設されたレンズフード。PLフィルターを操作する場合に、スライド式の窓を開けてPLフィルターの外枠が回せる。これまでのようにレンズフードを着脱する必要がないため、ズームの変動や構図のズレなどが起こりにくい。ユーザーからの声を反映して新設された

↘置の最適化で乗り越えています。

――それにしても、約1/2まで最短撮影距離を短縮するのは、並大抵のことではないと思いますが……。

杉田　そうですね。フォーカスレンズは、フォーカスに関するカムとズームに関するカムを組み合わせた軌跡で移動するようになっています。つまり、それらのカムを複雑に組み合わせて所望の関係性を作ることに成功したことが大きく寄与しています。

――その辺りは、長玉独特の作り込みというべきものなのでしょうか。

杉田　いいえ。標準ズーム系でも用いていますが、このレンズでは重たい前玉のガラスが動くので、それによるズームトルクの変化と、ほかのレンズ群との移動スピードの関係を高度にバランスさせる必要があり、そこにノウハウが詰まっています。

――それでは、次にASCについてお尋ねします。まず、ASCとはどういう技術で、従来のレンズコーティングとはどこが異なるのでしょうか。

杉田　ASCは本レンズから搭載される技術で、正式には「エアー・スフィアー・コーティング」といいます。従来のコーティングは、蒸着という方法を用いて何層もの膜を積み重ねています。ASCも基本的には同じなのですが、空気と接する最表面の層の性質に特徴があります。その層の屈折率が、通常の蒸着膜に対して、大幅に低くなっています。反射は屈折率が異なる媒質の界面で生じ、その反射率は媒質の屈折率の差が激しいほど大きくなります。通常の蒸着膜の材料は、最も屈折率が低いものでも、ある程度の屈折率があり、空気との界面での反射を抑えるのに限界があったのですが、それに対して「超低屈折率層」というものを作り出すことで、蒸着膜レンズコーティングが大きく進化しました。それが、ASCです。

――断面図を見ますと、まるで発泡スチロールのようなハニカム構造になっていますね。

杉田　それは空気の玉を規則的に配列させているためです。光の波長より小さいナノレベルの空気の玉を表面に並べることで、あたかも密度の低い材料のように見せかけるという技術です。つまり、コーティングの表面に空気を織り交ぜることによって、光にとっては屈折率が低い素材であるかのように見せているのです。

――表面の材質は従来と違いはありますか。

杉田　いいえ。素材そのものは通常の蒸着膜と変わりません。

――SWCは界面の密度を変えていきながら光を取り込んでいくという技術だと解釈していますが、ASCは原理的に異なっているのでしょうか。

杉田　光の波長よりも微細な構造で、見かけの屈折率を変えるという意味では同じなのですが、作り方はまったく異なります。SWCはクサビ形の膜を形成しており、最表面の尖った部分は空気が多くて膜材は少ないため、空気に限りなく近い性質があるのです。そして、奥へと進むにつれて密度が上がっていく構造です。反射というのは屈折率が変わったところで発生しますので、徐々に屈折率が変化していけば、反射が起こりにくいという理論を用いています。

――それを踏まえてASCの原理を説明してください。

杉田　はい。ASCの場合は、SWCのように徐々に密度を変えていくわけではなく、通常の蒸着膜と同様、空気との界面での反射を、干渉により弱める方法を採用しています。ただし、空気との界面である最表面の層を超低屈折率層にすることで、最も大きい空気界面での反射を小さくしています。そして、何層も重ねたその下のコーティングで、反射する光を打ち消しあって弱くするという考え方です。

――レンズ構成図を見ますと、第5レンズ群の1枚にASCが施されていますが、これには特別な理由があるのでしょうか。

杉田　レンズにはゴーストやフレアが発生しやすい面というものがどうしても存在します。当然、それを回避しながら光学設計を行っていますが、ことさらゴーストやフレアにこだわって設計してしまいますと、肝心の光学性能が落ちてしまう場合があるのです。ですので、今回はレンズ性能が引き出せる光学バランスを保ちつつ、特定の面にASCを施すことによって諸問題を解決しています。

――IS（手ブレ補正機構）に「モード3」が搭載されるなど進化していますが、16年という歳月でIS機構にはどのような変化がありますか。

長尾　第一にいえることは、補正光学系が駆動する際の摩擦抵抗を可能な限り減らすような構造に改善しました。前モデルのISは補正光学系の運動を、ガイド軸を摺動（しゅうどう）させてガイドする構造でしたが、このモデルを含む最新のレンズでは、ボールを転動させてガイドする構造にしています。駆動時のロスを少なくしたメカ構造と制御の改良が合わさって、補正信号に応じてよりスムーズにメカが動くようになったことで、手ブレの補正効果を大きく向上させることができました。

――レンズの耐久性について、前モデルと大きく異なる点はどこでしょうか。

長尾　最も大きな違いは内部の骨組み構造です。マウントから先端部までを支える骨組み構造の部品があるのですが、その肉厚を上げています。肉厚を単純に上げるだけでは、強度は上がりますが重量が増してしまうため、できるだけ肉抜きをしながら強度を保ちました。無駄な部分の肉厚を落とす一方で、強くすべきところは強くしつつ、メリハリを付けた加減を行いました。

――防塵・防滴性能については、前モデルよりもアップしていますか。

長尾　基本的な防塵・防滴構造としては、EF70-300mm F4-5.6L IS USMらの世代の機種に準じています。具体的に強化した部分は、部材と部材の継ぎ目や動きのある部分のシーリングです。

――ズームによって繰り出される部分についての↙

各種操作系スイッチ

ISに［MODE 3］が新設されるなど、新世代のEF望遠レンズと同様の機能に。MODE 3はシャッターの半押し時に補正光学系が電気的にロックされ露光時のみISが機能する。動きの激しい被写体を追う場合、IS特有の画像の揺れ戻しがなく、より正確に被写体をフレーミングできる

MTF曲線

前モデルと比較して、開放絞り時、F8時ともに性能が向上している。特に画面中央部付近では、開放絞りから0.8以上の数値をマーク。被写体の細線・太線ともに、良好に描写できることを示している

解像力の向上は400mm側でさらに顕著だ。前モデルでは30本/mmの同心円方向の特性が急激に低下していたが、新型では良好にカーブが推移。画面周辺部で画質ムラが少ないようだ

↘**気密性を高めているわけですね。**

長尾　はい、その通りです。ズーム比の関係から繰り出し量が多いレンズですので、広角と望遠では体積の変化が大きいことが特徴です。そのため、ズーミングによって空気が吸い込まれたり、吐き出されたりしますが、レンズの中に空気は通すけれど、水やほこりは通さない「空気抜き」を行う部分を設けています。もちろん、外側から見える部分ではなく、すべてレンズの内部に設けています。

――三脚座の構造が変更されていますが、特徴や使い勝手についてお教えください。

長尾　ユーザーの方々からのご要望を反映させて構造そのものを変更しています。従来のものよりも、横位置と縦位置を切り替えるときの操作性を向上させています。三脚座を簡単に取り外しできますので、持ち運び時にレンズ全体の体積を小さくすることが可能です。

――三脚座の本体はコンパクトですね。大きければ大きいほど有利であるように感じられますが……。

長尾　従来のものとは構造がまったく異なりますので問題はありません。むしろ、三脚座の剛性を上げるために太くしている部分もあります。今回は製品の軽量化を考えて、十分な剛性を確保しつつ、小さくできる部分については熟慮を重ねて形状を検討していきます。また、リング部と鏡筒に一体感があるデザインになっていますので、スマートに持ち運べます。さらに、リング部を取り外せない構造にすることで、内部の構造を合理的に設計でき、スムーズに動かせます。

――レンズフードにはPLフィルターなどの操作用の窓が開けられていますね。

長尾　この部分については、ユーザーの方々からの声をストレートに反映させました。このクラスの望遠ズームのフードは、十分な遮光効果を得るためにどうしても所定の長さが必要です。そのためフード装着時の撮影において、一度構図を決めてからフードの前側から手を入れてPLフィルターを回すと、焦点距離が変わってしまったり、三脚が動いてしまったりするというお話がありました。そこで、今回は操作性を良くするという目的のため、PLフィルター調整用の窓を新設いたしました

――最後に一言ずつ、メッセージをお願いします。

横田　当社デザイナーの言葉を借りれば、人間工学的な官能性能の部分に非常にこだわったデザインですので、手にとっていただければと思います。

長尾　16年分の思いを詰め込んだレンズです。ぜひ使っていただきたいと思います。

杉田　最高の光学性能を達成したと思っています。多画素カメラの性能を存分に引き出せる一品です。また、400mmでの最短撮影距離1mアンダーの世界を存分に味わっていただけたら幸いです。

――本日はありがとうございました。

気になるポイントをユーザー目線でチェック!!

デジカメNEWS調査隊 12月 December

デジカメ関連の新製品、新サービスを中心とした旬の情報を厳選し、取材した内容をレポート。今月はシグマの高倍率ズームレンズなどを中心にピックアップ！

レポート：編集部

小型・軽量でマクロ撮影にも強い シグマの新しい高倍率ズームレンズ

CHECK シグマから16.6倍のズーム比を持つ高倍率ズームレンズ、18-300mm F3.5-6.3 DC MACRO OS HSM | Contemporaryが新登場。APS-C専用レンズで、35mm判換算で約29～480mm相当の焦点域で撮影できる。専用設計のクローズアップレンズ（実勢価格：6,500円前後）を使えば、レンズ単体時の撮影倍率（約0.33倍）を約0.5倍にすることが可能。レンズを交換することなく近接撮影が楽しめる。

シグマ 18-300mm F3.5-6.3 DC MACRO OS HSM | Contemporary

フード（付属）

手頃な価格と取り回しの良いサイズが魅力

キヤノン EOS 70Dに装着

◎発売日：2014年10月30日
◎実勢価格：66,000円前後
◎対応マウント：キヤノン用、ニコン用、シグマ用、ソニー用（Aマウント）、ペンタックス用

●レンズ構成：13群17枚　●対角線画角：76.5˚～5.4˚　●最小F値：F22　●最短撮影距離：0.39m　●最大撮影倍率：約0.33倍　●絞り羽根枚数：7枚（円形絞り）　●フィルター径：φ72mm　●大きさ：約φ79×101.5mm　●重さ：約585g

レンズの最延長時および収納時の大きさをチェック

レンズ収納時の長さは約101.5mm。望遠端まで伸ばしたときの長さは約188mmになる。ズームレンズが前面に長く繰り出すが、カメラに装着して持ったときのバランスが悪くなることはなかった

ズームロックスイッチを搭載

カメラに付けて持ち歩いていると自重でズームレンズが伸びることがあるが、側面にズームリングのロックスイッチを備えているのでこれを防ぐことができる。ロックしておけば、広角端で見下ろすアングルでの撮影にも有効だ

検証 スナップから木の実のマクロ撮影まで オールマイティーに使える便利な1本

◀キヤノン EOS 70D／シグマ 18-300mm F3.5-6.3 DC MACRO OS HSM | Contemporary／18mm（29mm相当）／絞り優先AE（F3.5、1/50秒、±0EV）／ISO 640／WB:オート　街中で見かけた自転車を下からあおり気味にしてスナップした。画角が広く、被写体に近づいても全部写し込める

▶キヤノン EOS 70D／シグマ 18-300mm F3.5-6.3 DC MACRO OS HSM | Contemporary／300mm（480mm相当）／絞り優先AE（F6.3、1/125秒、±0EV）／ISO 200／WB:オート
ぶどう畑の奥の木にぶら下がる房を望遠端でとらえた。近づきにくい被写体をここまで引き寄せられる

クローズアップレンズ（AML72-01）を装着

▲キヤノン EOS 70D／シグマ 18-300mm F3.5-6.3 DC MACRO OS HSM | Contemporary／300mm（480mm相当）／絞り優先AE（F6.3、1/60秒、－1.3EV）／ISO 800／WB:オート
紅紫檀の赤い実に寄って撮影した。クローズアップレンズ装着時の撮影倍率は約0.5倍になり、マクロレンズのような表現ができる

●参考URL　シグマ　http://www.sigma-global.com/

人気のコンパクト機「STYLUS 1」の新モデルは ユーザーから要望の多かった撮影機能を向上

CHECK 開放F2.8通しで焦点距離28～300mm相当のレンズを備えたコンパクト機、STYLUS 1に新モデルが追加。ピント合わせをするときや、ズーム操作時の使い勝手についてユーザーから要望の多かった機能を新搭載。別売アクセサリーとして新たにワイドコンバージョンレンズが追加されており、カメラに装着することで22.4mm相当というよりワイドな画角を生かした撮影が可能になる。

オリンパスイメージング STYLUS 1s

ユーザーの声を採り入れ性能アップで使いやすい

シボ加工のグリップを新採用 レンズの周囲に青ラインも追加

グリップの表面加工やレンズの周囲のデザインを変更し、プレミアム感を演出した仕上がりになった

◎発売日：2014年11月14日
◎実勢価格：70,000円前後
◎カラー：ブラック

●撮像素子：1/1.7型 CMOSセンサー　●有効画素数：約1,200万画素　●焦点距離：6mm～64.3mm（35mm判換算：28mm～300mm相当）　●レンズ構成：10群12枚　●ISO感度：ISO 100～12800　●シャッター速度:1/2,000～60秒、バルブ　●対応メディア:SD／SDHC／SDXCカード（UHS-I対応）、Eye-Fiカード　●大きさ約116.2（W）×87（H）×56.5（D）mm　●重さ:約402g（バッテリー及びメディアを含む）

ワイドコンバージョンレンズ WCON-08X

◎実勢価格：18,000円前後

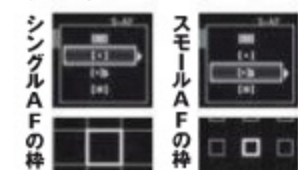
STYLUS 1sにワイドコンバージョンレンズを装着

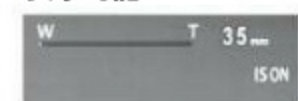
広角端の焦点距離を22.4mm相当にできる別売アクセサリー。カメラに装着用のアダプター（CLA-14、実勢価格3,200円前後）が必要だ

●参考URL　オリンパスイメージング　http://olympus-imaging.jp/

緻密なピント合わせや素早い画角変更ができる機能を追加

被写体をピンポイントで狙えるスモールAFターゲット

シングルAFの枠　スモールAFの枠

MF時の合焦位置の輪郭を表示できるピーキング機能

ズーム時の焦点距離表示を35mm判換算で表示可能

ズームレバー／サイドズームレバーがステップズームに対応

検証 広角端22.4mm相当の画角で撮れる ワイドコンバージョンレンズを試す

◀オリンパス STYLUS 1s／6mm（28mm相当）／絞り優先AE（F8、1/1,000秒、±0EV）／ISO 100／WB:オート
秋空と雲の様子をとらえた。28mm相当の画角では高い空と地面を一緒には入れられなかった

◀オリンパス STYLUS 1s／5mm（22.4mm相当）／絞り優先AE（F8、1/800秒、±0EV）／ISO 100／WB:オート
ワイドコンバージョンレンズを装着すると、空の高さと足元に広がる風景を同時に写せた

PCレスでSDカードをバックアップできる Wi-Fiモバイルストレージに注目

CHECK 出先でデジタルカメラに入っているSDカードの容量がいっぱいになってしまった。しかしノートPCが手元にないので撮影データをコピーできない。そんなときに役立つアイテムがサンディスク・コネクト・ワイヤレス・メディアドライブだ。32GBの内蔵ストレージにSDカードをバックアップしたり、モバイルストレージとして使用したりできる。

サンディスク・コネクト・ワイヤレス・メディアドライブ

内蔵32GBのストレージにカードの中身をコピー

◎発売日：2014年10月下旬
◎実勢価格：18,000円前後

●対応デバイス：iOS 6以降搭載端末、Android 2.3以降搭載端末　●対応OS:Windows 8／7／Vista／XP、Mac OS 10.6以降　●対応メディア：SD／SDHC／SDXCカード　●内蔵ストレージ：32GB　●電源：充電式リチウムイオン電池（内蔵）　●大きさ:約66（W）×66（H）×13.8（D）mm　●重さ：約75g

検証 スマートフォンから専用アプリを使って バックアップ作業が簡単に行える

アプリの画面イメージ　使用イメージ

本体にSDカードを挿し、Wi-Fiでスマートフォンと接続。これで専用アプリからバックアップを実行できる。Wi-Fi経由でSDカードや内蔵ストレージのデータを人と共有することも可能。

●参考URL　サンディスク　http://www.sandisk.co.jp/

F2.8のEFレンズがF2で使える! Eマウント用の新レンズアダプター

CHECK APS-Cセンサー搭載のソニー Eマウント機に、キヤノンEFレンズを装着できるレンズアダプター、SPEED BOOSTERの新モデルが発売中。Caldwell Photographic製の4群5枚の縮小光学系補正レンズを採用し、レンズの実焦点距離とほぼ同じ画角を1段分明るい開放F値で使えるのが特徴だ。

METABONES SONY E用電子接点付SPEED BOOSTER ULTRA EFアダプター

ソニー NEX-6に装着

USB端子を使ってファームアップが行える

●対応機種：APS-Cセンサー搭載のソニー Eマウント機
※フルサイズEマウント機は撮影範囲をAPS-Cサイズにクロップして使用可能　●対応レンズ：EF24-70mm F2.8L II USMなど（詳細は製品Webサイト上にて公開）　●大きさ：約φ69×26mm（三脚座をのぞく）

EFレンズの開放F値を1段分明るくして使える

◎発売日：2014年10月15日
◎直販価格：88,900円

検証 F2相当の明るさを生かして撮影する

ソニー NEX-6／キヤノン EF24-70mm F2.8L II USM／70mm（75mm相当）／絞り優先AE（F2、1/320秒、±0EV）／ISO 100／WB:日陰
日陰で美しく紅葉していたモミジをとらえた。ボケもしっかり描写されている

●参考URL　デジタルホビー　http://digitalhobby.biz/

金属の質感やアナログな操作感が楽しめる コシナのVMマウント単焦点レンズ

CHECK ソニーのフルサイズEマウント機に装着できるレンズアダプター、VM-E Close Focus Adapter専用に設計された、新しい単焦点レンズがコシナから発売された。MF専用だがレンズ本体にヘリコイドを持たないので、アダプター側のヘリコイドリングでピント合わせを行う必要がある。光学系は3枚玉のトリプレットタイプを発展させた3群5枚で、フルサイズEマウント機に最適化されている。金属感あふれるユニークな外装デザインが特徴的だ。

レンズのフィルター径はφ37mm。ブラックのドーム型フードとニッケル仕上げのストレート型フードが付属。フードを変えるとレンズの見た目も変わる

コシナ HELIAR 40mm F2.8

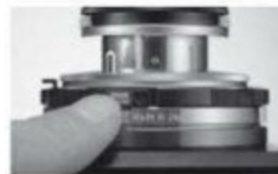
ソニー α7にVM-E Close Focus Adapterを介してHELIAR 40mm F2.8を装着

◎発売日：2014年10月26日　◎実勢価格：43,000円前後
●レンズ構成：3群5枚　●対角線画角：57°　●最小F値：F22　●最短撮影距離：0.5m（VM-E Close Focus Adapter使用時）　●最大撮影倍率：約0.3倍　●絞り羽根枚数：7枚（円形絞り）　●フィルター径：φ37mm　●大きさ：約φ52×12.6mm　●重さ：約132g

●参考URL　コシナ　http://www.cosina.co.jp/

レンズの使い方

レンズを垂直に引き出し、左側に回して固定する

ヘリコイドリングでピント合わせを行う

脱着時は突起に指をかけて回しながら外す

検証 オールドレンズ風の写り具合を楽しめる

▲ソニー α7／コシナ HELIAR 40mm F2.8／40mm／マニュアル露出（F2.8、1/800秒）／ISO 50／WB：オート　道端に咲いていた花をとらえると、周辺がほどよくぼけた表現ができた

撮影にはVM-E Close Focus Adapterが必須

本レンズはVM-E Close Focus Adapterと組み合わせて使う前提の設計になっている。VMマウント、ZMマウントの各レンズを装着可能だ。このレンズアダプターの実勢価格は35,000円前後となる

Loweproの新しいカメラバッグには装着の仕方や機材の出し方に工夫あり

CHECK カメラバッグブランドのLoweproから、2種類のカメラバッグが発売されている。同梱のベルト2本を使って、ショルダー、ホルスター、チェストハーネス、ベルトの4通りの持ち方が選べる中型バッグ「トップローダープロ」シリーズと、バッグの上面や両側面、背面の4カ所から機材を取り出せるバックパック「プロタクティック」シリーズだ。

ロープロ トップローダープロ 70 AW 2

◎発売日：2014年10月2日
◎実勢価格：16,000円前後
●大きさ：約205（W）×280（H）×210（D）mm　●重さ：約910g　●カラー：ブラック

ロープロ プロタクティック 350 AW

◎発売日：2014年10月2日
◎実勢価格：32,000円前後
●大きさ：約280（W）×440（H）×210（D）mm　●重さ：約2kg　●カラー：ブラック

レンズ付きカメラ1台を収納可能

バッグ上部からカメラを出し入れ可能。70-200mmなどの望遠ズームに対応する「75 AW 2」もラインアップ

レンズ付きカメラ2台とレンズ2～3本を収納可能

バックパックの背面を開けて中を整理できる。70-200mmなどの望遠ズームが入る「450 AW」もラインアップされる

●参考URL　ハクバ写真産業　http://www.hakubaphoto.jp/

全天球カメラ「RICOH THETA（シータ）」新モデルは動画撮影に対応

CHECK 360°全天球撮影ができる画期的なカメラ、RICOH THETAに新モデルが追加された。音声付きの全天球動画を最大3分間撮影できるようになったほか、動作速度も改善。さらに本体カラーにピンク、イエロー、ブルーの3色が加わった。

検証 専用PCソフトで動画閲覧や編集が行える

撮影した動画を専用PCソフト「RICOH THETA」（β版）で開くと、一面ぐるりと動画が流れ、不思議な感覚を味わえた。製品版では動画切り出しができる予定だ

リコーイメージング RICOH THETA（RICOH THETA m15）

◎発売日：2014年11月14日
◎実勢価格：35,000円前後
◎カラー：ホワイト、ピンク、イエロー、ブルー
●対応デバイス：iOS搭載端末、Android搭載端末、Windows／Mac OS搭載のパソコン
●大きさ：約42mm（W）×129mm（H）×22.8（D）mm
●重さ：約95g

●参考URL　リコーイメージング　http://www.ricoh-imaging.co.jp/

複数の風景写真を自動合成でつなぎ合わせてパノラマ写真を作れる写真編集ソフトが楽しい

CHECK 軽快な動作速度とさまざまなレタッチ機能の搭載を特徴とするサイバーリンクの写真編集ソフト「PhotoDirector」に新バージョンが発売された。本ソフトの特徴は、風景をパノラマ風に撮りたいときに、手持ちで複数枚に分けてあらかじめ撮影しておき、あとで自動合成するだけで1枚の写真を作れる機能を備えていること。三脚と雲台を使って緻密に位置合わせをする必要がないのでとても便利だ。

サイバーリンク PhotoDirector 6 ULTRA（パッケージ版）

◎発売日：2014年10月10日
◎実勢価格：10,000円前後
◎対応OS：Windows 8.1／8／7／Vista、Mac OS X 10.6.8以降
◎パッケージ版ラインアップ：7,000円前後（乗換え・アップグレード版）、6,000円前後（アカデミック版）

検証 9枚に分かれた風景写真を1枚のパノラマ写真に仕上げる

1 手持ちで撮影した複数の風景写真を用意する

キヤノン EOS 70Dにシグマ 18-300mm F3.5-6.3 DC MACRO OS HSM | Contemporaryを装着して、広角端の18mm（29mm相当）を使い、東京駅前の夜景を9枚撮った。撮影データを開き、仕上がりをイメージして並び替えている

2 合成ボタンを押すだけで自動的につなぎ合わされる

［結合］ボタンを押して待つと、自動合成された画像が表示される。露出の具合が違っても、輝度差が大きくなければオートで合わせてくれるのでとても使いやすい。結合した画像データを好みでトリミングすればパノラマ写真が完成する

完成！

●参考URL　サイバーリンク　http://jp.cyberlink.com/

本革採用のクラシカルなカメラバッグがアルティザン&アーティストから発売

CHECK アルティザン&アーティストから、バッグ上部のフラップに北米ステア牛の特注革を採用した高級カメラバッグが発売。本体は帆布製で、取り出し可能なインナーケースはパイル生地製。ネイビーの本体と鮮やかなレッドのインナーケースの対比が特徴的で、デザインに古めかしさを残しつつも最新の機材に対応する収納力を備える。

アルティザン&アーティスト クラシックカメラバッグ（CLCAM-1000）

フラップに特注の牛本革を採用

ベルトの付け根にロゴマークを刻印

ミラーレス機と交換レンズ2本、ノートPCやタブレットが入る

レンズ付きミラーレス機1台と交換レンズ2本、ノートPCやタブレットを収納可能だ

◎発売日：2014年10月16日
◎直販価格：37,800円
●大きさ：約310（W）×230（H）×120（D）mm
●重さ：約1kg　●カラー：ネイビー
●生産国：日本

●参考URL　アルティザン&アーティスト　http://www.aaa-shop.jp/

カメラストラップにミニバッグが一体化！手ぶらで気軽な撮影に出かけられる

CHECK カメラストラップに小型のバッグが付いたユニークな商品、INSTRAPシリーズが発売されている。サイズは2種類で、レンズキャップやメディアケースなどをしまえる。Lサイズはマチを広げて長財布など大きめのアイテムも収納可能。手ぶらで撮影に出かけるときに使えそうな逸品だ。

グリーンハウス INSTRAPシリーズ

◎発売日：2014年10月14日
◎実勢価格：4,300円前後（Lサイズ）、3,200円前後（Sサイズ）
●大きさ（バッグ部）：約80（W）×200（H）×40（D）mm（Sサイズ）、約140（W）×285（H）×20～60（D）mm（Lサイズ）　●重さ：約80g（Sサイズ）、約128g（Lサイズ）
●カラー：グレー、ブルー、イエロー（Sサイズ）、ブルー、ピンク（Lサイズ）

レンズキャップなどの小物や小型レンズを収納可能

Lサイズのバッグにはカードケースやスマートフォンなどを入れて小物をまとめられる。ミラーレス機の小型レンズなら布などでくるんで、バッグ内に入れて持ち運ぶこともできそうだ

●参考URL　グリーンハウス　http://www.green-house.co.jp/

写真編集ソフト「OpticsPro」「Filmpack」「ViewPoint」3製品の新バージョンが発売

CHECK デジタル画像関連の製品・サービスを開発するDxO Labs社から、ソフト3製品の新バージョンがリリースされた。RAW現像も行える写真編集ソフト「OpticsPro 10」、銀塩フィルム風の仕上げ機能に特化した「FilmPack 5」、広角レンズの歪み補正が行える「ViewPoint 2.5」だ。

OpticsPro 10
◎発売予定日：2014年11月下旬
◎価格：19,900円（ELITE判）、12,900円（ESSENTIAL版）

Filmpack 5
◎発売予定日：2014年11月下旬
◎価格：14,900円（ELITE判）、9,900円（ESSENTIAL版）

フィルムの風合いを忠実に再現できる

ViewPoint 2.5
◎アップデート公開日：2014年10月29日
◎価格：9,900円（ViewPoint 2）
※新規インストール時に2.5がダウンロードされる

撮影データの歪みを自動補正できる

注目 **各ソフトに搭載された注目の新機能**
- OpticsPro 10 ／ ClearView：風景写真などの画像に写り込んだ白いもやを自動補正できる
- Filmpack 5 ／ RAWデータ対応：新たにRAWデータに対応し、自動補正や調整が行える
- ViewPoint 2.5 ／ソフトのプラグイン化：OpticsProから機能を独立させ、単独で使用可能

●参考URL　ソフトウェア・トゥー　http://www.swtoo.com/

マイクロフォーサーズに対応 Kodakブランドの新ミラーレス機

CHECK Kodakブランド製品を扱うJK Imagingが、マイクロフォーサーズ規格に対応するミラーレス機の新製品を発売。KODAK PIXPRO SZ ED 12-45mm F3.5-6.3 AFがキットレンズとして付属する。

Kodak PIXPRO S-1
◎発売予定日:2014年11月21日
◎予想実勢価格:65,000円前後
●撮像素子：4/3型 CMOSセンサー　●有効画素数：約1,683万画素　●Wi-Fi機能：搭載　●大きさ：約115.7（W）×67.4（H）×35.6（D）mm　●重さ：約290g

Kodakフィルム風に撮れるエフェクト機能を搭載
「色彩効果」メニューにはEktachrome、Kodachrome、kodacolorなどを搭載している

●参考URL　マスプロ電工　http://www.maspro.co.jp/

世界初の512GB SDカードが25万円前後で12月発売

CHECK 世界最大容量512GBを初めて実現した「サンディスク エクストリーム プロ SDXC UHS-Iカード」。最大書き込み速度が約90MB／秒で、UHSスピードクラス（最低保証速度）はクラス3（30MB／秒）に対応。高速連写に対応するほか、フルHD動画や4K動画の撮影で求められる仕様を実現している。

●参考URL　サンディスク　http://www.sandisk.co.jp/

サンディスク エクストリーム プロ SDXC UHS-Iカード 512GB

◎発売予定日：2014年12月
◎予想実勢価格：248,000円前後
●最大読み取り速度：約95MB／秒
●最大書き込み速度：約90MB／秒
●UHS-I スピードクラス3・Class10対応
※データ復旧ソフト「レスキュープロ デラックス」1年間利用可能

編集部 耳より情報

デジカメ関連の新情報はこのほかにもまだまだ紹介しきれないほど発表されている。ここではその中から、特に耳よりな情報をピックアップしてお届けしよう。

「ニコンプラザ名古屋」が11月4日オープン

●開設日：2014年11月4日

ニコンイメージングジャパンは、愛知・名古屋に「ニコンプラザ名古屋」を新たにオープンした。ショールームや製品体験コーナー、写真展示スペースを拡充し、地下1階にはセミナールームを新設。これまでの「名古屋サービスセンター」は10月末に営業終了し、ニコンプラザ名古屋にサービスセンターとしてのサポート業務やメンテナンス窓口の業務を引き継いでいる。

▲「ニコンプラザ名古屋」のイメージ図

参考URL　ニコンイメージングジャパン　http://www.nikon-image.com/

下取り商品の査定なしで購入品が先に届く 先取交換サービスをマップカメラが実施

カメラ専門サイト「マップカメラ」を運営するシュッピンは、「先取交換」サービスを9月より展開。マップカメラが取り扱う商品を手持ちの商品との交換によって買取を希望する際、新たに購入した商品が先に購入者の元に届き、後で交換買取に出したい商品を発送するというもの。注文時は購入品の全額をクレジットカードを使って申し込み、差額のみを支払う。

▲「先取交換」サービスのウェブサイト

参考URL　マップカメラ　https://www.mapcamera.com/

18人の写真家がEOS 7D Mark IIで“一瞬”をとらえた作品を展示する特別企画展

●キヤノンギャラリー銀座：2014年11月20日〜11月26日
●キヤノンギャラリー梅田：2014年12月4日〜12月10日

キヤノンは、全国のキヤノンギャラリーにて特別企画展「The Photographers ―一瞬の世界へ―」を開催する。野鳥、鉄道、スポーツ、飛行機、野生動物、モータースポーツ、昆虫の全7ジャンルの第一線で活躍する18人の写真家がEOS 7D Mark IIで撮影を行い、決定的瞬間の数々をとらえた作品が一堂に会する。福岡、名古屋、仙台、札幌の各ギャラリーでも順次開催予定。

▲特別企画展「The Photographers ―一瞬の世界へ―」

参考URL　キヤノン　http://canon.jp/

「ピクトリコ フォトコンテスト2015」開催決定 2015年1月1日より作品の募集をスタート

●応募期間：2015年1月1日〜2月28日　※当日消印有効
●受賞結果発表時期：2015年5月上旬

ピクトリコは、「ピクトリコ フォトコンテスト2015」の開催を発表。3つの部門を用意し、審査員は「自由部門」が合地清晃氏、「ネイチャー部門」が米 美知子氏、「スナップチャレンジ部門」が佐藤倫子氏の計3名。応募は郵送で受け付ける。受賞結果については、ピクトリコ公式Webサイトおよび月刊誌「フォトコン」6月号に掲載を予定している。応募に関する問い合せ先は日本写真企画となる。

▲「ピクトリコ フォトコンテスト2015」のロゴイメージ

参考URL　ピクトリコ　http://www.pictorico.jp/

New Product Report

気になるアイテムをチェック!

カメラやレンズ以外にも撮影時に役立つ製品はたくさんある。この連載では、街角写真家の佐々木啓太氏が気になる製品をピックアップ。実際にフィールドで使用した感想をレポートしていく。 レポート:佐々木啓太

第18回 エディー・バウアー ウェザーエッジダウンストームコート、長袖エディーズフェイバリットフランネルパターンボタンダウンシャツ、ニューオーセンティックスリムストレートデニムジーンズ

コートの表にはミラーレス一眼が楽に入る大きなポケットが左右(上と斜め方向から入れられる)についている

内側にも左右にポケットが2つずつある。上のポケットは両面テープがついたフタもあり携帯を入れるのに便利

内側の左側には下側にメッシュのポケット、上側に財布などを入れるのに便利なジッパー付きのポケットがある

オススメポイント
1 大人っぽく見えるデザイン
2 暖かさをしっかり確保できる
3 街になじむファッション性

長袖エディーズフェイバリットフランネルパターンボタンダウンシャツ

お得意のスリスリポーズ。素材の質感が良く、肌への当たりはとても優しい。これなら汗をかいても気にならない

ウェザーエッジダウンストームコート

袖口はしっかりとしたリブがついている。暖かくなった空気を逃がさず、外から冷たい空気が入ってくるのを防いでくれる

フードは取り外し式になっているので気分転換にもなる。かぶると保温効果は抜群だ

ニューオーセンティックスリムストレートデニムジーンズ

シルエットがきれいで少しゆとりのあるサイズ感。撮影時にしゃがんだりするのも楽だ

Data
(ウェザーエッジダウンストームコート)
標準価格:39,000円/サイズ:XS、S、M、L、XL(11月末展開予定)
(長袖エディーズフェイバリットフランネルパターンボタンダウンシャツ)
標準価格:5,900円/サイズ:XS、S、M、L、XL
(ニューオーセンティックスリムストレートデニムジーンズ)
標準価格:6,900円/サイズ:29〜40
問い合わせ先
■Eddie Bauer Japan(エディー・バウアー・ジャパン)
〒154-8567 東京都世田谷区若林1-18-10 みかみビル3F
☎0120-07-1920(月曜〜土曜/9:00〜18:00)
URL:www.eddiebauer.jp

今回紹介するのは、冬用の洋服。それもちょっと格好いい系の雰囲気だ。ブランドはアウトドアウェアの老舗エディー・バウアー。アウターは650フィルパワーのプレミアムダウンを使ったロングコート。お尻が隠れるぐらいの丈があり、寒さをしのぐのにもちょうど良い。体にフィットするサイズにすると、中の空気を逃しづらいので保温効果が高くなる。袖口にはしっかりとしたリブがついていて、外から冷たい空気が入ってくるのを防いでくれる。表面の生地は風や雨を防ぐ透湿防水素材のウェザーエッジを使用。少ししっかりとした印象はあるが、着ているときに動きづらいと感じることはなかった。ウェザーエッジはエディー・バウアーのオリジナル素材で生地表面には撥水加工も施されている。風を防ぐ効果も高く、ダウンのフィルパワー以上に暖かく感じた。

ジーンズはスリムとストレート、リラックスの3タイプの中からスリムを選択。最近のスリムはスキニータイプが多く、おじさんには厳しいと感じていたが、このスリムは履き心地に少しに余裕があってきれいなシルエットに見える絶妙なサイズ感だった。生地は高品質のアメリカンコットンが使われているのでしなやかさもある。バックポケットの下部は二重布にして補強してあるため、擦れて穴の開く心配も少ない。裾をロールアップしたときのデザインポイントになるレッドステッチも入っている。

インナーは、先染めツイル生地の両面にソフトな肌触りの起毛を掛けたエディーズ フェイバリット フランネル・パターンシャツ。厚みがあり保温性も確保しやすい。肌触りも格別に良かった。気になる毛玉が発生しにくい処理も施されているので安心だ。チェック柄は今年の流行!? そんなうわさも耳にするのでポイントも高そうだ。撮影には機能性も大切だが、たまにはちょっとおしゃれもしてみたらどうだろう? 服が変われば気分も変わるため、いつもと違う場所に視線が向くはずだ。

佐々木啓太(ささきけいた):1969年兵庫県生まれ。日本写真芸術専門学校卒業後、貸スタジオ勤務、写真家のアシスタント生活を経て独立。「写真はモノクロに限る」が口癖で、写真学校卒業以来の暗室オタクも、デジタルでカラーにシフト。フィルムでも、デジタルでも、写真で楽しく遊べる世界を目指す。「街角写真家」として活動中。http://www.facebook.com/KeitaPage2

愛機と長く付き合うために デジタル一眼時代のメンテナンス

vol.5 「動体予測測距は追跡? 予測?」

愛着あるカメラやレンズを長く使うためには、きちんとしたメンテナンスが必要となる。この連載では、キヤノン正規修理代行店で働いている山下 亮氏にメンテナンスの方法を教えてもらう。 レポート:山下 亮

運動会やマラソン大会といったスポーツの撮影で、動いている被写体にピントを合わせ続けるAF機能(キヤノンではAIサーボAF、ニコンではコンティニュアスAFサーボと呼ばれています)を活用しているユーザーの方も多いと思います。このシステムは漢字で書くと、「動体予測測距」となり、読んで字のごとく、動体の動きを「予測」することでピントを合わせています。この機能のことを勘違いして理解している方が意外と多く、カメラが壊れていないのに修理に出されることがありますので、今回はこの仕組みを説明したいと思います。

例えば、右から走って来る人がいるとします。通常はこのまま左に向かって走って行くのが普通です。動いているモノが次に動くであろう方向や、動きのパターンをたくさんプログラムして、その膨大なパターンのデータの中から次の動きを予測。先回りして「置きピン」し続けているのが「動体予測AF」です。ですが、この仕組みを一度被写体をロックオンしたら追いかけ続ける誘導ミサイルのような「動体追跡」であると理解している方がいます。誘導ミサイルなどは、ロックした動体をセンサーがキャッチしたあとは、常に追いかけ続け、最後には追いつくという仕組みです。しかし、写真の場合、それでは追いつくまでずーっと「ピンボケ状態」になってしまいます。動体を「追跡」している限り、被写体を常に「先回り」してとらえることができないわけです。その「先回り」する行為こそが「予測」なのです。動体予測AFが年々進化しているのは、この予測のアルゴリズムが新機種が登場するたびに進歩しているからだと思われます。

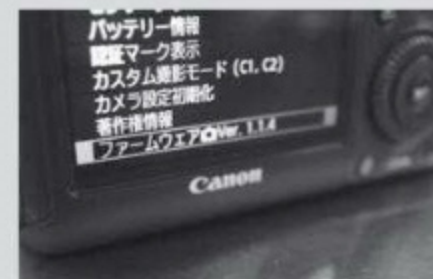
この仕組みを理解することができると、さらに使いやすくなるように準備されている各種の設定を正しく認識できるはずです。例えば、キヤノンではいくつかのモデルに「被写体追従特性(被写体追従敏感度)」という設定があります。これは動体予測の敏感度を調整する機能です。敏感度を上げた場合、測距点でとらえている被写体の前を別の人が横切っただけで、その人の動きを予測しはじめてしまうぐらいに感度が敏感になります。また、敏感度を下げると、被写体の前を誰かが横切ってもお構いなしで、測距点で最初にとらえた被写体を追い続けます。この設定は、サッカーなどのスポーツで大人数が入り乱れるような場面で有効です。カメラに対して最も至近距離にいる選手にピントを合わせたいシーンでは敏感度をアップ。それとは違って、狙った選手にピントを合わせ続けたいシーンでは敏感度をダウンさせると、狙った選手の前を横切る人の動きを無視することができるようになるのです。

この事例は、動体予測AFの仕組みが、あくまで被写体の動きを「予測」していると認識している方にはすぐに理解できます。しかし、動体を「追跡」していると思っている方は、どんなシーンであっても、とにかく敏感度を上げてしまう傾向にあります。敏感度を上げれば、もっと完璧に「追跡」すると思い込んでいるからなんですね。前述した通り、敏感度を上げると、最初にとらえた被写体から、すぐにほかの被写体に予測を変更してしまうことになるため、それを望んでいない場合、「うまく追跡しない!」と感じてしまうわけです。

最近のデジタル一眼レフカメラには、数多くの最新技術が詰め込まれています。それらにすべてをまかせるのではなく、技術の仕組みを理解することも、カメラを使いこなすためには必要になってきていると思います。

エンジニア通信

以前、F1レースを撮影されているカメラマンの機材をお預かりした際に、ちょうどその機種の動体予測の性能を向上させる内容を含むファームウェアのバージョンアップが発表されたので、こちらでファームの更新を行ってからお返ししたことがありました。すると、しばらくしてカメラマンから「何かした?」と問い合わせが入りました。話を聞くと動体予測がうまくいかなくなったとのこと。こちらでは機能が向上するファームに更新しただけだと説明すると、カメラマンからは「だからか!」という返事がかえってきました。その方は、「動体予測は人間が考えたアルゴリズムで予測しているAFなんだから、カメラマンはそのシステムの『クセ』を早くつかまないといけない。せっかく、そのクセをつかみかけてきていたのに勝手に更新されたら、またはじめから練習しないといけなくなるから、元に戻してくれ」と、おっしゃられました。

実際、動体予測AFが過渡期だったころから、そのカメラマンが撮る写真では、しっかりピントが来ていました。「使いこなす」という技を間近で見た出来事でした。

現代のデジタルカメラは昔ながらの「機械」で動くハードの一面とデジタル処理基板などで動く「ソフト」の一面があります。機械の部分を進化させることはできませんが、ソフトはファームウェアを更新することで購入時より性能が上がることがあります

山下 亮(やましたりょう):1973年大阪府生まれ。キヤノン正規修理代行店「PDA GALLOP」技術部長。プロ機材に特化した技術を生かし業界では類を見ない「プロ専門メンテナンスサービス」を開始。日々、多くのプロカメラマンの機材をメンテナンスしている。http://www.pda-gallop.com/

2014年度

フォトコンテスト応募要項

2014年度のデジタルカメラマガジンフォトコンテストでは、3つの常設部門に加え、随時企画部門を開催します！

（2014年3月号選考～2015年2月号選考）

応募期間

常設部門

デジタルフォト部門

2015年2月号選考 **2014年　11月11日～2014年12月10日**

【2015年度】
2015年3月号選考 **2014年　12月11日～2015年1月10日**

組写真部門

【2015年度】
2015年3月号選考 **2014年　11月11日～2015年1月10日**

プリント部門

2015年2月号選考 **2014年　10月11日～2014年12月10日**

【2015年度】
2015年4月号選考 **2014年　12月11日～2015年2月10日**

企画部門

2014年12月号特集1「ナナメの構図」連動フォトコンテスト

2015年3月号選考 **2014年　11月20日～2014年12月20日**

2014年の紅葉フォトコンテスト

2015年冬期選考 **2014年　11月20日～2015年3月20日**

個性派写真展（お題：「街灯」）

2015年2月号選考 **2014年　11月20日～2014年12月10日**

デジタルフォト部門（選考）毎号掲載……… **選者：藤田一咲氏**

デジタルカメラで撮影された画像データ。
カラー、モノクロは問いません。

組写真部門（選考）奇数月掲載…… **選者：岡田 敦氏**

デジタルカメラで撮影された画像データ。複数枚の組写真。
カラー、モノクロは問いません。

プリント部門（選考）偶数月掲載…… **選者：岡嶋和幸氏**

デジタルカメラで撮影された、A3ノビサイズまでのプリント作品。
カラー、モノクロ、出力機、用紙は問いません。

※GANREF応募ページ掲載の「応募票」をプリント作品の裏面に貼り付けて郵送してください
※作品は1枚ずつ透明袋（スリーブ）に入れてください
※上位入賞作品は翌年に行われる展示会へご参加いただけます

賞金・賞品について

◎ **常設部門（デジタルフォト部門、組写真部門、プリント部門）、特集1連動フォトコンテスト、2014年の紅葉フォトコンテスト**

・優秀賞：3万円・準優秀賞：1万円・入選：図書カード5千円分・佳作：図書カード1千円分

◎ **個性派写真展**　**採用作品**：図書カード1千円分

※入賞者にはGANREF経由で振込先・発送先を確認するメールを編集部からお送りいたします。
メッセージ送信から3カ月間ご連絡をいただけない場合、賞金をお送りできない場合があります
※賞金の振り込み、および賞品の発送は掲載号の発売日から約40日以内をめどに処理しております

副賞について

毎月、下記の部門の優秀賞受賞者にはメーカー協賛のもと景品を贈呈いたします

◎ **デジタルフォト部門**

エクストリーム CFカード16GB

エクストリーム プロ SDHCカード16GB

※使用機種によってどちらかを贈呈

提供：サンディスク株式会社

◎ **組写真部門**

Nivelo 244BK（ニヴェロ）

提供：ガードフォースジャパン

◎ **プリント部門**

Lowepro パスポート スリングⅡ マイカ／グリーン

提供：ハクバ写真産業株式会社

常設部門のポイント制および年間賞

◎ **デジタルフォト部門／組写真部門／プリント部門**

フォトコンポイントは部門ごとに集計され、各入賞者（同一の投稿ネームに限る）に加算されます（ポイント数は優秀賞＝4、準優秀賞＝3、入選＝2、佳作＝1）。各部門の年間でもっともフォトコンポイントの多い方を、年間最優秀賞として2015年3月号で発表。その後、特別ギャラリーにて作品を掲載いたします。企画部門のポイントはありません。

応募規定（共通）

- 応募作品はデジタルカメラで撮影した写真に限ります。
- 応募作品は応募者本人が撮影し、著作権を持っている写真に限ります。
- 一般に公募されている雑誌、Web、企業や団体主催のコンテストとの二重投稿や類似作品の応募はご遠慮ください。他コンテストでの落選が確定した作品、応募者本人のWebまたはSNSのMyページなどで公表した作品の投稿は可能です。
- 同一作品は1部門のみへの投稿に限ります。また、同じ号の同じ部門での入賞はひとり1賞までになります。
- 審査は選者と編集部が行います。
- 応募点数は、GANREFのシステム上の制限に沿います。
- **優秀賞の場合、誌面に大きく掲載されることになります。その際、リサイズ前の大きなデータの発送を編集部からメールにてお願いすることがあります。作品のオリジナルデータはなるべく保存しておいてください。**
- プリント部門において、プリント作品の取り扱いには十分注意しますが、万一の事故（紛失、破損など）について主催者はいっさい責任を負いません。
- プリント部門において応募された**プリント作品の返却は行っておりません。**
- **応募作品の著作権は、応募者（撮影者）に帰属します。**
- 被写体の肖像権、著作権などには十分に注意してください。応募者の責任ですべての問題を解決したうえで応募してください。
- **入賞作品について、応募者は、当社のデジタルカメラマガジン記事等出版物、ホームページ、広告、宣伝などで使用する著作権法上の権利について、国内外を問わず、非独占的に使用を当社に許諾するものとし、著作者人格権を行使しないものとします。**
- 応募規定に違反した場合は入賞を取り消すことがあります。
- 審査結果についての問い合わせにはお答えできません。
- 応募された作品は添削の対象となる場合があります。
- 掲載する際は、名前、都道府県名などの情報を掲載します。
- 誌面掲載時の名前（投稿ネーム）はGANREFの表示名とは別に自由に設定できます。ただし、フォトコンポイントは誌面掲載時の名前に付与されるので、年度内で投稿ネームを変更した場合は合算されません。
- 投稿ネームは、商標や特定の個人の権利を侵害しないものにしてください。
- 人（実在の人物であるか否かを問わず、マンガ、アニメ等のキャラクターを含む）の裸体（性器・アンダーヘア・女性のバストトップなど）を撮影、描写した写真や、暴力的なシーンを撮影、描写した写真は応募できません。
- **本応募要項は、デジタルカメラマガジン誌上で行われた過去のフォトコンテストすべてに適用いたします。不明な点は、GANREF（http://ganref.jp/）の「お問い合わせ」フォームからお問い合わせください。**

GANREF　応募はすべて本誌連動Webサイト「GANREF」から行います

http://ganref.jp/

⚠ 応募規定違反の作品は審査の対象になりません。応募前にしっかり確認をして、どしどしご応募ください。

作者氏名は本名での記載を推奨します

2014年度より、誌面に掲載する作者の氏名は本名を推奨します。GANREFにニックネームで登録されている方は、[Myページ]→[設定]→[プロフィールの編集]の[誌面掲載時の名前]に掲載時氏名をご指定ください。ただし本名の記載は強制ではなく、ニックネームでの掲載や本名との併記も可能です。

プリント郵送について

プリント部門の作品の郵送締め切りは偶数月の10日（必着）となります。その日が土日祝日の場合は、その前に編集部に到着するように郵送してください。GANREF上で応募が完了していても、プリント作品が到着しない場合や、プリント作品に応募票が無い場合は選考外となりますのでご注意ください。また、GANREF上での応募手続きがないまま応募票の添付されたプリント作品が郵送された場合も選考対象になりますが、GANREFポイントの付与は行われません。応募票の入手方法や郵送先などは次ページをご覧ください。

PHOTO CONTEST DCM

フォトコンテスト 2014年度累計ポイント

2014年3月号から2015年2月号まで1年間開催する2014年度のデジタルカメラマガジン フォトコンテスト。ここでは各部門の累計ポイントを発表します。左ページの応募要項を参照いただき、自信作をどんどんご応募ください。

2014年度フォトコンテスト累計ポイント（2014年12月号）

組写真部門（12月号現在、敬称略）

順位	氏名	都道府県	今月のポイント	トータルポイント
1	石川賢一	高知県		8
2	田村祐二	滋賀県		6
2	求麗川貞喜	岡山県		6
4	中田多米士	北海道		5
4	パプ	神奈川県		5
6	向後広美	千葉県		4
6	円山貢	神奈川県		4
6	新田麟生<BlackBird>	愛知県		4
9	page	東京都		3
9	s-waki	神奈川県		3
9	川瀬敏明	佐賀県		3
12	青山秀行	北海道		2
12	菊池 靖	岩手県		2
12	小川幸二	山形県		2
12	旅びと	富山県		2
12	澤田慶一郎	愛知県		2
12	長尾昌弘	大阪府		2
12	井上幾雄<めるちゃん1>	大分県		2
19	アンドウ マサヒロ	北海道		1
19	magatan	青森県		1
19	momo-taro	埼玉県		1
19	市川達夫	埼玉県		1
19	清水茂行	千葉県		1
19	志村直樹	東京都		1
19	坂元治代	三重県		1
19	瀬谷泰翰	三重県		1
19	近森健太	大阪府		1
19	Kiyosei Fujikawa	大阪府		1
19	prego	兵庫県		1
19	takabo	兵庫県		1
19	中本則昭	兵庫県		1
19	柳谷行勇	奈良県		1
19	corazon-neo	鳥取県		1

プリント部門（12月号現在、敬称略）

順位	氏名	都道府県	今月のポイント	トータルポイント
1	prego	兵庫県	2	11
2	ウッチーパパ	東京都	2	8
2	田村祐二	滋賀県	2	8
4	円山貢	神奈川県	1	7
4	Kiyosei Fujikawa	大阪府		7
4	冨永貴洋<takabo>	兵庫県	2	7
7	瀬爪 通	神奈川県	1	6
7	Nobuyuki Matsumoto	アメリカ		6
9	夏目冬彦	北海道	4	4
9	大田政行	愛知県		4
9	松尾和敏	福岡県		4
9	井上幾雄	大分県	1	4
13	津坂 純	埼玉県		3
13	清水茂行	千葉県	3	3
13	佐々川陽一<akira moo>	神奈川県		3
13	稲上純一	愛知県	1	3
13	ななみ	京都府		3
13	平康 厚	大阪府	1	3
13	吉井健一<ken-1>	大阪府	1	3
13	skyblue	広島県		3
13	岩下昌平	鹿児島県	2	3
22	大橋 直	東京都		2
22	松成絵理子	東京都		2
22	高橋邦夫	神奈川県		2
22	草島敬子	大阪府		2
26	林 祐也	北海道		1
26	本田駒彦	北海道	1	1
26	刈部 博	宮城県	1	1
26	斎藤一弥	群馬県		1
26	Kuyt	東京都		1
26	石川正明	東京都		1
26	パプ	神奈川県		1
26	大沢幸子	京都府		1
26	林崎貴督	京都府		1
26	セキグチ ヒロシ	和歌山県		1
26	ムラカミ イズミ	広島県		1

デジタルフォト部門（12月号現在、敬称略）

順位	氏名	都道府県	今月のポイント	トータルポイント
1	市川達夫	埼玉県	2	12
2	本田厚子	栃木県	3	10
3	中山朋月	千葉県		9
3	Dobby	兵庫県		9
3	蜜田雄一郎	インド	1	9
6	comomo	千葉県		7
6	prego	兵庫県		7
8	中沢 博	埼玉県		6
8	渡辺英也	千葉県		6
8	小野田浩司	東京都	3	6
11	magatan	青森県		5
11	azumi@noguchi	東京都		5
11	Kata	東京都	4	5
11	t	東京都	2	5
11	KOSHIN	滋賀県		5
11	大沢幸子<CoCo>	京都府		5
11	榎本圭介	大阪府		5
11	中本則昭	兵庫県		5
19	夏目冬彦	北海道		4
19	松本共栄<T.Y.R>	岩手県	1	4
19	加藤淳司	秋田県		4
19	高橋真哉	埼玉県		4
19	江森 操	千葉県		4
19	Kuyt	東京都	1	4
19	榊原昭仁	愛知県		4
19	坂元治代	三重県	2	4
19	谷野栄彦	大阪府		4
19	安川 誠	中国		4
29	島田晃幸	北海道	1	3
29	刈部 博	宮城県		3
29	阿部 聡	山形県		3
29	鬼地正刀	福島県		3
29	佐藤彰調	群馬県		3
29	入 敏明	埼玉県		3
29	駒村優子	千葉県	2	3
29	ceechang	東京都		3
29	神坐 浩	東京都		3
29	k shibuya	神奈川県		3
29	岡 謙一	神奈川県		3
29	ichi16	新潟県		3
29	稲上純一	愛知県		3
29	NEO373	滋賀県	1	3
29	平康 厚	大阪府		3
29	吉住延也	大阪府		3
29	HYPO	兵庫県		3
29	姫賀望弘	岡山県		3
29	Masa.	福岡県		3
29	野口重吉	福岡県	2	3
29	橋本武昌	大分県	1	3
50	浅見 治	北海道		2
50	スズキヒロユキ	北海道		2
50	篠原幹彦	埼玉県		2
50	高瀬広之	千葉県		2
50	page	東京都		2
50	sha	東京都		2
50	ym_gc	東京都		2
50	富久浩二	東京都		2
50	堀川哲仁	東京都		2
50	本多享光	東京都		2
50	Tetra_Angel	神奈川県		2
50	かぶちん	神奈川県	1	2
50	たあくん	神奈川県		2
50	円山貢	神奈川県		2
50	KeiCi Kagi	石川県		2
50	miyabi	福井県		2
50	念張浩之	静岡県		2
50	BlackBird	愛知県		2
50	sleepless	愛知県		2
50	柴田真知	愛知県		2
50	矢野敬和	愛知県		2
50	山崎拓也	愛知県		2
50	Barcarole	京都府		2
50	岡 高嶺	大阪府		2
50	中村 敦	大阪府	1	2
50	西川 浩	大阪府		2
50	atsushin	兵庫県		2
50	山口紫野	兵庫県		2
50	kawagarasu	島根県		2
50	西村直也	岡山県		2
50	原田達成	岡山県		2
50	keinana	広島県		2
50	栗鶴直行	広島県		2
50	下岡之<シモス・チェンバレン>	広島県		2
50	川瀬敏明	佐賀県	1	2
50	tanouetohru	熊本県		2
50	井上幾雄<めるちゃん1>	大分県	1	2
87	綾	北海道	1	1
87	小野光昭	青森県		1
87	中村文哉	青森県		1
87	菊池 靖	岩手県		1
87	小川幸二	山形県		1
87	鈴木徹朗	茨城県		1
87	安藤孝幸	栃木県		1
87	五月女英美	栃木県		1
87	吉田和男	群馬県		1
87	pinこと内田靖夫	埼玉県		1
87	大久保賢二	埼玉県		1
87	菅野雅夫	埼玉県	1	1
87	橋本拓郎	埼玉県		1
87	和泉富夫	埼玉県		1
87	藤田浩史	千葉県		1
87	bellybutton	東京都		1
87	guitarman	東京都		1
87	Nyanjiroo	東京都		1
87	Ryo	東京都		1
87	Takumang	東京都		1
87	tokyojackal	東京都		1
87	y-kuni	東京都		1
87	坂根克人	東京都		1
87	久米原 肇	東京都		1
87	チビコの冒険	東京都		1
87	みっち	東京都		1
87	村内徹平	東京都		1
87	C級サラリーマン	神奈川県		1
87	hal	神奈川県		1
87	INU+	神奈川県		1
87	赤木敏和	神奈川県		1
87	石井芳季<双子座詐画。>	神奈川県		1
87	奥平義則	神奈川県		1
87	スターダストくん	神奈川県		1
87	西村香織	神奈川県		1
87	はいだるい	神奈川県		1
87	パプ	神奈川県		1
87	フォト自由人	神奈川県	1	1
87	山村瑠子	神奈川県		1
87	五島一郎<kitokito>	富山県		1
87	酒井 京	石川県		1
87	征矢直香	石川県		1
87	高村涼介	福井県		1
87	柴田直明	長野県		1
87	高羽 浩	岐阜県		1
87	DAIREX	静岡県		1
87	えふ5.6	静岡県		1
87	田村真叡	静岡県		1
87	Girard Inoue	愛知県		1
87	jijicat	愛知県		1
87	安藤保彦	愛知県		1
87	小山内 潤<rocketracer7>	愛知県		1
87	竹内 晃	愛知県		1
87	松永 繁<まっつん>	愛知県		1
87	カステラ	三重県		1
87	服部克己	滋賀県		1
87	松浦利晃	滋賀県		1
87	compact	大阪府		1
87	oiyan21	大阪府		1
87	Tetts	大阪府		1
87	磯崎輝彦	大阪府	1	1
87	小山竜太郎	大阪府		1
87	にっしゃん	大阪府		1
87	松本 修	大阪府		1
87	吉井健一<ken-1>	大阪府		1
87	Hiro-H	兵庫県		1
87	nikuten	兵庫県		1
87	岩本春樹	兵庫県		1
87	カメ爺　76	兵庫県		1
87	酒井孝能	兵庫県		1
87	スポック艦長	兵庫県		1
87	マーキー	兵庫県		1
87	堀内 徹	奈良県		1
87	柳谷行勇	奈良県		1
87	宮下正則	和歌山県		1
87	Kurihara Masayuki	岡山県		1
87	求麗川貞喜	岡山県		1
87	タシデレ	岡山県		1
87	芦田晴之	香川県		1
87	おまつ	福岡県		1
87	まりも	福岡県		1
87	仁田坂勝己	佐賀県		1
87	Naoki Tomiyama <Naktom64>	沖縄県	1	1
87	ryu	沖縄県		1

2014年度フォトコンテスト プリント部門について

プリント部門　投稿の手順

1. GANREF（http://ganref.jp/）の「コンテスト」からコンテスト名を選び、応募規定をご確認後、応募手続きを行います。GANREF登録がない場合、この作業は不要です
2. 応募規定に登録されている「応募票」をダウンロードしてプリントし、必要事項を記入します。GANREFを介さない場合は右記のURLを直接入力し、応募票をダウンロードしてください
3. プリントした作品の裏面に記入した応募票を貼り付け、郵送にてお送りください

郵送先

〒102-0075　東京都千代田区三番町20
株式会社インプレス
デジタルカメラマガジン編集部
「フォトコンテスト応募係 プリント部門」

応募票ダウンロード

http://ganref.jp/oubo

応募票が新しくなりました　**GANREF登録がなくても応募できます。上記URLからまずは応募票ダウンロード！**

集まれ！

DCM写真部 2014 12

すっかり寒くなってきましたね。気づけば、弊誌も2014年と付くのは今号が最後です。編集部も気持ちよく新年を迎えられるように、少しずつ年末を見越して慌ただしくなってきました。年末に向けて浮足立ってくるこの季節。「師走」らしくどこかせわしない、いつもと違った街の様子をスナップしてみるのも面白いかもしれません。（編集部）

お題を決めてみんなで撮る！ 個性派写真展

今月号のお題は「坂道」

平坦な道より坂道の方が、記憶に残るのはなぜでしょうか？ 移動するにも体にかかる負荷が大きいぶん、体験として印象に残るのかもしれません。さまざまな印象の写真が届きました。

ニコン D700／タムロン SP AF28-75mm F/2.8 XR Di LD Aspherical [IF] MACRO／52㎜／絞り優先AE（F10、1/1,250秒、−0.7EV）／ISO 200／WB：晴天日陰

「夕暮れの頃」sakura（静岡県）

夕日の方向に続く坂道で、自転車をこぐ姿が印象的な1枚。実際の故郷には坂道がなくても、少年時代を思い出させるような1枚です。

「洋腸小径」DOBBY（兵庫県）

腸のように九十九折になった坂道が、斜面の急な高低差を物語っています。車による光の筋が、坂道を何かが駆け巡っているようで印象的です。

ニコン D800E／AF-S NIKKOR 24-120mm f/4G ED VR／35mm／マニュアル露出（F8、213.1秒）／ISO 100／WB：オート

「森の通勤ラッシュ」3（東京都）

働きアリがせっせと移動するのは、木の上でしょうか？ 小さなアリにとっては、ちょっとした勾配も大変な道程かもしれませんね。

パナソニック LUMIX GH4／LEICA DG MACRO-ELMARIT 45mm / F2.8 ASPH. / MEGA O.I.S.／45mm（90mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/160秒、−1.0EV）／ISO 1600／WB：晴天

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF100-400mm F4.5-5.6L IS USM／400㎜／絞り優先AE（F6.3、1/400秒、＋0.7EV）／ISO 250／WB：くもり

「た・び・じ」takabo（兵庫県）

俯瞰で撮影された斜面の構図が面白い1枚。その坂道はどこまでも続いていくようで、タイトル通り旅の1ページを想起させる写真です。

2月号のお題は「街灯」

日が落ちるのがすっかり早くなって、気づいたら街灯が点灯しているような季節になりました。長くなった夜を照らす街灯。どう表現するかはあなた次第です。

募集期間 **11月20日～12月10日**

今日から使える！ 人気者になれる 撮影ひと言アドバイス

写真が趣味だからって、「どうしたら写真がうまく撮れるの？」と漠然と質問されたことはありませんか？ そんなときに使える気の利いたアドバイスの仕方を伝授します。

レポート・撮影：編集部

アドバイザー **鈴木知子**

今月のアドバイス

玉ボケを入れてふんわりアクセントを付けよう

イルミネーションが増えるこの時期。ぜひアドバイスしたいのが玉ボケの作り方。幻想的な円形のボケがアクセントになります。ポイントはなるべく開放F値を使うこと。また、望遠側の焦点距離を使うことで、玉ボケは大きくなります。詳しい方には円形絞り採用のレンズだときれいな円になることも教えてあげましょう。ちょっとした光源があれば簡単に作れることもポイント。木の葉による光の反射でさえも玉ボケのもとになることを教えてあげると、使いやすいネタとして喜ばれること間違いなし！

望遠ズームレンズを使って、135mm（216mm相当）で開放F値のF5.6に設定して撮影。太陽を反射してキラキラ輝いていた茂みが大きな玉ボケになった

F値でボケの大きさが変わる

F16

F値を16まで絞り込むと玉ボケは小さくなる。玉ボケを大きく入れたいときは開放F値を使うようにアドバイスしよう

玉ボケのもとは簡単に見つかる

点のように光を反射する光源（点光源）があれば、玉ボケは作れる。左のような植え込みの光の反射もぼかせば玉ボケになる

あのフォトコン受賞者に会いたい

市川達夫さん

絵画と写真が融合したような作風で、今年度のデジタルフォト部門を席巻している市川さん。優秀賞を取った「花鳥風月」のような日本画のような作品を作るに至った経緯が知りたくてお話を伺いました。

レポート：編集部

2014年3月号デジタルフォト部門 優秀賞 「花鳥風月」

――写真を撮り始めたきっかけは何でしたか？

意識して写真を撮り始めたのは13年前です。父の入院をきっかけに、その姿を収めようとデジタルカメラを購入しました。作品を撮りだしたのは10年前。富士山上空に鳳凰を思わせる飛翔雲がかかっている光景を偶然撮影できました。そのとき、自分と自然と写真が一体となるような感覚になり、それが作品作りの原点になっています。

――その自然と一体となるような感覚があって、野鳥などを撮り始めたのでしょうか？

近所の伊佐沼にはもう10年以上通っています。ずっと通っていると鳥にも表情やまなざしがあることに気づいたのです。そうなると「撮っている」というより「撮らされている」ような感覚です。気づくと、無心にシャッターを切るようになっていました。

――そこから「花鳥風月」のような作品を作られるようになった経緯を教えてください

高校時代は美術部で絵を描いていて、東山魁夷や歌川広重、尾形光琳らの日本の古典にも興味を持っていました。写真がデジタルになったおかげで、編集や印刷まで、絵画と同じようにすべて自分の手で作品を仕上げられます。自分の絵心も刺激されて、デジタルならではの手法による創作意欲が湧いてきたのです。飛ぶ鳥の「動」と日本画の「静」を融合して、さらに進化したような表現を目指すようになりました。

――デジタルになったことで自分の筆や絵の具を手に入れたということでしょうか？

合成などを嫌われる方もいますが、例えば、油絵だって当時は最新技術だからもてはやされたという背景があります。デジタルになったおかげで、作品の細部まで自分の気持ちを込められると私は思います。

――今後の目標を教えてください。

「花鳥風月」の表現を突き詰めていくこと。さらに、舞うように飛ぶ鳥を連写してパノラマ合成した新しい「鳥図鑑」を作ってみたいと思っています。ディテールに目を向ければ、見慣れた雀の飛び方でさえも新たな発見があります。瞬間を凝縮できる写真という表現だからこそできることはたくさんあります。時間がいくらあっても足りません（笑）。

応募要項

お便り…誌面への感想、カメラ、レンズに関する疑問・質問・意見、最近のカメラ生活近況など、みなさんからのお便りを募集します。

写真…「個性派写真展」では、毎号お題を決めて写真を募集します。今回は「街灯」をテーマにした写真を大募集。応募締め切りは12月10日で、掲載は2月号です。どしどし投稿ください。

写真を掲載した方には……図書カード1,000円分

応募方法

○E-mailの場合 **digitalcamera@impress.co.jp**

※Subject（タイトル）は

「DCM写真部 ○○○」

・あて先には必ず「個性派写真展」か「お便り」と入れてください
・すべての投稿には、住所・郵便番号・氏名を書いてください
・ペンネームがある場合はわかりやすく書いてください

○インターネットからの場合

GANREF ガンレフ

投稿ページ **http://ganref.jp/photo_contests**

デジタルカメラマガジンからのおしらせ

■賞金、図書カード、読者プレゼントの発送時期

PHOTO CONTESTやDCM写真部の賞金、および図書カード、読者のプレゼントなどの発送は掲載号の発売日から約40日後をめどに処理させていただいております。

■編集部のTwitterアカウント

@digicame_magをレッツフォロー！

デジタルカメラマガジン2014年10月号 DIGITAL CAMERA MAGAZINE PRESENT 当選者発表

1. Thule「Covert CSC/DSLR Sling」
   秋山新吾（東京都）
2. JOBY「グリップタイト ゴリラポッド」
   伊集院正敏（東京都）／藤岡和夫（石川県）
3. ウエスタンデジタル「My Passport Ultra（1TB）」
   本間悠斗（兵庫県）
4. サンディスク「サンディスク エクストリーム SDHC UHS-Ⅰ カード（16GB）」
   尾崎潤二（東京都）／鈴木美明（愛媛県）
5. レキサー・メディア「プロフェッショナル 1066倍速 CFカード（16GB）」
   伊勢雅美（東京都）
6. IPP「FUJIN（風塵）EF-L001」
   鈴木二郎（東京都）／岩本健児（三重県）／安部匡史（大阪府）

中井精也のがんばれゆる鉄！ ゆるみやげ

関東鉄道「大宝駅記念入場券」

桑原敬至（茨城県）／山本孝太郎（千葉県）／伊東 稔（石川県）／佐藤周逸（静岡県）／田中仙吾（京都府）

写真展最新情報

2014.11.20-12.19

メーカーギャラリー

地域	ギャラリー	展示（11月20日〜12月19日）
札幌	キヤノンギャラリー http://canon.jp/	早見紀章「Various Colors of IRIOMOTE ISLAND ―西表島―」 / 日本鉄道写真作家協会写真展：新幹線半世紀 / 長倉洋海「その先の世界へ」 〜12/22
札幌	富士フイルムフォトサロン http://www.fujifilm.co.jp/	Xシリーズ写真展 2014秋 / 岩本敏弘「移りゆく季節の中で」 / 「かけがえのない HOKKAIDO 2014」 / 写真クラブLIFE 第2回作品展「思いは、ひとつ!」
仙台	キヤノンギャラリー http://canon.jp/	小澤太一「ナウル日和」 / 横木安良夫「GLANCE OF LENS 2014 〜生きている時間〜」
仙台	富士フイルムフォトサロン http://www.fujifilm.co.jp/	52th富士フイルムフォトコンテスト自由部門入賞作品　アンコール展 / 〜12/23
銀座	キヤノンギャラリー http://canon.jp/	EOS 7D Mark II 特別企画展 The Photographers ―一瞬の世界へ― / 2014第38回鉄道ファン・キヤノンフォトコンテスト入賞・佳作作品展 / 秦 達夫「遠山郷 霜月祭 あらびるでな」 / 橘野栄二「命の森 九州」 / 〜12/24
銀座	ソニーイメージングギャラリー 銀座 http://sony.jp/	清水朝子 作品展「ちょっとかがんで」 / 地蔵ゆかり「Zigeunerweisen 〜ロマの旋律〜」 〜1/8
銀座	ニコンサロン http://www.nikon-image.com/	小林紀晴「ring wandering　悲しき迷走」 / 石川竜一「絶景のポリフォニー」 / 松本コウシ 〜12/29
銀座	リコーイメージングスクエア銀座 http://www.ricoh-imaging.co.jp/	浜崎さわこ「Chose specially Rose」
新宿	エプソンイメージングギャラリー エプサイト http://www.epson.jp/	鎌田拳太郎「TOKYO VASE」 / 中井精也「à la gare de Paris」 〜1/8
新宿	ニコンサロン http://www.nikon-image.com/	Juna21　辰巳唯人「Inside／Outside」 / 斎藤純彦「Milestones」 / 第39回伊奈信男賞受賞作品展 / Juna21 三木淳賞奨励賞受賞作品展 / Juna21 蕭 又滋 〜12/22
新宿	ニコンサロン bis http://www.nikon-image.com/	Juna21　吉田幸樹「上越線」 / ニコンカレッジエキスパートコース第2期卒業作品展 / Juna21 第16回三木淳賞受賞作品展 / Juna21 三木淳賞奨励賞受賞作品展 / Juna21 八木隆太 〜12/22
新宿	富士フォトギャラリー http://www.prolab-create.jp/	日本写真会　第35回同人・同友展 / nikoniko一写倶楽部 第2回 写真展「四季の彩」 / 第2回ふるさとお国自慢フォトコンテスト 入賞作品展 / ［スペース1］柳田利美「花見山花候」［スペース2］X100T写真展
新宿	リコーイメージングスクエア新宿 http://www.ricoh-imaging.co.jp/ ギャラリーI	福井智一「ケニア・生命の大地」 / 志水哲也「剱」 / Light & Nature 〜 Photography and the Art of Projection 〜12/22
新宿	リコーイメージングスクエア新宿 ギャラリーII	長瀬正太 和紙写真展「心」 / 志水哲也「剱」 / Light & Nature 〜 Photography and the Art of Projection 〜12/22
小川町	オリンパスギャラリー http://www.olympus.co.jp/	河原雅夫「Re-View 6×6」 / エドワード・レビンソン「都会の美とシンボリズム」 / ハービー・山口「子供たちは今日も歌っている」 / 安田菜津紀と行く東北スタディツアー写真展「高校生の見た陸前高田」 / 〜12/25
品川	キヤノンSタワー キヤノンギャラリーS http://canon.jp/	佐藤信太郎「The spirit of the place」 / 森山大道 〜12/25
六本木	フジフイルムスクエア http://www.fujifilm.co.jp/ スペース1	FUJIFILM SQUARE　企画写真展 蜷川実花写真展 / 休館 / 2014富士フイルム営業写真コンテスト入賞作品発表展 / 第18回「写真家達によるチャリティー写真展」
六本木	フジフイルムスクエア スペース2	FUJIFILM SQUARE　企画写真展 蜷川実花写真展 / 休館 / 柴田祥・片桐英行・鎌田光彦 写真展「12」 / 松本紀生「アラスカ原野行」
名古屋	キヤノンギャラリー http://canon.jp/	写真甲子園2014　本戦出場校作品展 / 宮武健仁「JAPAN SCAPES　日本景一雪月花」
名古屋	富士フイルムフォトサロン http://www.fujifilm.co.jp/	［スペース1］第6回 とやま森の四季彩フォト大賞作品展［スペース2］「よにん・よいろ」写真展 / 花の会　愛知　第28回写真展 / 2014　写真展　「今」 / 風花の会　第18年展　「花舞台」 / 休館
大阪	オリンパスギャラリー http://www.olympus.co.jp/	権 二郎「インドの南」 / tamari 会「Art by Art-filter Photo exhibition」 / 河原雅夫「Re-View 6×6」 / エドワード・レビンソン「都会の美とシンボリズム」
大阪	キヤノンギャラリー http://canon.jp/	築田 純　報道写真展「SPORTS　THEATER」 / 佐瀬雅行「みちのく 祈りの道の果つるところ」 / EOS 7D Mark II 特別企画展 The Photographers ―一瞬の世界へ― / 郡山貴三「いい人　スマイル　パートII ―カメラの前のプロフェッショナル達―」 / 嶋田 忠 〜12/25
大阪	ニコンサロン http://www.nikon-image.com/	Juna21 阿部祐己「新しき家」 / 中井菜央「未明」 / 井上尚久「日常の知覚」 / 野村恵子「赤い水」 / 石川直樹 〜12/29
大阪	ニコンサロン bis http://www.nikon-image.com/	Juna21　浅見俊哉「呼吸する影 ―Shadow of Bombed Trees―」 / 2014年度 大阪芸術大学写真学科選抜展 NEXT / 史上初 カメラグランプリ3冠受賞記念フォトコンテスト受賞作品展 / 森脇 亨「ときしろ」 / 會田 昭 〜12/29
大阪	富士フイルムフォトサロン http://www.fujifilm.co.jp/ スペース1	2014関西女性フォトグループ写真展 / 2014年度 第61回シュピーゲル写真展 / フォト昴「彩時記 11」 / 第十八回AMATERAS展「太陽 月 空 海 大地」
大阪	富士フイルムフォトサロン スペース2	2014関西女性フォトグループ写真展 / 梅田写友会 第7回写真展「出会いの彩」 / 四季会「自然の美」 / 第十八回AMATERAS展「太陽 月 空 海 大地」
大阪	富士フイルムフォトサロン ホワイエ	フォトカルチャー"風" しみずいさをと風の仲間たち写真展 / ミカサカメラ撮影会優秀作品展 / 日本風景写真協会 大阪第一支部 第5回例会作品展 / 本町写真研究所写真展
福岡	キヤノンギャラリー http://canon.jp/	郡山貴三「いい人 スマイル パートII ―カメラの前のプロフェッショナル達―」 / 池田エイシュン写真展〜山口智子2005 / 2014第38回鉄道ファン・キヤノンフォトコンテスト入賞・佳作作品展 〜12/22
福岡	富士フイルムフォトサロン http://www.fujifilm.co.jp/	[illegible]05 / 第11回　シニアデジカメサロン写真展

ピックアップギャラリー

地域	ギャラリー	展示（11月20日〜12月19日）
東京	Akio Nagasawa Gallery http://www.akionagasawa.com/	AKIO NAGASAWA Inaugural Exhibition / Wiliam Klein : TOKYO 1961 〜'15/1/18
東京	マルイジャム渋谷 http://www.0101.co.jp/	「大部彩夏 vs 魚住誠一」
東京	資生堂ギャラリー http://www.shiseidogroup.jp/	「荒木経惟 往生写集―東ノ空・PARADISE」 〜12/25 / 第7回 タムロン鉄道風景コンテスト 私の好きな鉄道風景ベストショット 入賞作品写真展 〜11/20
名古屋	ニコンプラザ名古屋 http://www.nikon-image.com/	高砂淳二作品展「EARTH SONG」

GALLERY

秦 達夫写真展「遠山郷 霜月祭 あらびるでな」

●キヤノンギャラリー銀座　●12月4日〜12月10日

長野県最南端に位置する遠山郷で、12月に行われる霜月祭。「神々にお湯を差し上げる祭」として9世紀ごろから執り行われてきた伝統的な祭事で、方言で「あらびるでな（暴れるからな）」と注意を呼びかける言葉が祭の最中に交わされるという。この祭事を20年間カメラに収め続けてきた、長野出身の風景写真家・秦 達夫氏の写真展が東京・キヤノンギャラリー銀座にて開催される。キヤノンギャラリー仙台でも12月18日から2015年1月6日まで展示予定。

GALLERY

小林紀晴写真展「ring wandering 悲しき迷走」

●銀座ニコンサロン　●11月19日〜12月2日

©小林紀晴

長野県・八ヶ岳で生まれ育った写真家・小林紀晴氏の写真展が東京・銀座ニコンサロンにて開催中。夏の間に迷走しながら成長して冬枯れした植物、人に追われて迷走する動物、両者の間で迷走する人間。故郷の厳しい冬の寒さの中で、人、植物、動物が見せる三者三様の生と死の「回帰の輪」がテーマになっている。表題の「ring wandering」は、人が山中などで方向感覚を失い、無意識に同一地点で円を描くようにさまようことを意味する。

GALLERY

中井精也写真展「à la gare de Paris」

●エプソンイメージングギャラリー エプサイト　●12月5日〜2015年1月8日

©SEIYA NAKAI

冬のパリ。ターミナル駅では、足早に行き交う旅人が、列車の発着の間のわずかな時間で演じる、さまざまなドラマを垣間見ることができる。別れの涙を見せる者、抱き合う恋人たち。国境を越えて行く列車が逆光の中で見せるシルエット。本誌でおなじみの鉄道写真家・中井精也氏がとらえた数々の旅情あふれる作品を展示する写真展が東京・新宿のエプサイトにて開催される。会期中の12月6日にはトークイベント&サイン会を開催予定。事前予約（定員100名）が必要で、参加費は無料。

GALLERY

松本紀生写真展「アラスカ原野行」

●フジフイルムスクエア　●12月12日〜12月18日

©松本紀生

1年のうち約半分をアラスカで過ごし、厳しくも雄大な自然風景の撮影を続ける写真家・松本紀生氏。クジラやクマなどの野生動物、現地の植生、夜空に舞うオーロラの光といった、アラスカならではの被写体を見つめて20年にわたって多数の作品を制作してきた。東京・六本木のフジフイルムスクエアでは、松本氏のカラー作品40点が一堂に会する写真展を開催する。会期中の12月13日には、松本氏によるトークショーを開催予定。

GALLERY

「大部彩夏 vs 魚住誠一」

●マルイジャム渋谷　●11月21日〜11月30日

本誌でおなじみの写真家・魚住誠一氏が撮りためた、タレント・大部彩夏さんの写真20,000点の中からベストセレクションを展示販売するイベントが、東京のマルイジャム渋谷 6階展示スペースにて開催される。展示される作品はすべて予約販売を行う。会期中の22日には大部さんのサイン会を実施予定。また、魚住氏のレクチャーによる大部さんのフォトセッションや、ゲストとのトークショーといったイベントを開催予定。会場ではTシャツや生写真などのグッズ販売も行われる。

GALLERY

高砂淳二作品展「EARTH SONG」

●ニコンプラザ名古屋　●11月4日〜12月13日

撮影：高砂淳二

ニコンイメージングジャパンは、11月4日に「ニコンプラザ名古屋」をオープンした。開設記念イベントとして、ニコンプラザ内の「フォト・プロムナード」において写真家・高砂淳二氏の作品展「EARTH SONG」を開催している。会期中の12月6日には、高砂氏による講演会を実施予定。このほか、同会場では作家・椎名 誠氏の作品展「寒くてあたたかいアイスランド」を1月10日まで開催中。なお、ほかのイベント開催時には写真展示を休止する場合がある。

BOOK

PENGUIN LAND

●福田幸広　●青菁社

亜南極地域に位置する、イギリス領フォークランド諸島の島々では、夏に多くのペンギンたちが子育てのために集結し、命の続く限り奮闘するドラマチックな姿を見ることができる。ここでペンギンたちとともに過ごし、彼らの姿をカメラで追い続けた動物写真家・福田幸広氏の写真集『PENGUIN LAND』が11月下旬に発売予定。子ども向けの動物写真絵本も多数手がける福田氏による、「久しぶりの大人向け写真集」となっている。判型は148×203mmで全96ページ、価格は1,620円。

BOOK

通過者の視線

●森山大道　●月曜社

「ぼくが50年という時をかけて覚えた唯一のカメラワークとは"通過者の視線"にほかならない」。森山大道氏による単行本未収録の写真論と、エッセイ集『もうひとつの国へ』（朝日新聞出版）からの9編を改訂収録して構成した新刊『通過者の視線』が10月に発売された。スナップへのこだわり、銀塩かデジタルか、モノクロかカラーかといった写真論や、スランプ時代を語った深瀬昌久氏との対話を収めている。判型は四六判で全288ページ、価格は1,944円。

第5回 木村 肇

同じような写真が続くのを見ていると、明らかに集中力が途切れる。良い写真には、そこに物語があると思います。木村肇さんはドキュメンタリーでストーリーのある写真を撮る写真家です。自分の写真にストーリーが欲しい。そう思って木村さんにストーリーの作り方を聞きました。

1982年千葉県生まれ。2012年写真集『谺(KODAMA)』を出版。2012年度九州産業大学フォトコンテスト九州産業大学賞、2012年度コニカミノルタフォトプレミオ特別賞、IPA Photo Book Asia Award 2013 グランプリ。ほか受賞多数。

木村さんに聞きたい３つのこと

ストーリーを語るドキュメンタリー写真の秘密が知りたい。
そもそも物語を、どこから作っているのか?
ストーリーの作り方をどのように学んでいったのか?

カメラを目の前にして、何を撮ったら良いか分からなくなる、そんなときがある。撮り続けること、それは写真を撮るすべての人に共通する大きなテーマである。写真家の保坂昇寿が、自分の作家活動を通じて日頃感じている生き方にフォーカスし、写真に関わる各方面の方々のお話を聞くインタビュー記事連載である。

保坂：木村さんがストーリーの重要性に気がついたのはいつごろですか?

木村：趣味で写真を撮っているころは、写真集を読んでページをめくっていても、単純にすごいな、すごいなって思っていましたけど、もっとストーリーのことは考えなければいけないなと思ったのは2010年くらいですね。それまでは写真を構成するときにストーリーを考えるなんて知りませんでした。2010年に受けたワークショップで、より効果的に意図を伝えるには、どのようにしたら良いのかを学びました。デザイナーやエディターが構成してくれる場合もあるかもしれないけど、基本、写真家が全部やるものだということを知ってから、ストーリーを考えるようになりました。そのワークショップでは、自分でストーリーを作るとか、人に見せるときにはどうするとか、インスタレーション(＊1)するときには、どの写真を大きくしたり、どの写真を小さくしたりするとか、どういう配置にするとかを教わって、大変ためになりました。

保坂：どのようにストーリーを作る練習をしていますか? 写真集を見てストーリーラインを追うとかですか?

木村：そうですね、そうすることが多いです。良い映画を見る、本を読むというのも1つの手段ですけれども、写真とリンクがしづらいので、ワークショップでは良いとされている写真家の写真集や写真展などを見て、良いポイントを議論することをやっていました。ネットで作品を見ても、写真の順番だけは分かるじゃないですか。それは本当に勉強になりますね。でも正直、日本の写真展ではあんまり勉強になるものが少ないなとは思いました。海外に行ったときに、写真展とかギャラリーの展示を参考にすることが多いです。

保坂：それもワークショップで習ったことですか?

木村：ええ。ワークショップの中でディスカッションの時間がありました。200枚の写真を50枚にするというときに、絵的なものでセレクトをする訓練したり、さらに50枚から半分にするのはどうしたら良いのか、もっと面白くするにはなどを議論したり、最終的に結論はあまり出ないんですけど、並べ方は、ストーリーは、こうした方が良いんじゃないか、とか何通りも考えてフィーリングが一番、自分に合っている、見た人に言いたいことが伝わるものを探すということを3日間ぐらいかけてやりました。

保坂：写真を撮り始めるときに、まず構想を立ててから始めるんですか?

木村：撮影しているときにストーリーは全然考えてないです。ある程度、撮って、選び始めたときにストーリーを考えます。それは、初めから自分の考えたストーリーに乗っけていくと、そのストーリーしかならないと思うからです。ある程度の形になりそうだなと思ったら、自分の写真を見返してセレクトしているとき、その段階で初めてストーリーを考えます。

保坂：僕は撮るときにある程度、構想を固めてしまって、

淡々と撮っていくんですね。ところが写真を組む段階になると、とても小さな物語になってしまう。もちろん言いたいことはあるので、結局ステートメントにゴテ盛りすることになってしまうんです。

木村：保坂さんの写真は緻密で、すべてがはっきり写っている。1枚1枚のイメージの力が強くて、すごくストーリーが組みづらい写真だなと思います。僕の写真もコントラストを高くしたモノクロです。強いイメージの写真が多く、絵を自分のやりたい方にいじっていくほうなので、同じように言われます。最近、畠山直哉さんの『テリル』(＊2)という写真集がいいなと思いました。プレーンなイメージで、1枚でもキレイな写真で構成されています。見ていて感情移入できる写真です。想像が入り込む余地がある写真だから、見ていてストーリーができてくるんだろうなと思うんです。

保坂：木村さんが、見る人が入っていく場所を作るには、どうしていますか?

木村：20枚とか30枚とか並べたとき、本当に強い写真を20枚を並べるんじゃなくて、その間にいろんなことを織り交ぜていきます。父親のプロジェクト(＊3)でも、周辺のものを調べたり、ちょっと関係があるものを撮っています。父親が何かやっているところや、ポートレートばかりを撮っていると写真が似たものばかりになってしまいます。遠目の風景や使っているものを小さく撮るとか、以前に住んでいた場所とか、昔の写真とかを撮りました。

保坂：尺が足りるか、絵が足りるか、撮りながらなんとなく考えている。それってプロデューサー気質というか、編集能力、漠然と全体を想像できる能力ということですよね。

木村：多分そう思います。僕の編集能力は、トレーニングをして、がんばってやっていることだと思っています。撮影してある程度まとめる段階になったときに、本を作るんだ、写真展でインスタレーションするんだ、編集するんだと頭に切り替えてやっています。

保坂：編集の際に何に気をつけていますか?

木村：新聞や雑誌の仕事をよくやっていたころは、短時間で決められた時間とギャラで、あるレベルのものを作らなければいけなかったので、段取りを細かく決めて、明日はこういうところに行って、こういうものを撮ろうって考えるようになっていました。事前にストーリーを考えて、そこに写真を乗せるスタイル。それを切り替えることが大変でした。自分のプロジェクトだったら、時間とか自由ですし、どんなものを撮ってもいいはずなんですけど、そのくせが無意識に出たときがありましたね。昔の写真を見ていたら、そんなことをずっと考えてないで撮っていた自由さがありました。その自由さを大切にしたいので、今はこれを撮るっていう決め打ちをするよりは、もっと大雑把な感じですかね。ぼわんとしたものを撮ろうかなって、いうのが近いです。もちろん写真を撮るときも、誰かを撮影しているときも、これは撮らなくていいかな、撮っていいかな、って無意識に考えて選んでいるのでしょうけど、そのときは話したり、話しながら撮ったりしているだけです。でも、それは意識しないと難しいです。以前は、すごい苦痛でしたけど、最近は楽しいと感じています。

今回のインタビューで感じたこと

今回、木村さんとお話をして、とても気が楽になりました。特にストーリーが組みづらい写真、と指摘されたことがうれしかったです。そのように見えるんだと知ったことが、大きな収穫でした。想像の余地や感情移入できる場所とは、イメージのスキや人物を入れることと理解しました。漠然と全体を想像することは、写真を見返すのを増やすことでフォローできそうです。

＊1 ……インスタレーションとは、場所や空間全体を作品として体験させる芸術のことだが、ここでは狭義に写真展を指している。
＊2 ……畠山直哉『テリル』タカ・イシイギャラリー刊(2011年)。現在は産業遺跡となっている仏リールの鉱山跡地ぼた山を四季を通じて撮った作品。
＊3 ……『Man and dog』木村さんの老いたお父さんと犬のシリーズ。親子のいろいろな思いを犬を通した関係で物語った、僕が大好きなシリーズ。

保坂昇寿(ほさかのりひさ)：1968年、東京都生まれ。2009年に米PhotolucidaのCritical Mass2010においてTop50に選ばれる。2011年リブロアルテより『BURINING CHROME:クローム襲撃』を出版。2012年にギャラリー Tanto Tempoにて個展開催。2014年より写真プロジェクト、東京画 Describing Tokyo Scapes by 100 Photographersに参加。http://www.hosakanorihisa.com/

PRESENT

01 1名様
エプソン
カラリオ PF-70

スマホからも印刷できて収納場所を選ばない小型プリンター

●約249（W）×85（H）×176（D）mm ／約1.8kg ●用紙サイズ：カード～ A5
●印刷速度：約30秒（L判・写真用紙〈光沢〉） ●対応メディア：SD ／ SDHC ／ SDXCカード（専用アダプターでmicroSD ／ SDHC ／ SDXCカードおよびminiSD ／ SDHCカードの各メディアにも対応） ●Wi-Fi機能：対応 ●カラー：ホワイト

提供：エプソン販売株式会社 http://www.epson.jp/

02 1名様
aosta
ストラーダ（メッセンジャーバッグ）

レンズ付きデジタル一眼レフと交換レンズ１本が入るカメラバッグ

※カラーはいずれか１色を編集部で選ばせていただきます

●約400（W）×250（H）×150（D）mm ／約400g
●カラー：ブラック、オレンジ、ブルー

提供：株式会社ケンコー・トキナー http://www.kenko-tokina.co.jp/

03 1名様
ウエスタンデジタル
My Passport Ultra (1TB)

大切な写真や映像を安心して保存できるWD製自動バックアップや暗号化もできるHDD

● Windows ／ Mac両対応 ●約110（W）×82（H）×15（D）mm ／約160g ●カラー：ブラック

提供：ウエスタンデジタルジャパン株式会社 http://www.wdc.com/jp/

04 2名様

USB 3.0 対応で超高速転送 ストレスフリーな USBメモリー

サンディスク
サンディスク エクストリーム USB3.0フラッシュメモリー（16GB）

●約70.9（W）×21.3（H）×11.4（D）mm ／約18.1g
●最大読み取り速度：245MB ／秒
●最大書き込み速度：50MB ／秒
●データ暗号化ソフト「SanDisk SecureAccess Software」付属

提供：サンディスク株式会社 http://www.sandisk.co.jp/

05 1名様

プロ仕様の UDMA 7対応 高速コンパクト フラッシュ

レキサー・メディア
プロフェッショナル 1066倍速 CFカード（16GB）

●最大読み取り速度：160MB ／秒（1,066倍速）
●最大書き込み速度：155MB ／秒
●画像復旧ソフト「Image Rescue」無料ダウンロードクーポン付属

提供：レキサー・メディア マイクロン株式会社 http://jp.lexar.com/

06 1名様

集合写真や パノラマ写真の 自動合成が行える 写真編集ソフト

サイバーリンク
PhotoDirector 6 ULTRA

●対応OS：Windows 8.1 ／ 8 ／ 7 ／ Vista、Mac OS X 10.6.8以上
※いずれも64ビット版対応

提供：サイバーリンク株式会社 http://jp.cyberlink.com/

応募要項

［締め切り］2014年12月19日（金）

雑誌公正取引競争規約の定めにより、この懸賞に当選された方はこの号のほかの懸賞に入選できない場合があります。

GANREFサイト上からご応募ください！ ※「CLUB IMPRESS」への登録が必要です

応募先はこちら▸▸▸ **https://ganref.jp/magazine/dcm/howto/**

デジタルカメラマガジンでは下記の内容でWebアンケートを実施しています。そちらにお答えいただいた方の中から、プレゼント抽選を行います。当選者はデジタルカメラマガジン2015年２月号にて発表いたします。

アンケート内容 年齢／住所／役職／業種／職種／パソコン所有の有無／お持ちのパソコンの機種名／パソコン使用歴／使用OS ／インターネット使用歴／デジタルカメラ所有の有無／購入したい周辺機器／お持ちのプリンターのメーカー名と機種名／カメラ歴／デジタルカメラ歴／メールによるお知らせの可否／本誌の記事内容について（［表紙］12月号表紙／［巻頭特別企画］写真家7人のSEVEN SENSES キヤノン EF70-300mm F4-5.6L IS USM ／［特集1］ナナメの構図／［特別企画］キヤノン EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM ／［新製品レビュー］シグマ dp1 Quattro ／カールツァイス Loxia 2/50 ／［特集2］クラシカルなコンパクト5機種／［SPECIAL GALLERY］静寂なる秋日 萩原俊哉／［連載］中井精也のがんばれ ゆる鉄！／［連載］風と木と水が教えてくれたこと／［連載］写真表現カメラマニュアル／［連載］四季の星空風景／［連載］日本風景の色を探す／［連載］レンズ鑑定奉行が斬る!! ／［連載］気持ちが伝わるポートレート／［連載］Photoshop Lightroomで簡単レタッチ シーン編／［連載］いいレンズってなんだ？／［連載］REAL BONES 骨格と機能美／［連載］M.ZUIKOレンズと旅する1泊2日／［連載］私の写真を変えたLENS ／フォトコンテスト12月号選考／世界一わかりやすい動物写真教室イベントレポート／ニコン Df 50mm f/1.8G Special Gold Edition キット／リコーイメージング K-S1 Sweets Collection ／ソニー α6000（ホワイト）／［連載］デジタルカメラ 3Stepレッスン／［連載］メーカー直撃インタビュー／最新売れ筋カメラ・レンズ通信／［特別企画］キヤノン EF100-400mm F4.5-5.6L IS Ⅱ USM「開発者インタビュー」／デジカメNEWS調査隊／New Product Report ／［連載］デジタル一眼時代のメンテナンス／集まれ！DCM写真部／［連載］写真と結婚したという生き方／写真展最新情報／読者プレゼント／奥付／［特集3］絶対に失敗しない超望遠ズームの撮り方／Overview Exhibition of Photography ／遠くから来た舟／編集後記）／今月号の誌面でいちばんよかった写真／現在気になるデジタルカメラの機種名／これからほしいレンズの製品名／好きな写真家／好きな被写体／撮影した写真のおもな使用法／本誌を知った理由／今月号を購入した理由／本誌購入の頻度／本誌へのご意見、ご感想／ご希望のプレゼント

DIGITAL CAMERA MAGAZINE
デジタルカメラマガジン 12 December 2014

デジタルカメラマガジン
2015年1月号は 12月20日(金)発売

特別付録 2015年カレンダー（中井精也）

次号予告

内容は変更することがあります。ご了承ください。

[特集1] **主題**を引き立てるためには**副題**が大切

[特集2] 2015年の 未来予想をメーカーに直撃!!
メーカー横断インタビュー

[特集3] 絶対に失敗しない
イルミネーションの撮り方

乞うご期待!!

デジタルカメラマガジン MOOK＆書籍シリーズ ラインアップ予定

世界一わかりやすい デジタル一眼レフと写真の教科書 改訂版
11月28日発売予定 2,000円+税

世界一わかりやすい デジタル一眼レフと写真の教科書 動物園&水族館の撮り方編
10月31日発売 2,000円+税

キヤノン EOS 7D MarkⅡ 完全ガイド
9月30日発売 2,000円+税

今後も続々とラインアップ
- プロはこう使う。キヤノン **EOS 7D Mark Ⅱ 動体編** ……2月上旬発売予定
- イラストで焦点距離とF値の選び方がよくわかる **レンズのすべて** ……2月上旬発売予定

広告索引

Staff

CD 菊池美範／大村貫一郎（エイアール）
AD 盛田尚弘（エイアール）
本文デザイン エイアール
國枝美里
湯浅レイ子
新里真美（オキデザイン）
写真撮影 加藤丈博
用紙 第一紙業株式会社
印刷製本 共立印刷株式会社
生産管理 籔田 武
広告営業 株式会社インプレス
An Impress Group Company
広告部 清水栄二／高橋伸行／野原大輔
五十嵐敦子／中林さやか
出版営業 吉田和彦／丸岡重之／岩本琢磨
岩織康子／加茂下良憲／嘉藤大輔
飯沼昭教
直販・定期購読 水島晃一／皆川美緒
鶴田真梨／阿部俊大
制作進行 島村正人
編集協力 荒田淳子／山崎理佳
編集 白石由佳／牧浦裕介／庄司亮一
デスク 上田大輔／武間俊樹／小谷輝之
編集長 福島 晃

デジタルカメラマガジン12月号
2014年11月20日発売

発行人●土田米一
発行所●株式会社インプレス
〒102-0075 東京都千代田区三番町20番地
http://book.impress.co.jp
販売●株式会社インプレス 出版営業統括部
TEL.03-5275-2442
広告●株式会社インプレス 営業統括部
TEL.03-5213-6283
http://ad.impress.co.jp
インプレスカスタマーセンター
TEL.03-5213-9295 FAX.03-5275-2443
info@impress.co.jp

雑誌コード 16453-12

絶対に失敗しない 超望遠ズームの撮り方

400㎜以上の超望遠域で撮影できる望遠ズームレンズが続々と登場している。容易には近寄れない被写体にぐっと迫れる世界は、私たちをたしかに興奮させ、シャッターを切る手を止めさせない。超望遠ズームレンズの適切な扱い方と表現効果を知って意図的に操れるようになれば、写真の楽しさは飛躍的に増すはずだ。

A 600mm 飛行機 中野耕志

B 600mm 自然風景 萩原史郎

C 400mm 都市夜景 堀 寿伸

D 960mm 動物 福田豊文

A ニコン D7100／AF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VR／400mm（600mm相当）／マニュアル露出（F5.6、1/1,500秒）／ISO 400／WB：晴天

B ソニー α77／70-400mm F4-5.6 G SSM II／400mm（600mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/160秒、±0EV）／ISO 400／WB：晴天

C キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／シグマ 150-600mm F5-6.3 DG OS HSM | Sports／400mm／マニュアル露出（F10、6秒）／ISO 400／WB：3,150K

D キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／タムロン SP 150-600mm F/5-6.3 Di VC USD／600mm（960mm相当）／絞り優先AE（F6.4、1/4,000秒、−0.7EV）／ISO 2000／WB：オート

レンズ越しにしか見ることができない

超望遠の世界に飛び込もう

1 引き寄せ効果
2 圧縮効果
3 極端に浅い被写界深度
でこれまでは撮れなかった別次元の写真を撮ろう!

レポート：中野耕志

焦点距離が300mmくらいまでならキットレンズでカバーできるが、さすがに400mmや600mmともなるとそれなりの意志を持ってレンズを購入する勇気がいる。しかし、肉眼では点にしか見えない野鳥の表情をクローズアップしたり、高速で飛ぶジェット機をうまくファインダーにとらえたときのハンティングのような快感は、超望遠レンズならではの魅力といえよう。近年は各メーカーがこぞって望遠端が400～600mmをカバーする高性能超望遠ズームレンズを発売し、超望遠レンズがグッと身近になりつつある。スポーツ、動物、風景など超望遠レンズを活用できる被写体はたくさんある。「引き寄せ効果」や「圧縮効果」「極端に浅い被写界深度」といった特性を理解して、標準～中望遠レンズとは異なるアプローチの写真を撮ってみよう。

1 圧倒的な引き寄せ効果で遠くのものを大きく写す

超望遠レンズでもっとも重要視されるのは、遠くのものをどれだけ大きく写すことができるのかということ。200～600mmの焦点距離別の作例を並べてみると、100mm刻みではさほど大差がないが、200mmと400mmの差は大きく、600mmともなればかなりクローズアップできる。さらに、APS-C機に装着すれば、その焦点距離は35mm判換算で900mm相当になり、まるで手を伸ばせば触れられるような大きさとなる。このように超望遠レンズで遠くの被写体を大きく写すことを「引き寄せ効果」と呼ぶ。肉眼では認識できない遠方の被写体も超望遠レンズを通してはじめて確認できることも多々ある。野鳥の識別に双眼鏡代わりに使えるほどだ。また、周囲の無駄なものを排除し、メインの被写体にクローズアップして撮影意図を明確にしやすいのも超望遠レンズのメリットだ。

撮りたい被写体に応じて必要な焦点距離を知っておく

撮影ジャンルにより扱いやすい焦点距離は異なる。飛行機は大型の旅客機なら300～400mmくらいあれば十分だが、戦闘機では500～600mmがほしい。野鳥は人慣れしているカモやカモメなら400mmで撮れることもあるが、警戒心の強い猛禽類や小さな小鳥は600mmでも足りないくらいだ。動物園の動物は柵からの距離次第だが、400mmくらいが扱いやすいだろう。引き寄せ効果に期待するユーザーは自分に必要な焦点距離を確認しておこう。

- ▶ 旅客機：300～400mm程度
- ▶ 動物園：400mm程度
- ▶ 野鳥（人慣れ）：400mm以上
- ▶ 戦闘機：500～600mm程度
- ▶ 猛禽類・小鳥：600mm以上

2 圧縮効果で遠近が凝縮された写真を撮ろう

超望遠レンズ特有の効果が、この圧縮効果だ。本来は離れた距離にある複数の被写体を、あたかも近距離にあるかのように圧縮して描写する効果で、焦点距離が長くなるほどその効果は顕著に現れる。これは広角レンズで遠近感を出すのとは真逆の効果だ。実際には密度が低い被写体を圧縮効果で密度を高く見せたり、背景の山を圧縮効果でより大きく見せたりすることもできる。写真の印象ががらりと変わるので、表現面で大きな影響がある。ポイントとなるのは撮影者、メインの被写体、背景（前景）との位置関係と使用レンズの焦点距離だ。

都市のビル群をぎゅっと凝縮する

広角レンズで都市が広がる様をとらえるのも面白いが、超望遠レンズの圧縮効果を生かせば、ビル群が凝縮されたような写真を撮影できる。超望遠レンズは必要ないようなシーンも、レンズの効果に着目することで、いつもと違う写真が撮れる。

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／シグマ 150-600mm F5-6.3 DG OS HSM|Sports／481mm／マニュアル露出（F11、8秒）／ISO 400／WB：3,500K／撮影：堀 寿伸

背景が迫るような印象を与える

全長約60mあるボーイング777は短めのレンズで近距離から狙うとデフォルメされて写るが、機体の前後方向から超望遠レンズで狙うとボディの均整が取れる。また背景の山までは実際には10km以上の距離があるが、圧縮効果であたかも飛行機の目の前にそびえ立つかのように写り込んでいる。

ソニー α99／70-400mm F4-5.6 G SSM Ⅱ／400mm／マニュアル露出（F5.6、1/15秒）／ISO 400／WB：晴天

3 極端に浅い被写界深度で大きなボケを作ろう

被写界深度が極端に浅いことも超望遠レンズの特徴。被写界深度は焦点距離が長くなるほど浅くなる。メインの被写体にピントを合わせ、背景や前景を大きくぼかすことで主役を浮かび上がらせられる。そのぶんピント合わせは難しく、近距離での野鳥撮影の例では目にピントが合っていてもくちばしはぼけてしまうことがあるほどだ。後ボケの効果を最大にするには、メインの被写体と背景との距離を大きくすると良い。わずかなポジションの差で背景のボケ味は変化するので、完成度を高めるために後ボケもこだわりたい。

ベールのような前ボケで風景を撮る

浅い被写界深度のおかげで前ボケも大きく広がり、まるでベールのように前景を入れることも可能だ。色とりどりの花や紅葉を前ボケとして取り込むことで、幻想的な風景写真を撮影することができる。

ソニー α77／70-400mm F4-5.6 G SSM Ⅱ／400mm（600mm相当）／絞り優先AE（F5.6、1/100秒、＋1.0EV）／ISO 100／WB：晴天／撮影：萩原史郎

大きな後ボケで主役を引き立てる

桜の蜜を吸いに来たスズメを400mmで撮影。APS-C機なので35mm判換算で600mm相当。背景には桜の花と枯れたヨシ原を配置しているが、浅い被写界深度の効果でいい具合にぼけて主役を引き立てている。

ニコン D7100／AF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VR／400mm（600mm相当）／マニュアル露出（F6.7、1/500秒）／ISO 200／WB：晴天

超望遠レンズの扱い方を覚えよう

望遠レンズがはじめての人でも大丈夫！

1 ぶれにくい構え方を心がけよう

シャッターの押し加減に注意!

カメラのシャッターボタンは指の腹で静かに押し込み、シャッターチャンスまで半押し状態をキープする。全押し時に力を入れすぎるとブレの原因になるのと、必要以上に多い連写もブレやフレーミングの失敗につながる

カメラを頬骨にあてて支える

利き目でファインダーをのぞき、カメラを頬骨に押し当てて保持する。フラッグシップ機やバッテリーグリップ付きのカメラでは、さらに顎にも押し当てる。利き目が左の筆者はカメラは体の正面に対し左斜め前に構えるようにしている

左手の位置は用途で決める

レンズを保持する左手は、像の安定を優先するならレンズ先端、素早いズーム操作を優先するなら三脚座を手のひらに乗せ、親指と中指でズームリングを操作すると良い。手ブレ補正の効果はレンズによりまちまちなので、被写体に合わせて効果をテストしておこう

ズーム操作を多用するなら左手はズームリングの位置に持ってこよう

上半身は固定して腰で回転

両足は肩幅まで広げて下半身を安定させ、カメラを構える上半身は固定する。胴体の動きに合わせて腰だけを回転させるイメージだ。常にカメラを保持して被写体を追い続けるのは疲れるので、シャッターチャンスの前後だけで良い

+α 手ブレをしない 限界シャッター速度を知っておく

ブレの要因はカメラブレと被写体ブレに大別される。カメラブレを防止する第一歩は、手ブレ補正機構を切った状態で自らの手ブレ限界を知ること。使用機材の適切なシャッター速度域を把握することで無理な低速シャッターを使うことはなくなるし、高速シャッターを切るために無駄にISO感度を上げることもなくなる。

三脚を使用するときは

超望遠ズームは大口径超望遠レンズに比べると軽量だし、手ブレ補正機構もついているから気楽に手持ち撮影したくなるが、しっかりと撮るならやはり三脚を使いたい。超望遠ズームの三脚座は固定力が弱いモデルもあるので、ミラーアップや電子先幕シャッターを使うなどしてブレ防止に努めよう。

ボディではなく、レンズの三脚座を使って三脚に固定する。なるべく剛性の高い三脚を使おう

2 狙った被写体を逃さずとらえよう

標準レンズ50mmの対角線画角は約46度なのに対し、600mmは約4度とかなり画角が狭い。はじめは狙いどおりに被写体をファインダーにとらえることすら難しいと感じるかもしれない。しかし慣れれば800mmであろうと瞬時にファインダーにとらえられるようになるから心配無用だ。コツは肉眼で被写体をとらえている目線の間にスッとカメラとレンズを挿入すること。慣れない場合や、EVFでファインダー像を認識しづらい場合は、モデルガン用のドットサイト（照準機）併用も有効だ。

ファインダーで探すと失敗する

特に動体撮影ではいきなりファインダー越しに被写体をとらえるのは難しい。広角端でとらえてズームインしても間に合わないケースがほとんどだ

+α 動体追従時はベストな構図で楽な姿勢になるようにしよう

動体を追ってカメラを振る場合、被写体のいる方向により姿勢が崩れてカメラ保持が不安定になりがちだ。そんなときはあらかじめシャッターを切る方向に向けてベストな立ち位置を決めておいたうえで予備動作～撮影～フォロースルーという一連の撮影動作を行う。

3 狭い画角は構図を工夫して補おう

前ボケや後ボケで環境を伝える

ニコン D7100 ／タムロン SP 150-600mm F/5-6.3 Di VC USD ／ 600mm（900mm相当）／マニュアル露出（F8、1/2,000秒）／ ISO 400 ／ WB：晴天

前ボケに別の岩を配置し、ウミネコの背景には海と対岸を後ボケとして配置した。ウミネコまでは約30m、手前から奥までは100mもの距離があるが、超望遠レンズの引き寄せ効果、圧縮効果、被写界深度の浅さをフル活用し、ウミネコの生息環境を1枚の写真に凝縮した

背景ボケを入れて立体感を出す

青空をバックに優雅に飛翔するトビは絶好の被写体だ。しかし単純な青空バックではもの足りない。そこで崖の上部に生える草を背景に入れるべく、トビが崖の縁を飛ぶのを待ち構えた。適度な背景ボケを入れることで立体感を表現できた

ニコン D7100 ／ AF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VR ／ 400mm（600mm相当）／マニュアル露出（F6.7、1/1,500秒）／ ISO 400 ／ WB：晴天

画角は400mmでも約6度しかなく、狭い世界で、画面に取り入れられる要素が少ないと感じるかもしれない。しかし狭い世界のなかにも環境や季節感などを盛り込める。超望遠レンズを使用した作画の考え方は、第一にメインの被写体が浮き上がるよう背景とのコントラストをつけること。アクセントになる背景や前景がメインの被写体と同方向に位置するよう撮影ポジションを考慮するとさらに効果的だ。これにより、野鳥写真であれば画面外にも風景の広がりを感じさせることができるはずだ。

要素が少ないと平面的に見える

画面内の要素がないと立体感が薄れて平面的に見えてしまうことも

4 ピント合わせは設定が肝心！

超望遠ズームレンズは、望遠端の開放F値がF5.6～F6.3程度と暗いものが多いので、撮影条件によってはAFが合いづらいことがある。特に低照度下や低コントラストの被写体は苦手だ。合焦率を上げるコツは3つある。フォーカスリミッターをセットしてAFが動く範囲を制限すること。測距点をメインの被写体に確実に合わせること。そして何より十分な明るさとコントラストを確保することだ。AFモードは、止まっている被写体はシングルAF、動いている被写体はコンティニュアスAFが基本だ。AFで合わない場合はMFでピントを合わせる。

フォーカスリミッターの切り替えスイッチ

レンズによってはフォーカスリミッターを切り換えられる。被写体との距離に合わせた設定にしておけば、その範囲でしか測距しないのでAFが速くなる

+α 通過点が分かるなら置きピンも有効

鉄道やモータースポーツのように通過する場所が分かっている場合や、本作例のように飛行機が上昇するにつれて画面中央付近のAFカバーエリアを外れていく場合は、置きピンで対応したい。任意の場所にピントを固定して、被写体が通過するタイミングでシャッターを切る手法だが、場合によってはAFより確実にピントを合わせることができる。

構図が決まっていれば、あらかじめ滑走路の決まった位置にピントを合わせておくことで対応できる

超望遠デビューはズームレンズがオススメ

400mm以上の超望遠レンズは、画質面において単焦点レンズが有利だが、どれもでかい、重い、高いの三重苦。そこで超望遠デビューにオススメなのはズームレンズだ。メーカー純正では望遠端が400mmで開放F5.6のものが主流だ。レンズメーカー製なら新型の150～600mmがオススメだ。一昔前の超望遠ズームは画質面での妥協を強いられたが、最新設計のレンズは単焦点超望遠レンズに匹敵する画質のものも多くなってきた。

キヤノン

EF100-400mm F4.5-5.6L IS II USM

◎発売予定日：2014年12月下旬
◎予想実勢価格：300,000円前後

レンズ構成：16群21枚／最短撮影距離：0.98m ／最大撮影倍率：0.31倍／フィルター径：φ77mm ／大きさ：φ94×193mm ／重さ：約1,560g（三脚座を含む）

シグマ

150-600mm F5-6.3 DG OS HSM | Sports

◎発売日：2014年10月24日
◎実勢価格：220,000円前後

レンズ構成：16群24枚／最短撮影距離：2.6m ／最大撮影倍率：0.2倍／フィルター径：φ105mm ／大きさ：約φ121～290.2mm ／重さ：約2,860g ／対応マウント：キヤノン用、ニコン用、シグマ用

ソニー

70-400mm F4-5.6 G SSM II

◎発売日：2013年3月8日
◎実勢価格：243,000円前後

レンズ構成：12群18枚／最短撮影距離：1.5m ／最大撮影倍率：約0.27倍／フィルター径：φ77mm ／大きさ：約φ94.5×196mm ／重さ：約1,500g（三脚座別）

タムロン

SP150-600mm F/5-6.3 Di VC USD

◎発売日：2013年12月19日（キヤノン）／ 2014年4月30日（ニコン）／ 2014年8月2日（ソニー）
◎実勢価格：121,000円前後

レンズ構成：13群20枚／最短撮影距離：2.7m ／最大撮影倍率：0.2倍／フィルター径：φ95mm ／大きさ：約φ105.6×257.8mm ／重さ：約1,951g（三脚座を含む）／対応マウント：キヤノン用、ニコン用、ソニー用

ニコン

AF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VR

◎発売日：2013年3月4日
◎実勢価格：288,000円前後

レンズ構成：12群20枚／最短撮影距離：1.75m（AF時）、1.5m（MF時）／最大撮影倍率：約0.18倍（AF時）、約0.2倍（MF時）／フィルター径：φ77mm ／大きさ：約φ95.5×203mm ／重さ：約1,570g（三脚座を含む）

552mm（883mm相当）

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／タムロン SP 150-600mm F/5-6.3 Di VC USD ／ 552mm（883mm相当）／絞り優先AE（F32 ,1/200秒、－0.7EV）／ ISO 2000 ／ WB：オート　**552mm×1.6倍の883mm相当で、極力周囲を省き、群れのアップのみを狙った。横並びに群れているシーンをあえて正面からではなく、サイドからとらえたことで奥行きも表現できた**

圧縮効果で遠近感をなくして群れで密集する姿をとらえる

大きなボケ味を生かせることは超望遠の1つの魅力だが、今回は全く逆効果を狙い、思いきって絞り値をF32まで絞り込み、手前から奥まですべてにピントが合うように撮影した。絞り値F16で撮ったものは、手前のライオンがボケてしまう。超望遠レンズでは、大胆な絞り込みの決断もありだ。

F16

超望遠の場合、被写界深度が浅くなりがちなので、圧縮効果で密集した状態をとらえたいときは思い切って絞り込む必要がある

応用① 動物 福田豊文

超望遠で群れの様子や一瞬の表情をとらえる

サファリパークに超望遠ズームを持ち出してみた。サファリパークのライオンは、一般の動物園と比べると頭数が多く、分散して広大なエリアの中で自由に動き回るため、見られる場所がその時々で異なるが、その分、さまざまな表情を見せてくれる。オス、メスの違い、迫力ある顔の表情や、毛並みの質感、ネコ科特有のさまざまな仕草など、そのひとつひとつに注目すれば、撮りたいシーンはいくらでも出てくる。数頭で群れているシーン、飼いネコを彷彿させるような寝姿、大あくびや咆哮シーンなど、超望遠ズームレンズでその表情そのものをストレートに写すことで、大迫力の描写が可能だ。例えば、あくびのシーンを連写すると、1コマ1コマすべて表情が違い、どのカットを選ぶか、セレクトの楽しみがある。舌が出ている瞬間の舌のざらついた質感や、牙の様子などが、克明に描写され、あらためてライオンの顔に驚きと発見の感動すら覚える。餌やりバスが来ると立ち上がって歩くオスライオンの姿を離れた距離から超望遠で狙い、堂々と勇ましい姿をとらえることも可能だ。

被写体の存在感を背景の印象で引き立たせる

600mm（960mm相当）

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／タムロン SP 150-600mm F/5-6.3 Di VC USD ／ 600mm（960mm相当）／絞り優先AE（F6.3 、1/5,000秒、－1.0EV）／ISO 1600 ／ WB：オート　**シンリンオオカミが遠吠えする瞬間に運良く出合えた。撮影環境としては、人工物が目立つ難しい場所だったが、壁に映り込んだ木々を背景に望遠端でとらえられた**

600mm（960mm相当）

引き寄せ効果で表情を大きくキャッチアップする

望遠ズームの優れているところは、作例のように全身の様子から、部分アップまでが、たった1本のレンズでとらえられることだ。トリミングをしなくても、表情そのものをズバリ写し込むことで、よりリアルな質感や迫力を感じさせる写真が撮れる。大いに活用したい。

300mm（480mm相当）

キヤノン EOS 7D Mark Ⅱ／タムロン SP 150-600mm F/5-6.3 Di VC USD ／ 600mm（960mm相当）／絞り優先AE（F6.3 、1/8,000秒、－1.3EV）／ ISO 1250 ／ WB：オート　**オスライオンのあくびのシーンを画面いっぱいでとらえた。あくびのシーンを連続撮影でとらえると、1枚1枚すべて表情が違うため、見応えもあり、選ぶ作業も楽しめる**

こだわりポイント 高感度、高速シャッターで被写体ブレ防止を優先する

画質を優先するあまり、感度を抑え気味に撮影する方も多いと思うが、動物撮影の場合は、被写体ブレが一番の大敵だ。どんなに素晴らしいシャッターチャンスでも、被写体ブレや手ブレの写真では台無しだ。そのためにはISO 2000程度の高感度を利用し、高速シャッターでブレを防ごう。シャッターチャンスは、動物たちの一瞬の動きの中にある。

めったに使用しないISOオートを使い撮影。被写界深度を優先したあまり、シャッター速度が遅めになり、ライオンがぶれてしまった。ホワイトバランスはオートでも問題ないが、ISOオートは慎重に使う必要がある

【群馬サファリパーク】
■営業時間　9:30～15:30（16:30閉園）※季節によって変動
■入園料　高校生以上：2,700円　3歳～中学生：1,400円
ライオンやトラなどの肉食獣だけでなく、さまざまな草食獣も多数展示され、バスや自家用車で回れる。日本で唯一スマトラゾウを展示中

福田豊文（ふくだとよふみ）：1955年、佐賀県生まれの動物写真家。野生生物から動物園、犬や猫のペットまで、さまざまな動物たちの撮影に精力的に取り組んでいる。デジカメの進化に伴い、最近は高感度、高画質を生かした新鮮で斬新な写真に日々チャレンジ中。UFP写真事務所代表。公益社団法人 日本写真家協会会員。http://www.u-f-p.jp/

ソニー α7 ／ 70-400mm F4-5.6 G SSM Ⅱ／ 400mm ／マニュアル露出（F5.6 、1/1,000秒）／ ISO 400 ／ WB：晴天　**着陸するF-15DJイーグルを400mmで撮影した。背景には比較的近い木立から遠くの稜線までを取り入れ、圧縮効果で1枚の写真に凝縮した**

400mm

圧縮できる複数の要素を同一方向で重ねる

ほぼ同じ撮影ポジションから160mmでとらえたのが下の写真だ。「戦闘機」「基地外周の木立」「背景の山」など、近景から遠景まで距離が異なる要素が存在することが分かる。これらを同一方向に重ねて1枚の写真に詰め込むことで、最大の圧縮効果を得ることができるわけだ。

160mm

160mmでも多少の圧縮効果が出ているが、ダイナミックに表現するなら層のように重ねたい

圧縮効果で背景を作って飛行機の迫力を強調する

応用② 飛行機 中野耕志

戦闘機を撮るためには400～500mmクラスの超望遠レンズが必要になる。戦闘機撮影に超望遠レンズを使う理由は、単純に離れた場所から大写しするためなので、「引き寄せ効果」以外の超望遠レンズの各種効果を意識することは少ないだろう。ただし、プラスαとして積極的に意識したいのは「圧縮効果」を使った背景処理だ。超望遠レンズで大写しにした機体そのものを圧縮効果で迫力を出すのはもちろんだが、同時に背景に遠く見える山を圧縮してあたかも戦闘機の背後にそびえ立つように見せられるのは超望遠レンズならではの表現手法と言えよう。引き寄せ効果と圧縮効果による部分切り取りの合わせ技で、被写体を効果的に引き立てることができる。

迫るような背景を入れることで迫力のある構図を作る

圧縮効果を出すには、当然圧縮するべき要素が必要になる。空バックでも雲や太陽、月を使って圧縮効果を表現できるが、やはり山など遠景の地上風景が効果的だ。その場合、飛行機をどこに配置するかをあらかじめ決めて、背景を加味した構図の決定が望ましい。

圧縮効果で背景の小高い山を重ねることで、対比として機体そのものの大きさを強調できる

飛行機は撮影地点が限られる分構図のバリエーションが難しいが、前ボケを取り込むなどの工夫ができる

400mm

ソニー α7 ／ 70-400mm F4-5.6 G SSM Ⅱ／ 400mm ／マニュアル露出（F5.6 、1/1,000秒）／ ISO 400 ／ WB：晴天
編隊を組んで滑走路へ向かうF-15 。機体正面から複数機を収めたアングルというのももちろんだが、背景にそびえる山々が圧縮感を倍増する

こだわりポイント 飛行機の動きと背景の位置を計算して撮影ポジションを決める

背景に山を配置した飛行機写真では、山が入っていればなんでもいい、という漠然としたものではなく、「どこの山を背景にして、機体はその稜線の上に」というように理想的な背景になるようにこだわっている。そのショットを得るためには飛行機の動きと背景との重なり具合を計算して、ピンポイントで撮影ポジションを決定する。

ソニー α7 ／ 70-400mm F4-5.6 G SSM Ⅱ／ 400mm ／マニュアル露出（F6.7､1/1,500秒）／ ISO 200 ／ WB:晴天　**背景の山にちょうど飛行機が乗っかるような構図でとらえた。山の稜線と飛行機の羽が平行になるように撮ることで、空に浮かぶイメージが強調できた**

中野耕志（なかのこうじ）：1972年神奈川県生まれ。野鳥や飛行機などの"飛びモノ"の撮影を得意とし、雑誌やカレンダーを中心に作品を発表している。風景と飛行機のコラボレーションである"Jetscape"と、風景と野鳥のコラボレーションである"Birdscape"の2大テーマを求めて、国内外を飛び回っている

応用③ 自然風景 萩原史郎

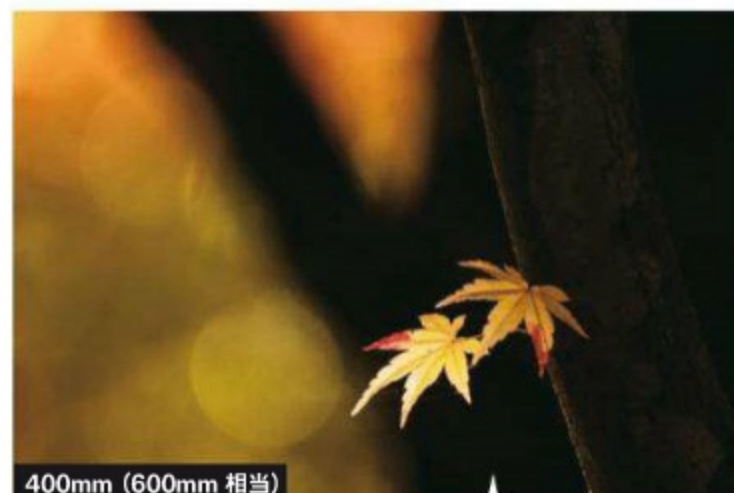
自然の色や形の美しさを超望遠の効果で引き出す

自然風景の撮影では、ダイナミックに広がる自然を広角レンズで撮影するようなイメージの方が強いかもしれない。しかし、超望遠レンズを使うことで、風景の際立った面白さを引き出すことができる。どんな被写体であっても、己の視野を狭め、風景を凝視すれば必ず見えてくるはずだ。超望遠レンズを持って自然風景の撮影に出たら、まずは色や形に絞って観察することをオススメする。今回筆者が実写したように、水なら飛沫や波紋、樹なら葉や枝の形だ。これらの被写体は超望遠の目で見ると、肉眼では感じられない動きやフォルム、色彩に満ちていることが分かる。普段は使い慣れない超望遠だと思うが、ぜひチャレンジしてみてほしい。

ソニー α77 ／ 70-400mm F4-5.6 G SSM Ⅱ／ 400mm（600mm 相当）／絞り優先 AE（F16、1/40秒、－0.3EV）／ISO 50 ／WB：晴天　**何度もシャッターを切り、ようやくとらえた狙いどおりの瞬間。水の勢いや迫力と、落葉の危うげな様子がうまく対比できたと思う**

力強い水しぶきを縦位置の圧縮効果で強調する

横位置も縦位置も600mm相当で撮影。水飛沫が印象的な瞬間を予想してシャッターを切っている。ポイントは画面下部に岩をしっかり見せること。これによって圧縮効果が感じられるようになる。同じ場面での横位置写真を見ると、印象の違いがわかると思う。縦位置の方が圧縮効果が効いていて、水の存在感が強く迫力が出ている。

横位置は安定感を求めた構図だ。どちらかといえば落葉が主役で、水飛沫は脇役扱いである。縦位置の構図は高さを生かして水飛沫の全体像をとらえた。主役はもちろん水飛沫で、落葉は水に圧倒され今にも流されそうな弱々しさが感じられる。

ソニー α77 ／ 70-400mm F4-5.6 G SSM Ⅱ／ 400mm（600mm 相当）／絞り優先AE（F5.6、1/250秒、－1.7EV）／ISO 400 ／WB：晴天　**撮影位置を変えることで、主役の背景に幹を選んだ。印象的なボケを持った背景になると同時に、主役を引き立てる黒バックにもなっている**

わずかな位置の差でボケ味が変化する

超望遠を使うとわずかな撮影位置の違いで光軸が変化し、主役と背景の見え方が違ってくる。大きくとらえた主役にはどんな背景が良いのか、どんな前景が似合うのか、吟味することで印象が異なる作品が生まれる。超望遠を使うので、背景も前景も大きくぼけるため、ボケ味を選ぶ作業と言っても良いかもしれない。

こだわりポイント　色使いに注意して形を引き立てる

超望遠レンズを使うと、背景をぐっと狭めることが可能だ。余計な要素を排除することで、主役の形と背景の色だけを抽出できるので、望遠レンズを使うよりもはるかに突き詰めた表現になる。標準レンズを使った王道的な風景写真の対極となるイメージ的な表現に特化することになるが、色や形に興味があるなら最高のレンズである。

かなりのクローズアップだが、まだ風景的要素が残っている。そういう意味ではオードックスな表現の域は出ていないが、完成した構図の1つではある

枝の形、赤い色という2つの要素だけに特化した構図。600mmという超望遠ならではの表現で、いわばデザインを楽しむような気持ちで撮影した

萩原史郎（はぎはらしろう）：1959年山梨県生まれ。日本大学卒業後、「風景写真」の創刊に携わる。編集・発行人を経験、退社後フリーのカメラマンに転向。現在自然風景を中心に撮影、執筆活動中。日本風景写真家協会（JSPA）

応用④ 都市夜景 堀 寿伸

密度の高い都市の夜景を打ち下ろして凝縮させる

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／シグマ 150-600mm F5-6.3 DG OS HSM｜Sports ／ 524mm ／マニュアル露出（F11、5秒）／ISO 400 ／ WB：3,500K　**大阪府と奈良県を隔てる生駒山から大阪市の中心部を超望遠レンズでとらえた。JR大阪駅を中心として、市内の各所に建つ高層ビルが一体化して迫ってくるような重厚感のある構図が得られた**

都市の中心部から広角レンズでとらえる夜景も魅力的だが、今回はあえて都心から距離をおいて俯瞰し、そこから超望遠レンズでビル群に迫る。圧縮効果によって都市が1つの塊のように浮かび上がり、ビル群が幾重にも折り重なったような構図を得ることができた。このような肉眼を超えた圧倒的な表現力こそが、超望遠レンズで撮影する都市夜景の魅力である。その迫力のある表現に加え、地形的特徴やランドマークを絡めることによって、より印象的な構図となるだろう。夜景撮影において400mmオーバーというのは使い所の難しい焦点距離ではあるが、広大な風景の中から一部分だけを切り取って、独自の構図を作り出す面白さをぜひ体験してほしい。超望遠レンズの持つ魅力に気づくはずだ。

都市を打ち下ろして画面内をビルで埋め尽くす

上の作例では標高524mの地点から超望遠レンズを使って大都市の夜景を打ち下ろした。実際には画面の手前から奥方向にかけて10km以上の距離があるのだが、超望遠レンズで一部分を切り出すことによって距離感が圧縮され、まるでビル群が立体的にせり上がってくるような効果が得られた。

同じポジションから200mmで撮影した写真。このように都市が平面的に広がる様子も美しいが、圧縮効果を使うことで大都市のイメージが強調される

こだわりポイント　シャープさ重視でブレ対策にこだわる

夜景撮影で超望遠レンズを使用する場合は、通常よりも一層シビアなブレ対策が要求される。SPT-1（ベルボン）のような望遠レンズサポーターを使用してカメラとレンズの一体性を高めたり、ストーンバッグ等で三脚の自重を増すのも有効だ。手ブレ補正はオフ、シャッターを切るときには必ずミラーアップにして、ケーブルレリーズやセルフタイマーを使用して慎重に行おう。

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／シグマ 150-600mm F5-6.3 DG OS HSM｜Sports ／ 400mm ／マニュアル露出（F10、2.5秒）／ ISO 400 ／ WB:4,400K　**生駒山から大阪湾を超望遠レンズで撮影。日本一の超高層ビル「あべのハルカス」と世界最長の吊り橋「明石海峡大橋」という遠く離れた複数のランドマークを同時に写しこんだ。手前右側に見えるミニチュアのような「通天閣」がスケール感を強調している。超望遠撮影では何を見せたいのかを明確に意識することが重要だ**

ランドマークを配置することで、夜景の中にアクセントを加える

超望遠レンズで構図を決めるのが難しいと感じる場合は、何かランドマークを見つけて基準にすると良いだろう。ただし目立つランドマークがあるとつい画面の中心に置いてしまいがちになるが、いわゆる日の丸構図よりも、その周囲や手前・奥側にある被写体との対比を考えて配置するとより効果的だ。超望遠夜景の構図は非常にシビアなので、配置や焦点距離を変えて何枚か撮影しておくと良いだろう。

日の丸構図で大阪城を配置すると、大阪城が主役になり、都市夜景としての面白さは下がってしまう

堀 寿伸（ほりとしのぶ）：1977年大阪府生まれ。立命館大学経済学部卒。会社勤めをするかたわら、商業写真家として夜景文化の発展と認知度の向上を目指して活動を続けている。近年は映像クリエイターとしてテレビ向けの映像制作も手がける。2014年6月に写真集「大阪夜景」（創元社）を出版。http://www.osakanight.com/

閉じ込められた１秒間の中に
脈々と紡がれる街の時間が描かれる

所 幸則（ところ ゆきのり）1961年香川県生まれ。大阪芸術大学卒業後、フリーのフォトグラファーとして活動。1992年世界写真見本市「フォトキナ 92」で「世界の新しい表現者」の日本代表として作品が選ばれる。その後、海外の雑誌で特集が組まれるなど国内外で活躍。現在、大阪芸術大学客員教授。所 幸則写真集『ONE SECOND Vol.01 SHIBUYA』（蒼穹社刊）が９月１日に発売された。

Overview
Exhibition of Photography
写真展を振り返って

One Second ～瞬間と永遠～

写真・文　HARUKI

渋谷交差点のＱフロント前に立ちすくみスクランブル交差点を行き交う大勢の人たちをぼんやり眺めているとき、"１枚の写真の中に１秒間という時間の流れを写し止めたい" と2008年からスタートしたシリーズ作品。入口辺りに初期の渋谷を撮った作品群があり、ほぼ時系列に会場の奥へと新しい作品が展示されている。ピクトラン局紙バライタにプリントされた作品はすべて２：３の比率で600×900 、300×450 、250×375mmの３サイズ。基本的に昼間の撮影ではNDフィルターを使用して４段分ほど減光、シャッター速度は1/8秒くらいに固定している。体調が良いときは1/4秒まで遅くすることも。Ｆ値はギリギリまで絞り、ISO感度はリミッター解除のカメラ任せオート。夜間撮影だとNDフィルターは使わず絞りはF11 、ほかの設定はほぼ同じとのこと。使用機材は当時としては小型で性能の良いシグマDP1でスタート、その後ファインダーの見やすいソニーのα900を使い、今はα7シリーズを使用している。初期に渋谷を撮っているときは外の明るさに対して人物が逆光で暗くなっていたが、今撮っている銀座では高感度に強いセンサーのおかげで、夜の街を撮っても人物が昼間のように明るく撮れるので表現の幅が広がったそうだ。

撮り始めた時点でジャーナルな意図はなかったが、結果的に街が変化していく様を記録していた。今では歩いている人たちにも興味を持ち、場所のイメージに合った人物を取り込んで撮影している。同じ手法で何年も場所を変えては撮影されているが飽きないか？ と質問してみた。すると「いまだに飽きていないね。全部の都市を撮り尽くすくらいやってみないと飽きないと思うよ。以前は若者の街の象徴みたいな渋谷をメインに撮ってきたけれど、これからは銀座だけじゃなく日本橋や浅草なんかの大人の街も撮ってみようかな。今は自分も少しは大人になったことだし（笑）」と笑顔で答えてくれた。

ソニーイメージングギャラリー 銀座

2014年10月10日（金）～ 10月30日（木）

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／EF35mm F2 IS USM／35mm／マニュアル露出（F16、1/200秒）／ISO 100／WB：オート
幼い踊り子たちが踊るあいだ大人たちは背後から見守る。あたかもお経を唱えているかのような低い歌声。日本離れした派手な衣装が太陽の光を浴びて、まぶしい

第十八回　**牛窓秋祭り**（岡山県瀬戸内市牛窓町）

私たちは一艘の舟に乗り遠い過去から未来へと向かう

遠くから来た舟　小林紀晴

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ ／ EF35mm F2 IS USM ／35mm ／マニュアル露出（F16 、1/200秒） ISO 100 ／ WB：オート
疫神社で最初に踊りが奉納されたあと、幼い踊り子は大人に肩車されて、少し離れた天神社に移動。同じ踊りが繰り返される。踊りのなかで、年長の子どもと幼い子どもが前後入れ替わることはない

牛窓秋祭り

エキゾチックな衣装に身を包んだ小さな踊り子たちの異国情緒あふれる舞い

10月第四日曜日（岡山県瀬戸内市牛窓町）

疫神社の境内、社の横にゴザが敷かれていた。唐子踊りの舞台であることは一目瞭然だったが、ふとゴザは果たしてゴザだろうかと、私は考えた。何かに見立てているのかもしれないと思ったからだ。日本各地で行われる「お田植神事」ではゴザを田んぼ、つまりは神田に見立てることが多い。苗は杉の葉を束ねたものだったりもする。日本の神道には限りなくシンプルに抽象化する傾向がある。そのことを私はエッジが効いていると感じ、その先端を写真に撮りたいとつねに思う。

その点、唐子踊りはけっして日本的ではない。明らかに異国の匂いが漂う。牛窓はかつて朝鮮通信使の寄港地だったという歴史を持つ。教育委員会の資料によれば慶長十二年（1607年）から文化八年（1811年）までの200年間に朝鮮から訪れた朝鮮通信使という名の使節団が徳川幕府の襲職慶賀などのために何度も来日しているらしい。その往復の際、牛窓へ17回寄港したといわれている。そのとき唐子踊りがこの地に伝えられたという説が有力だが、中国から伝わった説、果ては地元創作説などがあるが、残念ながらどれも立証する資料は見当たらない。

午後1時すぎに階段の下の方がざわつくと、2人の男の子が大人に肩車されて社の階段を登ってきた。2人とも驚くほど幼い。でも晴れ晴れとした表情をしていた。聞けば5歳と6歳の保育園児だという。今日は彼らにとって、門出だ。肩車は踊り子は地面に足をつけてはいけないという習わしによる。

続いて羽織と着物を着た大人びた少年2人が登場した。彼らはこれまで長く踊り子を勤めてきた小学6年生だ。今日が踊り納めとなる。

年長の2人が前に立ち、後ろに唐子踊りのあでやかな衣装をつけた幼い2人が並んで立った。背後には多くの大人。笛と太鼓、さらに男たちの低い歌声が少年たちに降り注ぐ。4人は踊り出した。不思議な動きだ。両腕をカカシのように真横にのばし、手のひらは垂直、上に向ける。そのまま、おどけたように左右に身体を揺する。

いつどこで誰が踊り始めたのか。どこから伝わってきたのか。いまここにいる誰もが知らない。踊っている少年たちも、背後に立っている大人たちも誰1人として知るよしもない。誰も語ることができない。だからこそ、受け継がれていくことの尊さを知る。

瀬戸内海に面した岡山県の牛窓町で行われるのが、牛窓秋祭り。江戸時代から300年以上続いている。牛窓がかつて朝鮮通信使の寄港地であったことから、朝鮮文化の影響を受けているという一説もある。お祭りのメインイベントは、カラフルな異国風の衣装を身に付けた2人の童子による唐子踊り。独特の所作によって異国情緒を感じられる。また、迫力ある見事な装飾が魅力の船形だんじりも見どころの1つ。港町の歴史が生んだ祭りだ。

臨場感が伝わる視野に近い画角を楽しみたい

EF35mm F2 IS USM 標準価格：89,640円 実勢価格：66,600円前後

レンズ構成：8群10枚 絞り羽根枚数：8枚 開放絞り：F2 最短撮影距離：0.24m
最大撮影倍率：0.24倍 フィルター径：φ67mm 大きさ：φ77.9×62.6mm 重さ：335g

35mmという視野に近い焦点距離では、撮影者がどんなアングルで撮影したのかが、いや応なく鑑賞者に伝わる。視野に近いぶん素直な写真が撮れるが、逆に、撮る者の撮影意図が試されるという言い方もできるだろう。自分の意図を伝えるために動き回って、意図がしっかり伝わるアングルでの撮影にのぞもう。335gで小型・軽量。さらに、手ブレ補正機構（IS）も搭載され、撮影者の動きにしっかりと応えてくれる

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ／ EF35mm F2 IS USM ／ 35mm ／マニュアル露出（F18 、1/200秒） ／ ISO 100 ／ WB：オート 踊りを終えた幼い子どもたちは「だんじり」に乗って移動。龍の頭のすぐあと、先頭に彼らは乗る。この日、ほかにも町内から5つほどの「だんじり」がひかれた

キヤノン EOS 6D ／ EF35mm F2 IS USM ／ 35mm ／マニュアル露出（F14 、1/180秒） ／ ISO 100 ／ WB：オート 祭りのあいだ、町内全体で「だんじり」がひかれるが、不思議なことに唐子踊りはこの紺浦地区だけのもので、ほかの地区では一切行われない

キヤノン EOS 5D Mark Ⅲ ／ EF35mm F2 IS USM ／ 35mm ／ マニュアル露出（F14 、1/200秒 ） ／ ISO 100 ／ WB：オート
踊り子の移動は肩車か「だんじり」による。踊り子が歩いて移動することはない。この光景も日本離れして見える。だからだろうか、存在に現実感が薄れ、神童という言葉を自然と連想した

小林紀晴（こばやしきせい）：1968年長野県生まれ。東京工芸大学短期学部写真科卒業後、新聞社にカメラマンとして入社。95年「ASIAN JAPANEASE」でデビュー。97年「DAYS ASIA」で日本写真協会新人賞受賞。『days new york』『SUWA』『父の感触』『十七歳』など著書多数。最新作に『メモワール 写真家・古屋誠一との二〇年』、写真集『kemonomichi』がある。写真展「遠くから来た舟」で第22回林忠彦賞を受賞

An Editor's Postscript

FROM STAFF

牧浦裕介 Yusuke Makiura
▶ キヤノン EOS Kiss X7i

「絶対に失敗しない超望遠ズームの撮り方」の特集で、群馬サファリパークでの撮影に同行しました。そこで出合ったのがこのシンリンオオカミ。レンズ越しに思慮深そうな瞳をのぞくと、その格好よさにすっかり虜になってしまいました。特集内では「超望遠なんて自分には必要ない」と思う方にこそ読んでみてもらいたい、さまざまな望遠効果を生かした写真が勢ぞろいしています。見つめるように撮る分、その被写体をもっと好きなってしまうのも超望遠ならではの効果かもしれませんね。

庄司亮一 Ryoichi Shoji
▶ ソニー NEX-6

過日の話題になりますが、10月8日の皆既月食は皆様ご覧になったでしょうか。本誌でおなじみの沼澤先生による連載「四季の星空風景」の内容を参考にして、私も当日撮影してみました。600mm相当でとらえたものをトリミングしたものがこちらの写真です。さて、今回の連載では12月14日の「ふたご座流星群」に向けて、撮影の仕方と比較明合成の方法をご紹介しています。少し難易度は高めですが、しっかり防寒対策をして挑戦してみてくださいね。

上田大輔 Daisuke Ueda
▶ ニコン D610

10月31日に発売された『世界一わかりやすいデジタル一眼レフカメラと写真の教科書　動物園&水族館の撮り方編』（長いですね）。その出版記念として、10月25日は日本平動物園、26日に富士サファリパークにて撮影イベント行いました。僕は参加された皆さまのサポートに回っていたのですが、もうね、皆さま写真うますぎ! 切り取り方、配置のバランスがすばらしい。僕はまぁなんというか雨男らしいのですが、富士の最後でちょっと雨が降っただけで終われたのでほっとしています。

小谷輝之 Teruyuki Kotani
▶ ソニー α7S

休暇をとり、トルコ・イスタンブールを旅してきました。初めて訪れたこの国は、想像していた以上に活気に満ちていて、料理もどこかスパイシーで、今まであまり食べたことのない味わいのものが多かったです。そして、街の至るところで目にするネコちゃんたち。あっちにネコちゃん、こっちにネコちゃん。毎日10匹以上は撮影していたように思います。ある路地では7、8匹のネコがこっちに向かって歩いてくるなんてシーンも。エナジーチャージが完了したので、年末まで一生懸命働きます。

武間俊樹 Toshiki Takema
▶ ニコン D600

編集長の手伝いを兼ねて小田原・箱根方面にドライブに行きました。目的はクルマの写真撮影とおいしい地元の料理。青梅を起点に初の圏央道延伸ルート、小田原厚木道路を経て、MAZDAターンパイク箱根、伊豆スカイラインへ。10年ほど前、当時在籍していた編集部の同僚にバイク乗りが多く、みんなで初めて下田までツーリングに行ったのを思い出しました。バンクが楽しい適度なワインディングと傾斜、広大な緑と空。いやが上にも男子の血が騒ぎ、もう一度バイクに乗りたくなりました。

白石由佳 Yuka Shiroishi
▶ ニコン D7100

今月号の特集「ナナメの構図」はいかがでしたでしょうか。タブーと言われていることにあえてチャレンジすることの面白さについて考えた企画でした。もちろん、なんでもかんでもナナメにすれば良いというわけではありません。しかし、絶対にナナメにしてはいけない! というわけでもないのです。セオリーにとらわれることなく、柔軟に考えることが自分なりの表現につながるのですね。次号からもそんな「攻め」の企画を提案していきます!

島村正人 Masato Shimamura
▶ キヤノンEOS 5D Mark II

11月初めの3連休、入間基地航空際の撮影に行ってきました。3日は晴天にも恵まれ、とてもよい撮影日和でした。秋空に飛ぶブルーインパルスは一段とダイナミックに見え、久々の400mm望遠レンズも大活躍です。アクロバチックな機動にも見事に追従してくれました。腕が未熟でも機材がいいと気持ちよく撮れて、嬉しいものです。そうだ、来年にはレンズムックを企画してみよう! 発売が決まればご報告させていただきます。

福島 晃 Akira Fukushima
▶ ニコン D750

10月下旬、内山 晟さんと日本平動物園と富士サファリパークへ。11月上旬は中井精也さんと真岡鐵道へ。その翌週には大和田 良さんと神戸へ。ほぼ毎週のように土日にイベントがあって、かなりヘトヘトになりながらも、参加者のみなさんと楽しく過ごすことができました。写真はSLに乗車中の1枚。今年も中井精也さんの「ゆる鉄2015カレンダー」を制作しますので、そちらにもご期待ください。

デジタルカメラマガジン